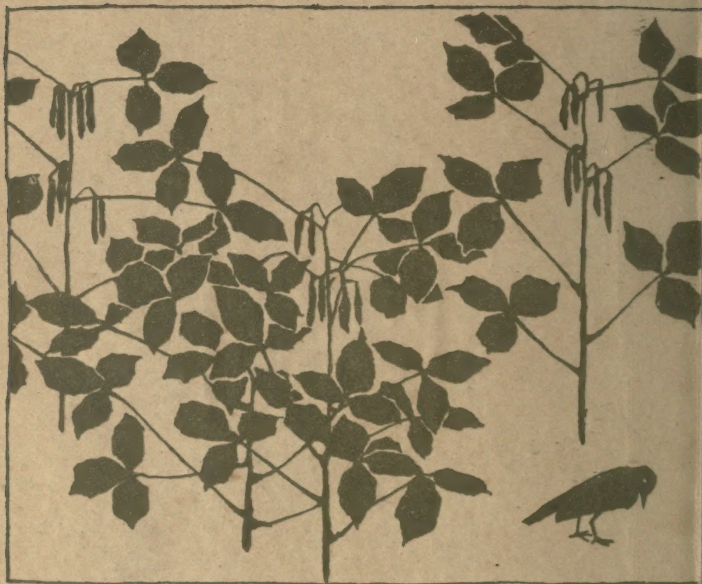


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02980 4887









不請道經

三才圖會

三才圖會

三才圖會

三才圖會

三才圖會

三才圖會

明倫彙編
家範典
卷一百一十五

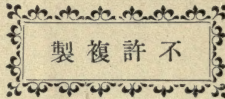
三才圖會

三才圖會

明治四十四年九月三日印刷
明治四十四年九月六日發行

金葉、詞花、千載

定價 金八拾五錢



不許複製

編輯兼
發行者

東京市神田區錦町一丁目十九番地

三浦理

印刷者

東京市本所區番場町四番地

平井登

印刷所

東京市本所區番場町四番地

凸版印刷株式會社分工場

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地

有朋堂書店

大賣捌所

東京市神田區裏神保町一番地

三省堂書店

同

大阪市東區南本町四丁目

三宅莊藏書店

わかれしあきの
わかれのうちの
わかれのところに
わかれはいまの
わかれはみちの
わくるころは
わけいかづちの
わするなとだに
わすれぬつまと
わすればわれも
われからかみの
われさへいかが
われひとりやは
われもうきたる
われもこひしき
われもさこそは
われよそならば
われをはなれて
われをはな

并

四九〇ノ二
三七二ノ四
四三二ノ四
三七八ノ一
三五三ノ二
二六五ノ一
五三五ノ一
三五四ノ一
四四一ノ一
四三七ノ六
五二二ノ三
四八四ノ六
三五九ノ三
三四二ノ二
三五三ノ二
四三三ノ四
四二七ノ二
四三〇ノ四
二七〇ノ六

ゐでのかばづの
ゐでのさとびと

二八二ノ二
二八二ノ一

エ

ゑまじがいそに
ゑじまがさきに

四六五ノ一
四六四ノ五

ヲ

をぎのうばばを
をぎふくかぜの
をしきははるの
をしむころの
をしむころや
をしむとひとに
をちのたかれに
をのしげふは
をのへをこゆる
をばすてやまの(有明)
をばすてやまの(夕暮)
をばすてやまを
をぶさのすずの

四七〇ノ一
三〇四ノ一
二八四ノ一
二八三ノ四
五〇〇ノ三
四九一ノ六
三四六ノ一
二八〇ノ三
三四七ノ四
四六八ノ二
三二二ノ四
五二七ノ四
三〇四ノ四

をらばとがむる
をりたがへたる
をりならぬを

五二三ノ三
三〇一ノ五
三七〇ノ二

千載和歌集索引終

やまのはにのみ
やまはひさしき
やまほととぎす
やまもこのろの
やまもこたふる
やまよりおつる
やみこそひとは
やみをもてらせ

四八八ノ三
三八八ノ一
二九六ノ三
三三三ノ一
三九〇ノ一
四七四ノ二
二六三ノ四
五二〇ノ二

ユ

ゆきこそせきの
ゆきのしたにも
ゆきのしたみづ
ゆきのふかさを
ゆきのみやまの
ゆきふりにけり
ゆきふりにける
ゆきふるときの
ゆくへもしらぬ
ゆふゐるくもの
ゆめにきくも

三四八ノ四
三六〇ノ一
二五九ノ二
三四五ノ一
二九七ノ二
三四七ノ二
三六六ノ一
三四七ノ二
三六二ノ二
二九〇ノ四
二九一ノ一

ヨ

ゆめにもあかて
ゆめにもゆめを
ゆめのうちにぞ
ゆめのうちにも
ゆめをもえこそ

よしののおくも
よしののさとも
よせてはやがて
よそふるそでは
よどのみこもの
よのつねならず
よのつねのとや
よはのしぐれも
よぶかきゆきを
よものそらをも
よものやまべに
よよのくもゐの
よよのたまくら
よよをへだてむ

四四三ノ二
四九四ノ六
二六七ノ二
三六四ノ三
三六五ノ四

ワ

よろづよまでの
よをいでてぬ
よをうしとだに

わがおもふいもが
わがおもふひとの
わがかたをかの
わがこころこそ
わがこころさへ
わがこころにぞ
わがことのほを
わがたつそまに
わがなみだしも
わがのちのよを
わがまつことは
わがみのためと
わがみのほかの
わがみひとつに
わがみもかぜを
わかるべしとは

三八九ノ三
四四四ノ三
四八四ノ三
二九三ノ三
四四九ノ四
五三四ノ二
四二五ノ六
四四八ノ二
四四六ノ四
三九六ノ二
四九六ノ五
四〇五ノ三
四八ノ五
四一三ノ一
五二ノ二
四七ノ三
五二ノ二
三七四ノ二
三五三ノ一

ム

むかしありきと
 むかしながらの(橋)
 むかしながらの(山)
 むかしにかはる
 むかしにかへる
 むかしのあとは
 むかしのかげは
 むかしのとほく
 むかしのひとの
 むかしはおいを
 むかしもかかろ
 むかしもかくや
 むかしなかけて
 むかしなしのぶ
 むかしなみつる
 むぐらのかどな
 むしだにあきは
 むしのねをさへ
 むすばでみるも

四七三ノ二
 四七三ノ一
 二七三ノ一
 四八ノ三
 四八五ノ五
 五四ノ二
 三七三ノ一
 五〇〇ノ二
 二七三ノ二
 四八四ノ四
 二六八ノ一
 五三三ノ三
 三七三ノ二
 三七五ノ二
 二九三ノ六
 四八九ノ二
 四八七ノ四
 三〇八ノ三
 三〇二ノ三

メ

モ

むすばぬみづに
 むすぶやちよの
 むなしきいろに
 むなしきとこを
 むなしととける
 めにもさやかに
 めのまへにても
 もえいづれども
 ものいひかはせ
 ものおもふことの
 ものやかなしき
 もみちをふける
 ももよもおなじ
 もらすこころの
 もらでしぐれの
 もらでもひとの
 もらぬしぐれや

四〇五ノ一
 三八五ノ三
 四八ノ六
 四七四ノ五
 五二五ノ四
 三〇三ノ二
 二七八ノ四
 二六五ノ五
 三二四ノ二
 四三三ノ二
 三六四ノ四
 三三九ノ六
 四一九ノ二
 三九五ノ五
 三三七ノ四
 三三九ノ五
 三三七ノ三

ヤ

やがてこのみに
 やがてさしいる
 やがてぞうつる
 やがてのきげに
 やがてもそらの
 やがてもちりの
 やこゑのとりに
 やそしまかけて
 やそのふなつを
 やどのさくらを
 やどらぬみづの
 やどりしみづも
 やどるつきさへ
 やへにのみさく
 やほよろづよの
 やまちなふかみ
 やまのおくにも
 やまのさかきを
 やまのばごとに

五三ノ三
 三三九ノ二
 五三八ノ四
 三三九ノ四
 二六〇ノ三
 四四〇ノ四
 四五三ノ五
 三二四ノ一
 三〇五ノ一
 三六八ノ一
 四六三ノ四
 三四三ノ五
 五三六ノ三
 二八ノ五
 三九二ノ三
 四八〇ノ一
 四九九ノ四
 五三八ノ二
 二七二ノ四

まづしたるる
まつとともにぞ
まつにおとせで
まつにねぬよの
まつのかげにて
まつのけしきは
まつのはかすは
まつはさりと
まつふくかぜに
まつべきことの
まづみにしむは
まつらむとおもふ
まどひいでにし
まどふははるの
まほならずとも
まよのあまりに
まよはむやみの
まよひしくもち

こ

みえずなるをの

三〇六ノ二
三八六ノ四
四八〇ノ四
二八九ノ二
二九九ノ六
四七三ノ三
三九〇ノ四
五三三ノ二
四〇〇ノ一
四九三ノ四
三〇四ノ四
三六二ノ一
五三三ノ四
二七一ノ二
四四五ノ五
二六四ノ二
四七〇ノ六
五〇二ノ一

四七六ノ一

みかさのやまに
みしつきかげは
みしよのゆめを
みせばやきみに
みせばやとおもふ
みせばやひとに
みそぎにすつる
みぞれしそらの
みだれてけさは
みだれにけりと
みちもせにちる
みづのこころは
みづのみやしる
みどりをわくる
みなれがほにも
みにしたかふは
みにしむよはの
みれつづきなく
みれにぞうらの
みれのまつかぜ(思ひ)
みれのまつかぜ(吹き)

五三三ノ三
四二四ノ二
三七三ノ三
四七三ノ三
四〇四ノ一
二七三ノ四
三〇二ノ五
二七五ノ四
四二五ノ三
三二〇ノ二
二七九ノ三
四三六ノ一
五一三ノ一
二六〇ノ四
二九八ノ五
四八七ノ五
五一二ノ一
二九七ノ三
二七六ノ五
三四〇ノ一
四五六ノ二

四五六ノ二

みのくせなれや
みのためにこそ(思ひ)
みのためにこそ(袖も)
みのりのはなに
みはあをうみの
みはかずならず
みはなげられぬ
みやこにいでし
みやこにたれか
みやこのてぶり
みやこのやまの
みやこをいづる
みゆらむものを
みゆるはつきの
みよともすめる
みよのほとけの(ばは)
みよのほとけの(日や)
みよまであはぬ
みをつくしてや
みをのしるしも
みをやるかたの

五一五ノ五
四〇五ノ二
四五四ノ七
五二二ノ三
三五五ノ二
四八二ノ一
四八二ノ一
三六〇ノ一
三六〇ノ五
三五二ノ一
三六〇ノ二
三五五ノ三
四〇一ノ二
三一四ノ二
四六四ノ三
五二四ノ四
五三三ノ五
四七一ノ四
四二六ノ二
二九五ノ三
四四五ノ五

四四五ノ五

ふきくるすゑも
 ふくゆふぐれの
 ふけゆくまに
 ふしみのさとの
 ふしみのさとの(秋)
 ふしみのさとの(有明)
 ふしみのさとの(名)
 ふたたびおなじ
 ふたたびくべき
 ふたたびはるは
 ふたよりみより
 ふちのうらばの
 ふみおこせよと
 ふみたがふべき
 ふみみるたびに
 ふもとのくもの
 ふるきみやこに
 ふるきみゆきの
 ふるすにれをば
 ふるゆきよりも

三〇七ノ六
 三二八ノ二
 三二九ノ五
 四四八ノ一
 三〇九ノ三
 四三三ノ二
 四二二ノ五
 四四九ノ二
 四九五ノ一
 二八五ノ三
 五一四ノ一
 四八四ノ一
 五一六ノ一
 四四七ノ一
 五一六ノ二
 二九〇ノ五
 四六三ノ三
 五三〇ノ一
 四三八ノ六
 五三三ノ一

へ

へだつるくもの
 へぬらむとしの

五九ノ三
 五三ノ四

ホ

ほかよりなつな
 ほさでくたしつ
 ほすなるひまは
 ほすもひとめを
 ほのかなりしに
 ほのかになのる
 ほのかにまよふ
 ほのかにみゆる
 ほのめくよひの

三〇〇ノ四
 二九五ノ五
 四二七ノ五
 四二八ノ一
 三九四ノ二
 二九ノ四
 四〇〇ノ二
 三二ノ六
 二九二ノ三

マ

まがきぞはなの
 まかせしみづの
 まきのいたやの
 まきのはわくる

三〇八ノ二
 三〇〇ノ一
 三七ノ二
 四七ノ五

まくらにちりの
 まくらにもらぬ
 まくらにやどる
 まくらもうとく
 まことにいまや
 またあふみとも
 またうへもなき
 まだきすすしき
 まだきにだにも
 またでやはみる
 またとふかたの
 またとしびも
 またぬにきます
 またひきかへす
 またもこひしき
 まだよをこめて
 まちきしげふの
 まちみむほどの
 まつこそきみが
 まつことにして
 まづこのよにも

三〇五ノ三
 三六二ノ五
 四七〇ノ四
 四四四ノ三
 三三四ノ二
 四九三ノ三
 五三六ノ一
 三〇二ノ一
 四五一ノ三
 四六九ノ六
 三七九ノ二
 五二〇ノ三
 二六三ノ一
 四六一ノ三
 四五四ノ四
 四三四ノ四
 三〇四ノ六
 四一七ノ四
 三八九ノ四
 四四三ノ一
 二九九ノ四

はるとなつとの
はるのかぎりの
はるのかたみに
はるのかたみも
はるのとまりな
はるのみそらの
はるのみやこに
はるのものとや
はるはこころの
はるはさくら
はるまもなき
はれゆくそらの

ヒ

ひかげかつらぞ
ひかすはゆきの
ひかりもかをる
ひかりをかばす
ひかりをやどす
ひかりをわけて
ひきわかれても

二八二ノ二
二八三ノ三
二八〇ノ五
二八六ノ一
二八三ノ一
五二四ノ五
四八三ノ四
二六五ノ四
二七ノ四
四八二ノ二
五二ノ五
三二ノ一

五七ノ四
三五ノ三
二六三ノ六
三一三ノ三
五三五ノ四
三六ノ二
二八八ノ四

ひくしめなほの
ひさしくなりぬ
ひしのうきはに
ひつじのあゆみ
ひとえだをらむ
ひとこそしらね
ひとだのめなる
ひとつになりぬ
ひとにおくるる
ひとにこよひの
ひとにはえこそ
ひとのこころや
ひとのなごりを
ひとばきすとも
ひとまれなりと
ひとまたのめぬ
ひとやうづきと
ひとやりならず
ひとりきくべき
ひとりぞつきは
ひとりにならむ

四〇六ノ三
五二四ノ三
二九九ノ二
五一七ノ四
三〇七ノ五
四一五ノ六
二九〇ノ二
二六六ノ三
三七四ノ一
四六四ノ二
三九八ノ五
四一五ノ四
四四五ノ四
四〇三ノ四
四八七ノ一
四一ノ六
二八六ノ三
四四三ノ六
四九七ノ一
四六五ノ四
三八ノ四

四〇六ノ三
五二四ノ三
二九九ノ二
五一七ノ四
三〇七ノ五
四一五ノ六
二九〇ノ二
二六六ノ三
三七四ノ一
四六四ノ二
三九八ノ五
四一五ノ四
四四五ノ四
四〇三ノ四
四八七ノ一
四一ノ六
二八六ノ三
四四三ノ六
四九七ノ一
四六五ノ四
三八ノ四

フ

ひとりれざめの
ひとりばれなむ
ひとりばはぎを
ひとりもつきを
ひとりやこけの
ひとりやしらぬ
ひとりややまの
ひとをまつべき
ひとをみるめに
ひむろぞふゆの
ひるはながめに

ふかきおもひは
ふかきおもひを
ふかきこひちに
ふかきしるしも
ふかきながれと
ふかくものな
ふかくもゆきの
ふきくるかぜや

四五四ノ三
四五五ノ一
五二ノ四
四三八ノ三
三七九ノ三
三六九ノ四
四六七ノ二
四八二ノ四
三九九ノ三
二九九ノ七
四三ノ一

三二ノ三
四一三ノ二
四四二ノ四
四三七ノ二
四一五ノ五
四八〇ノ三
三三八ノ二
二六二ノ五

ぬれにぞぬれし
ぬれぬやきみが

四二ノ四
三七七ノ一

ネ

れざめぞあらぬ
れざめもゆめを
れになきてこそ
れにのみなけど
れぬにあけぬと
れやのひまさへ
れられぬまに
れをやあやめに

四九七ノ三
四九七ノ二
四四五ノ三
三九八ノ三
二八九ノ一
四一六ノ六
四六三ノ六
二九三ノ一

のきばにしげる
のちのはるをば
のちのよにだに
のどかにすめる
のどかにみねの
のにもやまにも
のべこそつねの

四三二ノ二
四七八ノ一
四四一ノ一
二六七ノ五
二六八ノ三
三〇九ノ六
三〇八ノ五

のべとひとつに
のりのころもな
のりのむしろの

三四六ノ五
四八九ノ一
五二七ノ六

ハ

はおとにたかを
はかぜにちるも
はかなきよなば
はぎのうはばに
はぎのはかぜの
はげしかれとは
はこやのやまの
はこやのやまは
はじめたてけむ
はちすのいとよ
はつかあまりの
はつねをいばふ
はつゆきふれる
はてばそれにぞ
はとふくあきの
はなさきしより

三四〇ノ五
二六二ノ四
五二六ノ一
五一四ノ四
三〇三ノ一
四〇六ノ二
三八八ノ四
三八九ノ一
五二九ノ二
五三九ノ一
五八ノ一
二六ノ三
三五八ノ二
五八ノ二
四四四ノ六
三〇七ノ三

はなさきてこそ
はなぞかへりて
はなになりゆく
はなのいろいる
はなのさかりも
はなのしがらみ
はなのしたゆく
はなのしらゆふ
はなのたもとの
はなはおいこそ
はなはかすにも
はなはわれをば
はなみるみとや
はなもひかすも
はやくあけぬる
はやくとひとに
はやくみしよに
はやくもつきの
はらはぬにはは
はるかにおくる
はるかにちよの

四〇一ノ三
三〇九ノ五
二七七ノ一
三〇八ノ四
四四二ノ一
二七八ノ五
二八一ノ四
二七〇ノ四
二六九ノ四
二七二ノ六
四七九ノ二
四七九ノ一
四八三ノ二
二七四ノ一
五三五ノ一
四九八ノ一
四九五ノ四
四六五ノ三
二七九ノ一
三三〇ノ四
三八八ノ三

なごりまでこそ
なつにしられぬ
なつのほかなる
なつみなづきの
などこのくれな
なにあだしよに
なにごとをかば
なにはのうらな
なにはのほるに
なほうきことぞ
なほこころみに
なほこひしきは(白河)
なほこひしきは(都)
なほこりすまに
なほしぐるるは
なほへだてたる
なほほのめかす
なほやまざとは
なほやまのほに
なほやまふかく
なみかけすて

三六五ノ三
三〇二ノ二
三〇〇ノ二
三〇二ノ四
四一九ノ一
四九五ノ三
四六三ノ五
三五八ノ五
二八〇ノ一
四四五ノ二
四八三ノ三
四八四ノ五
三六五ノ五
四〇九ノ四
四九二ノ三
五〇九ノ二
三〇六ノ四
四八〇ノ二
三〇一ノ一
四九九ノ五
三六四ノ一

なみこすかぜの
なみだかからぬ
なみだくもらで
なみだくもらぬ
なみださへこそ
なみだしもこそ
なみだぞこひの
なみだたえせぬ
なみだとともに
なみだにいまは
なみだのすゑな
なみだのそこに
なみだのよらぬ
なみだはおなじ
なみだばかりぞ
なみだばかりを
なみだはとこの
なみだもたへぬ
なみだをだにも
なみちをわけて
なみとともにぞ

四七五ノ五
四二七ノ二
三六ノ四
三七一ノ三
四七三ノ二
三七六ノ三
三九四ノ一
四二一ノ一
三五四ノ五
四二七ノ六
四〇三ノ一
四四三ノ四
四一四ノ四
四九二ノ四
三三三ノ四
三七九ノ四
三九六ノ六
三三八ノ六
三七六ノ二
四五一ノ五
二八五ノ一

なみのかくとも
なみのはなこそ
なみはくもゐの
なみもさこそは
なみをわけても
なよりもたかき
ならのひろげに
なりしけぶりの
なれしみやこに
なをさへひとに

二

にはにはふゆの
にははのべとも
にほふこちの
にほふにしるし

ヌ

ぬきちらしける
ぬしなきいろは
ぬまのいはがき

四七六ノ五
二七四ノ二
四七六ノ二
五三ノ四
二六六ノ四
四七四ノ六
三四四ノ五
三八三ノ一
三六四ノ四
四三九ノ六
三二ノ五
三二ノ一
二六三ノ五
二六八ノ二
五四ノ五
四七八ノ三
二九三ノ五

つまとふこゑの 三二九ノ四
 つまとふしかの 三二九ノ三
 つらきかたにも 四五九ノ三
 つらきはいまの 四四八ノ三
 つらきひとをも 二八九ノ五
 つらきもしらず 四三七ノ五
 つらきものから 二七〇ノ三
 つらさもおなじ 四五一ノ六
 つらさもかくや 四二〇ノ一
 つらはなれけむ 三七二ノ三
 つららぬにけり 三四二ノ六
 つれなきひとに 三九五ノ四
 つれなきひとの(かから) 四一〇ノ四
 つれなきひとの(果を) 四〇八ノ六
 つれなしとても 四二一ノ四

テ

てらむかぎりば

三八五ノ二

ト

ときならぬみと

五一四ノ三

ときはにまもる
 とけでやみぬる
 とけぬやなにの
 ところがらとも
 としはゆけども
 としもかぎりぬ
 としもこよひに
 とどまるものは
 とどめがたきは
 となりにおとは
 とはずがたりの
 とはましものを
 とふにつけても
 とほざかりなむ
 ともこそなけれ
 ともしにのみぞ
 ともれのをし
 とよにあまりて
 とるさかきばの

ナ

五三八ノ一
 四〇六ノ四
 四二二ノ二
 四四九ノ二
 四〇九ノ五
 三八五ノ五
 三四九ノ一
 三一〇ノ五
 四三三ノ一
 五六ノ三
 三九四ノ六
 三八七ノ五
 四八六ノ三
 三七二ノ一
 三四七ノ五
 二九八ノ一
 三四二ノ一
 五一五ノ二
 五三七ノ二

ながきわぶりは
 ながたのやまの
 なかなかなに
 なかなかももの
 なかぬにさへも
 ながむればまづ
 ながらのほしも
 ながらへゆけど
 ながれかはるは
 ながれしよりも
 なきあとまでも
 なきあふやまの
 なきてこづたふ
 なきなばことの
 なきなやのべの
 なきになしても
 なぐさむばかり
 なぐさめがたき(有明)
 なぐさめがたき(夕暮)
 なくひとえだは
 なこそながれて

四三九ノ六
 三九一ノ一
 四九三ノ一
 四三八ノ一
 二八九ノ四
 四五〇ノ五
 四七三ノ五
 四三九ノ四
 四四二ノ三
 四九三ノ一
 三九八ノ一
 二九七ノ一
 二六四ノ五
 四〇九ノ六
 三九六ノ四
 四五五ノ二
 四三六ノ二
 四三三ノ一
 四三九ノ三
 二六四ノ三
 四七四ノ一

たなればいとど

三〇八ノ一

チ

ちぎりしことの(うつつ)

四三六ノ五

ちぎりしことの(かはる)

四三三ノ一

ちぎりしことを

四三四ノ三

ちぎりしなかの

四四六ノ二

ちさかのうらの

三六七ノ二

ちとせすむべき

三九一ノ四

ちとせのあきを

三九〇ノ二

ちとせをおくる

三八七ノ四

ちよとちぎらむ

五三七ノ二

ちよにいくよの

三九六ノ一

ちよのはじめの

三八五ノ一

ちらぬはなさく

三八七ノ一

ちらぬひかすの

二六九ノ五

ちりつみてこそ

二八四ノ二

ちりぬるのちは

二七九ノ五

ちりのすゑをも

二七九ノ二

ちりのみつもる

四八三ノ三
四四九ノ一

ちるがうれしき

五三六ノ五

ちるこのもとに

二七五ノ三

ちるはなごに

二七六ノ一

ちればくもゐは

二七六ノ四

ちればふもとの

二七五ノ一

ツ

つがはぬをしの

四二二ノ四

つきさえぬれば

五三三ノ四

つきさへくさの

四七〇ノ二

つきさへすまず

四六九ノ二

つきさゆるよの

四六七ノ三

つきすむあきも

二九四ノ一

つきすむよはの

三二五ノ一

つきにこころは

三二六ノ五

つきのかつらの

四六九ノ四

つきのひかりの

三二四ノ四

つきのひかりは

二七三ノ一

つきはみるやと

四六八ノ五

つきはむかしに

四六五ノ六

つきひとともに

三九一ノ二

つきひをおほく

三九九ノ五

つきみむことぞ

三九〇ノ三

つきもいまはの

四五三ノ三

つきもたびねの

三五九ノ四

つきもれとてや

三五七ノ二

つきやむすばぬ

三二五ノ四

つきよりさきに

四二六ノ一

つきをしたひて

四六九ノ一

つきをしみづに

三〇〇ノ五

つきをのこして

三二六ノ六

つたへしふえの

三八一ノ一

つつむひとめも

四三〇ノ五

つとめていたる

五一七ノ五

つゆおくそでに

三六三ノ六

つゆかかるとも

四〇二ノ二

つゆこぼれます

四一七ノ六

つゆしげしとや

四二九ノ三

つゆともひとに

四二二ノ二

つゆにもえこそ

四三三ノ四

つゆのかざれる

二八七ノ三

つゆもたのまば

五三二ノ一

そのこととなく
そのよなきなの
そのよもしらぬ
そめぬさくらの
そめますものは
そもわかるるは
そよぐやふれの
そらさえのぼる
そらさへにほふ
そらにひよしの
そらよりほなの
それかとみゆる
それともみえぬ

タ

たえずもひとに
たえせぬやどの
たえだえのころ
たがさとよりと
たがためにきて
たがつらきとか

四六五ノ四
四二一ノ一
三八〇ノ三
二七六ノ二
二七一ノ三
三七七ノ四
二九九ノ三
四七〇ノ三
二六九ノ二
五三五ノ五
五八ノ二
三六九ノ一
二六三ノ二

四〇七ノ五
二六九ノ三
二七五ノ二
二九三ノ五
二七一ノ三
四二一ノ三

ただありあけの
ただこのごろに
ただみにしむは
たちかへりぬる
たちくるなみに
たちけむなだに
たちそふものは
たちとまるべき
たちわかれにし
たつけぶりもや
たづぬるときは
たづねぬひとは
たにのあらしを
たにのうぐひす
たにのまつとや
たのみしかげの
たのみしつきも
たのめしことの
だのめぬなみの
たびねのそでも
たへずなりゆく

二九二ノ二
三六八ノ二
二六七ノ一
五〇一ノ二
四二三ノ五
四二〇ノ一
三〇三ノ三
四七〇ノ二
五三八ノ五
四八六ノ四
四二三ノ三
二七八ノ三
四八八ノ二
二六〇ノ一
四五六ノ一
四九〇ノ三
四六七ノ五
四五〇ノ二
四四〇ノ三
三六三ノ二
四七〇ノ三

たへぬおもひに
たまえのぬまを
たまちるたびの
たまになしつる
たまのときとて
たままくばかり
たまものこの
たもとにおくは
たもとにかかる
たもとになつは
たもとよりこそ
たもとをそむる
たゆるときなき
たれかれざめに
たれかはいまは
たれかばけさの
たれさらしけむ
たれとむかしを
たれもしのぶの
たれもつひには
たれをとぶひの

四三六ノ五
二六六ノ一
三六〇ノ三
三二五ノ五
三五九ノ五
二八八ノ二
三四二ノ五
三二〇ノ四
三二〇ノ一
二八六ノ二
三二〇ノ三
四〇一ノ一
二七二ノ五
四六八ノ一
三七三ノ四
五一二ノ三
五七四ノ三
三七八ノ四
四三〇ノ一
三七一ノ一
二六二ノ四

しづやのこすげ 二九五ノ二
 しでのやまぢの 三七七ノ二
 しでのやまぢも 四七一ノ一
 しどろにみゆる 三四六ノ三
 しのだのもりの 二八〇ノ二
 しのびがたくて 二八三ノ二
 しのびもあへず 四三六ノ四
 しのぶとだにも 三九五ノ六
 しのぶのやまも 四〇二ノ三
 しのぶむかしに 三四九ノ四
 しのぶもちずり 二九七ノ四
 しばしとまちし 四〇一ノ一
 しばのとまでも 五三五ノ三
 しほせにかかる 四七五ノ三
 しほたれまさる 二九五ノ四
 しほやにあとな 五三一ノ一
 しほらじそでよ 四〇六ノ一
 しほりもあへず 三六二ノ四
 しめさすばかり 二八〇ノ四
 しらでやひとの 二六二ノ三
 しらなみよする 五一〇ノ四

しりてやとしの
 しるきはこしの
 しるしありまの
 しるひとあらば
 しるやさとり
 しなれししづの

ス

すぎゆくものは
 すくなかりける
 すすめしひとぞ
 すそののはざの
 すそののはらぞ
 すそののほらに
 すてはててきと
 すまてやみなむ
 すまのせきやに
 すみけるものを
 すゑをみやこと

セ

せきあへぬものは
 せきちへだつる
 せきのしみづの
 せきのながはの
 せきもるかみや
 せきやられぬは
 せぜのふるぐひ

ソ

そこにぞふかき
 そこのたまもと
 そこなさとらぬ
 そでこそぬるれ
 そでしもことに
 そでにあまるは
 そでにうつるは
 そでにつゆおく
 そでのしがらみ
 そでのしづくを
 そでのひるまと
 そではなみだに

四三八ノ四
 三八八ノ四
 三六二ノ三
 三〇〇ノ三
 二九六ノ五
 四三九ノ二
 四四七ノ三
 二八一ノ三
 三八〇ノ四
 五二四ノ三
 三〇五ノ六
 三七八ノ二
 四〇三ノ五
 三〇七ノ四
 四九九ノ一
 四〇〇ノ五
 四二五ノ二
 四二八ノ四
 四六ノ三

ころものいろは
ころこそそでの
ころさへにほふ
ころたてつべき
ころはまくらに

サ

さえてもつきの
さかえまさるは
さくやちとせの
さくゆふかげの
さけるかきれば
さけるかきれや
さこそはつらき
ささなみよする
さしてぞいのる
さすがにいへの
さだめなきみは
さだめなきよを
さてじもいとど
さてもつきすむ

四九八ノ五
三六四ノ五
二六四ノ四
二九九ノ一
二九二ノ一

三二二ノ二
五三八ノ四
三八七ノ三
三〇七ノ一
二八七ノ二
二八七ノ四
四一八ノ二
三二五ノ五
五三七ノ一
四八五ノ一
三三二ノ四
四〇〇ノ四
四二五ノ一
五三六ノ六

さてもはつれや
さてもほすべき
さてもわかれば
さびしくもある
さびしくもあるか
さむべきほどは
さむるうつつも
さむるまくらも
さむるわかれを
さむればおなじ
さむればゆめの
さめてもおなじ
さやけかるらむ
さよかふけぬる
さらばみるめを
さりともいまは
さをにさばらぬ

シ

しかにおもひは
しがのうらなみ

二九〇ノ一
四〇三ノ三
三八二ノ五
三二九ノ一
三一九ノ二
四九四ノ一
四〇八ノ四
五〇〇ノ一
四一五ノ二
五三三ノ三
四九四ノ三
三三八ノ一
三二二ノ三
三四一ノ一
四〇八ノ三
四一八ノ四
四六五ノ二

二九八ノ三
四六〇ノ三

しかのころさへ
しがのなみちに
しかのれおるす
しかのれさそへ
しかのれをさへ
しかやこよひの
しきしのびても
しぐるるそらに
しぐるるまきに
しぐれにくもる
しぐれにのみや
しぐればかりぞ
しぐれふるなり
したにとけすと
したばやひとの
したをれぬらむ
しづがそでだに
しづがたもとも
しづのふせやに
しづみしことは
しづみやせむと

三三〇ノ五
四六一ノ一
三三〇ノ三
三〇九ノ四
三三〇ノ六
三〇一ノ四
四三二ノ二
三三九ノ三
四〇二ノ四
三三七ノ五
三六三ノ一
三三九ノ一
三六五ノ二
四四四ノ四
二〇六ノ一
三〇六ノ五
四〇八ノ二
四三七ノ一
二八八ノ一
五三三ノ一
五五五ノ三

こころをおこす
こころをにかけて
こころをしろは
こころをだにも
こしのしらねに
こしのみそらに
こすゑぞふゆの
こすゑにかかる(沖)
こすゑにかかる(花)
こすゑはるかに
こぞかたらひし
こだかくぞなる
こたふるこゑも
ことしのはるは
ことしもけふを
ことよりほかの
このさみだれは
このはにかはる
このまのつきの
このまのつきは
このみやみづに

五三三ノ三
五一九ノ四
三九七ノ二
四四〇ノ六
二七三ノ五
三四六ノ三
三四六ノ二
二七三ノ三
二七三ノ五
三八五ノ四
二九一ノ三
三九一ノ三
二八九ノ三
三六九ノ三
三七二ノ二
四三五ノ三
三七〇ノ一
三三七ノ一
二八七ノ一
二七三ノ二
五三三ノ四

このもとをこそ
このよならでも
このよにひとを
このよにまたは
このよのちも
このよばかりと
このよひとつの
このよをさへも
こはたのさとに
こひしきひとの
こひしきほどを
こひしきとだに
こひしぬとだに
こひすとひとに
こひせよとては
こひちにまどふ
こひちにまよふ
こひつづくらす
こひにいのちの
こひのけがりを
こひのながめの

四八八ノ三
四〇七ノ四
四五四ノ二
四四五ノ一
四九四ノ五
四四九ノ六
四二一ノ五
四七三ノ四
五二二ノ一
四五二ノ二
四〇七ノ一
四三五ノ四
四一ノ二
三九四ノ五
四四〇ノ一
四〇〇ノ三
三九九ノ四
四二四ノ二
四三八ノ二
四〇四ノ五
四〇一ノ五

こひはくちせぬ
こひはすがたの
こひはみちなき
こひはわがみを
こほりぞなみの
こほりぞむすぶ
こほりとみゆる
こほりもみづも
こほりをくだく
こもれるちよは
こよひはこえじ
こよひはほなの
こるばかりなる
これぞそれとも
これぞやがての
これにてぞしる
これもこころの
これやなげきに
これやなごりと
これよりおくの
こるもにおつる

四五二ノ五
四四〇ノ二
四二二ノ三
四五一ノ四
三四三ノ三
三四三ノ六
三一四ノ五
五二六ノ三
五三五ノ二
三八四ノ二
三五七ノ一
五一五ノ一
四二四ノ五
三九三ノ三
三五二ノ五
三五九ノ六
四四二ノ四
四四九ノ三
五二〇ノ一
四九二ノ二
二六三ノ三

くもとなみとは
くもにやどかる
くものいくへの
くものたへまの
くもりもあへず
くもるばかり
くもぬにまがふ
くもぬのちかき
くもぬのよそに
くらきこころの
くらきにまふふ
くらしわぶてふ
くろしかりしぞ
くれすばはるの
くれぬるけふぞ

ク

三六三ノ五
三六六ノ二
二九〇ノ三
二九七ノ五
四一三ノ四
四六三ノ二
四七六ノ三
三八九ノ二
二七〇ノ二
五七五ノ五
五五九ノ二
四九三ノ二
四八三ノ二
二八三ノ五
三四九ノ五

けふとたのめし
けふのくれをも
けふりとならむ(ことぞ)
けふりとならむ(ゆふべ)
けふりばかりや
けふりはなみの
こがくれてのみ
こきむらさきの
ごくらくにゆく
こけのしたには
こけのしたにも
こけのたもとの
ここにすむべき
こころありても
こころいづれか
こころくたくる(風の)
こころくたくる(玉川)
こころくだけと
こころつくしに

コ

四三ノ三
三四九ノ三
三七五ノ三
四九四ノ二
三三ノ四
二九六ノ一
四六三ノ三
二八二ノ三
五二九ノ四
四九八ノ二
五三六ノ二
五〇一ノ一
五七ノ一
三四六ノ四
四一ノ三
三一ノ四
三四四ノ三
三四四ノ四
三五九ノ一

こころづくしの
こころづよきも
こころとまりし
こころなきひと
こころならずや
こころにかかる
こころにかけて
こころにもにぬ
こころのうちに
こころのうちに
こころのそこは
こころのほどぞ
こころのまに
こころばかりぞ
こころばかりな
こころははるの
こころはみより
こころひとつに
こころふかくも
こころほそくも
こころやみれに

二七五ノ五
四八五ノ四
四九六ノ三
三〇九ノ一
三四一ノ三
四二三ノ三
四三九ノ一
四〇三ノ二
三九七ノ三
四一七ノ五
四九六ノ二
四六三ノ一
四五二ノ三
四九六ノ四
二六六ノ五
二六八ノ五
三五四ノ二
四九六ノ二
三四三ノ四
四九七ノ五
二七〇ノ五

かひなくたむ

四五ノ二

かれぬとおもへば

四九八ノ三

きみだにこふる

三五三ノ三

かへむほどまでと

四一〇ノ二

かわくときなき

四二三ノ二

きみにのこして

四四四ノ五

かへらむことぞ

三七九ノ一

キ

きみにふたたび(逢はむ)

三五一ノ二

かへらむことば

三四九ノ二

きえぬなごりを

五二九ノ三

きみゆゑものを

三六九ノ五

かへるくもちに

二六六ノ二

きえのこりける

二七九ノ四

きみわすれずば

四三八ノ三

かへるたもとに

三〇三ノ六

きかばやおなじ

四六〇ノ二

きみをぞおもふ

四四六ノ一

かへるにまふふ

四一七ノ一

ききもならはぬ

三六〇ノ四

きみをやちよと

四二三ノ一

かへるやまぢに

二九八ノ二

きくよしもこそ

二八九ノ六

きゆるはをしき

五三八ノ三

かへるやまぢの

三四七ノ一

きくよりのちの

二八九ノ六

きよきかはらに

二五九ノ四

かへるをみるに

三五五ノ一

きごとにうめと

三四五ノ三

きよたきがほに

三四一ノ四

かみのしるしは

四六二ノ二

きしのまつかぜ

二六四ノ一

きりのまがきに

三三三ノ五

かみのほとけと

五三三ノ四

きそちのほしの

三六三ノ四

きりのまがきに

三〇ノ一

からくれなゐに

五三二ノ二

きつるひかずの

四三七ノ四

くさのいはりの

二九四ノ二

からくれなゐの

五一ノ四

きのふけふなや

三七七ノ三

くちなばなにを

三七四ノ三

からなでしこの

三五四ノ四

きのふのそでは

二六九ノ一

くちやはてなむ

三九四ノ三

かりにのみきて

二九九ノ五

きみがとふにや

四〇八ノ一

くめのいはばし

三九五ノ二

かりにもひとを

四六六ノ一

きみがみやこに

四九六ノ一

くもだのむらの

四七五ノ二

かりねのこの

四三六ノ三

きみがよほひの

四九五ノ四

くもちはるかに

三九二ノ一

かれにしえだも

二九二ノ四

きみこねよよを

三八四ノ一

くもちはるかに

二九〇ノ六

か

五二六ノ四

き

四八〇ノ五

ク

二九〇ノ六

おもふもかなし
おもにはつげよ
おりたちにくる

五四ノ一
三六五ノ六
五四ノ二

カ

かかげかれたる
かからむそでを
かかりそめけむ
かかろうきよも
かかればなしは
かきねばかりに
かくうきながら
かくきむものと
かくてふるやの
かくやはそでの
かくれなはてそ
かくわすられず
かげさすかたに
かげさへそこに
かげひのみづの
かげをたもとに

四八五ノ二
三七五ノ一
二八三ノ四
五五六ノ二
三五八ノ三
二八七ノ五
四九一ノ三
四八八ノ四
四八五ノ三
四六四ノ一
四六七ノ一
四二〇ノ二
二八八ノ三
三八六ノ一
四九〇ノ一
四三九ノ五

かこちがほなる
かごとがましき
かごとばかりの
かざすひかげに
かさなるかすを
かさぬにつけて
かしらはしるく
かすならぬみの
かすまぬさきに
かすみぞたてる
かすみにうかぶ
かすみにとづる
かすみにまがふ
かすみのうちや
かすみのころも
かすみもけふぞ
かすみもはれて
かすみをさへや
かぜにしられぬ
かぜにのみやは
かぜをさくらの

四五〇ノ四
三三八ノ五
四三三ノ五
四七五ノ一
二六三ノ二
三七八ノ三
五七〇ノ二
四二二ノ三
二六〇ノ二
二六二ノ一
四七六ノ四
四七五ノ二
二七三ノ三
二六二ノ二
二六〇ノ五
二五九ノ一
五二〇ノ一
五二〇ノ三
二七八ノ二
二七六ノ六
二七六ノ三

かぜをばよそに
かぞいろほとや
かたぶくつきに
かたぶくつきは(なれも)
かたぶくつきは(またも)
かたぶくまに
かたみとききし
かつがつけふの
かつかぬそでは
かつみがしたに
かつみるまに
かつらぎやまの
かなしきことの
かなはでとしの
かねてぞしるき
かねてならはぬ
かばかりこそは
かばかりはやき
かはさぬよはの
かはしもはてず
かはるにかふる

二六八ノ四
二六五ノ二
四六六ノ四
三四一ノ二
三二六ノ三
四六七ノ四
四四一ノ二
四四三ノ三
四四二ノ六
三四三ノ二
二九五ノ一
三二七ノ一
三二八ノ三
二七八ノ一
三四四ノ六
三七六ノ四
三四八ノ五
五三四ノ一
四四四ノ二
三〇五ノ四
三八二ノ三

うはのそらなる
うべかつまたに
うべぞみぎほに
うへはつれなき
うまれぬのちの
うらさへそでは
うらべにけぶり
うらみけるさへ
うらみしことぞ
うらみはすゑも
うらみはたえぬ
うらみむとては
うらやくちなむ
うらやましきは
うるふくさきは
うれしくもみづの
うれしとおもふに

エ

オ

えだよりほかの

三九四ノ四
五一ノ五
五三ノ二
三九七ノ五
四八六ノ一
四三〇ノ二
二九五ノ六
四三六ノ四
四五四ノ五
四四一ノ三
四五三ノ六
四〇四ノ二
四二七ノ四
四〇九ノ二
五一九ノ一
五二七ノ一
二七ノ二
三四八ノ三

おいのこころの
おくるはつきの
おくるるひとや
おくるるほどは
おくれてもまた
おくれはつべき
おちくるたきの
おときくよりも
おとしおとせぬ
おとづれしより
おとにのみやは
おとにはたてじ
おなじそらとも
おなじみのりを
おのれのみこそ
おひかぜしるく
おへかしひとの
おほろげにてや
おもがばりすな
おもはぬいその
おもはぬつきの

二六七ノ四
五三三ノ二
三四七ノ六
三七一ノ二
三八一ノ二
四九七ノ四
四七三ノ四
四八九ノ三
五一五ノ三
三〇四ノ五
三九五ノ三
三九九ノ一
三〇一ノ三
五二九ノ一
三四三ノ一
二九三ノ四
五一五ノ六
四六二ノ二
四六六ノ一
四六六ノ二
四六三ノ一

おもひかへすに
おもひしらすば
おもひしらでぞ
おもひしらるる
おもひしれとや
おもひすつべき
おもひぞおくる
おもひたえたる(曙)
おもひたえたる(暮)
おもひたえぬる
おもひはふゆの
おもがばりせぬ
おもひもかけぬ
おもひよりけむ
おもひわかでも
おもふこころや
おもふこころよ
おもふこころを
おもふことをも
おもふになれば
おもふばかりは

四四二ノ五
四九八ノ四
四四七ノ四
三六五ノ一
三八〇ノ二
四二九ノ五
三五一ノ一
四一三ノ六
四五三ノ一
四一八ノ五
四〇三ノ五
四七七ノ一
四三四ノ二
四三〇ノ三
四九五ノ二
二九四ノ四
三九三ノ二
三九七ノ一
三六八ノ三
四九三ノ二
三九六ノ五

い	つ	ま	で	わ	れ	も	四六六ノ三	い	ま	こ	む	と	だ	に	四二五ノ四
い	づ	れ	さ	か	き	の	五三三ノ一	い	ま	は	か	ぎ	り	の	四七九ノ三
い	づ	れ	の	と	き	な	三六九ノ二	い	ま	は	な	み	だ	の	四〇一ノ六
い	づ	れ	の	も	の	と	五二八ノ三	い	も	が	か	ほ	の	み	五二〇ノ三
い	と	か	く	そ	で	は	四〇七ノ二	い	も	こ	ひ	し	ら	に	三五七ノ三
い	と	こ	の	た	び	の	三五四ノ三	い	り	な	む	の	ち	な	四六八ノ四
い	と	ひ	や	す	き	は	四九一ノ一	い	る	よ	り	そ	で	は	四〇四ノ四
い	の	ち	と	な	ら	む	四一〇ノ三	い	る	こ	そ	か	へ	れ	三二一ノ五
い	の	ち	に	か	は	る	五二一ノ一	い	る	な	る	な	み	に	三三三ノ二
い	の	ち	に	か	へ	ぬ	四〇九ノ三	い	る	に	い	で	じ	と	三九四ノ三
い	の	ち	や	こ	ひ	の	四〇七ノ三	い	る	に	は	い	で	じ	三九七ノ四
い	の	ち	を	あ	だ	に	四五〇ノ一	い	る	は	か	は	ら	で	三〇四ノ三
い	の	ろ	い	は	ひ	は	五三七ノ三								
い	は	こ	す	な	み	は	三八六ノ三								
い	は	さ	へ	こ	け	の	四九〇ノ四								
い	は	た	の	を	の	の	三二一ノ三								
い	は	で	の	や	ま	の	三九八ノ二								
い	は	れ	に	ま	つ	の	三八六ノ二								
い	は	ま	の	み	づ	の	三六二ノ二								
い	ま	い	く	か	か	は	二九六ノ四								
い	ま	い	く	た	び	の	二八五ノ二								

ウ

う	き	お	も	ひ	で	の	四三〇ノ三	う	き	よ	に	ま	た	は	五一九ノ二	
う	き	に	た	へ	た	る	四三四ノ一	う	き	よ	に	め	ぐ	る	五一八ノ一	
う	き	に	た	へ	ぬ	は	四二八ノ二	う	き	よ	は	た	れ	も	四七八ノ二	
う	き	に	つ	け	て	も	三八二ノ二	う	き	よ	へ	だ	つ	る	四八一ノ二	
う	き	は	わ	が	み	に	五一三ノ五	う	き	よ	り	ほ	か	の	四七二ノ三	
う	き	み	ゆ	ゑ	こ	そ	四五一ノ一	う	き	よ	を	い	で	む	四八四ノ二	
う	き	よ	に	ふ	か	き	四九九ノ三	う	き	よ	を	い	と	ふ	四九一ノ四	
								う	き	を	い	と	ふ	は	四五〇ノ六	
								う	き	を	し	の	げ	ぬ	四五一ノ二	
								う	し	と	み	つ	つ	も	四九四ノ四	
								う	す	ぐ	も	か	け	て	三四五ノ四	
								う	た	て	も	の	お	も	ふ	四三三ノ二
								う	だ	の	と	だ	ち	な	三四〇ノ三	
								う	た	も	よ	み	ち	な	五一七ノ三	
								う	つ	つ	も	い	ま	は	五二五ノ五	
								う	づ	ら	な	く	な	り	三〇九ノ二	
								う	つ	り	し	み	づ	は	三四四ノ一	
								う	つ	り	も	あ	へ	す	三三八ノ三	
								う	つ	る	ふ	な	べ	に	二八二ノ一	
								う	の	は	な	く	た	し	二九四ノ三	
								う	は	げ	の	し	も	よ	三四七ノ四	

あひみぬさきの(わかれ)

四〇三ノ六

あらはれわたる

三四〇ノ二

いかにつきせぬ

四七五ノ一

あふことのほの

四〇一ノ四

ありあけがたの

四六九ノ五

いかにまちてか

二九二ノ二

あふさかやまの

三九二ノ二

ありしやふしの

五五ノ四

いきてちるをば

二七〇ノ四

あふせありとは

四一六ノ二

ありやなしやを

四八七ノ二

いくしほとしに

二七〇ノ一

あふせのかずの

四四二ノ二

あるよにだにも

四八八ノ一

いくたのおくの

三三〇ノ二

あふとほひとの

四四四ノ一

あればぞひとを

四三三ノ一

いくたのかはに

四二一ノ一

あふにいのちを

四四〇ノ五

あわとなりても

四一六ノ三

いくたびかげを

三八七ノ二

あふびぞくさの

四六〇ノ一

あをねをこすや

二七一ノ五

あふまでこそは

四一八ノ三

あ

いくへかさなる

三五六ノ一

あふみちにさへ

四二九ノ二

い

いくへかみえむ

二八〇ノ六

あふよりほかの

四〇九ノ一

い

いくよになりぬ

四九一ノ二

あまよりくまなき

四六四ノ四

い

いくよまでにか

四七五ノ四

あまのはしだて

三五八ノ四

い

いざむすびみむ

三五九ノ二

あめもなみだも

三九六ノ三

い

いさよふつきを

四六六ノ二

あやしきとりの

四四六ノ三

い

いそのまつがれ

三六一ノ四

あやなくつきの

四二九ノ四

い

いただのほしも

五三七ノ三

あやなくひとを

三九九ノ二

い

いづくもたらむ

四三四ノ一

あやめもしらぬ

三七四ノ四

い

いづともしらぬ

三六一ノ一

あゆくくさばに

四九三ノ五

い

いつふしなれて

四一六ノ四

あらばやひとに

四三〇ノ六

い

いつまでありし

四三七ノ一

あらはれてだに

三九三ノ一

い

三〇一ノ二

四〇〇ノ六

わびつづは
わびびとの
わりなしや
われながら
われもまた
われゆゑの

ヲ

をしからぬ
をしかな
をしどりの
をしへおく(かたみ)
をしへおく(その)
をしみかれ
をしめども(かひ)
をしめども(はかなく)
をちかへり
をはぎはら
をはつせの
をみなへし(靡く)
をみなへし(涙)

四四四ノ二
五二二ノ四
三九三ノ三
三〇一ノ一
二八二ノ五
四一五ノ三

四九五ノ四

三六八ノ二

三四二ノ六

三五五ノ二

三九二ノ二

四五三ノ三

二八五ノ一

三四九ノ四

二九六ノ四

三〇一ノ四

二七三ノ三

三〇七ノ六

三〇八ノ一

をやまだの
をりしもあれ

下句七言

ア

あかしのおきに
あかつきつゆの
あかでやみぬる
あかぬちぎりや
あきかぜふけば
あきのれさめの
あきののべとも
あきのわかれや
あくるみなとに
あけぬなりとは
あけやらすとや
あすばかりをば

四六六ノ四
二九三ノ六

三五ノ二

三〇五ノ五

四七二ノ二

三〇五ノ二

三〇四ノ二

三八ノ一

三一ノ二

三五ノ三

三四一ノ六

三七六ノ一

三四一ノ五

二八二ノ五

あとだにひとば
あとだにみせぬ
あとなきみづに
あとをみるだに
あなしほとけの
あはでとしふる
あはでのうらの
あはでもとりの
あはれどくれの
あはれことしの
あはれしぐるる
あはれなごりを
あはれなみだの
あはれなりける
あはれなるべき
あはれわかれの
あはれをけふの
あひみてしかの
あひみてのちの
あひみぬさきに
あひみぬさきの(つらさ)

四七四ノ四
四五四ノ一
四六九ノ三
三八一ノ三
二九六ノ二
四三三ノ一
四一五ノ一
四一六ノ五
四四三ノ五
四七三ノ一
三八ノ四
四四四ノ四
四〇八ノ五
四五〇ノ三
四一五ノ三
三六七ノ一
五二八ノ三
二九八ノ四
四〇四ノ二
四二二ノ四
四四三ノ三

よしのやま(花は)

二七五ノ二

よろづよの

二六八ノ一

よそにして

四二五ノ二

よろづよも

三八九ノ四

よそにてぞ

二七八ノ四

よろづよを

四二四ノ三

よそびとに

四三三ノ二

よないとふ(心)

四六ノ三

よとともに(心を)

四〇四ノ一

よないとふ(はし)

三九九ノ二

よとともに(つれなき)

五二二ノ三

よなかされ(寐ぬ)

二九二ノ二

よとともに(行く)

四二七ノ六

よなかされ(むすぶ)

三四一ノ四

よとともに(行く)

四三三ノ三

よなこめて(明石)

三三〇ノ四

よなよなの

三五八ノ三

よなこめて(谷)

三四四ノ六

よにしらぬ

四三三ノ六

よなすくふ

五二九ノ二

よのうさを

四八五ノ三

よなそむき

四九八ノ五

よのなかの(ありし)

四七二ノ二

よなてらす

五二〇ノ三

よのなかの(うき)

四九八ノ四

よのなかは

五一八ノ三

ワ

よのなかを

四九九ノ四

わがこひは(あまの)

四三三ノ二

よのなかな

四八二ノ一

わがこひは(年ふる)

四〇九ノ二

よのほどこに

五一二ノ二

わがこひは(なばな)

三九九ノ一

よひのまも

四二五ノ四

わがこまを

五一二ノ一

よもすがら(花の)

二七〇ノ五

わがそでの(しほの)

四一四ノ五

よもすがら(物思ふ)

四二六ノ六

わがそでの(涙)

四三六ノ三

よもやまに

二六五ノ二

わがそでは

四一五ノ六

わがたのむ

五三五ノ三

わがとこは

四〇二ノ二

わがととも

三八五ノ一

わがやどの

二九三ノ五

わかれては

四三六ノ二

わかれても(おなじ)

三五四ノ三

わかれても(心)

三五六ノ一

わかれゆく

三五九ノ二

わかれより

三五二ノ二

わぎもこが

三六〇ノ五

わけきつる

四九ノ二

わけわびて

四九八ノ三

わしのやま

五二五ノ二

わすらるる

四一七ノ五

わするなよ(姨捨山)

三五五ノ三

わするなよ(かへる)

三五二ノ三

わするなよ(世々の)

四三三ノ二

わするるは

四四五ノ五

わすれぬや

五四一ノ二

わたのばら(しほぢ)

三六三ノ五

わたのばら(遙に)

三六〇ノ五

やへむぐら
 やほかゆく
 やまかげや
 やまかぜに(ちり)
 やまかぜに(まや)
 やまざくら(かすみ)
 やまざくら(たづぬ)
 やまざくら(ちぢに)
 やまざくら(散る)
 やまざくら(にほふ)
 やまざくら(花を)
 やまざくら(をしも)
 やまざとの(垣根に)
 やまざとの(垣根の)
 やまざとの(垣根は)
 やまざとの(かけひ)
 やまざとの(さびしき)
 やまざとの(柴)
 やまざとは
 やましるの
 やまのはに(たなびく)

三〇三ノ四
 三二五ノ三
 三〇〇ノ二
 二七八ノ六
 四七〇ノ四
 二七〇ノ三
 二七六ノ八
 二七六ノ一
 二七八ノ三
 二六八ノ四
 四八二ノ四
 二七五ノ三
 二六〇ノ二
 三三八ノ五
 三六六ノ五
 四八九ノ三
 四九〇ノ一
 四八七ノ一
 三八ノ二
 四一ノ五
 三三ノ一

やまのはに(ますみ)
 やまびとの
 やまふかき
 やまふかみ(誰)
 やまふかみ(ほぐし)
 やまぶきの(花咲き)
 やまぶきの(花の)
 やまめぐり
 やまよりも

ユ

ゆきかへる(心)
 ゆきかへる(春)
 ゆきつもる
 ゆきふかき
 ゆきふれば
 ゆききみを
 ゆくすゑを(思へば)
 ゆくすゑを(まつぞ)
 ゆくすゑを(まつべき)
 ゆくとしは

三二四ノ三
 四七四ノ五
 四六八ノ一
 四七〇ノ五
 二九八ノ三
 二八二ノ一
 二八二ノ一
 三三八ノ二
 四六六ノ四
 四二二ノ四
 三六七ノ二
 三四六ノ三
 二五九ノ三
 三四八ノ三
 三三三ノ二
 四七二ノ五
 三八七ノ一
 三五二ノ二
 四七二ノ一

ゆふされば(萱)
 ゆふされば(玉)
 ゆふされば(野邊)
 ゆふされば(小野の淺茅)
 ゆふされば(小野の萩原)
 ゆふだちの
 ゆふづくよ(いるさ)
 ゆふづくよ(ほのめく)
 ゆふまぐれ(山)
 ゆふまぐれ(萩)
 ゆめさめむ
 ゆめとのみ

ヨ

よしさらば(逢ふ)
 よしさらば(磯)
 よしさらば(君)
 よしさらば(涙)
 よしのがば(岸)
 よしのがば(みかさ)
 よしのやま(花の)

三〇八ノ三
 三〇〇ノ三
 三〇九ノ二
 三二一ノ四
 三一九ノ二
 三〇一ノ三
 二九一ノ四
 二八七ノ二
 三四〇ノ五
 三二〇ノ三
 五二〇ノ二
 四九四ノ一
 四〇八ノ四
 三六四ノ一
 四五四ノ四
 四二八ノ一
 二八二ノ三
 二七二ノ五
 二七二ノ五

みやぎのの(小萩)

三三〇ノ六

むかしより

二六五ノ一

ももちたび

三八九ノ一

みやきひく

三五八ノ五

むかしわが

二九八ノ五

もらさばや

四〇〇ノ五

みやこだに

三四〇ノ一

むさしのの

五二七ノ一

もろがみの

五八三ノ三

みやこにて

三五〇ノ一

むすびおく

四〇六ノ四

もろともに(秋)

四七〇ノ一

みやこびと

二九二ノ四

むなしきも

五二四ノ五

もろともに(有明)

三七五ノ四

みやこへと

三七三ノ四

むれにみつ

三七五ノ三

もろともに(眺め)

三八三ノ四

みやまぎの

二六五ノ五

むらむらに

二八七ノ一

もろともに(春)

三七四ノ一

みやまぢは

三四五ノ五

むれてゐる

三九〇ノ二

もろともに(見し)

四六五ノ六

みやまべの

三三八ノ五

めづらしき

五三三ノ二

もろびとの

四九二ノ三

みゆきする

五三五ノ五

メ

ヤ

みよしのの(花)

二七三ノ五

もくづびの

三九四ノ二

やかたをの

三四〇ノ三

みよしのの(山)

二七七ノ五

もくづびの

三六三ノ一

やきすてし

二八八ノ二

みるになほ

二九九ノ五

もしほぐさ

五二八ノ三

やどかれて

三一ノ二

みるほどは

五二一ノ一

もちづきの

五二八ノ三

やとせまで

四六二ノ五

みるまに

五〇〇ノ一

ものおもはぬ

四六三ノ六

やどもやど

四七八ノ三

みるゆめの

二六二ノ二

ものおもふ

四八四ノ二

やどりする

四九一ノ二

みわたせば

三五一ノ一

ものおもへど

四八五ノ三

やばらかに

四三〇ノ四

ム

むかしみし(心)

四八九ノ二

ものごと

三〇四ノ四

むかしみし(松)

三〇四ノ四

ものごと

三〇四ノ四

やへぎくの

三八七ノ四

マ

まきのとを
まことにや
ましばかる
ましばふく
ますかがみ
ますけおふる
まだしらぬ(露)
まだしらぬ
またできく
またもなく
まちいでて
まちがれて
まづがれの
まつとても
まつほども
まつらむと
まてといひて
まどろみて
まばらなる

四八六ノ三
四四八ノ一
三四八ノ二
四六九ノ五
四一八ノ四
四七〇ノ二
四三一ノ五
三九三ノ二
二九〇ノ一
三九九ノ四
五二八ノ一
四四〇ノ三
三五九ノ五
四三四ノ二
四六八ノ二
三八一ノ三
三五五ノ一
四九七ノ三
三七〇ノ三

こ

まぶしさす
みかさやま
みくさのみ
みくらやま
みこもりに(あし)
みこもりに(言はで)
みしまゆふ
みしゆめの
みせばやな(露の)
みせばやな(を島)
みそぎする
みそぎせし
みたらしや
みだれすと
みちすがら
みちたゆと
みちとほみ
みちのくの(しのぶ)
みちのくの(十綱)

四三四ノ六
五三〇ノ一
五二六ノ六
五二二ノ二
二六六ノ一
三九五ノ六
五三八ノ二
四三二ノ三
四三九ノ一
四四一ノ四
三〇二ノ六
四四九ノ四
四六一ノ一
三八二ノ五
三六〇ノ二
二五九ノ四
二八〇ノ五
三九七ノ四
四〇七ノ五

みちのべの
みづかきの
みづぐきは
みつしほの
みづどりの
みづどりを
みづのいろの
みづのうへに
みですぐる
みとせまで
みなとがは(うきれ)
みなとがは(夜船)
みなひとの
みなひとを
みれごえに
みのうさの
みのうさを
みのほどを
みむろやま(おるす)
みむろやま(谷)
みやぎのの(はぎ)

五三二ノ二
三九〇ノ三
四三八ノ四
四三三ノ一
三四二ノ三
三四二ノ二
四七四ノ三
三五八ノ三
二八七ノ四
三八〇ノ一
三三〇ノ三
三三〇ノ五
二七〇ノ一
五二九ノ四
三三九ノ四
三六一ノ四
四四三ノ三
四四一ノ三
三一九ノ三
二五九ノ二
三〇七ノ三

ひとすぢに

五九ノ一

ふえたけの(こちく)

五一ノ三

ふるさとの(板間)

四八ノ二

ひとづては

四三七ノ三

ふえたけの(よふかき)

四五六ノ二

ふるさとの(板井)

四六九ノ二

ひととせば

三四九ノ五

ふえのねの

三九〇ノ一

ふるさと

二七九ノ二

ひとのあしを

五二六ノ一

ふかきよの

四七〇ノ三

ふるまを

五三三ノ二

ひとのうへと

四三七ノ五

ふかくいりて

五三六ノ一

ふるまに

三四八ノ四

ひとはいさ

四二五ノ六

ふかくおもふ

四八三ノ二

ふるゆきに(谷)

三四六ノ二

ひそもがな

三〇七ノ一

ふくかぜに(たへぬ)

四四五ノ一

ふるゆきに(軒端)

三四七ノ五

ひとめみし

三九四ノ四

ふくかぜに(なれふし)

三〇八ノ二

ふるゆきに(行方)

三四〇ノ四

ひとめをば

四〇三ノ五

ふくかぜも

三八八ノ一

ふるゆきは

五二二ノ五

ひとよとて

四四〇ノ四

ふくかぜを

二七九ノ三

ひとりぬる

四二一ノ四

ふけにける

三一六ノ三

ホ

四八一ノ五

ひとりぬの

三三七ノ五

ふたこゑと

二八九ノ二

ほとけには

二九一ノ五

ひとりのみ(哀)

四六四ノ二

ふぶきする

三〇六ノ三

ほととぎす(聞き)

二八九ノ三

ひとりのみ(苦し)

五二四ノ三

ふみしだき

二七五ノ五

ほととぎす(なほ)

二九〇ノ四

ひとりゐて

四六三ノ五

ふめばをし

四二四ノ二

ほととぎす(又も)

二八九ノ六

ひのひかり

五二七ノ五

ふゆくれば

四八二ノ三

ほととぎす(まつは)

二八九ノ一

ひなへつつ(しげき)

四〇一ノ四

ふゆのひを

五三三ノ三

ほどふれば

四三四ノ三

ひなへつつ(行く)

三六二ノ三

ふりにける

三七八ノ四

ほりうゑし

三八五ノ五

フ

五二五ノ四

ふりはへて

三九一ノ一

ほととぎす

三九五ノ五

ふえたけの(あな)

五二五ノ四

ふるさとに

三七八ノ四

はかなしな
 はかなしや(憂身)
 はかなしや(枕)
 はつせやま
 はなさかぬ
 はなざかり(春の)
 はなざかり(よもの)
 はなさきし
 はなすすき
 はなとみし
 はなにそむ
 はなのいろに
 はなのちる
 はなのほる
 はなのみな
 はなはれに
 はなゆゑに(かからぬ)
 はなゆゑに(しらぬ)
 はやせがは
 はりまがた(須磨の月)
 はりまがた(須磨の晴)

四二六ノ四
 四七二ノ四
 四〇〇ノ二
 五〇〇ノ二
 四八〇ノ三
 二六九ノ二
 二七一ノ四
 三五九ノ六
 三二〇ノ五
 三七四ノ二
 四八一ノ四
 二七三ノ二
 二七六ノ二
 二八四ノ二
 二七九ノ一
 二八三ノ一
 二六八ノ五
 二七二ノ二
 二九九ノ四
 四六四ノ五
 四七六ノ二

はりまちや
 はるあきも
 はるがすみ
 はるかぜに
 はるかなる
 はるくれば(杉)
 はるくれば(たのむ)
 はるくれば(散り)
 はるごとに
 はるさめに
 はるさめの
 はるたてば
 はるのくる
 はるのよの
 はるのよは(のきば)
 はるのよは(吹き)
 はるはなほ
 はるばると(おまへ)
 はるばると(つもり)
 はるふかみ
 はるをへて(匂)

三五七ノ二
 二九九ノ七
 四七六ノ五
 二七六ノ五
 三八〇ノ一
 二六九ノ一
 二六六ノ二
 三六七ノ一
 五三六ノ五
 二七五ノ四
 二六五ノ三
 二六〇ノ一
 二五九ノ一
 四五八ノ二
 二六三ノ六
 二六四ノ一
 二六七ノ一
 四七六ノ三
 三六三ノ四
 二八〇ノ六
 二七三ノ六

ヒ

はるをへて(花)
 ひきかけて
 ひくひとも
 ひさかたの
 ひたすらに
 ひとえだは
 ひとかたに
 ひとごころ(有らず)
 ひとごころ(なにを)
 ひとごとに
 ひとこゑは
 ひとこゑも
 ひとしれず(おもひ)
 ひとしれず(おもふ)
 ひとしれず(むすび)
 ひとしれず(物思ふ)
 ひとしれぬ(大内山)
 ひとしれぬ(木の葉)
 ひとしれぬ(涙の川)

二七六ノ三
 四七六ノ四
 四八五ノ四
 四五〇ノ五
 四一八ノ三
 二七七ノ六
 四二〇ノ四
 四七三ノ三
 四四七ノ三
 五三三ノ三
 二九〇ノ六
 三七〇ノ一
 四〇一ノ六
 四〇一ノ三
 四四三ノ一
 三九六ノ三
 四六三ノ三
 三九七ノ一
 三九八ノ二

なげけとて
 なごりなく
 なつごろも(裾野)
 なつごろも(花)
 なつのうちば
 なつのよの
 なつふかみ
 などてかく
 などやかく
 なにかそれ
 なにごとの
 なにごとも
 なにしおはば
 なにせむに
 なにとかや
 なにとなく(ながむる)
 なにとなく(ものぞ)
 なにとなく(ものぞ)
 なにはえの(葦)
 なにはえの(藻)
 なにはがた(入江)

四五〇ノ四
 二九一ノ三
 三〇一ノ五
 二八六ノ一
 五一四ノ二
 三〇一ノ二
 二九九ノ三
 二九七ノ二
 四一三ノ一
 四六一ノ三
 三八〇ノ四
 四七三ノ一
 五一三ノ五
 四五三ノ一
 四三二ノ二
 四六九ノ四
 三〇九ノ三
 五一一ノ一
 四二六ノ二
 三九三ノ一
 三四二ノ五

なにはがた(潮路)
 なにはめの
 なほざりに(かへる)
 なほざりに(三輪)
 なほざりの
 なみかけば
 なみだがは
 なみだにや
 なみだをも
 なみのうへに
 なみまより
 なれてのち(しなむ)
 なれてのち(つらからまし)

四七六ノ四
 三九七ノ五
 四六六ノ四
 四三三ノ三
 四三三ノ二
 四三六ノ四
 三九八ノ五
 四三八ノ四
 四三九ノ四
 三五八ノ一
 三四七ノ三
 四〇九ノ三
 四〇九ノ六

にしきぎの
 にほひもて
 ぬげばちる

ヌ

ニ

四〇九ノ四
 二六三ノ二
 四七四ノ二

ね
 れざめして
 れざめする
 れをなけば

の
 のきちかく
 のこりなく
 のべみれば
 のぼるべき
 のわきする

は
 はかなくぞ(後の)
 はかなくぞ(みよの)
 はかなくも(こむ世)
 はかなくも(人に)
 はかなくも(我がよ)
 はかなさを(恨み)
 はかなさを(我が身)

四五一ノ三
 五二二ノ二
 四四九ノ二
 四〇五ノ二
 四六六ノ二
 四七八ノ二
 三二〇ノ一

二九三ノ一
 四六六ノ四
 三八〇ノ三
 四九二ノ二
 三〇九ノ一

つゆしげき(よもぎ)

四六二ノ二

ときはなる(神)

五三七ノ一

とりのれも

五三九ノ一

つらしとて

五七ノ二

ときはなる(松)

二六ノ三

とりべやま(おもひ)

三七九ノ三

づららゐて

四五〇ノ六

ときはなる(み神)

三九三ノ三

とりべやま(君)

四九八ノ二

つれづれと

三四四ノ二

としごとの

二九九ノ六

ナ

四八二ノ一

つれなくぞ

二六五ノ四

としふれど

四八二ノ一

ながからむ

四二五ノ三

つれなさに(いはで)

四〇四ノ二

としふれど(憂身)

四五二ノ二

ながきよも

五三五ノ一

つれなさに(今ほ)

四〇三ノ六

としふれど(かばらぬ)

四五一ノ六

ながむれば(思ひ)

二八三ノ三

つれもなき

四二一ノ五

としへたる

二八二ノ四

ながむれば(霞める)

二六六ノ三

つれもなく

三九八ノ四

としをへて(おなじ)

三五三ノ三

ながめつつ

四六四ノ一

つれもなく

四二〇ノ三

としをへて(きみ)

二七二ノ三

ながめやる

三二五ノ二

テ

てらすなる

五三三ノ一

としをへて(昔)

三八二ノ二

ながらへて(有る)

四四〇ノ五

てるつきの(かげ)

三二六ノ一

としをへて(かほる)

四六三ノ二

ながらへて(かほる)

四〇〇ノ四

てるつきの(心)

五三三ノ三

とほざかる

三二四ノ五

ながれても

四〇三ノ四

てるつきの(旅寐)

三二七ノ一

ともかくも

四四五ノ三

なきひとを

四〇三ノ四

ト

ときしもあれ(秋)

三二一ノ一

ともしする(端山)

四〇四ノ四

なきよわる

三五一ノ三

ときしもあれ(水)

二九五ノ五

ともしする(火串の)

二九八ノ二

ながきあまり(うき身)

四三八ノ三

ときはなる(青葉)

三二一ノ五

ともしする(火串を)

二九八ノ四

ながきあまり(知せ)

三九六ノ五

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(青葉)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)

三二一ノ五

ともしする(宮城)

二九七ノ四

ながきつつ

四四四ノ三

ときはなる(宮城)</

たまくらの

四一四ノ四

ちとせすむ

三八六ノ一

つきかげの(つねに)

五九ノ三

たまづさに

三三九ノ三

ちとせふる

三八九ノ三

つきさげは

三二五ノ五

たまもかる(いらこ)

四七五ノ四

ちとせまで(むすびし)

五二ノ二

つきのすむ

三四四ノ三

たまもかる(野島)

四〇七ノ二

ちとせまで(なりて)

三八五ノ四

つきのすむ

三四四ノ一

たまもふく

三六三ノ一

ちとせやま

五三八ノ四

つきまつと

四三九ノ三

たまよする

三三三ノ三

ちはやぶる(齋の宮の有)

三八六ノ四

つきみれば(遙に)

三三三ノ一

たよりあらば

三九九ノ三

ちはやぶる(齋の宮の旅)

四六〇ノ一

つきみれば(まづ)

三六二ノ一

たらちめや

三八三ノ三

ちはやぶる(神田)

三九一ノ二

つきよみの

五三六ノ二

たれもみな(露)

四九六ノ三

ちはやぶる(神代)

三八七ノ五

つつめども(たへぬ)

三九四ノ六

たれもみな(とまる)

三七二ノ二

ちはやぶる(賀茂)

四四六ノ一

つつめども(涙)

三九四ノ五

たれもよも

四三八ノ五

ちよとのみ

三九一ノ一

つつめども(枕)

四三七ノ二

たれゆゑか

四一四ノ二

ちよふべき

三八八ノ二

つつめども(枕)

五三九ノ三

チ

ちかひをば

五三三ノ一

ちりつもる

五〇〇ノ三

つねよりも(今日)

二八五ノ二

ちぎりありて

四五八ノ三

ちりはてて

三三九ノ六

つねよりも(また)

三七三ノ二

ちぎりおきし

四七二ノ一

ちるばなを

二七八ノ一

つねよりも(身)

三二五ノ一

ちぎりおく

四一四ノ一

ちるをみて

四八一ノ三

つねよりも(むつまじ)

三七七ノ二

ちぎりこし

四二〇ノ一

つ

つばなおひし

五四四ノ五

ちぎりしに

四五四ノ一

つきかげの(いりぬる)

四七〇ノ六

つゆさむみ

三二九ノ一

ちぎりしも

四三七ノ六

つきかげの(いりぬる)

四七〇ノ六

つゆしげき(あした)

三〇七ノ五

すべらきな
すまのせき
すみぞめの(色)
すみぞめの(秋)
すみなれし(さの)

すみなれし(さの)
すみなれし(宿)
すみのえの
すみよしの(波)
すみよしの(松)

すみよしの(松)
すみわびて
すめばみゆ
せきかぬる
せきとむる

せきとむる
せきかぬる
せきとむる
せきかぬる
せきとむる

せきとむる
せきかぬる
せきとむる
せきかぬる
せきとむる

せきとむる
せきかぬる
せきとむる
せきかぬる
せきとむる

せきとむる
せきかぬる
せきとむる
せきかぬる
せきとむる

せきとむる
せきかぬる
せきとむる
せきかぬる
せきとむる

せきとむる
せきかぬる
せきとむる
せきかぬる
せきとむる

せきとむる
せきかぬる
せきとむる
せきかぬる
せきとむる

そまがはに

夕

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

たなばたに(かしつ)
たなばたに(ことし)
たなばたに(花ぞめ)

たなばたに(天つ)
たなばたの(天の河原)
たなばたの(天の羽衣)

たなばたの(心)
たにかぜの
たにのとな

たにのとな
たにみづを
たのむれど

たのむれど
たのめこし
たのめとや

たのめとや
たのもしき
たびごろも(あさ)

たびごろも(あさ)
たびごろも(なみだ)
たびねする(庵)

たびねする(庵)
たびねする(木)
たびねする(須磨)

たびねする(須磨)
たびのよに
たまがばと

たまがばと
たまがばと
たまがばと

たまがばと
たまがばと
たまがばと

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

そまがはの
そまがばや

さみだれに(花橘)
さみだれに(目數)
さみだれに(室の)
さみだれの
さみだれは(あま)
さみだれは(たく)
さみだれは(とま)
さみだれは(水の)
さもこそば
さゆるよの
さよちどり
さよふかき
さよふけて(風)
さよふけて(富士)
さらしなや
さらにまた
さらぬだに(光)
さらぬだに(夕)
さりととも(たのみ)
さりととも(たのむ)
さりととも(歎き)

二九四ノ一
二九五ノ二
二九六ノ一
二九六ノ三
二九五ノ六
二九五ノ四
二九六ノ二
二九五ノ三
四六九ノ三
三四四ノ四
四六五ノ一
三五九ノ三
二六三ノ五
三三三ノ四
三六〇ノ一
五七〇ノ六
三〇〇ノ五
三三〇ノ一
五三四ノ二
五三四ノ三
三四九ノ一

さをしかの

シ

しかばかり
しきしのぶ
しぐれつる
しぐれゆく
したさゆる
したひくる
したひもほ
しぬとても
しのびかれ
しのびれの
しのべども
しばしこそ
しひしほの
しほがまの
しほたるる(いせを)
しほたるる(伊勢を)
しほたるる(袖)
しほみてば

三九ノ六

四五四ノ二
四五二ノ五
三三九ノ二
三三八ノ三
二七九ノ四
五五ノ五
四二一ノ三
四四四ノ五
四三九ノ五
四〇三ノ二
三五四ノ四
四二七ノ六
三七八ノ三
三四一ノ一
四〇八ノ三
四三七ノ五
四一五ノ一
四七五ノ五

しものがれの(難波)

しものがれの(まがき)

しもさえて

しもさゆる

しもふれど

しらくもと(みれに)

しらくもと(みれの)

しらくもと(羽)

しらくもと(まがひ)

しらざりき

しらじかし

しられても

しるなれば

しるらめや

ス

すがたこそ

すぎがえを

すぎきにし

すきぬるか

すべらぎの

三四一ノ六

三四五ノ三

三四一ノ五

四六八ノ五

三九二ノ二

二七五ノ一

二七三ノ一

三八八ノ三

四七三ノ四

四三九ノ五

四二〇ノ二

四二九ノ六

四四九ノ一

四三二ノ四

四二六ノ五

五三三ノ四

四七二ノ三

二九三ノ一

三九一ノ三

こひしなむ(事)	四二六ノ二
こひしなむ(涙)	四一五ノ五
こひしなむ(身)	四一〇ノ二
こひすれば	四二七ノ三
こひそめし(心)	四四三ノ五
こひそめし(人)	四〇五ノ三
こひゆゑは	四一七ノ二
こひわたる	四〇七ノ四
こひわびて(あはれ)	四三三ノ三
こひわびて(うちぬる)	四四四ノ一
こひわびぬ	四二一ノ一
こひわぶる(今日)	四〇八ノ一
こひわぶる(心)	四五三ノ四
こひをのみ(しかま)	四三六ノ五
こひをのみ(しぐる)	四一三ノ四
こひをのみ(しづ)	四三三ノ二
こひをのみ(すがた)	四三六ノ六
こまなべて	五一〇ノ四
こまのあと	三四七ノ六
こもよには	四七一ノ二
こよひれて	二八〇ノ三

サ

これほみな	四四四ノ四
これやゆめ	四九五ノ二
これのみよ	四四四ノ六
ころもでに	四二二ノ二
さえわたる	三四五ノ一
さかきばは	五一ノ四
さきしより	二七四ノ一
さきそむる	二六三ノ二
さきだたむ	三八一ノ二
さきだちし	四六六ノ三
さきだつを	四九七ノ四
さきにたつ	四〇〇ノ三
さきにほふ	二六九ノ三
さきぬやと	二七〇ノ六
さくらさく	二七七一
さくらちる	二七八ノ五
さくらばな(愛身)	二七〇ノ四
さくらばな(おほく)	二六九ノ一
さくらばな(見る)	三六九ノ三

ささなみや(國)	四六三ノ三
ささなみや(志賀の花)	二七三ノ二
ささなみや(志賀の都)	二七三ノ一
ささなみや(ながら)	二七三ノ四
ささのばに	四五五ノ一
ささのはな	三六〇ノ三
ささめかる	四五四ノ七
さだめなき(うき世)	三六一ノ一
さだめなき(身)	五八ノ二
さつきやみ(さやま)	二九七ノ五
さつきやみ(しげき)	二九八ノ一
さつきやみ(ふたむら)	二九七ノ三
さつまがた	三六五ノ六
さびしさに(あはれ)	四六五ノ四
さびしさに(うき世)	四九七ノ一
さびしさも	四六八ノ四
さまざまに	三八ノ四
さまざまの	三〇九ノ四
さみだれに(淺澤沼)	二九五ノ一
さみだれに(おもひ)	二九四ノ二
さみだれに(ねれねれ)	二九三ノ五

くれたけの(空し)

五二四ノ四

くれたけの(折れ)

三三八ノ一

くれてゆく

二八三ノ四

くれなゐに

四三〇ノ六

くれにとも

四一三ノ六

くれのあき

五一五ノ二

くればてぬ

二七一ノ一

ケ

けさかふる

二八六ノ二

けさとはぬ

四二四ノ四

けふかくる

五一三ノ五

けふくれぬ

二八五ノ三

けふくれば

三〇二ノ四

けふこそば

四七六ノ一

けふみれば

四七三ノ二

けふもまた

五一七ノ四

けふりかと

二六〇ノ三

けふりだに

五二八ノ五

コ

こえかねて

三四七ノ二

こえてゆく

三六二ノ三

こえやらで

四一四ノ三

こがらしの

三二二ノ二

こくらくば

五七〇ノ五

ここにきえ

五八〇ノ一

こののへに(咲ける)

二八二ノ三

こののへに(やへ)

二八一ノ二

このろあらば

四七八ノ一

このろざし

三七七ノ三

このろさへ

四四〇ノ二

このろなき

二八〇ノ一

このろをぞ

二九二ノ三

このろをば

三〇七ノ四

このろをも

三五四ノ五

こののれに

四〇〇ノ一

こののれを

四六七ノ三

このころの

三四二ノ四

このせにも

四九三ノ一

このはだに

三〇四ノ二

このはちる

三三七ノ四

このはるぞ

四八一ノ六

このまもる

四六七ノ二

このまより

四三四ノ五

このもとに(かき)

四九〇ノ二

このもとに(かく)

四九〇ノ三

このよにて(また)

三八三ノ一

このよにて(六十)

四七一ノ一

このよには

四八七ノ三

このよをば

四九四ノ二

こひこひて(あふ)

四二六ノ三

こひこひて(かひ)

四〇六ノ五

こひこひて(こよひ)

三〇五ノ三

こひしきは

四二五ノ一

こひしきを(いかか)

四一八ノ一

こひしきを(憂身)

四〇〇ノ六

こひしとも(言はぬ)

三九七ノ二

こひしとも(また)

四一ノ三

こひしなば(うかれむ)

四四九ノ四

こひしなば(世の)

三九八ノ一

こひしなば(我)

四一八ノ二

こひしなむ(命)

四〇八ノ六

かなしさを(これ)
 かれてより
 かはりゆく
 かへりこむ(程も)
 かへりこむ(程を)
 かへりつる
 かへりても
 かへるかり
 かへるさを
 かみうくる
 かみがきの
 かみにおける
 かみやまの(麓)
 かみやまの(松)
 かみより(つもり)
 かみより(ひさし)
 かもある
 からくに
 からころも
 かりころも
 かりにぞと

三七六ノ四
 四二四ノ五
 四五〇ノ一
 三五二ノ一
 三五二ノ四
 四三三ノ一
 五二二ノ四
 二六六ノ五
 二六八ノ三
 五三七ノ四
 二七〇ノ四
 五二七ノ三
 二八八ノ四
 三〇四ノ三
 五三二ノ四
 三八六ノ二
 三四三ノ一
 四七一ノ四
 四四三ノ二
 三三九ノ四
 四四七ノ二

かりにだに
 かりびとば
 かればつる
 かわくよも
 かなるかに
 かなるかの

キ

きぎすなく
 きのふまで
 きのふみし
 きぶねがば
 きみがため
 きみがなぞ
 きみがよに
 きみがよの
 きみがよは
 きみがよを
 きみこふと
 きみこふる(心)
 きみこふる(涙)

二六九ノ五
 四四六ノ三
 四二九ノ一
 三七四ノ三
 四六〇ノ二
 二六二ノ五
 二一〇ノ四
 四六〇ノ三
 四六三ノ一
 五三五ノ二
 三八五ノ三
 五四四ノ二
 三九〇ノ四
 三九一ノ四
 三八五ノ二
 三八七ノ三
 四四九ノ五
 四四九ノ六
 四〇二ノ三

きみこふる(身)
 きみにのみ
 きみやあらぬ
 きみやそれ
 きみないのる
 きゆるをや
 きよくすむ

ク

くさきまで
 くさまくら(同じ)
 くさまくら(かりね)
 くなしの(色)
 くなしの(園)
 くちなつる
 くちはてて
 くちまなき
 くものうへの
 くものうへも
 くらぬやま
 くりかへし

三九九ノ五
 四三八ノ一
 四五〇ノ二
 四二六ノ四
 五三五ノ一
 三四五ノ二
 五二八ノ四
 三〇九ノ六
 三六三ノ三
 三六四ノ三
 二八一ノ四
 三六八ノ三
 五三五ノ四
 五二七ノ三
 三二二ノ五
 四七九ノ二
 四九ノ二
 四八三ノ四
 四三〇ノ三

おもひでの 四九一ノ一

おもひとく 五三六ノ三

おもひねの(夢だに) 四二六ノ五

おもひねの(夢に) 四四三ノ五

おもひやる 二九〇ノ三

おもひやれ(とよ) 四八五ノ二

おもひやれ(ならはぬ) 四九九ノ一

おもひやれ(むなしき) 三七五ノ二

おもひわび 四三八ノ二

おもふこと(ありあけ) 四九九ノ五

おもふこと(いは間) 三九六ノ一

おもふこと(くみて) 五三二ノ一

おもふこと(忍ぶ) 四二二ノ三

おもふこと(千枝にや) 二八〇ノ二

おもふこと(なき身) 二九一ノ一

おもふこと(なくてや春) 四八二ノ二

おもふこと(なくてや見) 三五八ノ四

おもふより 三九四ノ一

おもふをも 四五一ノ二

おもへただ 四三六ノ一

おもへども(いはで忍ぶ) 三九七ノ三

おもへども(いはでの山) 三九五ノ二

カ

かがみやま 二七九ノ五

かかりける(歎) 四一六ノ一

かかりける(涙) 四〇六ノ一

かきくらし 三四八ノ六

かきたえし 五〇九ノ三

かぎりあらむ 三五三ノ一

かぎりありて(人は) 三七六ノ二

かぎりありて(二重) 三七九ノ四

かくしつづ 三六五ノ一

かくてだに 四八〇ノ五

かくばかり(色) 四〇一ノ二

かくばかり(憂身の程) 三六五ノ五

かくばかり(憂身なれ) 四九三ノ二

かくばかり(憂世の末) 四八二ノ二

かくばかり(憂世の中の) 四六四ノ三

かくばかり(憂世の中を) 四九三ノ四

かくまでは 三六一ノ四

かげきよき 二六七ノ五

かざごしを 二九〇ノ五

かすがのの 二六二ノ一

かすがやま 四八四ノ一

かすならで(年) 四八四ノ三

かすならで(心) 四八七ノ五

かすならぬ(身には) 三四九ノ三

かすならぬ(身にも) 四三八ノ三

かすならぬ(身を) 四八五ノ一

かすみしく 二六〇ノ四

かぜにちる 二九三ノ三

かぜのおとに 三六三ノ五

かぜわたる 二六四ノ五

かぞふれば(昔) 三七八ノ一

かぞふれば(八年) 五三三ノ一

かぞへしる 四五六ノ一

かたみにや 三四三ノ一

かつらぎや(たかま) 二七〇ノ二

かつらぎや(渡し) 四七五ノ二

かなしさに 三七二ノ四

かなしさは 三七三ノ二

かなしさを(かつは) 三七二ノ一

うらむべき
うらめしや
うらやまし
うれしくぞ
うれしくは
うれしくも
うれしきな(かへす)
うれしきな(よその)
うゑおきし
うゑてみる

オ

おいがよに
おいらくの
おきてゆく
おくしもを
おくやまの(岩がき)
おくやまの(やつをの)
おくれじと
おしなべて(草葉)
おしなべて(花の)

四五ノ二
四二ノ二
二六ノ四
五二ノ三
四〇六ノ三
五三ノ三
五〇一ノ一
五〇一ノ二
三六八ノ一
三八四ノ二

四八三ノ三
三六九ノ五
四二九ノ三
三四三ノ二
四五二ノ四
三八七ノ二
三六九ノ四
三〇六ノ二
二七二ノ四

おしなべて(山の)
おしなべて(雪の)
おそろしや
おちたぎつ
おちにきと
おつれども
おとにさへ
おとにのみ
おどろかぬ
おなじくば
おなじとし
おのづから(あれば)
おのづから(つらき)
おほかたに
おほかたの(秋)
おほかたの(戀)
おほかたの(露)
おほけなく
おほぞらの
おぼつかない(いかに)
おぼつかない(いつか)

三四五ノ六
五三ノ一
五六ノ二
三八六ノ三
五五ノ一
四〇一ノ五
三七ノ二
四七四ノ六
五三六ノ一
四〇三ノ三
四八九ノ一
四九一ノ六
四七ノ四
三七一ノ三
三六ノ五
三九五ノ一
三〇ノ四
四九六ノ五
五二九ノ一
三六ノ二
二九四ノ四

三六九ノ二
四八八ノ一
四五一ノ五
四〇五ノ一
四〇四ノ三
四三四ノ一
四四九ノ三
四九三ノ五
三六九ノ一
四五三ノ五
四四一ノ三
四三〇ノ二
四四三ノ一
三八一ノ一
四九三ノ三
四一九ノ二
四三八ノ二
四一五ノ二
三四ノ二
四五一ノ一
四一七ノ三

おぼつかない(うるま)
おほゐがば
おもひあまり(うちぬる)
おもひあまり(人に)
おもひいづる
おもひいでて
おもひいでよ
おもひかれ(あくがれ)
おもひかれ(きのふ)
おもひかれ(越ゆる)
おもひかれ(なほ)
おもひかれ(夢に)
おもひきや(うかりし)
おもひきや(今日)
おもひきや(志賀)
おもひきや(榻の)
おもひきや(年の)
おもひきや(夢を)
おもひぐま
おもひしる
おもひせく

三六九ノ二
四八八ノ一
四五一ノ五
四〇五ノ一
四〇四ノ三
四三四ノ一
四四九ノ三
四九三ノ五
三六九ノ一
四五三ノ五
四四一ノ三
四三〇ノ二
四四三ノ一
三八一ノ一
四九三ノ三
四一九ノ二
四三八ノ二
四一五ノ二
三四ノ二
四五一ノ一
四一七ノ三

いはまゆく(みたらし)

いはまより

いまさらに

いましばし

いまばさば

いまばしも

いまはただ(いけらぬ)

いまはただ(おさふる)

いまはとて(入り)

いまはとて(かきなす)

いままでに

いまよりば(梅)

いまよりば(更け)

いもがあたり

いもがりと

いもとれて

いりぬるか

いりひさす

いるつきを

いるみえぬ

ウ

うかりける(人を)

うかりける(世々の)

うきくもの(いさよふ)

うきくもの(かかる)

うきことの

うきねする

うきひとを

うきものの

うきゆめは

うきよにも

うきよをば(捨てて)

うきよをば(峯の)

うぐひすは

うごきなき

うごきなく

うしとても

うたがひし

うたたれに

うたたれの(夢に)

うたたれの(夢や)

うちならす

うつつとも(思ひ)

うつつとも(夢とも)

うつつをも

うづらなく

うつりがに

うのはなの(かきね)

うのはなの(よそめ)

うのはなよ

うはごほり

うめがえに(心)

うめがえに(降り)

うめがえの

うめがかに(おどろ)

うめがかに(聲)

うめがかば

うめのはな

うらづたふ

うらみける

うらみずば

三三八ノ一

三七六ノ一

三七三ノ三

三六九ノ二

四九四ノ六

四三六ノ一

四四一ノ一

二八八ノ一

二八七ノ五

五一三ノ四

四七五ノ一

二六二ノ三

二六二ノ四

二六四ノ四

二六三ノ四

二六四ノ三

二六四ノ二

二六三ノ三

三六〇ノ四

五二七ノ四

四四七ノ四

いかなれば(流は)

四三ノ二

いたづらに(しをるる)

四七ノ一

いとほるる(身を)

四三ノ四

いかなれば(春を)

二八ノ九

いたづらに(ふりぬる)

五三ノ二

いとひても

四九ノ一

いかにして(過ぎにし)

四九ノ一

いたびさし

五二ノ三

いなりやま

五一ノ一

いかにして(よるの心)

四三ノ一

いづかたに(にほひ)

二八ノ二

いにしへに

四七ノ一

いかにせむ(いせの)

四八ノ二

いづかたに(花)

二六ノ三

いにしへの

五三ノ三

いかにせむ(思ひ)

三九ノ三

いづかたの

三七ノ三

いにしへに

四八ノ四

いかにせむ(さらで)

四六ノ五

いづくにか(月は)

三四ノ五

いにしへも(こえ)

四四ノ一

いかにせむ(忍ぶ)

四〇ノ四

いづくにか(身を)

四九ノ三

いにしへも(底)

四八ノ五

いかにせむ(御垣)

三九ノ三

いづくにて

四八ノ一

いにしへを

二九ノ一

いかにせむ(室の)

四〇ノ五

いづくより

四三ノ一

いのちあらば(いか様)

四八ノ四

いかにせむ(思ふ)

四〇ノ五

いづことも

四九ノ四

いのちあらば(また)

二八ノ二

いかにせむ(戀路)

四〇ノ五

いづこにも

三二ノ三

いのちこそ

四三ノ一

いかりおろす

四七ノ三

いづしかと

四〇ノ五

いのちをば

四二ノ二

いくかへり

二八ノ一

いつとても(身の)

四八ノ四

いはこゆる

三四ノ三

いくちよと(限らざり)

三八ノ一

いつとても(惜し)

三〇ノ五

いはしみづ

五三ノ三

いくちよと(限らぬ)

三八ノ二

いつとなく

五三ノ四

いはそそぐ

四九ノ二

いけみづに

二七ノ二

いつもかく

三六ノ四

いはたたく

三〇ノ二

いけもふり

五一ノ五

いでぬより

三二ノ四

いはねふみ

三六ノ二

いさぎよき

五三ノ三

いとどしく(しづ)

二九ノ三

いはばしる

三三ノ五

いせしまや

四四ノ六

いとどしく(昔)

五二ノ一

いはまもる

三〇ノ四

いそがくれ

四三ノ五

いとほるる(その)

四一ノ四

いはまゆく(やま)

三五ノ五

あしたづの(雲路)

五〇一ノ三

あはれにも(暮れ)

三四九ノ二

あしのやの

四三九ノ四

あはれにも(みさを)

二九九ノ一

あしびきの

四六九ノ六

あひみむと(いひ渡り)

四三九ノ二

あすしらぬ

四九五ノ三

あひみむと(思ひし)

四九九ノ三

あすもこむ

三三三ノ二

あひみむと(思ひな)

四二〇ノ一

あたらふな

三五七ノ三

あふことの(ありし)

四四〇ノ六

あたりさへ

三〇〇ノ一

あふことの(かく)

四四〇ノ六

あぢきなく

四三〇ノ五

あふことの(なげき)

四五〇ノ六

あづまぢの(野嶋が崎)

五二〇ノ二

あふことは(引佐)

四三七ノ二

あづまぢの(やへの霞)

五〇九ノ一

あふことは(身を)

四四三ノ四

あづまぢも

三六六ノ一

あふことを(さりとも)

四二二ノ五

あづまやの(あさき)

四二七ノ一

あふことを(その年月)

四〇七ノ三

あづまやの(ながや)

四三六ノ四

あふさかの(せき)

三六二ノ二

あとたえて(とふべき)

五一ノ三

あふさかの(名を)

四三九ノ二

あとたえて(世を)

四九〇ノ四

あふさかの(やま)

二九六ノ五

あともたえ

三四七ノ一

あふとみし

四三九ノ六

あはれてふ

四八四ノ六

あふならぬ

四二一ノ四

あはれとし

三五四ノ二

あふひぐさ

二八八ノ三

あはれとも(誰かは)

四八八ノ一

あまたたび

四七九ノ三

あはれとも(枕)

四二二ノ一

あまつそら

二六六ノ四

あはれなる

三六三ノ六

あまのかは

三〇五ノ六

あまのばら(すめる)

四六五ノ三

あまのばら(そらゆく)

四六三ノ四

あめつちの

三九二ノ一

あめのした

五三一ノ三

あやしきは

二八九ノ四

あやしくも

五一三ノ三

あやめぐさ(うきれ)

三七五ノ一

あやめぐさ(涙の)

三七〇ノ二

あらいその

三九五ノ四

あらしふく(志賀)

二七六ノ四

あらしふく(比良)

三三八ノ四

あられもる

三六五ノ四

ありあけの(月見)

四四四ノ四

ありあけの(月も)

三五七ノ一

イ

いかだおろす

四六五ノ二

いかでわが(つれなき)

四〇七ノ一

いかでわが(ひまゆく)

四八五ノ五

いかなれば(上葉)

三〇六ノ五

いかなれば(沈み)

四七一ノ三

なるべきはるぞ

一九一ノ四

やなせのさなみ
やへかさなれる
やみにまどへる

一七三ノ三
一五ノ六
二五三ノ二

ユ

ゆきのきえまに
ゆきふみわけて(越えむ)
ゆきふみわけて(夜な)
ゆくとやいはむ
ゆくらむかたを
ゆふかくるまで
ゆふかけてのみ
ゆめにもひとの
ゆゆしとやみむ

一五八ノ二
二四〇ノ二
三三九ノ二
一八〇ノ一
二六ノ三
一八〇ノ二
一六九ノ一
一九九ノ四
一七五ノ一

ヨ

よしののやまの
よにはふるさで
よのうきめより
よるなくむしの
よなながつきの

一六ノ二
一六九ノ四
二四二ノ一
一八ノ二
一四ノ三

ワ

わがこころこそ
わがつまをこそ
わかのうらとぞ
わかへむとしな
わがみひとつも
わがやどからの
わがやどのみぞ
わたりにのみや
われさへわれに
われてもす原に
われならざらむ
われのみひとを
われもしぐるる
われもなにゆゑ
われをわするる

二五三ノ一
一八二ノ三
二二〇ノ二
二二三ノ三
二二六ノ二
二三四ノ二
二四一ノ五
二九ノ三
一六ノ一
二〇六ノ五
二二ノ五
二二三ノ二
二三八ノ一
二八ノ一
二三五ノ四

ヲ

なさまれるよの
なしみもあへず

二四五ノ三
一七三ノ二

ふたたびくべき
ふたたびすめる
ふたつにわくる
ふままくをしき
ふりはつるまで
ふるかひもなき
ふるにかひなき

二六ノ一
二四六ノ一
二二ノ一
一八九ノ四
一六五ノ一
二三ノ三
一八七ノ六

ホ

ほのかにけさぞ
ほのみしまえの

一七四ノ一
二七ノ一

マ

またこりずまに
まだとどこほる
またぬねざめの
まだふるものは
またもやはるに
まだよなこめて
またわれならぬ
まづくるひとに

二〇三ノ五
二四三ノ三
一七〇ノ二
一八四ノ三
二三九ノ四
二〇九ノ二
二三〇ノ四
二四六ノ二

まつこころこそ
まつこころにや
まつこそばなの
まつともなき
まつとはたれに
まつにひかるる
まつべきみこそ
まつもいくたび

一六九ノ二
二四三ノ四
一六二ノ六
一六九ノ三
二三四ノ二
一五八ノ四
一九四ノ四
一九三ノ五

ミ

みえぬやみづの
みかきがはらは
みさへくちぬる
みなしらくもと
みにしむばかり
みにはなみだの
みれにあさひの
みれのつづきの
みやこのひとも
みやこははれぬ
みればのごとに

一七一ノ三
一五七ノ三
二五〇ノ一
一六〇ノ三
一七九ノ三
二三二ノ一
一九一ノ一
一九一ノ二
一六九ノ五
一九五ノ一
一八〇ノ三

ム

みわかぬほどに

二三九ノ三

むかしをしのぶ
むしのねきくぞ
むすぼほるらむ
むろのやしまの

一七三ノ一
一八ノ三
一五九ノ六
一九八ノ二

メ

めにめづらしき

一八八ノ五

モ

ものおもふそでは

二〇五ノ一

ヤ

やがてしられぬ
やがてなきよも
やがてゆきげの
やそせのなみぞ
やどはあらして
やどれるつきの

一九八ノ三
二五〇ノ二
一八八ノ四
一七ノ一
二三三ノ二
一七八ノ五

なになげくらむ
なにのつみなき
なびくをひとの
なみのよりこと
なりゆくほどの
なるとていとふ
なるみののべの

二五ノ一
二〇〇ノ五
二〇六ノ四
二〇三ノ三
二二三ノ五
二二一ノ二
一八ノ五

ヌ

ぬるるはさても
ぬれぬやどかす

二二九ノ一
一八八ノ三

ノ

のこりありしを
のなかのしみづ
のべのあさぢも

二三五ノ三
二二五ノ二
一八五ノ一

ネ

ねのひのまつも
ねやのつまとや
ねられぬいをも

一五八ノ三
二二七ノ二
二四七ノ五

ハ

はつれをあやな
はてはけぶりも
はなちりてこそ
はなにさきだつ
はなにわかれぬ
はなのいろにぞ
はなのころは
はなのさかりに
はなのしたにて
はなばはるとも
はなみるひとに
ははそのもりの
はまなのはしに
はるさへはれぬ
はるにしられぬ
はるのゆくとや

一五七ノ四
二四八ノ一
一六四ノ二
二八ノ三
二二七ノ三
一七三ノ二
二三五ノ二
一六三ノ四
一六六ノ三
一六二ノ三
二二八ノ二
二四四ノ三
二四三ノ一
一五八ノ一
二二七ノ二
一六三ノ一

ヒ

ひくしらいとの

一七〇ノ五

フ

ひとこゑなげば
ひとづてならで
ひとのころを(命)
ひとのころを(盡さ)
ひとよりゆくへも
ひとよりしもに
ひとりばぬべき
ひとりやわれは
ひとをこひしと
ひとをわするる(心)
ひとをわするる(事)
ひとをわするる(身)
ひばりのとこそ
ひるばきえつつ
ひをのよるさへ
ふかきにまけぬ
ふかくもほるの
ふきなみだりそ
ふじのたかれの

一七〇ノ一
二〇〇ノ一
二二三ノ二
二〇四ノ一
二〇九ノ五
二四三ノ二
二二三ノ一
二三三ノ一
二〇七ノ一
二五ノ六
二五ノ五
二六ノ一
一八六ノ二
二〇六ノ一
一八四ノ五
二三〇ノ二
一六五ノ五
一五九ノ五
一八九ノ二

ただやまのほに
 たちかへるべき
 たづねゆくまの
 たつよりかれて
 たなばたとや
 たなれのこまの
 たにのふるすを(思ひ)
 たにのふるすを(忘れ)
 たのめてこねは
 たびねぞこひの
 たびねをいかに
 たびのそらとも
 たびのそらにも
 たればそらに
 たれとかあきの
 たれぬのびきの
 たれふたむらの
 たわむけしきを

チ

二四四ノ四
 一七三ノ六
 一六二ノ一
 一九五ノ二
 一七四ノ三
 二二一ノ四
 二四一ノ一
 二四一ノ二
 二三八ノ四
 二〇三ノ一
 一九三ノ一
 二四六ノ四
 二四六ノ三
 二四四ノ一
 二二一ノ二
 二二一ノ一
 一八三ノ四
 二〇二ノ三
 二二三ノ三

ちかくもしかの
 ちづかもまたで
 ちとせをへつつ
 ちよのむつきを
 ちよはかぞへむ
 ちよまできみと
 ちらさぬほどの
 ちらばひとへも
 ちりしくにはな
 ちりちりならむ
 ちりなむのちを
 ちるはなよりも

ツ

一八二ノ四
 一九八ノ四
 一九〇ノ一
 一九〇ノ二
 一九〇ノ三
 一七六ノ五
 一五八ノ五
 一六六ノ一
 一八六ノ三
 一六四ノ三
 二四一ノ一
 一六三ノ四
 二一九ノ二

つとめてのちぞ
 つながぬこまも
 つみえむことも
 つれなきひとの
 つれなきひとと
 とくるけしきも
 としにひとたび
 とへとぞおもふ
 とやまのかすみ

ト

ナ

二五二ノ四
 一五九ノ二
 二四一ノ二
 二〇三ノ四
 一九九ノ三
 二〇一ノ五
 一七五ノ五
 二二九ノ四
 一五七ノ二
 二〇〇ノ二
 二五二ノ三
 二二三ノ二
 一七〇ノ三
 一七三ノ一
 一九九ノ五
 二四七ノ四
 二二三ノ四

こひしといふは
こひのなみだの
こひはしぬとも
こぼれやしぬる
こまかにものを
こまのけしきも
こよひのつきに
こよひばかりの(月は)
こよひばかりの(月を)
こよひばかりは
ころものせきを
ころものそでを
こなこひつつも

二〇〇ノ四
二〇四ノ四
二五〇ノ一
二五九ノ二
二六〇ノ三
二五九ノ五
二二二ノ四
二二二ノ四
一七三ノ三
一八五ノ二
一九三ノ二
二四九ノ三
二四九ノ四

サ

さえてやひとに
さかゆべしとは
さきはじめたる
さくらばはなに
ささなみよする
さしいづるつきの

一六八ノ二
二二〇ノ一
一六三ノ二
一六〇ノ二
一五七ノ一
二二三ノ三

さてもわかれむ
さのみはつきの
さはべになくや
さりとてなかの
さをのおとにぞ

二四〇ノ三
二二〇ノ一
二二七ノ三
二二二ノ二
二二二ノ二

シ

しかまのかちの
したてるやまは
したばながるる
したばにつきも
しづこころなく
しのだのもりの
しのびけりやと
しのびにもゆる
しばしたゆれば
しらゆふかくる

二八〇ノ二
一八三ノ五
二〇六ノ三
一八三ノ五
一六三ノ三
二四一ノ三
二二二ノ三
一七三ノ四
二二二ノ三
一八九ノ三

ス

すぐるつきひも
すてぬひとこそ

二二五ノ五
二四二ノ五

セ

すむとてえこそ
すゑたわむまで
すゑばのつゆの
せきちよりこそ

二三八ノ二
二二九ノ四
二二八ノ三
一七八ノ二

ソ

そこにやどれる
そなたにむきて
そのことのばも
そのばるまでと
そらがくれする
そらだきものの
そりはてぬるか

一九二ノ三
二五二ノ二
二二二ノ四
二三八ノ二
二五二ノ三
一七五ノ四
二二二ノ四

タ

たえだえならで
たがさとまでか
たがそめかけし
ただはるのひを

二〇九ノ四
一七二ノ五
一六〇ノ一
二二四ノ三

かすみわたれる
かぜこそわたれ
かはらぬものは
かはるはひとの
かはれどかはる
かへるやまぢの
かみなづきにも
かみのしるしぞ
かみのよよりも
かみもうゑけむ
かれにしひとの
かわけるうへに
かゐるぞはなの

二七ノ三
一七九ノ一
一七七ノ四
二〇五ノ二
一九九ノ二
二三八ノ三
一八六ノ一
二三三ノ一
一九一ノ三
一九三ノ四
二五ノ三
一八七ノ一
一六五ノ四

キ

きえせぬゆきと
きみとみかさの
きよみがせきに

一六四ノ一
二三六ノ一
二三五ノ二

ク

くだけてものを

二〇三ノ二

ケ

くちばがうへに
くもかくしてよ
くものうへまで
くものなみちに
くもはふもとの
くもるとみれば
くもゐにまがふ
くもゐにみゆる
くもゐにものな
くやしきことの
くるあきごとに
くれゆくそらは

一八九ノ一
二五〇ノ五
二三三ノ一
二三三ノ五
二四六ノ五
一八八ノ一
二四五ノ一
一六一ノ五
一七八ノ六
二二九ノ二
一八一ノ一
一七五ノ二

コ

けふこのへに
けふにやまたも
けふのかざしは
けふやわがよの
けぶりもなみも

一六三ノ三
一八九ノ六
一六八ノ三
一六五ノ三
二〇三ノ四

こころひとめを
こころいくたび
こころごころに
こころにえこそ
こころにかなふ
こころにもあらぬ
こころのうちは
こころぼそきは
こころもとなき
こころよわくも
こころをさへも
こねひとをだに
このことばかり
このしたかげも
このはとともに
このはのもとに
このよはてふの
このよをながく
こひしかるべき
こひしきことの
こひしきことは

二三五ノ四
一七八ノ四
一八一ノ四
一六五ノ二
一九五ノ三
二二二ノ一
二二五ノ三
二四九ノ二
二〇七ノ二
二〇一ノ三
一八〇ノ四
二三四ノ三
二四八ノ三
一七七ノ五
二四八ノ二
一八七ノ二
二四四ノ二
二三三ノ四
一九六ノ四
二二六ノ四
二〇一ノ一

いまいくたびも
いまはかざりと
いまひとしほを
いまゆくすゑの
いりあひのかれの
いるまでつきを
いるまでみつる
いるをこころに

一六六ノ四
二二三ノ三
一六〇ノ五
二三五ノ一
一七九ノ六
二二三ノ六
一七六ノ六
二三四ノ一

ウ

うきにはこゑも
うきはみにしむ
うきみのとがと
うきもつらきも
うきよをめぐる
うくてふいのの
うすばなざくら
うちのわたりに
うつれるかげぞ
うつるはでやむ
うつるふいろを

二二三ノ二
二〇五ノ五
二〇〇ノ三
二〇五ノ三
二三八ノ一
二二九ノ一
一六〇ノ四
二四一ノ四
二四七ノ一
二〇四ノ三
一八二ノ六

オ

うつろふきくに
うばすてやまの
うらめしながら
うらやましくも
うらやましとや
うれしきことは

おいばひとをも
おきてのこせる
おきどころなき
おそくくれゆく
おつるなみだや
おときくをりぞ
おとぞよさむに
おとにのみやは
おなじこころに
おなじたかさぞ
おなじよにだに
おのがさまさま
おふなるものを

一八三ノ一
二二三ノ三
二六ノ二
二四三ノ三
一七六ノ四
二〇五ノ四
一八九ノ五
一八三ノ二
一七八ノ三
二〇九ノ三
二〇七ノ三
一八七ノ四
一七九ノ五
一九九ノ一
一六六ノ二
二三五ノ一
二〇五ノ六
一九一ノ五
二二三ノ一

カ

おほうちやまの
おぼろにみゆる
おもがばりせぬ
おもはばものは
おもひあへぬは
おもひいれども
おもひしらむ
おもひばひとに
おもふこころを
おもふことなき
おもふことをば
おもへどえこそ

かきながすべき
かくれゆくはた
かげばかりこそ
かげよりほかに
かげをもなみに
かすますものは
かすみにのみや

一六六ノ四
二四七ノ三
二〇四ノ二
二二七ノ一
二五ノ四
二〇三ノ三
二四九ノ五
一九八ノ一
一八二ノ一
一六三ノ六
二四二ノ四
一九四ノ一
二四二ノ二
二四七ノ二
二二三ノ四
一七〇ノ四
一六三ノ二
一七三ノ五
一五九ノ三

3

あかぬこころは
あかぬわかれと
あきしもことに
あきとおぼゆる
あきのこのはに
あきはもみぢの
あきをかれても
あくがれいづる
あくろそらをも
あけてのちこそ
あさせたどるも
あさちがばらに
あじろもたわに
あすもきくべき
あだちのまゆみ
あつしとのみや
あはぬおもひは
あはましくれを

あはれいかなる
あはれとばかり
あはれわかれの
あはれわかれは
あふせにわたす
あやしやなにの
あやなくほるの
あらそひかれて
あらたなるよの
ありあけのつき
ありしばかりの
あるかなきかの
あるじもしらぬ

イ

いかがはすべき
いかでなげきの
いかでほすらむ
いかなるそらに
いかなるつきの
いかなるねをか

二四〇ノ一	いかにすれども
二五〇ノ四	いくあきかぜに
二四九ノ四	いくあさつゆの
一九四ノ二	いくきのこまと
一七五ノ三	いくたのもりの
二〇九ノ一	いたらぬさとの
一六七ノ一	いつかとくべき
一八六ノ四	いつかばひとを
二四五ノ二	いつかがみに
二二ノ三	いづくもつひの
二四ノ三	いづくよりおく
二三九ノ一	いつしかとのみ
一五九ノ一	いつまでふべき
	いつまでよそに
	いづるなまつと
二〇三ノ一	いづれかわれが
二四八ノ四	いづれののべも
一七二ノ二	いでてもひとに
二四九ノ一	いでむひごとに
二六ノ四	いとひやすらむ
二三ノ四	いひあはせつつ

二〇六ノ二
一七九ノ四
一七二ノ三
一八二ノ二
一七四ノ二
一六二ノ一
一九六ノ三
一九七ノ二
二五〇ノ三
一九五ノ四
二〇八ノ三
二〇八ノ一
二三七ノ二
二三九ノ五
一七八ノ一
二〇一ノ四
二三八ノ四
二〇二ノ二
一九六ノ二
一七一ノ四
一八七ノ三

やまふかみ(おちて)
やよふかみ(やく炭)

一八七ノ一
一八八ノ四

ユ

ゆききえば
ゆきのいろな
ゆくすゑの
ゆくひと
ゆふぎりに(梢)
ゆふぎりに(佐野)
ゆふぐれに
ゆふぐれは(待たれし)
ゆふぐれは(物ぞ戀し)
ゆふされば
ゆふまぐれ
ゆめならで

一五八ノ一
一六八ノ二
一三五ノ五
一三三ノ五
一七九ノ六
二三一ノ四
二二一ノ五
二二六ノ三
二三九ノ三
一八三ノ五
二四八ノ二
二四七ノ五

ヨ

よしさらば
よそながら
よそになど

二三八ノ四
二〇〇ノ一
二五二ノ一

ワ

よそにみし
よとともに
よのなかに
よのなかの
よのなかな
よのひとの
よもすがら(叩く)
よもすがら(富士)
よるのつる
よるこびな
よるづよの
よなかさね
よなふかみ
わがおもふ
わがこひは(あひ)
わがこひは(蓋身)
わがこひは(夢路)
わがこひは(吉野)
わがために

二三九ノ一
一九九ノ二
二三三ノ三
二五二ノ三
二三三ノ三
二九三ノ三
一七〇ノ六
二三五ノ二
二三四ノ四
一九四ノ一
一五八ノ三
二二四ノ三
二〇八ノ三

ヲ

わかのうらと
わがやどの
わかれちの
わぎもこが
わすらるる(人目)
わすらるる(身は)
わするやと
わたのほら
わびつつも
わびぬれば
われのみや
をぎのほに(こととふ)
をぎのほに(そそや)
をぎのほに(露吹き)
なしむとて
なりをりの

三〇〇ノ三
一六五ノ二
一九五ノ二
一七一ノ二
二六六ノ四
二五〇ノ四
二〇一ノ一
二四五ノ一
二〇三ノ一
二〇一ノ三
二二九ノ五
一八一ノ一
一七九ノ二
一七九ノ五
二六七ノ一
二五〇ノ二

ほどもなく

二〇七ノ二

マ

まこもぐさ

一五九ノ二

またこむと

一九五ノ三

まだしらぬ

二六ノ一

まつしまの

一九一ノ五

まつひとの

一八九ノ四

まつほどに

一七三ノ二

まつほどは

一七〇ノ三

ミ

みかきもり

二〇六ノ一

みかさやま

二三三ノ三

みかづきの

二三八ノ一

みかりのの

二二三ノ四

みづきよみ

一七六ノ五

みなかみの

二四六ノ一

みなひとの(昔)

二三九ノ五

みなひとの(惜む)

二〇九ノ三

みのうさは

二五ノ一

みのほどを

二〇二ノ四

みまさかや

二二〇ノ二

みやこにて(覺束)

一九三ノ一

みやこにて(眺めし月の)

二四六ノ三

みやこにて(眺めし月を)

二四六ノ四

みやまぎの

一六〇ノ二

みやまには

一八八ノ二

みよしのの

一七九ノ四

みをしらで

二二九ノ二

みをすつる

二四二ノ五

ム

むかしにも

一六九ノ二

むかしみし(雲井)

二三七ノ三

むかしみし(垂井)

二四七ノ一

むしのねも

一七三ノ六

むとせにて

一九四ノ四

むねはふじ

二〇三ノ四

メ

めづらしく

一九〇ノ二

モ

もえいづる

一五九ノ四

もしほやく

一七一ノ四

ももとせの

二四四ノ二

もろともに(おきゐる)

二二一ノ二

もろともに(たたまし)

一九三ノ二

もろともに(山めぐり)

一八七ノ六

ヤ

やどちかく

一七二ノ一

やへさける

二六六ノ一

やへむぐら

一八二ノ三

やまざくら(つひに)

二〇四ノ一

やまざくら(をしむ)

一六二ノ三

やまざとの

一六九ノ五

やまざとは

一八四ノ一

やましるの(いはた)

二三五ノ三

やましるの(鳥羽田)

一七四ノ一

やまびこの

一七〇ノ一

なにごと

一八六ノ一

はくひと

一六四ノ二

ひととせを

一九二ノ二

なにたかき

二二ノ四

はつしも

一六五ノ一

ひとへだに

一六五ノ六

なにはえの(蘆間)

二六ノ二

はなすすき

二三八ノ四

ひとりゐて

一七九ノ一

なにはえの(繁き)

二二ノ三

はりまなる

二〇七ノ一

ひとをとふ

一五〇ノ三

なみだがは

二四二ノ一

はるがすみ

二二七ノ一

フ

一五〇ノ三

なみださへ

二二ノ一

はるくれば(あちかた)

二二九ノ一

ふかくいりて

二六六ノ四

なみたてる

二二七ノ三

はるくれば(花)

一六三ノ一

ふかくしも

二二九ノ二

なみだのみ

二五〇ノ一

はるごとに(心を)

一六三ノ五

ふきくれば

一五八ノ五

ニ

はるさめの

一八四ノ二

ふたつなき

一九六ノ一

にはもせに

一六五ノ四

はるなつと

一七二ノ二

ふるあめの

二二〇ノ三

ヌ

はるのこぬ

二二九ノ三

ふるさとに(変ら)

一八一ノ五

ぬしやたれ

一八〇ノ三

ヒ

ふるさとに(間ふ)

一六三ノ四

ネ

ひくこまに

一七八ノ二

ふるさとに(みかき)

一六三ノ三

れのひすと

一五八ノ四

ひぐらしに

一八九ノ二

ふるさとは

一五七ノ三

ハ

ひさぎおふる

一八六ノ二

ホ

二三四ノ二

はかなくも

一七〇ノ一

ひたぶるに

二二七ノ三

はととぎす(曉)

一七〇ノ二

はぎのほに

一七四ノ三

ひとしれす(物思ふ事)

二四八ノ三

はととぎす(鳴く)

一六九ノ三

ッ

そのことと
そまがはの

二四七ノ四
二七三ノ一

タ

たがきとに
たけのはに(霞)
たけのはに(玉)
たちわかれ
たなばたに(今朝)
たなばたに(心)
たなばたに(衣)
たなばたの
たなばたは
たにがはの
たねまきし
たまきかに
たままつる
たれかこの
たれにとか

二三八ノ三
二二三ノ一
二〇九ノ二
一九六ノ四
二〇二ノ三
一七五ノ二
一七五ノ一
一七六ノ三
二四九ノ二
一九九ノ一
一七二ノ三
一五七ノ四
一八九ノ六
二二九ノ四
一九三ノ三

チ

ちらぬまに
ちるはなに(せき)
ちるはなに(又)
ちるはなも

二二八ノ三
一六五ノ五
二三八ノ二
一六五ノ一

ツ

つききよみ
つきにこそ
つきはいり
つくづく
つくばやま
つねよりも(露)
つねよりも(歎き)
つゆのみの
つらしとて

二二三ノ四
二三五ノ四
二二三ノ一
二二六ノ三
二四三ノ一
二二〇ノ二
一七三ノ四
二五二ノ四
二二二ノ二

ト

としへぬる
としをへて(かけし)

二五三ノ四
一六八ノ三

ナ

としをへて(星)
としをへて(燃ゆ)
としをへて(吉野)
とどこほる
とどまらむ
とばぬまを
とまりゐて
とやまなる
とりつなぐ

二四三ノ二
二〇一ノ二
一八八ノ五
二四三ノ四
一九五ノ四
二二三ノ四
一九四ノ二
一八七ノ四
一五九ノ三

ながきよの
なかなかに
ながはまの
ながらへば
ながゐすな
なきつとも
なくこゑも
なぐさむる
なくむしの
なごりなく

二五二ノ一
一六三ノ四
一九三ノ一
二六六ノ一
二八八ノ一
一七〇ノ四
一七三ノ四
一九九ノ四
一八八ノ四
一八四ノ三

こぞのはる
ことしだに
ことしまた
こぬひとを(恨み)
こぬひとを(待ち)
このみなば
このもとに
このもとを
このよだに
このよには
こひしなば
こひしなむ
こひすれば
こひわびて
こほりして
こほりあし
こやのいけに

さきしより
さくらさく
さくらばな(風に)
さくらばな(散ら)
さくらばな(散り)
さくらばな(手ごと)
さつきやみ(鵜川)
さつきやみ(花)
さびしさに
さほひめの
さみだれの
さみだれば
さりとては

しらかはの(流)
しらかはの(春)
しらぎくの
しらくもと
しらくもば(さも)
しらくもば(立ち)

二四四ノ一
一六ノ六
二〇四ノ三
一六ノ二
一六〇ノ五
一六〇ノ四

ス

さきしより
さくらさく
さくらばな(風に)
さくらばな(散ら)
さくらばな(散り)
さくらばな(手ごと)
さつきやみ(鵜川)
さつきやみ(花)
さびしさに
さほひめの
さみだれの
さみだれば
さりとては

すぎきに
すまのうちに
すみのぼる
すみよしの(あさ澤)
すみよしの(あらひと)
すみよしの(波)
すみよしの(細江)

一九〇ノ三
二七ノ二
二三ノ一
二〇九ノ四
一九三ノ五
二三ノ一
二三〇ノ二

シ

したもみち
しづのめが
しのぶるも
しのぶれど
しもおかぬ
しもがるる

せきこゆる
せきとむる
せなはやみ

一八三ノ三
二〇ノ三
二〇六ノ五

サ

さかきとる
さかきばな

一六九ノ一
一九一ノ三

一七三ノ五
二七ノ五
二三ノ一
二〇五ノ一
二〇四ノ二
一八二ノ六

二四四ノ一
一六ノ六
二〇四ノ三
一六ノ二
一六〇ノ五
一六〇ノ四

おもふこと
おもへども

二二〇ノ一
二五一ノ二

カ

かくしつづ
かくてのみ
かくとだに
かぐやまの
かげみえぬ
かざこしの
かすがのに
かすがやま
かずならぬ
かぜふけば(河邊)
かぜふけば(櫓の)
かぜふけば(もしほ)
かぜをいたみ
かづきけむ
かはかみに
かはらむと
かへりこむ

二三九ノ二
二五〇ノ五
一九八ノ三
二三五ノ一
二〇三ノ二
二四六ノ五
一五八ノ二
二三〇ノ一
一八九ノ五
一七三ノ六
一八七ノ三
二〇六ノ四
二〇三ノ二
二三九ノ一
一七三ノ三
二四〇ノ三
一九四ノ三

かへるかり
かみがきに
かみなづき
かりそめの
かれはつる

二四二ノ四
一八〇ノ二
二三〇ノ四
二四二ノ三
二三四ノ三

キ

きくひとの
きたりとも
きのふかも
きみがよに
きみがよの
きみがよは(くもり)
きみがよは(白雲)
きみすまば
きみひかす
きみまつと
きみをわが
くさがれの

一八二ノ三
二二一ノ三
一五七ノ二
一九〇ノ一
一九三ノ四
一九二ノ一
一九二ノ二
一七四ノ二
二二三ノ四
二二三ノ六
二〇八ノ一
一八三ノ二

くまもなく
くみみてし
くものうへは
くもゐより
くやしくも
くれなゐに(涙の)
くれなゐに(見えし)
くれなゐの(うす花)
くれなゐの(こぞめ)
くれはまづ

二三三ノ三
二二五ノ二
二四三ノ三
二二一ノ一
二五〇ノ四
二〇五ノ二
一八九ノ三
一六〇ノ三
二〇四ノ四
一九六ノ二

ケ

けふよりは(天の川)
けふよりは(たつ)

二四九ノ一
一六八ノ一

コ

ここのへに
こころさへ
こころみに
こころをば
こずゑにて

一六二ノ四
二〇一ノ五
二三四ノ二
二〇九ノ一
一八六ノ三

いかでかば	一六ノ一
いかでわが	二五ノ二
いかならむ	二〇ノ四
いかなれば(同じ空)	一七ノ一
いかなれば(同じ流)	二三ノ一
いかなれば(氷は)	一五ノ六
いかなれば(とだえ)	一七ノ三
いかなれば(待つに)	二四ノ一
いかばかり	二〇ノ三
いくかへり	二六ノ二
いくらとも	一八ノ四
いけみづに	二三ノ二
いけみづの	一六ノ二
いざやまた	二四ノ二
いたくらの	二四ノ三
いたづらに	二〇ノ五
いたまより	二三ノ二
いづかたへ	一八ノ二
いづくをも	二二ノ一
いづるいき	二四ノ五
いとひても	二六ノ一

いにしへの
いにしへを
いのちあらば
いはりさす
いまさらに
いまばただ
いまよりば
いろいろに

ウ

うきながら
うぐひすの
うぐひすは(木傳ふ)
うぐひすは(花の都)
うすぐこく
うちむれて
うめのはな
うもれぎの
うらめしく
うれしきは

一六ノ三
二四ノ三
一九ノ五
一八ノ一
一八ノ二
二五ノ三
二五ノ五
一八ノ四

オ

おいてこそ
おいてのち
おくやまの
おとせぬは
おのがみの
おひたたで
おぼつか(な(變り))
おぼつか(な(まだ))
おほばらや
おもはじと
おもはれぬ
おもひかれ(今日)
おもひかれ(そなた)
おもひかれ(ながめ)
おもひかれ(別れ)
おもひでも(なき)
おもひでも(なく)
おもひやれ(簀)
おもひやれ(心)

一六ノ四
二五ノ四
一八ノ一
二二ノ二
二七ノ一
二四ノ四
一七ノ五
二〇ノ二
二四ノ五
二〇ノ四
二八ノ一
一九ノ四
二四ノ四
二四ノ一
二四ノ一
二四ノ二
二二ノ三
二二ノ五
二四ノ二

詞花和歌集索引

(上句の頭五言及び下句の頭七言を採り
歴史的假名遣により五十音順に排列す)

上句五言

ア

あかでのみ 一九二ノ四
あかれさす 一九五ノ一
あきかぜに 二八二ノ一
あきにまた 一七三ノ三
あきののの(くさむら) 一八二ノ二
あきののの(花見る) 一八〇ノ一
あきののの(月に心のあく) 一七六ノ六
あきののの(月に心のひま) 一七九ノ一
あきののの(月の光) 一七三ノ五
あきののの(月待ち) 一七九ノ四
あきののの(露も) 一八三ノ三
あきはぎを 一八二ノ四
あきはなほ 一八七ノ五
あきはみな 二二九ノ四

あきふかみ(花には) 一八三ノ五
あきふかみ(紅葉) 一八四ノ五
あきふくば 一九九ノ三
あきやまの 一七八ノ五
あくがるる 二五三ノ三
あさぢふに 二五八ノ三
あさなあさな(鹿) 一八〇ノ四
あさなあさな(露) 二四九ノ三
あさましや 一六二ノ一
あさまだき 二五三ノ一
あしかれと 二七三ノ一
あしびたく 二四一ノ四
あじろには 二三八ノ二
あだびとは 一九六ノ三
あづまぢの 二二〇ノ四
あふことは 二二五ノ一

あふことや 二二三ノ三
あふさかの(杉間) 一八二ノ二
あふさかの(關) 二六六ノ二
あふよとは 一七六ノ二
あまつかぜ 一七三ノ六
あまのがは(歸らぬ) 一七六ノ四
あまのがは(たま橋) 一七六ノ一
あまのがは(横さる) 一七五ノ四
あやしくも 一九八ノ一
あやめぐさ 二七三ノ二
あられふる 一八八ノ三
ありしにも 一七三ノ四
ありふるも 二二三ノ二
あれはてて 一八四ノ四

イ

いかでかく 二二三ノ二

わりなくやどる
われかきつらむ
われぞなごりの
われてぞいづる
われなればこそ
われまどはすな
われもうきよに
われゆゑいのち

四〇ノ五
七九ノ一
九四ノ二
一〇ノ五
一三ノ四
一四ノ二
一九ノ四
九三ノ四

井

あぐひにいとど

一三ノ一

ヲ

をぎゑもささで
をさまれるよに
をしのけごろも
をしむころも
をちのやまべを
をのさとびと
をはといふものは
をばななみよる

一一ノ一
六五ノ四
六ノ二
一二ノ五
二五ノ一
二二ノ二
一二ノ三
四九ノ二

をやみだにせよ
をらでばえこそ
をらぬそでさへ
をりからこゑの
をりしらぬみや
をりたがへたる
をりつるそでぞ
をりなやつしそ
をりにのみこそ

二六ノ六
一一ノ三
四ノ三
四六ノ六
一〇九ノ二
一三四ノ二
四七ノ三
一六ノ四
一五ノ三

メ

めにかけさげて

一〇五ノ五

モ

ものにもがなや
ものむづかしく
もみぢのいろぞ
もみぢをしける
もらぬいはやも
もりてながれむ
もりにのみもる
もりのことのほ

八二ノ五
九三ノ三
五三ノ三
五二ノ二
一一ノ四
一〇四ノ二
九六ノ六
一一七ノ三

ヤ

やがてうきよな
やどにもるこそ
やへながらをば
やましたてらす
やまのしづくに
やまのはのみぞ

一四三ノ二
五六ノ五
一七ノ二
一七ノ三
一〇ノ三
四四ノ四

ユ

やまもとどろに
やらむかたなく

一一四ノ五
一六ノ二

ゆかしからずと
ゆきあひのそらを
ゆきげのくもと
ゆきさすらひて
ゆきさへつもる
ゆきとはなのみ
ゆきみむとしも
ゆくへもしらず(あくがれ)
ゆくへもしらず(人さそひ)
ゆふしでかけぬ
ゆふなみちどり
ゆめにもみきと

一一二ノ二
三四ノ一
五九ノ三
九九ノ三
六八ノ四
三三ノ四
五九ノ二
三九ノ五
四三ノ二
六〇ノ四
五九ノ一
二〇二ノ一

ヨ

よがれがちなる
よしののやまと
よどむかたなき

二四ノ一
一三ノ四
七八ノ五

ワ

よのくもりなく
よぶこどりこそ
よるおとすなり
よるはこころに

四二ノ一
一五四ノ二
一五三ノ三
一四ノ二

わがこころなる
わがこころのみ
わがしたもえの
わがしらぬまに
わがたがふれば
わがたまくら
わがみのうへに
わがみはしかの
わがみひとつは
わがみもとに
わかれのとほく
わけゆくさなの
わすらるるなぞ
わすられしには
わたりやたびの

二六ノ一
一〇四ノ二〇
九一ノ三
二八ノ二
一三ノ二
四五ノ三
六二ノ三
四六ノ三
一三ノ一
五八ノ一
一三五ノ二
四九ノ四
一〇三ノ五
一一九ノ一
一六ノ三

ほのかになりぬ
ほのめくあきの

三ノ三
三七ノ一

マ

まきのいたやの
まきのしまびと
まきのそまやま
まきのつぎばし
まきゑにみゆる
まくらさへこそ
まくらにちりの
まこもかるべき
またあふさかも
まだうつつには
まだきにいほま
まだそらさえぬ
またなにごとに
まだふみもみず
まだふゆながら
まつことにても
まつさへふちの

五四ノ一
四九ノ三
五九ノ四
二九ノ一
一一四ノ四
八九ノ二
三四ノ四
二八ノ三
七三ノ一
二四ノ五
八三ノ一
四九ノ五
一一三ノ一
一六ノ二
五八ノ六
一一二ノ二
一三九ノ三

まつにしるしの
まつにねぬよの
まつのはなさく
まつのみどりも
まつひといかで
まつもかみよの
まつよのかずの
まつをひさしと

ミ

みがけるやどの
みせばやひとに
みちのくにより
みづにはかこそ
みづのこころに
みなかみよりや
みなそのほらは
みれにあさひの
みれのさくらや
みれのはつゆき
みれのもみちに

二四ノ四
二三ノ五
六八ノ二
二〇ノ三
二六ノ五
一一一ノ一
二五ノ三
六四ノ五
二七ノ四
八〇ノ四
一四七ノ二
五ノ一
二九ノ二
二ノ一
五〇ノ三
六七ノ二
九ノ三
五八ノ三
五ノ一

ム

みれのもみちは
みのうきくさは
みむろのやまの
みやこにいづる
みやこのかたへ
みやこをしのぶ
みゆるははなの
みるともあかじ
みるひともしき
みるめはかづく
みをさかのぼる
みをたづねつつ

むかしのひとを
むかしをしのぶ
むすばれながら
むすぶこほりの
むすばほれたる
むなしきそらの

五一ノ三
一三五ノ三
五五ノ二
三ノ五
七一ノ二
七二ノ二
一一一ノ一
六五ノ一
五六ノ三
九五ノ三
一〇五ノ三
六三ノ二
一一七ノ一
一三ノ一
八五ノ一
六二ノ一
七八ノ六
九七ノ四

はなよりさきに
 はなよりほかに
 はなをこころに
 はれもたゆくや
 ははいかにして
 はまなのはしに
 はるといふなの
 はるのそらにも
 はるほどもなく
 はるもとけすや
 はるよりのちの
 はるをかぎらぬ
 はるをこめても
 はれぬおもひに
 はれゆくたびに

一三四ノ一
 一〇八ノ四
 一三〇ノ六
 六ノ四
 一三八ノ二
 五七ノ四
 六〇ノ六
 八八ノ一
 一八〇ノ二
 五八ノ五
 八ノ五
 一〇〇ノ三
 一五ノ四
 七ノ五
 四三ノ一

ヒ

ひかりまちとる
 ひきくらぶべき
 ひくしめなはに
 ひくにはよわき

一二三ノ四
 一〇一ノ一
 一六ノ一
 一五ノ一

ひくまののべに
 ひさしくひとの
 ひさしくよにも
 ひときがすゑを
 ひとなみなみに
 ひとのこころを
 ひとのつらさを
 ひとへにはるを
 ひとめづつみを
 ひとやりならぬ
 ひとよをこめて
 ひとりないりそ
 ひとりもつきの
 ひとりやどもる
 ひとりやはるの
 ひとりやみまし
 ひとをつらしと
 ひねりふずとも
 ひまなきこひを

フ

五ノ四
 九三ノ六
 一五四ノ一
 三ノ一
 三四ノ二
 八一ノ四
 九五ノ二
 二〇ノ一
 七八ノ四
 一四六ノ一
 三三ノ一
 二五ノ四
 四〇ノ四
 八四ノ六
 四ノ四
 三七ノ四
 九一ノ六
 一〇四ノ三
 八四ノ一

ヘ

ふきなみだりそ
 ふたおやながら
 ふたたびかざす
 ふたたびのぼる
 ふたともしとや
 ふたばのまつの
 ふちのはなとや
 ふでのすさびを
 ふみかよはさむ
 ふもとのさとに
 ふもとのさとば
 ふるさといかに
 ふるさとこふる
 へだつるそらに

ホ

ほころびわたる
 ほそたにがはの
 ほどをいくたび

三三ノ二
 一三六ノ一
 一〇〇ノ二
 一三ノ三
 三〇ノ四
 六六ノ四
 二四ノ六
 七八ノ一
 七一ノ一
 六ノ五
 五一ノ四
 五九ノ五
 八〇ノ一
 六ノ三

四八ノ四
 一一ノ三
 七ノ三

なほくもかかる

一八ノ三

にほひばわれを

一八ノ五

はかなきゆめぞ

七四ノ二

なほゆくすゑの

七ノ四

にほひまされる

九ノ二

はじめてかぜは

一三ノ二

なほゆめかとぞ(疑はれ)

七ノ三

にまのさとびと

六五ノ五

はたおるむしの

四五ノ四

なほゆめかとぞ(疑はれ)

一六ノ三

はつはなともや

二ノ五

はつはなよりも

二〇ノ二

なみおりにくるる

一八ノ二

ぬぎすてられむ

八七ノ三

はつゆきとこそ

二ノ四

なみだにそむる

一五ノ二

ぬるるたもとに

九四ノ四

はてはけふりと

一四ノ三

なみだのいろは

三五ノ一

ぬれぬにこそは

五四ノ六

はなこそものは

一〇九ノ三

なみだのうきに

八ノ三

ねたくもをらで

二三ノ三

はなだにわれに

一三ノ一

なみだのかはの

七ノ三

ねながらひとは

二七ノ六

はなにかつらも

三五ノ二

なみだばえこそ

九三ノ一

のちのつらさの

九三ノ三

はなのほひに

七ノ一

なみのかけても

八五ノ四

のどけきはるの

六四ノ一

はなのみやこに

一〇九ノ四

なみのたちぬに

七五ノ四

のりにつらさの

四七ノ五

はなはわがみの

一〇八ノ一

なみのよりてや

四八ノ二

のりにつらさの

三三ノ三

はなはわがみの

八ノ四

なみのよるこそ

九八ノ三

のどけきはるの

二七ノ六

はなはわがみの

四七ノ四

なみばかりこそ

四四ノ一

のりにつらさの

二七ノ六

はなはわがみの

七ノ五

なみよりこそ

一三ノ三

のりにつらさの

二七ノ六

はなはわがみの

七ノ一

なみよりこそ

一三ノ三

のりにつらさの

二七ノ六

はなはわがみの

七ノ一

二

にしへかたぶく

一四ノ一

のりにつらさの

二七ノ六

はなはわがみの

一〇九ノ一

にはこそはなの

一三ノ三

のりにつらさの

二七ノ六

はなはわがみの

八六ノ一

つきのみおくる
 つきばかりこそ
 つきみよとしも
 つきやむかしの
 つきよりほかの
 つちくれしてや
 つつむそでより
 つもりてよもの
 つゆのすがらぬ
 つゆもあだには
 つらきをゆめと
 つれなきひとの
 つれなきひとと
 つれなきひとを
 つれなくたてる

ト

とかたぞかれの
 とかへるやまに
 ときはのはしに
 ときはのやまも

四四ノ三
 四三ノ三
 八九ノ一
 四四ノ二
 三七ノ三
 一四九ノ二
 七九ノ六
 六四ノ四
 三二ノ二
 五〇ノ一
 八六ノ五
 一五五ノ一
 七五ノ二
 七八ノ二
 一四九ノ三
 五五ノ五
 五七ノ一
 一七ノ四
 二ノ六

とくるこころの
 とこのやまかぜ
 としまがいそに
 とどこほらぬは
 とどめがたきは
 となせぞあきの
 となせのたきは
 とはれぬみこそ
 とふことのほに
 ともおいぎと
 とりとともにぞ

ナ

ながきながれな
 ながきよすがら
 ながむるつきを
 ながるるつきや
 ながれてどこそ
 ながれてのよの
 ながれてやとも
 なきしほたれて

九六ノ一
 四六ノ一
 八九ノ三
 一六ノ四
 八六ノ六
 五三ノ五
 五三ノ一
 一〇ノ一
 一三六ノ四
 一〇七ノ一
 七三ノ三
 六三ノ二
 一四三ノ五
 四四ノ一
 三九ノ六
 八三ノ二
 六三ノ一
 九九ノ一
 九〇ノ二

なくわたりこそ
 なげきにおつる
 なげきのみこそ
 なげきをやまと
 ななせのよどに
 ななへのあみに
 なにあふことの
 なにかはあまの
 なにながれたる
 なににあゆるを
 なにかかれる(露)
 なにかかれる(花)
 なにつけてか
 なにのみるめの
 なにほのことも
 なのりをせねば
 なはしろみづに
 なびかぬかみは
 なびきもあへぬ
 なびくにつけて
 なべてならぬに

二五ノ五
 九三ノ四
 一七ノ二
 一〇三ノ九
 八〇ノ二
 一四九ノ一
 一〇〇ノ五
 一〇一ノ二
 二一ノ五
 一五〇ノ二
 八七ノ五
 一八ノ一
 三六ノ二
 九六ノ五
 一二九ノ三
 一五ノ一
 六九ノ一
 六〇ノ三
 四八ノ五
 五ノ五
 二七ノ五

そのこのころな
そでのうらにも
そとものをだに
そのこのはに
そのよのつゆに
そらなげきをば
そらものどかに
そらよりおつる

二九ノ二
二七ノ五
三六ノ三
一〇六ノ四
九一ノ一
一〇四ノ一
四三ノ二
一五ノ一

タ

たえまはおほく
たがしめゆひし
たかつのみやに
ただかりそめの
ただこのもとを
たちものぼらぬ
たちわかるるは
たつしらなみの
たつたのかはの
たつたのやまの
たづねしこゑを

一〇六ノ一
二三ノ一
四一ノ二
九一ノ四
一三三ノ二
一〇ノ二
一九ノ五
五五ノ三
五四ノ三
三ノ一
三三ノ三

たつやあさまの
たでかるふれの
たなびくやまを
たにがはくみし
たにのうぐひす
たにのかけはし
たにはむこまは
たねまきてけり
たのしきみよと
たのみしきみが
たのむればこそ
たのめぬつきの
たびにかへすは
たまさかにとふ
たまたまきては
たまぬきかくる
たまもにさゆる
たまゐるかすを
たみやすげなる
たゆるはしぬる
たれかわがみを

八三ノ四
一五ノ一
七〇ノ一
一四三ノ三
一〇七ノ二
五ノ六
一四八ノ五
一六ノ二
六五ノ二
一三九ノ二
一五四ノ三
九八ノ五
七三ノ四
八五ノ二
八七ノ一
八四ノ五
五五ノ四
三八ノ二
六六ノ一
八四ノ三
一二ノ三

たれとかやまの
たれわがやどの
たれをまつとて

二四ノ三
五〇ノ二
一七ノ六

チ

ちとせのはるを
ちとせのまつの
ちとせはいけの
ちとせをふとも
ちよのためしに
ちらすのみやは
ちらすはなぞと
ちりのうたがひを
ちればふもとの

八ノ六
六八ノ一
六三ノ三
六七ノ四
一四ノ一
一四ノ一
一四五ノ二
一四三ノ三
一四ノ四

ツ

つきせすみゆる
つきせすものを
つきとゆきとは
つきにもみぢの
つきのいるこそ

六八ノ三
一七ノ一
六〇ノ一
四五ノ二
二九ノ四

ころもかりがね
ころものうらの
こゑききなるる
こゑはうつらぬ
こゑはしをれぬ
こゑはふりせぬ

サ

さえてもいづる
さきしかかれば
さくらなみよる
さこそはあまの
さこそばかりの
さこそみしかと
さすがにかけて
さぜるともなき
さそはぬわかの
さほのかはせの
さみだれたらば
さむるほどこそ
さもあらぬそでの

四五ノ六
一四ノ一
三ノ四
二三ノ一
四ノ一
二三ノ四

六〇ノ二
二三ノ二
二二ノ二
七二ノ四
五八ノ二
九三ノ二
一〇四ノ六
三〇ノ一
二五ノ二
四三ノ五
二八ノ一
一三八ノ一
一一九ノ三

さやけきかげは
さやつかのまに
さゆるしもよの
さをににしきを

シ

しかありけると
しかのれにさへ
しかまにそむる
しくものなしと
したてるばかり
したにながると
したもみちする
しづくにかをる
しでのやまぢも
しなばやとのみ
しのぶかたかた
しばしのまだに
しばしみあれの
しらげばうたて
しらせでとると

一三ノ二
一四ノ二
六ノ四
五四ノ四

一六ノ二
四六ノ四
一五ノ三
一三ノ一
五三ノ一
七六ノ五
八八ノ二
二七ノ二
一四五ノ四
八三ノ五
二九ノ一
一九ノ二
一九ノ四
一八ノ一
一四ノ一

しらぬいのちに
しらぬやまぢに
しられぬたにの
しるしもみえず

ス

すがたもひとに
すぎにしかたは
すげのをがさに
すすしくなりぬ
すみやきもをる

セ

せきのしみづの
せきのなぞとも
せきのながはに
せきやるかたも
せないでましぬ
せめてもをしき

ソ

九八ノ一
一〇ノ一
一三ノ一
五八ノ四

一二七ノ四
九五ノ四
五四ノ五
三〇ノ三
一〇三ノ六

三八ノ四
一〇〇ノ二
五〇ノ五
七四ノ一
一〇五ノ二
六三ノ一

ケ

けさしもおきて
けさしらつゆに
けさはかたみに
けさふくにしも
けふぞさかりに
けふのにほひを
けふはこころに
けふはさかゆく
けふをばつれの

二二〇ノ三
四八ノ一
七五ノ一
二ノ二
六ノ六
九ノ一
二七ノ一
二〇ノ三
七ノ二

コ

こころうつらぬ
こころかろくは
こころしてふけ
こころつくしの
こころにかかる
こころにたがふ
こころのとまる
こころのままに(すめる)

四二ノ六
九七ノ二
九ノ四
一三ノ一
九〇ノ一
六九ノ三
二九ノ五
四一ノ四

こころのままに(我が)
こころのやみに
こころぼそくも(老い)
こころぼそくも(呼ぶ)
こころまどはす
こころもゆかぬ
こころやおなじ
こころをさへに
こしぢくやしき
こしちのそらは
こすしらのなみの
こだかみやまに
こたふるさへぞ
ことしもけふに
ことしもむしの
ことのばさへぞ
このまのつきの
このまゆしろき
このみるばかり
このみをみるも
こばうみうめに

三八ノ一
二三ノ四
二七ノ三
六ノ二
八ノ一
一四ノ三
三八ノ三
一九ノ二
一三ノ四
一七ノ一
六四ノ六
五七ノ三
二五ノ四
六三ノ四
一五ノ一
二三ノ二
九三ノ五
一四ノ五
三七ノ五
二〇ノ二
一五ノ一

こはなにのみの
こひしかるべき
こひしきことは
こひしきひとの
こひしさいかで
こひしとだにも
こひしもなどが
こひするなをも
こひせよとても
こほるますだの
こまにこよひや
こやのいけみづ
こやゆふしでて
こやをのやまの
こよひとしらぬ
こよひのつきの
こよひのつきを
こよひもここに
こるばかりにも
これよりまさる
これをぞしもの

一四ノ三
一六ノ一
七五ノ三
七四ノ四
九一ノ五
九二ノ五
九六ノ二
八二ノ三
一〇六ノ二
六二ノ三
三八ノ五
五六ノ四
二一ノ一
五七ノ五
三九ノ一
三九ノ二
四一ノ三
四九ノ一
九〇ノ五
八三ノ三
一五〇ノ五

かぜよりさきに
かたしくそでに
かたぶくつきに
かたみにおきて
かたよりしける
かたらふこゑに
かつらぎやまに
かなはでとまる
かのみなぐちに
かへさのふねは
かへすがへすや
かみあらはれて
かみさびゆかむ
かみのこころも
かやがのきばの
からきはひとり
かりのよどのの
かりはかまなば
かをばこずゑに
かなるぞかぜの

一〇ノ四
七四ノ五
七三ノ三
五三ノ四
五ノ六
一九ノ一
五九ノ一
八三ノ二
一四八ノ二
三四ノ五
一四ノ三
九八ノ二
五ノ三
四二ノ四
二八ノ四
一〇三ノ三
八ノ一
一五ノ一
五ノ二
二ノ四

キ

きえにしあわな
きえばともにや
きえやしなまし
ききまどはしつ
きくひとさへぞ
きしのかげくさ
きしのもみぢに
きてみよとこそ
きびのやまびと
きみがこころを
きみがちよにも
きみこそつらき
きみこそまるが
きみぞつかへむ
きみにあふごの
きみはこえけり
きみみるまでの
きみをわするる
きよたきがはに

一三ノ三
一四ノ四
九四ノ三
二五ノ二
七〇ノ三
五七ノ二
五〇ノ四
二四ノ一
三ノ三
一〇四ノ八
六四ノ三
一〇三ノ四
一〇三ノ七
六八ノ五
一〇三ノ八
一〇四ノ四
一七ノ四
七三ノ四
三九ノ三

ク

くさのうへとも
くすはひかかる
くちきのそまの
くまなきみねの
くまなきみねを
くもでにすがく
くものかへしの
くものちりぬ
くものちりぬ
くもふきはらふ
くもらであけぬ
くもらばくもれ
くもるよもなき
くもぬにみゆる
くもぬのさくら
くもぬのつきを
くもぬのはなを
くるしきうみを
くるればつきの

一三ノ二
三六ノ一
七九ノ五
一一三ノ二
一一三ノ三
八〇ノ三
一一ノ四
一一〇ノ四
三九ノ四
三七ノ二
四一ノ五
七七ノ一
四一ノ一
一〇ノ五
一一〇ノ一
七七ノ三
一五ノ一
一四六ノ二
二ノ四

エ

えださしかはす

八ノ三

オ

おいそのもりの
おきどころなく
おくなるをもや
おくはなごに
おくれぬものは
おつるなみだぞ
おとにききつつ
おどろかさでも
おなじみかさの
おなじみづにも
おのがあをばも
おぼるげならぬ
おもかげにのみ(立たぬ)
おもかげにのみ(立たむ)
おもしろかりし
おもはれじとの

一三ノ二
一三八ノ一
一五ノ二
四七ノ一
一四ノ三
七〇ノ二
八七ノ四
一三七ノ三
四三ノ三
三七ノ六
五ノ五
一〇ノ四
九ノ五
五三ノ三
一〇八ノ三
一〇三ノ二

おもひかへして
おもひすつれど
おもひたえても
おもひたえにき
おもひのきより
おもひのこせる
おもひのしたに
おもひもあへず
おもひもかけぬ(鐘)
おもひもかけぬ(人)
おもひわづらふ
おもふがりのみ
おもふことなく
おもふことなる
おりたつなをも
おろすいかだの
かからぬやまの
かかるこひちに
かかれるまつも

カ

かきれつづきに
かきれのうめは
かけじやそでの
かげだにみえぬ
かけてひさしく
かげならべむと
かげほのかにも
かげよりほかに
かげろふほどの
かささぎならば
かささむはるの
かさねにつけて
かさねぬそでは
かすもしられぬ
かぜにしられぬ
かぜにみだるる
かぜのたよりに
かぜのつてにぞ
かぜのつらさに
かぜのまにまに
かぜのみあきの

五ノ一
一三ノ三
八四ノ二
一〇ノ三
九三ノ一
四〇ノ一
一三七ノ二
三〇ノ二
一五ノ三
一四ノ二
一九ノ三
一〇四ノ五
四三ノ六
一三ノ四
六九ノ二
二九ノ三
九ノ二
七三ノ一
一七ノ五

二ノ三
七ノ五
九八ノ四
一〇ノ四
六七ノ三
二八ノ二
二六ノ三
九九ノ四
一四ノ三
一五ノ四
六四ノ二
三四ノ三
一〇三ノ二
六六ノ二
八ノ二
一八ノ三
三〇ノ六
一一ノ五
一五ノ四
三ノ五

いたくななりそ
いつありあけに
いつともしらで
いつぬきがはの
いつはりさへぞ
いつもはつれの
いづらはここに
いづるつきひの
いづれのはるか
いづればあくる
いとどこころは
いとどみがけり
いとひきそふる
いとひしかぜぞ
いとふこころの
いとほしとだに
いのるしるしは
いはがきこむる
いはたのなの
いはでもひとに
いはねどしるし

一六ノ五
三六ノ五
九〇ノ四
六六ノ五
九六ノ三
二四ノ二
二〇三ノ五
八六ノ四
六六ノ三
三二ノ四
七六ノ三
四三ノ五
六ノ一
一五ノ二
九九ノ五
七四ノ三
一四〇ノ二
七九ノ四
四八ノ六
九四ノ一
三三ノ六

いはひぞそめし
いはまのこほり
いはまのみづな
いはもるしみづ
いはれながらも
いふもたのみの
いまいくあきに
いまいくとせか
いまはあらしの
いまはこころに
いまはひをまつ
いまひとこゑは
いりひのさすに
いるさのやまに
いるともつきを
いるやまのはも
いろいろにこそ
いろいろになる
いろにいづれば
いろますふちの
いろめくのべに

六七ノ一
一ノ一
一六ノ三
三三ノ六
一〇五ノ一
九三ノ二
一一ノ二
一〇八ノ二
四六ノ五
八四ノ四
一三七ノ四
三ノ六
一三ノ一
三ノ二
四〇ノ二
八九ノ四
四七ノ二
五四ノ二
九九ノ二
一八ノ四
四七ノ六

ウ

うきくもにのみ
うきねをなくと
うきはわがみに
うちみしひとも
うつしとどめよ
うつつにつらき
うづもれぬなを
うつらぬほどは
うつりしかげも
うつろはでやむ
うつろひにけり
うはげのゆきを
うはのそらなる
うひことのれの
うべさえけらし
うめづのうめは
うめのはながさ
うらみてもなほ
うらやましきは

一三九ノ一
九五ノ一
八七ノ二
一四三ノ六
七ノ三
七六ノ二
一三八ノ三
八六ノ二
一二五ノ三
八二ノ四
一七ノ一
五七ノ六
二三ノ五
一一四ノ二
五六ノ六
一四七ノ四
一五二ノ五
八二ノ五
七〇ノ四

あきのみづにも
あきをしらする
あくるもしらす
あくればかへる
あさかのぬまに
あさひのさとは
あさましかりし
あさましげにも
あしたのほらの
あしのしたげの
あしのまるやに
あしまのこほり
あとなきそらに
あなかまわれも
あなほらぐるの
あはでいくつき
あはでやみには
あはれいづこも
あはれこずゑに
あはれをそふる
あひみしほどな

四〇ノ三
三五ノ五
四四ノ五
二六ノ四
二七ノ二
六五ノ三
七五ノ五
八九ノ五
二ノ三
二八ノ五
三六ノ四
五六ノ二
三三ノ六
一〇四ノ七
一〇四ノ九
九七ノ一
一五ノ四
一四ノ四
二〇ノ一
四六ノ二
二二ノ三

あひみむことも
あひみむことを
あふくまがほの
あふことかたに
あふもしらぬ
あまくだります
あまてるかみや
あまのかはなみ
あまのとよりや
あまりながびく
あやしきまでも
あやしくみえぬ
あやしやいかが
あやなくよるの
あらうとみれど
あらしのかぜの
あらずなるみの
あらちのやまの
ありとしるこそ
ありへてひとに
ありやなしやの

八五ノ五
七九ノ二
一三六ノ一
一三二ノ四
七五ノ六
一四〇ノ一
六七ノ五
一〇ノ六
一ノ三
八二ノ二
六六ノ一
六六ノ四
六六ノ四
二六ノ二
一五ノ一
五二ノ二
九〇ノ三
一三〇ノ五
一四〇ノ四
一三九ノ四
七二ノ四

イ

あなばのしたに

一八ノ六

いかさまにせば
いかであさかの
いかでかしげし
いかでかそのの
いかできくべき
いかでこころを
いかなるかぜの
いかなるかみの
いかにうらみし
いかにうらむと
いかにかわかぬ
いかにしてかは
いかにふくよの
いくよかひなき
いくよれざめぬ
いくよをすきて
いくらのひとの
いそぐみちなば

七三ノ二
二七ノ三
一〇三ノ一
一四三ノ四
三三ノ六
一四三ノ二
一一ノ二
一四七ノ六
八三ノ一
一七ノ二
八六ノ三
九七ノ三
五三ノ二
三〇ノ五
五五ノ六
九五ノ五
一〇三ノ一〇
四ノ二

よそにみる

五一ノ四

よとともに(曇らぬ)

四三ノ六

よとともに(心の)

一四ノ四

よとともに(袖の)

八九ノ三

よとともに(玉ちる)

八〇ノ四

よなよなば

一七ノ一

よのなかは

二〇ノ三

よのなかな

四ノ五

よばになく

四ノ三

よひのまに

八五ノ三

よもすがら(草の枕)

八〇ノ一

よもすがら(ばかなく)

三〇ノ一

よものうみの(浦々)

六ノ四

よものうみの(波に)

一五ノ一

よふふれど

六三ノ一

よろづよと

四ノ二

よろづよに(かはらぬ)

二七ノ二

よろづよに(君ぞ)

三四ノ一

よろづよに(見る)

九ノ一

よろづよの(ためし)

七ノ三

よろづよの(ためし)

六八ノ四

よろづよは

六三ノ二

ワ

わがこひの

九四ノ一

わがこひは(おぼる)

七四ノ一

わがこひは(からす羽)

八六ノ二

わがこひは(しづの)

一〇六ノ一

わがやどに

一六ノ四

わかれちを

七〇ノ三

わぎもこが

九一ノ一

わぎもこに

二六ノ四

わすられて

一九ノ三

わすられむ

一〇三ノ一

わすれぐさ

九二ノ一

わたつみの

一四ノ四

われこそは

三七ノ六

われのみぞ

二〇ノ一

われひとり

七三ノ五

ヲ

をぐらやま

五一ノ六

をしへおきて

一四二ノ二

をしめども

五二ノ五

をののえは

一〇ノ三

をはぎばら

四七ノ二

をみなへし(咲ける)

四七ノ四

をみなへし(夜のま)

四八ノ一

下句七言

あかしのうらや

四三ノ四

あかでいりにし

八五ノ三

あかぬけしきを

三四ノ六

あかぬなみだに

三五ノ四

あかれさすとも

一四八ノ四

あきたつひこそ

三三ノ一

あきののごとに

四八ノ三

あきのはつかぜ

三三ノ三

むしのねは
むらくもや
むらさきの

一三五ノ二

四三ノ一

一七ノ五

メ

めづらしや
めのまへに

九五ノ五

九九ノ一

モ

もずのゐる
ものなこそ
もみぢちる
ももどのの
もらさばや
もろともに(あばれ)
もろともに(いつと)
もろともに(草葉)
もろともに(苔の)
もろともに(西へ)

五〇ノ二

九六ノ五

五四ノ三

一四七ノ三

一〇〇ノ四

一〇八ノ四

四四ノ三

三七ノ四

一三八ノ三

一一三ノ三

ヤ

やどからぞ

やどごとに

やどちかく

やまがはの

やまざくら(梢)

やまざくら(咲き)

やまざとの(おもひ)

やまざとの(門田)

やまざとの(そとも)

やまざとば

やまざとも

やまちかく

やまのばに(あかて)

やまのばに(雲の)

やまのゐの

やまふかみ

やまぶきに

やまぶきも

やまもりよ

四三ノ一

三三ノ一

二五ノ三

五三ノ三

八ノ四

一〇ノ五

九六ノ一

四四ノ五

一六ノ三

一五ノ三

一〇七ノ二

二五ノ五

三六ノ五

四〇ノ四

八九ノ五

三六ノ三

一七ノ二

一一〇ノ一

五一ノ三

ユ

ゆきつもる

ゆきとしも

ゆきのいろを

ゆきふれば

ゆくすゑの

ゆくひとも

ゆくひとを

ゆくへなく

ゆふされば

ゆふつゆの

ゆみばりの

ゆめにだに

ゆめにのみ

ヨ

よしのやま(嶺に)

よしのやま(峯の)

よそながら

よそにきく

よそにては(岩こそ)

よそにては(惜みに)

六八ノ一

二二ノ四

二二ノ二

五八ノ六

一〇八ノ二

一六ノ三

四九ノ一

九九ノ五

三六ノ四

四七ノ五

一四九ノ四

七六ノ二

一三八ノ一

一一ノ一

六ノ五

一三七ノ一

六九ノ二

九ノ三

一一ノ三

ほととぎす(あかで)

三三六

まつかぜの(な琴)

六五ノ四

みづとりの(つらら)

五六ノ六

ほととぎす(おとば)

三三三

まつがねに

四四ノ一

みづとりの(羽風)

七六ノ一

ほととぎす(くもぢ)

二六ノ六

まつひとの(大空)

九四ノ四

みづのうへに

九四ノ三

ほととぎす(くもの)

二六ノ三

まつひとの(宿を)

二五ノ一

みづのおもに(ちり)

一三ノ二

ほととぎす(くもぬ)

九四ノ二

まつわれは

二六ノ一

みづのおもに(松の)

六三ノ三

ほととぎす(心)

二四ノ一

ミ

みなかみに

一三ノ一

ほととぎす(姿)

二三ノ一

みかさやま(神)

二六ノ二

みなつきの

三三ノ五

ほととぎす(尋ぬる)

二六ノ五

みかさやま(光)

四一ノ五

みなひとば

一〇九ノ二

ほととぎす(なきつ)

二三ノ二

みかさやま(嶺)

四三ノ五

みにまさる

一三六ノ二

ほととぎす(一聲)

二六ノ二

みかさやま(もり)

四三ノ四

みれつづき

一〇ノ一

ほととぎす(ほのめく)

二五ノ二

みかづきの

一〇一ノ五

みのうさを

一二三ノ一

ほととぎす(まつに)

二四ノ六

みくまのに

一〇三ノ七

みのうさを

一三六ノ四

ほととぎす(まれに)

二五ノ四

みしひとは

一四一ノ一

みのほどを

一五五ノ一

マ

まくずはふ

三三ノ二

みしままに

一四一ノ一

みむろやま

五五ノ四

ますらはは

一一ノ二

みそぎする

三三ノ一

みやまいでて

二二ノ五

ましかれて

二四ノ三

みちのくの

九〇ノ一

みわたせば

一五三ノ六

まちしよの

八四ノ二

みちもなく

五九ノ六

ム

まちつけむ

七三ノ三

みづがきの

六七ノ五

むかしにも

一二七ノ二

まつかぜの(音)

二八ノ一

みつぎもの

六五ノ五

むかしみし

一三三ノ一

はしたかの
はしたかを
はつせやま
はつゆきは
はなうるし
はなくぎば
はなさそふ
はなのみや
はなもみな
ははきぎの
ははそちる
はやきせに
はやくより(あさき)
はやくより(たのみ)
はるがすみ(たち隠せ)
はるがすみ(たち歸る)
はるかなる
はるごとに(あかぬ)
はるごとに(おなじ)
はるごとに(松の)
はるさめに

五七ノ一
五八ノ一
一〇ノ六
五七ノ五
一〇四ノ九
一五ノ三
一二ノ二
一八ノ六
六六ノ三
五〇ノ三
五一ノ五
一九ノ四
二〇ノ三
二三ノ四
五ノ四
七ノ五
七〇ノ四
一一ノ二
一二ノ五
八ノ二
一一ノ四

はるさめは
はるたちて
はるのくる
はるのこし
はるのたに
はるのひの
はるのゆく
はるのよの
はるはをし
はるふかみ

ヒ

ひかげには
ひくこまの
ひぐらしの
ひとごころ
ひとしれず(思ふ)
ひとしれず(くれ)
ひとしれぬ(思ひ)
ひとしれぬ(戀)
ひとしれぬ(なき名)

四ノ一
一ノ二
二ノ二
一二ノ一
一四八ノ一
一二ノ一
一九ノ一
一五ノ一
一九ノ三
一七ノ一
二四ノ一
三八ノ四
二三ノ一
九〇ノ五
九八ノ二
六ノ六
九八ノ三
九〇ノ二
一〇三ノ二

ひとなみに
ひとはいさ(あり)
ひとはいさ(我が)
ひとよとは
ひのいるは
ひのひかり
ひなのよる
ふきかへす
ふくかぜに
ふくかぜも
ふちごろも
ふちなみは
ふちばかま
ふみそめて
ふゆさむみ
ふゆのよの
ふるゆきに

フ

ホ

二五ノ二
一〇ノ一
七三ノ一
八三ノ二
一四八ノ三
一三ノ一
五五ノ三
一四三ノ一
八六ノ六
七ノ二
三四ノ三
六七ノ三
三三ノ三
七八ノ一
五六ノ五
九八ノ四
五八ノ四

としふれど(春に)
としふれど(人も)
としふれば
としをへて
とだえして
とりのこの
とるてには

二〇九ノ四
七九ノ五
二三ノ二
二一〇ノ三
四三ノ三
二二ノ三
一五ノ二

ナ

なかなかに
ながはまの
ながむれば(おぼえぬ)
ながむれば(戀しき)
ながむれば(ふけゆく)
ながれての
ながれても
ながゐする
なきかげに
なきくより
なきなにぞ
なこそてふ

六二ノ二
六六ノ三
四四ノ二
七九ノ一
四三ノ二
七八ノ四
一三六ノ三
一一七ノ五
二四ノ二
九七ノ三
一一九ノ一
一〇〇ノ二

なごりなく
なぞもかく(こひぢ)
なぞもかく(身に)
なつごろも
なつのよの(月)
なつのよの(庭)
なつやまの
ななそちに
なにかおもふ
なににごとに
なににごとを
なににせむに
なににたてる
なににとなく
なににはえの
なほしろの
なみだがは
なみまくら
なふたけの

ニ

四一ノ四
八一ノ二
八五ノ五
三〇ノ二
三二ノ六
二九ノ四
二〇ノ二
一五四ノ一
一三三ノ二
五五ノ一
六三ノ四
七五ノ三
九五ノ三
六二ノ五
一四ノ三
一四八ノ六
七八ノ五
六一ノ三
五四ノ六

にしへゆく
にはのばな

ヌ

ぬすびとと
ぬるるさへ
ぬれぬれも

ネ

ねにかへる
ねぬるよの

ノ

のきばうつ
のこりなく
のちのよと
のりのため

ハ

はがくれに
はかるめる

二五ノ四
一四ノ一

一〇四ノ八
一八ノ四
五七ノ六

一三三ノ二
一三三ノ二

一二ノ一
一九ノ二
八三ノ五
一四ノ二

一三五ノ一
一〇四ノ一

たにがはに	五ノ一
たにがはの(うへは)	五ノ五
たにがはの(ふどみ)	五ノ三
たのめおく	八七ノ五
たびねする	五五ノ五
たまえにや	二七ノ四
たまがしは	二ノ一
たまくしげ(かけこ)	三六ノ一
たまくしげ(ふたがみ山)	三ノ四
たまくしげ(二見)	二四ノ四
たまさかに(あふ夜)	九六ノ二
たまさかに(波の)	九六ノ五
たまづさは	四四ノ五
たまつしま	一〇五ノ二
たゆみなく	一四六ノ一
たらちねは	一四三ノ五
たらちめの	一三七ノ二

チ

ちぎりおきし
ちとせまで(君が)
五ノ一

ちとせまで(すまむ)	二八ノ二
ちはやぶる(かしひ)	二〇ノ二
ちはやぶる(神)	一五〇ノ四
ちらぬまは	八ノ五
ちりかか(影は)	五ノ一
ちりかか(景色)	一三ノ三
ちりつもる	一〇ノ四
ちりはてぬ	一五ノ二

ツ

つかへつる	二〇ノ一
つきかげに	一一ノ五
つきかげの(さす)	四三ノ四
つきかげの(すみ)	三七ノ二
つききよみ	五五ノ四
つきをみて	三九ノ五
つつめども	八二ノ三
つながねど	六二ノ一
つのくにの	一〇三ノ四
つまこふる	四六ノ一
つみはしも	一四二ノ五

つもるべし	六八ノ二
つゆしげき	四九ノ三
つゆのみの	一三八ノ二
つらかりし(心習ひ)	七九ノ三
つらかりし(心習ひ)	一〇六ノ三
つらきをも	九一ノ五
つらしとも(思はむ)	一〇三ノ四
つらしとも(愚なる)	七ノ二
つららぬし	二ノ一
つれづれと	九七ノ一

テ

てるつきの(岩間)
てるつきの(ひかり)

三八ノ二
四〇ノ三

ト

とことばに
としくれぬ
としごとに(かはらぬ)
としごとに(聞く)
としごとに(咲き)

三三ノ一
六三ノ三
三ノ一
二三ノ四
七ノ四

さむしろに
 さもこそは(住の江)
 さもこそは(都)
 さやけさは
 さよなかに
 さらぬだに
 さりととも(思ふ)
 さりととも(書く)

シ

しかたたぬ
 しぎのある
 しぐれつつ
 したがへば
 しづのめが
 しながどり
 しのすすき
 しののめの
 しのぶれど
 しまかぜに
 しめのうちに

六ノ四
 一五ノ二
 四六ノ四
 三九ノ一
 一七ノ二
 四三ノ五
 七三ノ三
 一七ノ三

三〇ノ五
 一六ノ二
 五三ノ二
 八二ノ二
 三三ノ二
 五六ノ四
 七三ノ二
 八八ノ三
 八五ノ四
 八二ノ五
 一四七ノ五

しらかはの
 しらぎくの
 しらくもと(嶺には)
 しらくもと(よそに)
 しらくもと(をちの)
 しらくもと(まがふ櫻の)
 しらくもと(まがふ櫻を)
 しらくもの
 しらざりき
 しらすげの
 しらせばや
 しらつゆと
 しらつゆや
 しらなみの
 しるらめや

ス

すぎきける
 すみがまに
 すみのぼる
 すみよしの(まつかひ)

七ノ一
 八二ノ四
 一四ノ四
 一四ノ五
 八ノ一
 八ノ六
 九ノ二
 六ノ三
 七三ノ一
 四七ノ三
 八〇ノ二
 四七ノ一
 四七ノ六
 五七ノ四
 七八ノ二

一〇ノ二
 五九ノ三
 三九ノ四
 一三九ノ三

すみよしの(まつに)
 すみわびて
 するすみも
 セ
 せきもあへぬ
 ソ
 そのゆめを

タ

たかせぶれ
 たかれには
 たぐひなく
 たちながら
 たつたがば
 たづねつる
 たなばたに
 たなばたの(あかぬ)
 たなばたの(苔の)
 たなばたは

一八ノ三
 一三九ノ一
 九二ノ五
 一五ノ三
 一三七ノ三

五六ノ二
 五七ノ二
 一一ノ二
 八七ノ三
 五五ノ二
 六ノ六
 三四ノ六
 三五ノ二
 三四ノ二
 七五ノ六

こころには
 こす点には
 こぞみしに
 ことのねは
 ことのねや
 ことわりや(思ひ)
 ことわりや(交野)
 ことわりや(曇れ)
 このさとも
 このほるは
 このまもる
 このよには
 こひこひて
 こひしさは
 こひしさを
 こひしなで
 こひすてふ(なき名)
 こひすてふ(名を)
 こひすてふ(もじ)
 こひわたる
 こひわびて(おさふる)

一四二ノ四
 一三ノ四
 一〇九ノ三
 一四ノ三
 一四ノ一
 九ノ二
 五八ノ二
 一五ノ三
 三ノ二
 八ノ三
 一二ノ三
 一二ノ二
 三四ノ四
 七三ノ二
 一〇一ノ三
 一四ノ三
 二五ノ五
 七五ノ二
 七九ノ一
 八八ノ二
 七八ノ三

こひわびて(思ひ)
 こひわびて(たえぬ)
 こひわびて(ながむる)
 こひわびて(寐ぬ夜)
 こひわぶる
 こふれども
 こゆるぎの
 こよひわが
 こりつむる
 これにしく
 ころもでに(晝は)
 ころもでに(よこの)
 ころもでの
 こゑせずば

サ

さかきばや
 さかりなる
 さきそむる
 さきにけり
 さきのよの

八六ノ四
 九七ノ四
 九一ノ三
 八九ノ二
 九六ノ三
 八五ノ一
 一三ノ三
 四〇ノ一
 一〇三ノ八
 七三ノ四
 一四ノ二
 五七ノ三
 五九ノ一
 六ノ三

さぎのゐる
 さくらさく
 さくらばな(雲)
 さくらばな(咲き)
 さくらゆゑ
 ささがにの(糸の)
 ささがにの(糸引き)
 さしのぼる
 さだめなき
 さつきやみ
 さとごとに
 さのみやは
 さはみづに
 さほがほの
 さみだれに(入江)
 さみだれに(玉江)
 さみだれに(水)
 さみだれの
 さみだれは(沼の)
 さみだれは(日敷)
 さみだれは(小田)

一八ノ一
 一四ノ三
 一三ノ四
 一〇ノ二
 一三四ノ一
 四八ノ四
 四五ノ四
 七三ノ三
 一三九ノ二
 三〇ノ六
 二九ノ五
 九五ノ二
 三〇ノ四
 四八ノ二
 二九ノ三
 二八ノ五
 二九ノ一
 一〇三ノ五
 二八ノ三
 二八ノ四
 二九ノ二

かへるさは
かへるはる
かへるべき
かみがきに
かみがきの(あたり)
かみがきの(みむろ)
かみがきは
かみなづき(しぐる)
かみなづき(しぐれ)
かみやまの
かみがはを
かりにくる

キ

ききもあへず
ききわたる
きくたびに
きみうしや
きみがよの
きみがよは(天つ)
きみがよは(いく)

三五ノ四
一九ノ四
六九ノ三
一〇七ノ一
一五ノ三
六〇ノ四
一五ノ二
五三ノ一
五四ノ二
三三ノ一
一四九ノ五
四八ノ三

二六ノ一
二九ノ二
二四ノ二
六九ノ一
六四ノ五
六七ノ一
六六ノ五

きみがよは(曇)
きみがよは(末の)
きみがよは(とみの)
きみがよは(松の)
きみこそは

ク

くさきまで
くさのいほを
くさのうへの
くさのほに(かどで)
くさのほに(はがなく)
くさのほの
くさまくら(このたび)
くさまくら(さこそ)
くまもなく
くものうへに
くものなみ
くもりなき(影)
くもりなき(とよの)
くもりなく

六七ノ二
六四ノ六
六七ノ四
六四ノ四
一〇〇ノ五

一三九ノ三
一一一ノ四
四一ノ三
一四五ノ四
五三ノ四
二八ノ一
三七ノ三
一一〇ノ三
四三ノ六
一三ノ四
三九ノ三
四〇ノ二
六五ノ三
六六ノ五

ケ

くりかへし
くるひと
くるるまも
くれたけの

けさみれば
けふくれぬ
けふこそは
けふぞしる
けふはさば
けふもなほ
けふもまた
けふやさば
けふよりや

コ

ここのへに
ここのから
ここのこそ
ここのざし

一五三ノ四
一七ノ六
九〇ノ四
一三六ノ四

一二ノ三
九ノ四
九九ノ二
一四三ノ三
七一ノ四
一四五ノ二
二三ノ六
三ノ五
三ノ四

六四ノ一
一〇五ノ四
一七ノ四
八五ノ二

おくりては 九ノ三
 おくれゐて 七〇ノ一
 おさふれど 九三ノ四
 おしなべて 二〇ノ三
 おとたかき 六五ノ二
 おとにきく 九八ノ四
 おとにだに 五四ノ一
 おとはやま 五〇ノ五
 おどろかす 二四ノ五
 おなじくば 二八ノ一
 おのづから(秋は) 三六ノ一
 おのづから(夜がる) 八一ノ三
 おのづから(我が) 六四ノ五
 おほえやま 一一六ノ二
 おほゐがは(いくせ) 三三ノ三
 おほゐがは(岩波) 五〇ノ四
 おほゐがは(散る) 五三ノ一
 おほゐがは(紅葉) 五四ノ四
 おほゐがは(ゐぜき) 五一ノ二
 おもかげは 七七ノ三
 おもはむと 九〇ノ三

おもひあまり 七九ノ四
 おもひいづや 七五ノ五
 おもひかれ 一一〇ノ四
 おもひきや(逢ひ) 九三ノ三
 おもひきや(雲井) 一二三ノ四
 おもひぐさ 八七ノ一
 おもひやる 一三〇ノ五
 おもひやれ(須磨) 七四ノ五
 おもひやれ(とはで) 八四ノ六
 おもひやれ(めぐり) 一九ノ五
 おもふこと 四六ノ二

カ

かがみやま(うつろふ) 九ノ五
 かがみやま(嶺) 四一ノ一
 かきくらし 六〇ノ一
 かきたえて 八四ノ四
 かぎりありて(散り) 五ノ一
 かぎりありて(散る) 一六ノ五
 かぎりありて(別る) 三五ノ一
 かくてしも 一一ノ三

かくとだに 七八ノ六
 かくばかり(こち) 一四ノ三
 かくばかり(戀) 一〇五ノ五
 かさとのり 一〇三ノ六
 かしがまし 一〇四ノ七
 かすがのの 五ノ三
 かすがのの 一一三ノ一
 かすがやま 一〇五ノ一
 かすならぬ 八八ノ一
 かすめては 五六ノ一
 かぜはやみ 三七ノ一
 かぜふけば(枝) 三六ノ一
 かぜふけば(波) 三〇ノ三
 かぜふけば(蓮) 五ノ五
 かぜふけば(柳) 六二ノ一
 かぞふるに 七〇ノ二
 かたしきの 一三九ノ四
 かなしさの 四九ノ四
 かはぎりの 一四九ノ一
 かはらやの 一三ノ二
 かはりゆく 一一六ノ一
 かへさじと

いつしかと(春の)
 ひとつとなく(風)
 ひとつとなく(戀)
 ひとつはりに
 いづれをか
 いつをいつと
 いかやま
 いとせめて
 いとどしく
 いなげふく
 いなりやま
 いにしへの
 いにしへの
 いのちだに
 いのちをし
 いのちをも
 いはしろの
 いはぬまは
 いはげしろ
 いへのかぜ
 いまぞしろ

二ノ三
 六六ノ二
 八三ノ四
 三七ノ五
 二二ノ三
 一四ノ三
 六ノ二
 一五ノ三
 八九ノ一
 三六ノ二
 二四ノ四
 四一ノ二
 一七ノ四
 七九ノ二
 八四ノ三
 一四ノ四
 五八ノ五
 八四ノ一
 八七ノ四
 一二ノ三
 一三ノ一

いまばしも
 いまばただ
 いまばとて
 いまひとの
 いまよりば(思)
 いまよりば(心)
 いもせやま
 いりひさす
 いろかへぬ
 いろふかき
 いろみえぬ
 いろもかも
 ウ
 うかりしに
 うきみをし
 うぐひすの(木傳ふ)
 うぐひすの(鳴く)
 うたたれに
 うたたれの
 うちがはの(河瀬)

四八ノ六
 七四ノ四
 六ノ四
 九五ノ四
 九二ノ二
 四三ノ二
 四五ノ六
 一七ノ三
 一七ノ四
 五三ノ二
 九三ノ一
 一四ノ二
 一五ノ一
 一四ノ一
 三ノ六
 三ノ三
 八六ノ五
 一二ノ一
 四九ノ三

うちがはの(底)
 うちたのむ
 うちなびき
 うづらなく
 うとましや
 うのはなの(青葉)
 うのはなの(咲かぬ)
 うのはなを
 うぶねには
 うめがえに
 うめのはな
 うらむとも
 うらむなよ
 うらやまし(如何に)
 うらやまし(浮世)
 うらやまし(雲の)
 うれしくも
 うゑおきし
 オ
 おきつしま

二八ノ三
 一三ノ四
 一ノ一
 四九ノ二
 一〇三ノ一〇
 二二ノ四
 二二ノ五
 三三ノ三
 一五ノ三
 四ノ三
 四ノ二
 一〇ノ二
 一〇ノ四
 二二ノ六
 二二ノ二
 二二ノ三
 二四ノ二
 一〇八ノ一
 七ノ一

あふことは(舟人) 一〇五ノ三
 あふことは(夢) 九三ノ二
 あふことも 九五ノ一
 あふことを(今宵) 八九ノ四
 あふことを(とふ) 一〇四ノ二〇
 あふごなき 一〇三ノ九
 あふとみて 七四ノ二
 あふまでは 七四ノ三
 あふみてふ 一〇三ノ五
 あふみにか 一〇四ノ四
 あまぐもの 一〇三ノ二
 あまのがは(かへさ) 三五ノ三
 あまのがは(これや) 一一五ノ一
 あまのがは(苗代) 一四〇ノ一
 あまのがは(わかれ) 三四ノ五
 あみだぶつと(唱ふる聲に) 一四二ノ一
 あみだぶつと(唱ふる聲を) 一四六ノ二
 あめふれば 一五三ノ三
 あめよりは 一五三ノ六
 あやしきも 一〇六ノ四
 あやにくに 八六ノ三

あやめぐさ(れたく) 二七ノ一
 あやめぐさ(れをのみ) 二四ノ二
 あやめぐさ(ひく手) 二七ノ三
 あやめぐさ(よどの) 二七ノ六
 あやめぐさ(我身) 二七ノ五
 あやめにも 八二ノ一
 あらかりし 八〇ノ三
 あらしをや 四五ノ二
 あらたまの 二ノ四
 あらちやま 六〇ノ二
 あらをだに 一六ノ一
 ありあけの(月待つ) 四四ノ四
 ありあけの(月も) 四五ノ一
 ありがたき 一四三ノ六
 ありふるも 八二ノ四

イ

いかでかは 一二ノ四
 いかなれば 四三ノ三
 いかにして(衣の) 一四四ノ二
 いかにして(しがらみ) 三九ノ六
 いかにせむ(うき世) 一四一ノ三
 いかにせむ(數ならぬ) 七九ノ六
 いかにせむ(暮れ) 六三ノ三
 いかにせむ(末の) 五八ノ三
 いかにせむ(なげき) 九三ノ五
 いかにせむ(山田) 一九九ノ二
 いかばかり 六六ノ四
 いかかへり 一一ノ一
 いくとせに 一〇九ノ一
 いくとせも 一〇八ノ三
 いけにすむ 八二ノ五
 いけにひづ 一八ノ二
 いけみづに 三八ノ一
 いけみづの 六五ノ一
 いさぎよき 一四一ノ二
 いしだたみ 一三〇ノ一
 いせのうみ 七二ノ二
 いそなつむ 一七ノ四
 いたづらに 一三一ノ一
 いづくにも 三八ノ三
 いつしかと(明け) 一ノ三

或本

卷第十九

在曉を高野の山下思ひとく心上

寂照法師

ひとすぢに心かくればむかふなる蓮のいとよをはりみだるな

はらす

千載和歌集終

すべらぎを八百萬代の神もみなときはにまもる山の名ぞこれ

壽永元年大嘗會主基^{すき}方の歌よみて奉りけるとき

神樂の歌丹波國神南備山をよめる

權中納言兼光

三島^{みしま}木綿^{ふわた}かたに取り懸けかみなびの山の榊をかざしにぞする

元暦元年今上の御時大嘗會悠紀方の歌奉りける

神あそびの歌近江國諸神^{もろがみのさき}郷をよめる

藤原季經朝臣

もろがみの心にいまぞかなふらし君を八千代と祈るまことは

おなじ大嘗會の主基方の歌よみたてまつりける

神樂の歌丹後國千年山をよめる

藤原光範朝臣

ちとせやま神の代させる榊葉のさかえまさるは君がためとか

*

*

*

*

*

ときはなる神なび山の榊葉をさしてぞいのるよろづよのため

治暦四年後三條院の御時大嘗會主基方神樂かみあそびの歌

いはや山さいをよめる

藤原經衡

うごきなく千代をぞ祈るいはや山とる榊葉のいろかへずして

寛治元年堀河院の御時の大嘗會悠紀方神ゆきあそび

の歌諸神もろがみのさき郷をよめる

前中納言匡房

いにしへの神の御代よりもろ神の祈るいはひは君が世のため

久壽二年院の御時大嘗會悠紀方の神樂の歌近江

國木綿園ゆふそのをよめる

宮内卿永範

神うくる豊のあかりにゆふ園の日影かつらぞはえまさりける

嘉應元年高倉院の御時大嘗會悠紀方の神あそび

の歌近江國守山をよめる

山寺に侍りけるに太神宮の御山をば神路山と申

す大日如來の御垂跡を思ひてよみ侍りける

圓位法師

深くいりて神路の奥をたづねればまたうへもなき峯のまつ風

治承四年遷都の時伊勢太神宮にかへりまゐりて

君の御祈念し申し侍りてよみ侍りける

大中臣爲定朝臣

月讀の神してらさばあま雲のかかるうき世も晴れざらめやは

そののち世の中なほり侍りけるとなむ

石清水社に歌合とて人々よみ侍りける時社頭月

といへる心をよめる

能蓮法師

石清水きよきながれの絶えせねば宿る月さへくまなかりけり

長元九年後朱雀院の御時大嘗會主基^す方の神あそ

びの歌丹波國神なび山をよめる

藤原義忠朝臣

述懷の歌によめる

賀茂重保

君をいのる願を空にみてたまへわけいかづちの神ならばかみ

おなじき社の後番の歌合の時月の歌とてよめる 皇太后宮大夫俊成

きぶねがはたまちる瀬々のいはなみに氷をくだく秋の夜の月

述懷の歌の中によみ侍りける

法印慈圓

わがたのむ日よしの影は奥山の柴の戸までもささざらめやは

日吉の大宮の本地を思ひてよみ侍りける 法橋性憲

いつとなくわしのたかねに澄む月の光をやどすしがのから崎うら波

日吉の社に御幸侍りける時あめのふり侍りける

その時になりて霽れにければよみ侍りける 中原師尙

御幸する高根のかたに雲はれてそらに日吉のしるしをぞ見る

高野の山を住みうかれて後伊勢の國二見の浦の

侍りけるを二千三百度にもあまりける時貴布禰

の社にまうでて柱にかきつけける

平 實 重

今までになどしづむらむきぶね川かばかり早き神をたのむに

かくて後なむ程なく藏人になり侍りける近衛院の御時なり

片岡のはふりにて侍りけるをおなじ社の禰宜に

わたらむと申しける頃よみて物に書き付け侍り

ける

賀 茂 政 平

さりとともたのみぞかくる木綿襷わがかたをかか神と思へば

その後なむ禰宜にまかりなりにける

百首歌の中に神祇の歌よませ給ひける

武 子 内 親 王

さりとともたのむ心は神さびてひさしくなりぬ賀茂のみづ垣

賀茂社の歌合とて人々すすめてよみ侍りける時

といへる心をよみ侍りける

權大納言實國

おしなべてゆきのしらゆふかけてけりいづれ榊の梢なるらむ

有馬のゆに忍びて御幸ありける御供に侍りける

に湯の明神をば三輪の明神となむ申し侍ると聞

きてものにかきつけて侍りける

按察使資賢

珍らしき御幸をみ輪の神ならばしるしあり馬の出湯いでゆなるべし

熊野にまうでて侍りけるとき發心門の王子にて

よみ侍りける

權中納言經房

うれしくもかみに誓をしるべにて心をおこすかどに入りぬる

三輪の社にて霞をよめる

僧都範玄

杉がえを霞こむれど三輪の山かみのしるしはかくれざりけり

藏人にならぬ事をなけきて年とし來賀茂社にまうで

社の歌合とて人々よみけるに述懐の歌とてよみ

侍りける

右大臣

數ふれば八年經にけりあはれわが沈みしことは昨日と思ふに

そののち神感あるやうに夢想ありて大納言にも還任して侍

りけるとなむ

おなじ歌合に

皇太后宮大夫俊成

いたづらにふりぬる身をも住吉のまつはさりとと思はむとも哀しむらむ

おなじ歌合に社頭月といへる心をよみ侍りける 右大臣

ふりにける松ものいはばとひてまし昔もかくやすみのえの月

俊恵法師

住吉の松のゆきあひのひまよりも月さえぬれば霜はおきけり

廣田社の歌合とて人々歌よみ侍りける時社頭雪

白河法皇熊野へまゐらせ給うける御供にてしほ
やの王子の御前にて人々歌よみ侍りけるによみ
はべりける

後三條内大臣

思ふことくみてかなふる神なれば鹽やに跡をたるるなりけり

百首の歌めしける時神祇歌とてよませ給うける 崇徳院御製
道のべのちりにひかりをやはらけて神の佛となのるなりけり

藤原清輔朝臣

あめのしたのどけかれとや榊葉を三笠の山にさしはじめけむ

中納言家成住吉にまうでて歌よみ侍りける時よ

める

大納言隆季

神代よりつもりの浦に宮居して經ぬらむ年のかぎり知らずも

大納言辭し申して出で仕へず侍りける時住吉の

千載和歌集 卷第二十

神祇歌

後一條院の御時はじめて春日社に行幸^{みゆき}ありける
に一條院の御時の例をおほしめしいださせ給う
てよませ給うける

上東門院

三笠山さして來にけりいそのかみ古きみゆきの跡をたづねて

長元八年關白左大臣歌合し侍りけるのち左方の人
よろこびに住吉に詣でて歌よみ侍りけるに左

の頭にてよみ侍りける

大納言經輔

住吉のなみも心をよせければうべぞみぎはに立ちまさりける

鳥のねも波の音にぞかよふなるおなじ御法を聞けばなりけり

天王寺の御幸の時古寺忍昔といへる心をよめる 藤原定長朝臣
世をすくふ跡は昔にかはらねどはじめたてけむ時をしぞ思ふ

天王寺にまゐりて遺身舍利を禮してよめる 天台座主明雲

常ならぬためしは夜半の煙にて消えぬ名残を見るぞうれしき

往生講式かき侍りける時教化の歌よみ侍りける 律師 永 觀

みな人をわたさむとおもふ心こそ極樂にゆくしるべなりけれ

滿三七日已乘六牙白象の心をよめる

中原有安

待ちいでていかに嬉しく思ふらむはつかあまりの山の端の月

雪朝聞法といふ心を

中原清重

朝まだき御のりの庭にふる雪はそらより花のちるかとぞ見る

山階寺の涅槃會の暮れ方に遮羅入滅の昔を思ひ

てよみ侍りける

惠章法師

望月の雲がくれけむいにしへのあはれを今日の空に知るかな

涅槃經の如於鏡中見諸色像の心をよめる

俊秀法師

清くすむ心のそこをかがみにてやがてぞうつる色もすがたも

火盛久不燃といへる心をよめる

寂然法師

烟だにしばしたなびけ烏邊山たちわかれにしかたみとも見む

阿彌陀經の心をよめる

平康賴

る

皇太后宮大夫俊

武藏野のほりかねの井もある物を嬉しくも水の近づきにけり

提婆品をよめる

顯昭法師

谷水をむすべばうつる影のみやちとせをおくる友となりけむ

勸持品をよめる

法橋泰覺

朽ちはててあやふく見えしをばただの板田の橋も今渡すなり

るイ

藤原敦仲

うらみけるけしきや空に見えつらむ嫉捨山をてらすつきかけ

つイ

神力品如日月光明能除諸幽冥の心をよめる
蓮上法師

日のひかり月の影とぞてらしけるくらき心のやみ晴れよとて

普賢イ

勸發品の心をよめる

皇太后宮大夫俊成

さらにまた花ぞちりしく鷲の山のりのむしろのくれがたの空

驚かぬわが心こそ憂かりければかなき世をばゆめと見ながら

高野にまゐりてよみ侍りける

寂蓮法師

あかつきを高野の山にまつほどや苔のしたにもありあけの月

煩惱卽菩提の心をよめる

式子内親王家中將

思ひとく心ひとつになりぬればこほりも水もへだてざりけり

觀音のちかひを思ひてよみ侍りける

前大納言時忠

たのもしき誓は春にあらねども枯れにしえだも花ぞ咲きける

法華經序品の心をよめる

藤原伊綱

春ごとになけきしものを法の庭ちるがうれじき花もありけり

受記品の心をよめる

右京大夫季能

水草みくきのみ茂き濁と見しかどもさても月すむ江にこそありけれ

法師品漸見濕土泥決定知近水の心をよみ侍りけ

法華經我等長夜修習空法の心をよめる

前中納言師仲

長き夜もむなしき物としりぬれば早く明けぬる心地こそすれ

壽量品の心をよめる

圓位法師

驚の山月を入りぬと見る人はくらきにまよふこころなりけり

瞻西上人雲居寺の極樂堂に堀河右大臣まゐりて

歌よみ侍りけるによめる

神祇伯顯仲

いさぎよき池に影こそうかびぬれ沈みやせむと思ふ我が身を

大品經の常啼菩薩の心をよめる

寂超法師

朽ちはつる袖には如何いかつつままし空しと説ける御法ならずば

維摩經十喻此身は夢の如しといへる心をよめる 藤原資隆朝臣

見るほどは夢もゆめとも知られねば現うつも今はうつつと思はじ

登蓮法師

にとどまりて侍りけるほどに冬にも成りにけれ

たりけるイ

ば雪ふりたる朝に尊圓法師のもとに遣しける 法 印 慈 圓

いとどしく昔の跡やたえなむとおもふもかなし今朝のしら雪

かへし 尊 圓 法 師

君が名ぞなほあらはれむ降る雪に昔のあとはいづもれぬとも

法華經弟子品内祕菩薩行の心をよみ侍りける 左 近 中 將 良 經

獨のみくるしき海をわたるとやそこをさとらぬ人は見るらむ

攝政前右大臣家に百首の歌よませ侍りけるとき

法文の歌の中に般若經の心をよめる 藤 原 隆 信 朝 臣

吳竹のむなしと説けることの葉は三世の佛のははとこそ聞け

おなじ百首の時色卽是空空卽是色の心をよめる 攝 政 家 丹 後

むなしきも色なるものと悟ればや春のみ空のみどりなるらむ

照らすなる三世みよの佛の朝日光^イにはふる雪よりもつみや消ゆらむ

百首の歌の中に法文の歌の中に普賢願の唯此願

王不相捨離といへる心を

式子内親王

ふるさとをひとりわかるる夕にもおくるは月の影光とぞ聞く^イとこそ聞け

百首の歌よませ侍りける時法文の歌に五智如來

をよみ侍りけるに平等性智の心をよみ侍りける 攝政前右大臣

人ごとにかはるは夢のまどひにて覺むればおなじ心なりけり

維摩經十喻此身如水中月といへる心をよめる 宮内卿永範

すめば見ゆにござればかくる定なきこの身や水にやどる月かけ

比叡の山に堂衆學徒不和の事出で來りて學徒皆

ちりける時千日の山ごもりみちなむ事もちかく

ひじりの跡をたえむことを歎きてかすかに山洞

ませ給うける

崇徳院御製

誓をばちひろの海にたとふなり露もたのまばかりに入りなむ

おなじ百首のとき華嚴經の心をよめる

前參議教長

果なくぞみよの佛と思ひけるわが身ひとつに有り知らずて

卽身成佛の心を

照る月の心の水にすみぬればやがてこの身にひかりをぞますさい

法華經信解品の心をよみ侍りける

前大僧正覺忠

歸りても入りぞわづらふ槇の戸をまどひ出でにし心ならひに

冬のころ後入道法親王高野にこもりて侍りける

時イにおくり給うける

崇徳院御製

降る雪は谷の戸ほそをうづむとも三世みよの佛の日やてらすらむ

御返事

仁和寺後入道法親王覺性

あなほの観音を見たてまつりて

みるままに涙ぞおつるかぎりなき命にかはるすがたと思へば

提婆品の心をよめる

僧都覺雅

千年までむすびし水も露ばかり我が身のためと思ひやはせし

陀羅尼品の受持法華名者福不可量何況擁護具足

受持といふわたりを誦して持經者の結縁たのも

しくや侍りけむよみ侍りける

前大僧正快修

嬉しくぞ名をたもつだにあだならぬ御法の花にみを結びける

阿彌陀の十二光佛の御名よみ侍りける中に智恵

光佛の心をよめる

源俊頼朝臣

わびびとの心のうちをよそながら知るやさとの光なるらむ

百首の歌めしける時普門品弘誓深如海の心をよ

薪つき煙もすみて逝いににけむこれやなごりと見るぞかなしき

御嶽にまうではべりける精進のほど金泥こんでいの法華

經書き奉りてかの御山にをさめたてまつらむと

てまるり侍りける時思ふ心や侍りけむ物に書き

つけおきて侍りける

藤原敦家朝臣

夢さめむその曉をまつほどのやみをも照らせのりのもし火

かくてまうで侍りて後御山にてなむ身まかりにけるその後

故郷にてこの歌は見いでて侍りけるとなむ

三十三所の觀音をがみ奉らむとて所々まるり侍

りける時美濃の谷汲たにくみにて油の出づるを見てよみ

侍りける

前大僧正覺忠

世をてらす佛のしるしありければまだ燈火ともしびも消えぬなりけり

大空の雨はわきてもそそがねどうるふ草木はおのがさまざま

菩提といふ寺に結縁の講しける時聽聞にまうで

たりけるに人のもとよりとく歸りねといひたり

ければ遣しける

清少納言

求めてもかかる蓮の露をおきてうき世にまたは歸るものかは

後冷泉院の御時皇后宮に一品經供養せられける

時壽量品のこころをよめる

藤原國房

月影の影イのつねにすむなる山の端をへだつる雲のなからましかば

寄月念極樂といへる心をよみ侍りける

堀河入道右大臣

入る月を見るとや人はおもふらむ心をかけてにしにむかへば

天王寺にまゐりて舍利ををがみ侍りてよみ侍り

ける

瞻西上人

千載和歌集 卷第十九

釋教歌

維摩經十喻の中にこの身は水の泡のごとしといへる心

をよみ侍りける

前大納言公

ここに消え彼處かしこに結ぶ水の泡の憂世に廻る身にこそありけれ

うかべる雲のごとしといへる心を

定なき身は浮雲によそへつつはてはそれらにぞなり果てぬべき

三身如來を觀する心をよませ給うける

花山院御製

世の中はみな佛なりおしなべていづれの物とわくぞはかなき

法華經藥草喻品の心をよみ侍りける

僧都源信

あづまの方にまかりけるに八橋にてよめる

道因法師

八橋のわたりに今日も止る哉ここに住むべきみかはと思へど

女をかたらひ侍りけるをいかにも有るまじき事

なり思ひ絶えねといひ侍りければよめる
安性法師

つらしとでさてはよもわれやま烏頭はしろくなる世なりとも

あみだの小呪の文字を歌のかみにおきて十首よ

み侍りけるにおくにかき侍りける
源俊賴朝臣

上^{かみ}における文字は誠のもじなれば歌もよみ路を助けざらめや

山寺に詣でたりける時貝吹けるを聞きてよめる
赤染衛門

今日もまた午^{うま}の貝こそふきつなれ未^{ひつじ}のあゆみちかづきぬらむ

題しらす
空也上人

極樂ははるけきほどと聞きしかどつとめていたる所なりけり

六波羅密寺の講の導師にて高座にのほる程に聽

聞の女房あしをつみ侍りければよめる

良喜法師

人の足をつむにて知りぬ我が方へふみ遣^たせよと思ふなるべし

山寺にこもりて侍りける時心ある文を女のしば

しば遣し侍りければよみ遣しける

空人^仁法師

おそろしや木曾のかげぢの丸木橋ふみ見る度に落ちぬべき哉

賀茂社にこもりて侍りけるに政平つねにまうで

きて歌よみ笛吹きなどしてあそびける傍なるつ

ほねにこもりたる人をも知りてそなたへも罷り

などしけるがその人出でて後久しくまうで來ざ

りければ遣しける

心覺法師

笛竹のこちくとなにに思ひけむ隣におとはせしにぞありける

野花をみて道にとどまるといへる心をよめる 僧都範立

落ちにきとかたらばかたれ女郎花こよひは花のかけに宿らむ

九月十三夜によめる 賀茂まさひら

暮の秋ことにさやけき月影は十夜にあまりてみよとなりけり

隔我聞他戀といへる心をよめる 顯昭法師

板びさしさすやかや屋の時雨こそ音し音せぬかたはわくあるいなれ

堀河院の御時百首のうち戀歌とてよめる 藤原基俊

笛竹のあな淺ましのよの中やありしやふしのかぎりなるらむ

旅戀 源俊賴朝臣

したひくる戀の奴のたびにても身のくせなれや夕とどろきは

百首歌奉りけるに戀時イの歌とてよめる 待賢門院堀河

逢ふ事のなけきの積る苦しさをおへかし人のこりはつるまで

ともしをよめる

橘俊綱朝臣

照射^{ごもし}して箱根の山に明けにけりふたよりみより逢ふとせしまに

みな月のつごもりがたはたおりの鳴くをききて

よめる

江侍從

夏の中ははた隠れてもあらずしておりたちにはける蟲の聲かな

題しらず

輔仁親王

秋來れば秋のけしきも見えけるを時ならぬ身と何にいふらむ

萩の露の玉と見ゆとて折りけれども露もなかり

ければよめる

藤原爲頼朝臣

朝露を日たけて見ればあともなし萩の上葉^{うらい}にものやとはまし

崇徳院に百首歌奉^{の御時イ}りける時秋の歌とてよめる
花園左大臣家小大進

つばな生ひし小野の芝生の朝露をぬき散しける玉かとぞみる

稻荷山しるしの杉のとしふりてみつのみやしる神さびにけり

かさぎのいはや

登蓮法師

名にし負はば常に萬木ゆるぎの森にしもいかでかさぎのいはやすく寐ねる

誹諧歌

花のもとにより臥してよみ侍りける

道命法師

あやしくも花のあたりにふせる哉をらば咎むる人やあるとて

卯花をよめる

源俊賴朝臣

うの花よいでことごとしかけ島の波もさこそは岩をこえしか

五月五日菖蒲をよめる

道因法師

けふかくる袂に根ざせ菖蒲草うきは我が身にありと知らずや

かるかや

源俊頼朝臣

我が駒をしばしとかるかやま城のこはたの里にありと答へよ

まま木のやたて

御倉やままきのやたてて住む民は年をつむ共くちじとぞ思ふ

からかみのかたき

よと共に心をかけて頼めどもわれからかみのかたきしるしか

とりははき

刑部卿頼輔母

秋の野に誰を誘はむ行き返りひとりははぎを見るかひもなし

百首うたたてまつりけるときのかくし題のうた

きりぎりす

待賢門院堀河

秋はきりきりすぎぬれば雪降りてはるる間もなき深山邊の里

みづのみ

僧都 有慶

なにとなくものぞ悲しきあき風の身にしむ夜半の旅の寐覺は

物 名

さみだれをよめる

和 泉 式 部

夜の程にかりそめ人やきたりけむ淀の水薦みこものけさみだれたる

すたれかは

中 納 言 定 頼

跡たえてとふべき人も思ほえずたれかは今朝の雪をわくらむ

かきのから

大 貳 三 位

さかき葉はもみぢもせじを神がきのから紅に見えわたるかな

ふりつづみ

二條太皇太后宮肥後

池もふりつづみ崩れて水もなしうべ勝間田にとりも居のイざらむ

へだてたる かすみもはれて むかへるがごと

百首歌たてまつりける時旅の心をよめる 左京大夫顯輔

あづまぢの 野嶋が崎の はまかぜに

わがひも結ひし いもがかほのみ おもかけに見ゆ

折句歌

二條院の御時こいたじきといふ五字を句の上に

おきて旅の心を 源雅重朝臣

駒なべていざ見にゆかむ龍田川しら波よするきしのあたりを

なもあみだの五字を句のかみにおきて旅の心を

よめる 仁上法師

ぎりゝ
かくれなく　ながれての名を　をしどりの　憂きためしにや
ならむとすらむ

旋頭歌

しもつふさのかみにまかれりけるを任はてて上
りたりける頃みなものとしよりの朝臣につか

はしける

源　仲　正

あづまぢの　やへの霞を　わけきても

君にあはねば　なほへだてたる　ここちこそすれ

かへし

源俊頼朝臣

かきたえし　ままの繼橋　ふみ見れば

とき知らぬ　たにのうもれ木　朽ちはてて　むかしのはるの
こひしさに　なにのあやめも　わかずのみ　かはらぬつきの
かけ見ても　しぐれに濡るる　袖のうらに　しほたれまさる
あまごろも　あはれをかけて　訪ふひと　なみにただよふ
つりぶねの　漕ぎはなれにし　世なれども　きみにこころを
かけしより　しけきうれへも　わすれぐさ　わすれがほにて
すみの江の　まつのちとせの　はるばると　こすゑはるかに
さかゆべき　ときはのかけを　たのむにも　なぐさのはまの
なぐさみて　ふるのやしろの　そのかみに　いろふかからで
わすれにし　もみぢのした葉　のこるやと　おいそのもりに
たづねれどばい　いまはあらしに　たぐひつつ　しもかれがれに
おとろへて　かきあつめたる　みづぐきに　あさきこころの

しぎしまや やまとのうたの つたはりを 聞けばはるかに
ひさかたの あまつかみ代に はじまりて 三十文字あまり
ひと文字は いづものみやの やくもより おこりけりとぞ
しるすなる それよりのちは ももくさの この葉しけく
ちりぢりに かぜにつけつつ きこゆれど ちかきためしに
ほりかはの ながれを汲みて ささなみの より來るひとに
あつらへて つたなきことは はま千どり あとをすゑまで
とどめじと おもひながらも 津のくにの なにはのうらの
なにとなく ふねのさすがに このことを しのびならひし
なごりにて 世のひとぎきは はづかしの もりもやせむと
おもへども こころにもあらず かきつらねつる

おなじ百首奉りける時のなが歌

待賢門院堀河

うせはてて あるにもあらぬ 世のなかに またなにごとを
みくま野の うらのはま木綿^な かさねつつ うきに堪へたる
ためしには なる尾のまつ^{しらい}の つれづれと いたづらごとを
かきつめて あはれ知られむ 行くすゑの ひとのためには
おのづから しのばれぬべき 身なれども はかなきことも
くもとの あやにかなはぬ くせなれば これもさこそは
實なしぐり くち葉がしたに うづもれめ それにつけても
津のくにの いく田のもりの いくたびか 海士のたくなは
くりかへし ころに添はぬ 身をうらむらむ

反歌

世の中は憂き身にそへる影なれや思ひすつれど離れざりけり

百首歌めしける時よませ給うける

崇徳院御製

立ちまじり	うつふしぞめの	あさごろも	はなのたもとに
ぬぎかへて	のちの世をだに	と思へども	おもふひとびと
ほだしにて	行くべきかたも	まどはれぬ	かかるうき身の
つれもなく <small>なくもイ</small>	經にけるとしを	かぞふれば	いつつのとをに
なりにけり	いま行くすゑは	いなづまの	ひかりの間にも
さだめなし	たとへばひとり	ながらへて	過ぎにしばかり
すぐすとも	ゆめにゆめ見る	こちして	ひまゆくこまに
ことならじ	さらにもいはじ	ふゆがれの	尾ばながすゑの
つゆなれば	あらしをだにも	待たずして	もとのしづくと
なりはてむ	ほどをばいつと	知りてかは	くれにとだにも
しづむべき <small>たのイ</small>	かくのみつねに	あらそひて	なほふるさとに
すみの江の	しほにただよふ	うつせがひ	うつしどころも

あふけども　むなしきそらは　みどりにて　言ふこともなき
かなしさに　音をのみなけば　からころも　おさふるそでも
朽ちはてぬ　なにごとにかは　あはれとも　おもはむひとに
あふみなる　うち出のはまの　うちいでて　言ふともたれか
さがにの　いかさまにても　かきつがむ　ことをのきばに
吹くかぜの　はけしきころと　知りながら　うはのそらにも
をしふべき　あづさのそまに　みや木ひき　みかきがはらに
せりつみし　むかしをよそに　聞きしかど　我が身のうへに
なりはてぬ　さすがに御代の　はじめより　くものうへには
かよへども　なにはのことも　ひさかたの　つきのかつらし
折られねば　うけらがはなの　咲きながら　ひらけぬことの
いぶせさに　よものやま邊に　あくがれて　このもかのもに

千載和歌集 卷第十八

雜歌下

短歌

堀河院の御時百首歌奉りける時述懷の歌によみ

て奉りける

源俊賴朝臣

もがみがは 瀬々のいはかど わきかへり おもふこころは
おほ^けがれど 行くかたもなく せかれつつ そのもくづと
なることは 藻にすむむしの われからと おもひ知らずは
なけれども いはではえこそ なぎさなる かたわれぶねの
うづもれて 引くひともなき なげきすと なみの起ち居に

つかはせと仰せ出されければよみて遣しける 藤原定長朝臣

あしたづの霞^{はい}をわけて歸るなりまよひし雲路^{けふ}いまやはるらむ

この道の御あはれびむかしの聖代にも異ならずとなむとき
の人申し侍りける

嬉しさをかへすがへすもつつむべき苔の袂はしの狭くもあるかな

還昇くわんしょうして侍りける人のもとにつかはし侍りける 藤原季經朝臣

うれしさをよその袖までつつむかなたち歸りぬるあまの羽衣

今上の御時五節のほど侍従定家あやまちある様ころい

にきこしめす事ありて殿上除かれて侍りけるそ

の年も暮にける又の年のやよひのついたち頃に

院におほんけしき給ふべきよし左少辨定長が許

に申し侍りけるにそへて侍りける

入道皇太后宮大夫俊成

あしたづの雲路まよひし年くれて霞をさへやへだて果つべき

このよしを奏し申し侍りければいとかしこく哀

がらせおましまして今ははや還昇仰せ下すべき

よし御けしきありて心はるるよしのかへし仰せ

見るゆめの過ぎにしかたをさそひきて覺むる枕も昔なりせば

太宰大貳重家入道身まかりて後山寺懷舊といへ

る心をよめる

藤原有家朝臣

初瀬山いりあひの鐘を聞くたびにむかしの遠くなるぞ悲しき

春の頃久我にまかれりけるついでに父のおとど

の墓所のあたりの花つイちりけるを見てむかし花惜

み侍りけるころざしなど思ひ出でてよみ侍り

ける

權中納言通親

ちりつもの苦のしたにも櫻花をしむころやなほのころらむ

かしらおろし侍りて後前中納言雅賴まだ小男に

侍りける時はじめて昇殿申させ侍りけるを許さ

れて侍りければよみて奏せさせ侍りける

入道前中納言雅兼

源清雅九月ばかりにさまかへて山寺に侍りける
を人のとひて侍りける返事せよと申し侍りけれ

ばよみて遣しける

源 通 清

思ひやれならはぬ山にすみぞめのそでに露おく秋のけしきを

題しらす

圓 位 法 師

あかつきの嵐にたぐふ鐘の音をこころの底にこたへてぞ聞く
いづくにか身を隠さまし厭ひ出でて憂世に深き山なかりせば

述懷百首の歌よみ侍りける時鹿の歌とてよめる 皇太后宮大夫俊成
世の中よみちこそなけれ思ひ入る山の奥にもかぞ鳴くなる

秋の頃山寺にてよみ侍りける

藤 原 良 清

思ふことありあけ方の鹿の音はなほ山ふかくいへるせよとや

題しらす

藤 原 家 隆

大井河となせの瀧に身をなけてはやくと人にいはせてしがな

病ありて東山なる所に侍りけるをよろしくなり

て後いかかと人のとひて侍りける返事によめる 大江 公景

烏邊山君たづぬとも朽ちはてて苔のしたにはこたへざらまし

題しらす

法眼兼覺

分けわびて厭ひし庭の蓬生も枯れぬと思へばあはれなりけり

賀茂社の歌合に述懷の歌とてよめる 寂蓮法師

世の中のうきは今こそ嬉しけれ思ひしらずばいとほましやは

山寺にこもりる侍りけるに房にとどまりたる人

のいつか出でむすると言ひて侍りければつかは

しける 覺俊上人

世をそむき草の庵にすみ染のころものいろはかへるものかは

寂蓮法師

寂しさにうき世をかへて忍ばずばひとり聞くべき松の風かは

殷富門院大輔

つくづくとおもへばかなし曉の寐覺も夢を見るにぞありける

西住法師

まどろみてさても止みなば如何いかせむ寐覺いふぞあらぬ命なりける

六條院宣旨

先だつを見るは猶こそ悲しけれ後おくれはつべきこの世ならねば

さまかへむと思ひたつ人のものあはれなる夕暮

に箏のことひくを聞きて

二條太皇太后宮式部

いまはとてかきなす琴のはての緒の心細くもなりまさるかな

題しらず
空人に法師

憂世をば捨てて入りにし山なれど君がとふにや出でむとすらむ

閑居水聲といへる心をよみ侍りける

仁和寺法親王守覺

岩そそぐ水よりほかにおとせねば心ひとつにすましてぞ聞く

高野に参りて侍りけるに奥の院に靜蓮法師が庵

室にまかりたりけるに哀に見えければかへりて

遣しける

權大納言實國

たれもみな露の身ぞかしと思ふにも心とまりしくさの庵かな

秋の頃山に登りて横川の安樂の五僧の許にまか

れりけるに正法房の障子に書き付け侍りける

藤原公衡朝臣

なほざりにかへるたもとはかはらねど心ばかりぞ墨染はイのそで

題しらす

法印慈圓

おほけなくうき世の民におほふかなわがたつ袖にすみ染の袖

厭ひても猶忍ばるる我が身哉ふたたび來べきこの世ならねば

上西門院兵衛

これや夢いづれか現^{うつ}はかなさを思ひわかでも過ぎぬべきかな

花園左大臣家小大進

明日しらぬみ室の峯のねなし草何あだし世に生ひはじめけむ

前大僧正覺忠御嶽より大峯にまかり入りて神仙

といふ所にて金泥法華經書き奉りて埋み侍ると

て五十日ばかりとどまりて侍りけるに房覺熊野

のかたよりまかり入りけるにつけて言ひおくり

ける

前大納言成道_{通¹}

をしからぬ命ぞさらにをしまるる君がみやこに歸り來るまで

かへし

前大僧正覺忠

夢とのみこの世の事の見ゆる哉さむべき程はいつとなけれど

わづらふ事ありて雲林院なる所にまかりけるに

人のとぶらへりければ遣しける

良暹法師

この世をばくもの林にかどでして煙とならむゆふべをぞ待つ

題しらす

読人しらす

憂き事のまどろむほどは忘られてさむれば夢の心地こそすれ

紫式部

何處とも身をやる方のしられねばうしと見つつも永らふる哉

述懷百首の歌の中に夢の歌とてよめる

皇太后宮大夫俊成

うき夢はなごりまでこそ悲しけれこの世の後もなほや歎かむ

百首の歌奉りける時無常の心をよめる

藤原季通朝臣

うつつをも現といかが定むべき夢にも夢を見ずばこそあらめ

この瀬にもしづむときけば涙川ながれしよりも濡るる袖かな

世をそむかむと思ひたちける頃よめる

空 人仁イ 法師

斯ばかり憂身なれ共すて果てむと思ふになれば悲しかりけり

心の外なることにて知らぬ國にまかりけるを事

なほりて京にのほりて後日吉の社にまゐりてよ

み侍りける

平 康 頼

思ひきや志賀の浦波立ち返りまたあふみともならむものとは

述懐の歌よみ侍りける時

登 蓮 法師

かくばかり憂き世の中を忍びても待つべき事の末にあるかは

修行にまかりありきける時よめる

覺 禪 法師

思ひかねあくがれ出でてゆく道はあゆく草葉に露ぞこほるる

世のつねなきことを思ひてよめる

權 僧 正 永 縁

攝政家丹後

うしとても厭ひもはてぬ世の中をなかなか何に思ひしりけむ

題しらす

法印倫圓

のほるべきみちにぞまよふ位山これより奥のしるべなければ

十月に重服になりて侍りける又の年の春傍官ど

も加階し侍りけるを聞きてよめる

中納言長方

もろびとの花さく春をよそに見てなほしぐるるは椎しばの袖

題しらす

藤原顯

方賢イ

憂世にもうれしき世にも先にたつ涙はおなじなみだなりけり

遠き國に侍りける時おなじさまなる者どもこと

なほりのほると聞えけるととき其のうちに漏れに

けりと聞きて都の人のもとに遣しける

前右兵衛督惟方

思ひ出のあらば心もとまりなむいとひやすきは憂世なりけり身イ

大峯とほり侍りける時笙の岩屋といふ宿所イにてよ

み侍りける

前大僧正覺忠

やどりする岩屋のこの苔筵いく夜になりぬ寐いイこそやられれイね

述懷の歌とてよみ侍りける

大納言宗家

身の程をしらずと人や思ふらむかくうきながら年をへぬれば

右近中將忠良

そむかばや誠の道はしらずれどイとも憂世をいとふしるしばかりに

一條太皇太后宮別當

杣川そまがはにおろす筏のうきながら過ぎゆくものはわが身なりけり

百首歌の中に述懷歌とてよめる

藤原定家

おのづからあればある世に永らへて惜むと人に見えぬべき哉

かへし

聰子 内親王

山里のさびしきやどの住家にもかけひの水のとくるをぞまつ

大納言實家のもとに三十六人集をかりて返しつ

かはしけるなかに故大炊御門の右大臣の書きて

侍りけるさうしに書きておしつけられて侍りけ

る

太皇 太后宮

この本にかきあつめたる言の葉をわかれし秋の形見とぞ見る

かへし

權大納言實家

このもとにかく言の葉を見る度にたのみし蔭のなきぞ悲しき

高野にまうで侍りける時山路にてよみ侍りける 仁和寺法親王守覺

跡たえて世をのがるべき道なれや岩さへ苔のころもきにけり

述懷の心をよみ侍りける

かへし

入道大納言公任

おなじとしちぎりしあれば君がきる法の衣をたちおくれめや

おなじとしの人になむ侍りける

三條院かくれさせ給うて後かの院のまへを過ぎ
けるに松の梢はおなじさまにてついがき所々く
づれたるにむぐらの茂りたるを見て其の内に江
侍従が侍りけるに遣しける

辨のめのと

むかし見し松の梢はそれながらむぐらの門をさしてけるかな

一品聰子内親王仁和寺に住みはべりける冬の頃
かけひのこほりを三のみこのもとにおくられて
侍りければ遣しける

輔仁のみこ

山里のかけひの水のこほれるは音きくよりもさびしかりけり

常よりも世の中はかなく聞えける頃さがみが許
につかはしける

藤原兼房朝臣

哀とも誰かは我を思ひ出でむある世にだにも訪ふひともなし

前大納言公任ながたにに住み侍りける頃風はけ

しかりける夜の朝つかはしける

中納言定頼

ふるさとの板間の風にねざめして谷のあらしを思ひこそやれ

かへし

前大納言公任

谷風の身にしむごとに故郷のこのもとをこそおもひやりつれ

前大納言公任入道しはべりてながたにに侍りけ

るとき僧の装束法服などおくとてつかはしけ

る

法性寺入道前太政大臣

いにしへは思ひかけきや取りかはしかく著むものと法の衣を

山里の柴のイをりをりに立つけぶり人まれなりとそらに知るかな

九月ながつきのつごもりがたにわづらふ事ありてたのも

しけなく覺えければ久しくとはぬ人につかはし

ける

藤原基俊

秋はつる枯野の蟲のこゑたえば有りやなしやを人のとへかし

女のもとにまかりて月のあかく侍りけるに空の

けしき物心細く侍りければよみ侍りける

藤原道信朝臣

この世には住むべき程やつきぬらむ世の常ならず物の悲しき

題しらす

和泉式部

命あらばいか様にせむ世をしらぬ蟲だに秋はなきにこそなけ

紫式部

かずならで心に身をばまかさねど身にしたがふは心なりけり涙イ

攝政右大臣の時家の歌合に述懷の歌とてよめる 源 師 光

今はただいけらぬ物に身をなして生れぬ後の世にもふるかな

つかさめしに伊勢になりけるを辭し申しける時

大僧正行尊がもとに遣しける 源 俊 重

いかにせむいせの濱萩みがくれておもはぬ磯の波にくちなば

たなかみの山里に住み侍りける頃風はけしかり

ける夜よめる 源 俊 頼 朝 臣

槇の戸をみ山おろしにたたかれて訪ふにつけてもぬるる袖哉

山田の庵にけぶりの立ちけるを見てよめる 橘 盛 長

小山田の庵にたく火のありなしに立つ煙もやくもとなるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき山家の心を

よめる

一二條太皇太后宮肥後

右大將實房中將に侍りける時十五イ十首歌よませ侍り

けるに述懐歌とてよめる

中原師尙

數ならぬ身をうき雲の晴れぬかなさすがに家の風はふけども

學文料申し侍りけるをたまはらず侍りける時人

のとぶらへるかへり事によみて遣しける
大江匡範

おもひやれとよにあまれる燈火のかかけかねたる心ほそさを

題しらず

藤原公重朝臣

世のうさを思ひ忍ぶと人も見よかくてふるやの軒のけしきを

藤原是忠

引く人もなくて捨てつる梓弓こころづよきもかひなかりけり

一條院内侍參河

いかで我がひまゆく駒をひきとめて昔にかへる道をたづねむ

春日山まつにたのみをかくるかな藤の末葉のかすならねども

歎く事侍りける頃よみ侍りける

前左衛門督公光

物思ふ心や身にもさきだちてうき世を出でむしるべなるべき

らむい

述懐の歌とてよめる

俊恵法師

數ならで年へぬる身は今さらに世をうしとだに思はざりけり

道因法師

いつとても身のうき事はかはらねど昔は老をなけきやはせし

述懐の歌よみ侍りける時昔白河院につかうまつ

りける事を思ひ出でてよめる

藤原家基

いにしへも底にしづみし身なれどもなほこひしきは白河の水

廣田社の歌合によめる

藤原盛方朝臣

哀れてふ人もなき身をうしとても我さへいかが厭ひ果つべき

歌とてよめる

藤原定家

いづくにて風をも世をもうらみまし吉野の奥も花は散りけり

花の歌とてよめる

源季廣

深く思ふ事し叶はばこむ世にも花見る身とやならむとすらむ

家に櫻をうゑてよみ侍りける

源師教朝臣

老が世に宿に櫻をうつし植ゑてなほこころみに花をまつかな

高倉院春宮の御時權亮に侍りけるを參議にてほ

どへ侍りける頃賀茂社の歌合とて人々よみ侍り

けるに述懷の歌とてよみ侍りける

權中納言實守

くらゐやま花をまつこそ久しければるの都にとしは經しかど

崇徳院の御時十五首歌奉りける時述懷の心をよ

み侍りける

右兵衛督公行

題しらす

世の中を常なきものと思はずばいかでか花のちるに堪へまし

都うつりなど聞えける又の年のはる白河の花ざ

かりに女の手にて花の下におとしおきて侍りけ

る
讀人しらす

かくばかり憂世のすゑにいかにして春は櫻のなほにほふらむ

花ざかりに法成寺にまゐりて金堂のまへのはな

ちるを見てよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

ふりにけりむかしを知らば櫻花ちりの末をもあはれとは見よ

依花待客といへる心をよめる

源定宗朝臣

やまざくら花をあるじと思はずば人をまつべきしばの庵かは

圓位法師がすすめ侍りける百首の歌の中に花の

除目ぢもくの頃つかさ給はらで歎き侍りける時範永が

もとに遣しける

大江公資

年ごとに涙の川に浮べども身はなけられぬものにぞありける

寄霞述懐の心をよめる

源仲正

思ふことなくてや春をすごさましうき世へだつる霞なりせば

世をのがれて後白河の花を見てよめる

圓位法師

散るを見て歸るころや櫻花むかしにかはるしるしなるらむ

花の歌あまたよみ侍りける時

花にそむ心のいかで残りけむ捨て果ててきとおもふわが身に

ほとけには櫻の花をたてまつれわがのちの世を人とぶらはば

世をそむきて又の年の春花を見てよめる

寂然法師

この春ぞおもひはかへす櫻花山櫻むなしきいろに染めしころを

今はとて入りなむ後ぞおもほゆる山路をふかみ訪ふ人もなし

春の頃あはたにまかりてよめる

うき世をば峯の霞やへだつらむなほ山ざとは住みよかりけり

歎く事侍りける頃よめる

和泉式部

花さかぬ谷のそこにも住まなくにふかくも物をおもふ春かな

前大納言公任ながたに長谷といふ所にこもりるける時つ

かはしける

法性寺入道前太政大臣

谷の戸をとぢやはてつる鶯のまつにおとせではるの暮れぬる

山寺にこもりて侍りけるころ雨降りて心細かり

けるに人のまうできて歌などよみけるついでに

よめる

道命法師

かくてだになほ哀なるおく山に君こぬよよをおもひ知らなむ

かしらおろして後東山の花見ありき侍りけるに
圓城寺の花おもしろかりけるを見てよみ侍りけ
る

前中納言基長

いにしへにかはらざりけり山櫻はなは我をばいが見るらむ
遁世の後はなの歌とてよめる
皇太后宮大夫俊成

雲のうへの春こそさらに忘れね花は數にもおもひいでじを

石山にたびたび詣で給ひけるをはてのたび關の

清水のもとに御車とどめてこのたびばかりやと

心ほそく御覽じてよませ給うける
東 三 條 院

あまたたび行きあふ坂の關水に今はかぎりのかけぞかなしき

山にのほりてしばし行ひなどし侍りける時よみ

侍りける
前大納言公任

千載和歌集 卷第十七

雜歌中

五十御賀過ぎて又の年の春鳥羽殿の櫻のさかり

に御前の花を御覽じてよませ給うける

鳥羽院御製

心あらばにほひを添へよ櫻花のちのはるをばたれか見るべき^{知イ}

落花の心をよみ侍りける

仁和寺後入道法親王覺性

はかなさを恨みもはてじ櫻花うき世はたれもこころならねば

僧都頼實身まかりて後またの年の春禪定院の花

さかりなるを見てよみ侍りける

僧正尋範

宿もやど花もむかしに匂へどもぬしなき色はさびしかりけり

ゆく年は波とともにやかへるらむ面がはりせぬわかの浦かな

廣田社の歌合とて人々よみ侍りける時海上眺望

といへる心をよみ侍りける

權大納言實家

今日こそは都のかたの山の端も見えずなるをの沖に出でけれ

權中納言實宗

播磨がた須磨のはれまに見渡せば波は雲井の物にぞありける

右衛門督賴實

はるばるとおまへの沖をみわたせば雲井にまがふあまの釣舟

眺望の心をよめる
圓 玄 法師

なにはがた潮路はるかに見わたせば霞にうかぶ沖のつりぶね

藤 原 重 綱

春がすみ繪島が崎をこめつれば波のかくとも見えぬ今朝かな

和歌浦をよみ侍りける

祝部宿禰成仲

むろのやしまをよめる

藤原顯方

たえずたつ室の八島の煙かな如何につきせぬおもひなるらむ

堀河院の御時百首歌奉りける時橋の歌とてよみ

侍りける

大納言師頼

かつらぎや渡しも果てぬものゆゑにくめの岩橋苔生ひにけり

おなじ御時うへのをのことも題をさぐりて歌つ

かうまつりけるに釣舟をとりてよみ侍りける 權中納言俊忠

いはい
いかりおろす方こそなけれ伊勢の海の汐瀬にかかる蟹あまの釣舟

百首の歌の中に松をよめる 修理大夫顯季

玉藻かるいらこがさきの岩根松いくよまでにか年のへぬらむ

夏草をよめる

源俊頼朝臣

汐みてば野島がさきの小百合さゆり葉に波こす風の吹かぬ日ぞなき

瀧の音はたえて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ

屏風に瀧落ちたる所をよめる

藤原長能

ぬけばちるぬかねばみだる足引の山よりおつる瀧のしらたま

京極前太政大臣布引の瀧見侍りける時よみ侍り

ける
六條右大臣

水のいろのただ白雲と見ゆるかな誰さらしけむぬのびきの瀧

龍門寺にまうでて仙室に書きつけ侍りける
能因法師

あしたづにのりて通へる宿なれば跡だに人は見えぬなりけり

おなじ龍門の心をよめる
藤原清輔朝臣

やまびとの昔のあとを來て見ればむなしき床をはらふたに風

布引瀧をよめる
藤原良清

音にのみ聞きしはことのかずならで名よりもたかき布引の瀧

何事もかはり行くめる世の中にむかしながらの橋ばしらかな

おなじ所にて

道因法師

今日見ればながらの橋は跡もなし昔ありきと聞きわたれども

津守國基身まかりてのち住吉にもすまずなりに

けるを有基に具してあからさまに下りてはべり

けるに人の心もかはりて見えはべりければ松の

もとを削りて書きつけ侍りける

津守景基

人ごころ有らずなれども住吉の松のけしきはかはらざりけり

吉野の瀧をよめる

中納言經忠

白雲にまがひやせまし吉野やま落ちくる瀧のおとせざりイなかりせば

さがの大覺寺にまかりてこれかれ歌よみ侍りけ

るによみ侍りける

前大納言公任

漏れにければ遣しける

契りおきしさせもが露を命にてあはれことしの秋もいぬめり

運を恥づる百首の歌よみ奉りける中によめる
源俊頼朝臣

世の中のありしにも有らずなりゆけば涙さへこそ色變りけれ

述懷の心をよめる
覺審法師

すぎ來にしよそぢの春の夢の世は憂うれより外のおもひ出ぞなき

經因法師

果はかなしや憂身ながらも過ぎぬべき此世をさへも忍びかぬらむ

天王寺にまうでて侍りけるに長柄にてここなむ

橋のあとと申すを聞きてよみ侍りける
源俊頼朝臣

ゆく末を思へばかなし津の國のながらの橋も名はのこりけり

長柄の橋のわたりにて
道命法師

この世にて六十むそぢはなれぬ秋の月しでの山路にイもおもがはりすな

月の歌とてよめる

圓位法師

來む世には心の中にあらはさむ飽かでやみぬる月のひかりを

二條院の御時四代まで侍臣なる事をおもひてよ

み侍りける

皇太后宮大夫俊成

いかなれば沈みながらに年をへて代々の雲井の月をみるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時述懷の心をよ

める

藤原基俊

唐國にしづみし人もわが如くみよまで遇はぬなけきをばせし

僧都光覺維摩會の講師の請を申しけるをたびた

び漏れにければ法性寺入道前太政大臣に恨み申

しけるをしめぢがはらと侍りけれど又その年も

もろともに秋をやしのぶ霜枯のをぎの上葉をてらすつきかけ

月照山水といへる心を

法眼長眞

ますけ生ふる山下水にやどる夜は月さへ草のいほりをぞさす

山の端の月といへる心をよめる

藤原爲忠

ふかき夜の露ふきむすぶこがらしに空さえほる山の端の月

荒屋月といへる心を

覺延法師

山風にまやのあしづき荒れにけり枕にやどる夜半のつきかけ

題しらす

法印慈圓

山ふかみ誰またかか^{あとい}るすまひして槇の葉わくる月を見るらむ

月影のいりぬるのちに思ふかなまよはむやみの行くすゑの空

攝政前右大臣の家に百首の歌よませ侍りける時

月の歌の中によめる

俊恵法師

住みなれし宿をば出でて西へゆく月をしたひて山にこそいれ

故郷月をよめる

俊恵法師

ふるさとの板井のしみづ水草みくさゐて月さへすますなりにける哉

水上月といへる心を

藤原家基

さもこそは影とどむべきよならねど跡なき水にやどる月かな

賀茂社後番歌合に月の歌とてよめる

藤原親盛

何となくながむる袖のかわかぬは月のかつらの露やおくらむ

山家曉霰といへる心をよめる

大江公景

ましばふくやどの霰に夢さめてありあけがたの月を見るかな

山家月をよめる

靜蓮法師

あしびきの山の端ちかくすむとても待たでやは見る有明の月

月照寒草といへる心をよめる

紀康宗

題しらす

藤原家隆

山ふかき松のあらしを身にしめて誰かねざめに月をみるらむ

八條院六條

まつ程もいとどこころぞなくさまぬ姨捨山のありあけのつき

法師實修

世をいとふ心は月をしたへばや山の端にのみおもひ入るらむ

藤原隆親

寂しさも月見るほどはなくさみぬ入りなむ後をとふ人もがな

寒夜月といへる心をよみ侍りける
圓位法師

霜さゆる庭の木の葉をふみ分けて月は見るやととふ人もがな

世をのがれて後西山にまかりこもるとて人につ

かはしける

平實重

しける

近衛院御製

うき雲のかかるほどだに有るものをかくれな果てそ有明の月

箕面の山寺に日頃こもりて出で侍りけるあかつ

き月のおもしろく侍りければよめる

仁和寺後入道法親王覺性

木の間もる有明の月の送らずばひとりや山のみねを出でまし

月の歌とてよみ侍りける

道性法親王

琴の音を雪にしらぶときこゆなり月さゆる夜の峰のまつかぜ

權中納言長方

あかで入らむ名残をいと思へとや傾くままにすめる月かな

殷富門院にて人々百首の歌よみ侍りける時月の

歌とてよめる

藤原定家

いかにせむさらで憂世はなぐさますたのみし月も涙おちけり

都をはなれて遠くまかる事侍りける時月を見て

よみ侍りける

法印靜賢

あかなくに又もこの世にめぐりこば面がはりすな山の端の月

月の歌あまたよみ侍りける時いさよひの月の心

をよめる

源仲正

果なくも我がよのふけを知らずしていさよふ月を待ち渡る哉

見月戀故人といへる心をよめる

源仲綱

さきだちし人はやみにや迷ふらむいつまで我も月をながめむ

百首の歌奉りける時月の歌とてよめる

待賢門院堀河

残なく我がよふけぬと思ふにもかたぶく月にすむころかな

従一位藤原宗子やまひ重くなりて久しくまゐり

侍らで心細きよしなど奏せさせて侍りけるに遣

さよ千鳥ふけひの浦におとづれて繪島がいそに月かたぶきぬ

俊惠法師

いかだおろす清瀧川にすむ月は棹にさはらぬこほりなりけり

賀茂成保

あまの原すめるけしきは長閑にてはやくも月の西へゆくかな

顯昭法師

寂しさにあはれもいとどまさりけり獨ぞ月は見るべかりける

藤原清輔朝臣

今よりは更けゆくまでに月は見じそのこととなく涙落ちけり

年頃修行にまかりありきけるが歸りまうで來て

月前述懷といへる心をよめる

登蓮法師

もろともに見し人いかなりねらむにけむ月は昔にかはらざりけり

相模

ながめつつ昔も月は見しものをかくやは袖のひまなかるべき

和泉式部

ひとりのみ哀なるかとわれならぬ人にこよひの月を見せばや

思ふこと侍りける頃月のいみじくあかく侍りけ

るによみ侍りける

久我内大臣

かくばかりうき世の中の思ひ出に見よともすめる夜半の月哉

山家月といへる心をよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

住みわびて身を隠すべき山里にあまりくまなき夜半の月かな

百首の歌奉りける時月の歌とてよめる
前参議親隆

播磨がた須磨の月よみそらさえて繪島がさきに雪ふりにけり

月の歌十首よみ侍りける時

藤原家基

三條の女御琮子遁世の後あふぎがみに月いだし

てつかはし侍るとて添へて侍りける

權中納言實綱

秋をへてひかりを増せと思ひしにおもはぬ月の影にもある哉

月爲友といへる心いふ事をイを

仁和寺後入道法親王

とふ人に思ひよそへてみる月のくもるはかへる心地こそすれ

月の歌あまたよませ侍りける時よみ侍りける 法性寺入道前太政大臣

ささなみやくにつみ神のうらさびてふるき都に月ひとりすむ

天の原そらく月はひとつにてやどらぬ水のいかでなからむ

題しらず

中務卿具平親王

ひとりゐて月をながむる秋の夜はなに事をかは思ひのこさむ

赤染衛門

物思はぬ人もや今宵ながむらむ寐られぬままに月を見るかな

狩衣をきせて侍りけるををかしく見えければ又
の日範綱がもとにさし置かせける

左京大輔顯輔

昨日見ししのぶもぢずり誰ならむ心のほどぞかぎり知られぬ

上東門院に侍りけるを里に出でたりける頃女房
のせうそこのついでに箏つたへにまうでむとい

ひて侍りければ遣しける

紫式部

露しけきよもぎがもとの蟲の音をおほろけにてや人の尋ねむ

二條院の御時とし頃おほうちまもる事をうけた

まはりて御垣のうちに侍りながら昇殿はゆるさ

れざりければ行幸ありける夜月のあかりける

に女房のもとに申し侍りける

從三位賴政

ひと知れぬ大内山のやまもりは木がくれてのみ月を見るかな

何事かなど侍りけるかへり事につかはされ侍りける

式子内親王

御手洗みたらしやかけたえはつる心地して志賀の波路に袖ぞぬれこし

右兵衛督に侍りける時中院右大臣中納言に侍りけるに弓をかりおきて侍りけるをつかさ辭し申してこもり侍りける時かの弓をかへしおくる

とて添へてつかはし侍りける

大宮前太政大臣

八年かみまで手こならしたりし梓弓かへるをみるに音ぞなかれける

かへし

中院右大臣

なにかそれおもひ捨つべき梓弓また引きかへす時もありなむ

右大將兼長春日の祭の上卿に立ち侍りけるとも

に藤原範綱が子清綱が六位に侍りけるに忍摺しのぶずりの

つかはしける

藤原實方朝臣

ちはやぶるいつきの宮の旅寐にはあふひぞくさの枕なりける

彈正尹爲尊のみこかくれ侍りて後太宰帥敦道の

みこ花たち花をつかはしていかが見るといひて

侍りければ遣しける

和泉式部

かをる香によそふるよりは郭公きかばやおなじ聲やしたると

上西門院賀茂のいつきと申しけるをかはらせ給

ひて唐崎にはらへし給ひける御ともにて女房の

もとにつかはしける

八條前太政大臣

昨日までみたらし川にせしみそぎ志賀の浦波たちぞかはれる

賀茂のいつきかはり給うてのち唐崎のはらへ侍

りけるまたの日雙林寺のみこのもとより昨日は

いかにして過ぎにし方を過しけむ暮しわぶてふ昨日今日かな

御かへし

清少納言

雲の上もくらしかねける春の日を所がらともながめつるかな

いぶかしく覺されける人のむすめの女房のつほ

ねにゆかりありて忍びて方違かたがへにまるれりけるを

曉とく出でにければ遣しける

選子内親王

あひ見むと思ひし事をたがふればつらき方にもさだめつる哉

選子内親王に侍りける右近後の齋院にまるりて

御禊のいだし車にのると聞きて又の日つかはし

ける

齋院中將

みそぎせし鴨の川波立ちかへりはやく見し世に袖はぬれきや

祭のつかひにて神だちの宿所より齋院の女房に

いもと寐ておきゆく朝の道よりもなかなか物の思はしきかな

二月ばかり月のあかき夜二條院にて人々あまた
ゐあかして物語などし侍りけるに内侍周防より
ふして枕をがなと忍びやかにいふを聞きて大納
言忠家は是を枕にとてかひなをみすの下よりさし
入れて侍りければよみ侍りける

周防内侍

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくたたむ名こそをしけれ

といひ出し侍りければ返事によめる
大納言忠家

契ありてはるの夜ふかき手枕をいかがかひなき夢になすべき

一條院御時皇后宮に清少納言はじめて侍りける

頃三月ばかりに二三日まかり出で侍りけるにか

の宮よりつかはされて侍りける

皇后宮定子

せられたりけるに兵衛といふが赤紐のとけたり
けるをこれ結ばばやといふをききて中將實方朝
臣よりてつくろふとて足びきの山井の水はこほ
れるを如何なるひものとするなるらむと言ふを
聞きて返事により侍りける

皇后宮清少納言

うは氷あはに結べるひもなればかざす日影にゆるぶばかりぞ

十二月ばかりに門をたたきかねてなむ歸りにし
と恨みたりける男としかへりて門はあきぬらむ
やといひて侍りければ遣しける

上東門院紫式部

たが里の春のたよりにうぐひすの霞にとづるやどを訪ふらむ

藤原實方朝臣のとのる所にもろともに臥して曉
かへりて朝につかはしける

藤原道信朝臣

千載和歌集 卷第十六

雜歌上

上東門院より六十賀おこなひ給ひける時よみ侍
りける

法成寺入道前太政大臣

かぞへしる人なかりせばおく山のたにの松とや年をつままし

上東門院入内の時御屏風に松ある家に笛ふきあ

そびしたる人ある所をよみ侍りける

大納言 齊信

笛竹のよふかき聲ぞきこゆなる峰のまつかぜ吹きやそふらむ

一條院の御時皇后宮五節奉られける時辰の日か
しづき十二人わらは下づかへまで青摺をなむ著

馬 内 侍

笹の葉に霰ふる夜の寒けきにひとりは寐なむものとやは思ふ

和 泉 式 部

うらむべき心ばかりはある物をなきになしても訪はぬ君かな

契りしにあらずなるとの濱千鳥跡だに見せぬうらみをぞする

藤原定家

しかばかり契りし中も變りけるこの世に人をたのみけるかな

秋夜戀といへる心をよめる

顯昭法師

秋の夜をも思ふ事のかぎりとはひとり寐ざめの枕にぞしる

十首の歌人のよませ侍りける時よめる

前參議教長

よしさらば君に心はつくしてむまたもこひしき人もこそあれ

暮戀故人といへる心を

仁和寺後入道法親王覺性

なき人を思ひ出でたる夕ぐれは恨みしことぞくやしかりける

題しらす

源俊賴朝臣

これを見よ六田ちだのよどにさでさしてしをれししづの麻衣かは

笹めかるあれ田の澤にたつ民も身のためにこそ袖もぬるらめ

何せむに空だのめとて恨みけむ思ひたえたるくれもありけりぬい

戀の歌とてよめる

殷富門院大輔

なほざりの空だのめとて待ちし夜の苦しかりしぞ今は戀しきかとい

題しらす

攝政右大臣

をしみかねけに言ひしらぬ別かな月もいまはのありあけの空かひなし

右近大將實房

戀ひわぶる心はそらにうきぬれど涙のそこに身はしづむかな

隔關路戀といへる心をよめる

前中納言雅賴

思ひかね越ゆる關路に夜をふかみ八聲の鳥に音をぞそへつる

九月つごもりに女につかはしける

權中納言通親

世にしらぬ秋のわかれにうち添へて人やりならず物ぞ悲しき

戀の歌とてよめる

藤原經家朝臣

百首の歌めしける時戀の歌とてよませ給ひける 崇徳院御製
なけくまに鏡の影もおとろへぬ契りしことのかはるのみかは

左京大夫顯輔

年ふれどあはれにたえぬ涙かなこひしき人のかからましかば

藤原季通朝臣

今はただおさふる袖も朽ちはてて心のままに落つるなみだか

皇太后宮大夫俊成

奥山の岩がきぬまのうきぬなは深きこひぢになにみだれけむ
敷きしのぶ床だにたへぬ涙にも戀はくちせぬ物にぞありける

藤原清輔朝臣

朝夕にみるめをかづく蟹だにもうらみはたえぬ物とこそきけ

上西門院兵衛

思ひしる心のなきをなけくかなうき身のゑこそ人もつらけれ

源 有 房

思ふをも忘るる人はさもあらばあれ憂きを忍ばぬ心ともがな

惟 宗 廣 言

はかなくぞ後の世までと契りけるまだきにだにもかはる心を

源 仲 頼

厭はるるその由縁ゆかりにていかなれば戀は我が身を離れざるらむ

隔海路戀といへる心をよめる
鴨 長 明

思ひあまりうち寐る宵の幻影まぼろしも波路を分けて行きかよひけり

たえて久しくなりけるをとこ思ひ出でて今よ

りはあだなる心あらじなど言ひければ遣しける 土御門前齋院中將

年ふれど憂身は更にかはらじをつらさも同じつらさなるらむ

變りゆくけしきを見ても生ける身の命をあだに思ひけるかな

俊惠法師

君やあらぬ我が身やあらぬおほつかな頼めし事の皆變りぬる

圓位法師

物おもへどかからぬ人もある物をあはれなりける身の契かな

月前戀といへる心をよめる

なけけとて月やはものを思はするかこちがほなる我が涙かな

寂超法師

久方の月ゆゑにやは戀ひそめしながむればまづ濡るる袖かな

戀の歌とてよめる

祐盛法師

つらしとも恨むる方ぞなかりける憂きを厭ふは君ひとりかは

藤原隆親

知るなればいかに枕のおもふらむ塵のみつもる床のけしきを

題しらす

右大臣

はかなくもこむ世を^{れい}かけて契るかな二度^{ふたたび}同じ身ともならじを

右近中將忠良

思ひ出でよ夕の雲もたなびかばこれや歎きにたへぬけぶりと

左兵衛督隆房

戀ひ死なばうかれむ魂よ^{しばし}暫だに我が思ふ人のつまにとどまれ

太皇太后宮小侍從

君こふとうきぬる魂の小夜ふけていかなるつまに結ばれぬらむ

二條院讃岐

きみ戀ふる心の闇をわびつつはこの世ばかりと思はましかば

殷富門院大輔

花園左大臣の家に侍りける女にまだ中納言など
申しける頃物申し渡りけるをかれがれになり
ければ思ひたえにけむ前山城守なりけるものに
物申すと聞きていひ遣しける

中院右大臣

まことにやみとせも待たで山城のふしみのさとにひ枕する

かくいひて侍りければあやなくかの男にあはずなむなりに
けるとなむ

百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる

待賢門院堀河

うき人をしのぶべしとは思ひきや我が心さへなどかはるらむ

上西院兵衛

うかりける世々の契をおもふにもつらきはいまの心のみかは

前參議親隆

時々物申しける女のもとに文を遣したりけるを

よもあらじとて返して侍りければ遣しける 藤原つねひら

いにしへもこえ見てしかば逢坂はふみたがふべき中の道かは

むすめのもとに通ふ男の狩になむまかるとて太

刀をこひにおこせて侍りければ女にかはりて遣

しける 赤染衛門

かりにぞといはぬ先より頼まれずたちとまるべき心ならねば

中納言國信の家の歌合に戀の心をよめる 藤原基俊

人心なにをたのみて水無瀬川せぜのふるぐひ朽ちはてぬらむ

堀河院の御時百首の歌奉りけるととき恨の心をよ

める 隆源法師

恨みずば忘れぬ人もありなまし思ひしらでぞあるべかりける

左大將朝光がちかごとぶみを書きてかはりおこ

せよと責めはべりければ遣しける

馬内侍

ちはやぶる賀茂の社の神もきけ君わすれずばわれもわすれじ

かたらひける人の久しく音づれざりければ遣し

ける
大貳三位

うたがひし命ばかりはありながら契りし中のたえぬべきかな

もとしりて侍りける男のこと人に物申すと聞き

てふみ遣したりければいひ遣しける
相模

かり人はとがめもやせむ草茂みあやしき鳥のあとのみだれを

女のふかき山にも入らまほしきよいひて侍り

ければ遣しける
大納言ただのぶ

山よりもふかきところをたづね見ば我が心にぞ人はいるべき

千載和歌集 卷第十五

戀歌五

題しらず

相

模

假寐うたたねに果はかなくさめし夢をだにこの世にまたは見でや止みなむ

和泉式部

部

ねをなければ袖に朽ちてもうせぬめり猶憂き事ぞつきせざりける
ともかくも言はばなべてになりぬべし音になきてこそ見すべかりけれ
有明の月見すさみびにイておきていにし人の名残をながめしものを

紫式部

部

忘るるは憂世のつねと思ふにも身をやるかたのなきぞ悲イ他しき

戀ひ佗びてうちぬる宵の夢にだに逢ふとは人の見えばこそあらめ

忍びて物申し侍りける女のせうそこをだに通は

しがたく侍りけるをからの枕のしたに師子つく

りたるが口のうちに深くかくしてつかはし侍り

ける

權大納言實家

佗びつつはなれだに君が床にいなれよかはさぬ夜半の枕なりとも

かへし

讀人しらす

歎きつつかはさぬ夜半のつもるには枕もうとくならぬ物かは

題しらす

左近中將忠良

これはみな思ひし事ぞ馴れしより哀なげきなごりを如何にせむとは

權中納言通親

死ぬとても心をわくるものならば君に残してなほや戀ひまし

遇不逢戀といへる心をよめる

俊 惠 法 師

思ひきやうかりし夜半の雞きこりの音をまつ事にして明すべしとは

夏夜戀といへる心をよめる

唐衣かへしては寐じなつの夜は夢にもあかでひとわかれけり

戀の歌とてよみ侍りける

法 印 靜 賢

身のうさを思ひしらでや止みなまし逢ひ見ぬ先のつらさなりせば

攝政右大臣の時家の歌合に戀の心をよみ侍りけ

る

皇太后宮大夫俊成

逢ふ事は身をかへてとも待つべきによよを隔てむ程ぞ悲久しき

攝政家丹後

おもひねの夢に慰むこひなれば逢はねど暮のそらの待ぞたるる

題しらす

民部卿成範

人しれずむすびそめてし若草の花のさかりも過ぎやしぬらむ

稀會不絶戀

藤原顯家朝臣

いかなれば流はたえぬ中川に逢ふ瀬のかずのすくなかるらむ

攝政右大臣の時百首の歌よませ侍りける時遇不

逢戀をよめる

源 仲 綱

すみなれしさのの中川瀬だえしてながれかはるは涙なりけり

初疎後思戀といへる心をよめる

一條院讃岐

今さらに戀しといふもたのまれずこれも心のかはると思へば

戀の歌とてよめる

太皇太后宮小侍從

戀ひそめし心のいろのなになれば思ひかへすに返らざるらむ

道 因 法 師

伊勢島やいちしの浦のあまだにもかづかぬ袖は濡るる物かは

移香増戀といへる心をよみ侍りける

權中納言經房

うつり香に何しみにけむ小夜衣忘れぬつまとなりけるものを

あけぐれの空をとみに眺めける女また逢ふまで

のかたみに見むと申しける後遣しける

右近中將忠良

忘れぬや忍ぶやいかに逢はぬ間の形見とききしあけぐれの空

歌合し侍りける時戀の歌とてよめる

俊惠法師

おもひかねなほ戀路にぞかへりぬる恨は末もとほらざりけり

殷富門院大輔

見せばやな雄島の蜚の袖だにも濡れにぞぬれし色はかはらず

隔川戀といへる心をよめる

從三位賴政

山城のみの里にいもをおきて幾たびよどに船よばふらむ

絶久戀といへる心をよみ侍りける

藤原隆信朝臣

秋風のうき人よりもつらきかな戀せよとては吹かざらめども

源 仲 綱

心さへ我にもあらずなりにけり戀はすがたのかはるのみかは

寄浦戀といへる心をよめる 二條院内侍參河

待ちかねて小夜もふけひの浦風にたのめぬ波の音のみぞする

戀の歌とてよめる 讃 岐

一夜とて夜がれし床のさむしろにやがても塵の積りぬるかな

百首の歌よませ侍りける時遇不逢戀の心をよみ

侍りける 攝政前右大臣

ながらへてかはる心を見るよりは逢ふに命をかへてましかば

在所不言戀といへる心をよみ侍りける 前中納言雅賴

逢ふ事のありしところし變らずば心をだにもやらましものを

寄源氏物語戀と云ふ心をよみ侍りける

見せばやな露のゆかりの玉かつら心にかけてしのぶけしきを
逢坂の名を忘れにし中なれどせきやられぬはなみだなりけり

二條院の御時うへのをのこども百首の歌奉りけ

る時忍戀の心をよめる

刑部卿範兼

月まつと人には言ひてながむれば慰めがたきゆふぐれのそら

題しらす

藤原爲實

蘆の屋のかりそめ臥^{ふし}は津の國のながらへ行けど忘れざりけり

圓位法師

知らざりきくもるのよそに見し月の影を袂にやどすべしとは

逢ふと見し其夜の夢のさめであれな永き眠はうかるべけれど

空人^{仁イ}法師

君にのみしたのおもひはかはしまのみづの心は浅からなくに

うへのをのこども老後戀といへる心をつかうま

つりけるによませ給うける

院 御 製

おもひきや年のつもるはわすられて戀に命のたえむものとは

題しらす

藤原季通朝臣

歎きあまりうき身ぞ今はなつかしき君ゆゑ物を思ふと思へば

從三位頼政

水莖はこれをかぎりとかきつめてせきあへぬ物は涙なりけり

むつきのついたりたちごろ忍びたる所に遣しける 二條院御製

たれもよもまだ聞きそめじ鶯の君にのみこそおとしはじむれ

御返事 讀人しらす

鶯はなべてみやこになれぬらむ古巢に音をばわれのみぞなく

露ふかきあさまの野邊らイにをかや刈る賤が袂もかくは濡れじを
逢ふ事は引佐細江いなさのみをつくし深きしるしもなき世なりけり

百首の歌よみける時戀やイの歌とてよめる 顯昭法師

人づてはさしもやはともおもふらむ見せばや君になれる姿を

女のかよふ人あまたきこゆるに遣しける 平實重

淺ましやさのみはいかに信濃がイなる木曾路の橋のかけ渡るらむ

題しらす

人の上と思はばいかにもどかましつらきも知らず戀ふる心を

契りける事たがひにける女に遣しける 參議爲通

契りしももろともにこそ契りしか忘ればわれも忘れましかば

忍びて物いひ侍りける女の常に心ざしなしと云

んじければ遣しける

從三位季行

うづら鳴くしづやに生ふる玉小菅かりにのみ來て歸る君かな

たえて後のかたみといへる心をよみ侍りける 久我内大臣

わかれてはかたみなりける玉章を慰むばかり書きもおかせで

崇徳院に百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる 上西門院兵衛

わが袖の涙やにほのうみならむかりにも人をみるめなければ

前參議親隆

あづまやのをがやの軒の忍草しのびもあへずしけるおもひに

皇太后宮大夫俊成

戀をのみしかまの市にたつ民のたへぬ思ひに身をやかへてむ

待賢門院安藝

戀をのみすがたの池に水草みくさゐてすまでやみなむ名こそ惜しけれ

藤原清輔朝臣

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時の家

にて寄花戀といへる心をよめる

源 雅 光

吹く風にたへぬこすゑの花よりもとどめがたきは涙なりけり

逢不逢戀といへる心をよみ侍りける

大納言成通

あひみむといひ渡りしは行末の物思ふ事のはしにぞありける

權中納言俊忠中將に侍りける時歌合し侍りける

に戀の歌とてよめる

伊 豫 三 位

戀ひわびてあはれとばかりうち歎く事よりほかの慰めなぐさぞなき

おなじ家に十首の戀の歌よみ侍りけるととき來不

留戀といへる心をよみ侍りける

權中納言師時

たちかへる人をも何かうらみまし戀しさをだに留めざりせば

藤 原 道 經

思ひ出でてたれをか人のたづねまし憂にたへたる命ならずば

太宰帥敦道のみこ中たえ侍りけるころ秋つかた

思ひ出でてもの^{まをイ}して侍りけるにより侍りける 和泉式部

待^いつともかばかりこそは有らましか思ひもかけぬ秋の夕暮

題しらす

ほどふれば人は忘れてやみぬ^{れどイ}らむ契りしことを猶たのむかな

女のもとより夜ふかく歸りてつかはしける 藤原實方朝臣

竹の葉に玉ぬく露にあらねどもまだよをこめておきにける哉

堀河院御時百首の歌奉りける時戀の心をよめる 藤原基俊

木のまより領^ひ巾^れ振る袖を外^{よそ}に見ていかかはすべき松浦さよ姫

まぶしさす賤男の身にもたへかねて鳩ふく秋の聲たてつなり

藤原仲實朝臣

千載和歌集 卷第十四

戀歌四

題しらず

和泉式部

如何にしてよるの心をなぐさめむ晝はながめにさても暮しつ
これもみなさぞな昔の契ぞとおもふものからあさましきかな

昔御らんじける人たの近き程にわたりける由きか

せ給うてつかはしける

花山院御製

よそにては中々さてもありにしをうたて物思ふ昨日今日かな

久しくまうで來ざりける人のおとづれたりける

返事につかはしける

小式部

かへりつるなごりの空をながむればなぐさめがたき有明の月

皇太后宮大夫俊成

忘るなよ世々の契をすがはらやふし見の里のありあけのそら

皇嘉門院尾張

命こそおのが物からうかりけれあればぞ人をつらしとも見る

契る事侍りけるを忘れたる女につかはしける 右近中將忠良

何とかやしのぶにはあらで故郷の軒端にしける草の名ぞうき

夢中契戀といへる心をよめる 太皇太后宮小侍從

見し夢の覺めぬやがての現にて今日と頼めしくれを待たばや

人につかはしける 二條院御製

知るらめや落つる涙の露ともにわかれの床しにきえて戀ふとは

御返事 讀人しらす

まだしらぬ露おく袖を思ひやれかごとばかりの床のなみだに

右大臣に侍りける時百首の歌よませ侍りける時

後朝の歌とてよみ侍りける 攝政前右大臣

の侍りければ遣しける

左近衛督隆房

いづくより吹きくる風の散らしけむ誰もしのぶの森の言の葉

題しらず

從三位賴政

思ひかね夢に見ゆやとかへさずば裏さへそでは濡さざらまし

源 師 光

くり返しくやしきものは君にしもおもひよりけむ賤のをだ卷

藤 原 隆 親

いとほる身をうしとてや心さへ我をはなれて君にそふらむ

源 光 行

あぢきなくいはで心をつくすかなつつむ人目も人のためかは

皇太后宮若水

くれなるに萎れし袖も朽ちはてぬあらばや人に色もみすべき

かれはつる小笹がふしを思ふにも少なかりけるよよの數かな

寄催馬樂戀といへる心をよめる

藤原伊經

分けきつる小笹が露のしけければ逢ふ道にさへぬる袖かな

旅戀といへる心をよめる

讀人しらす

おきて行く涙のかかるくさまくら露しけしとや人のあやめむ

月前戀といへる心を

涙をもしのぶるころのわが袖にあやなく月のやどりぬるかな

稱他人戀といへる心をよみ侍りける

内大臣

しのびかね今は我とやなのらまし思ひ捨つべき氣色ならねば

左近中將良經

知られても厭はれぬべき身ならずば名をさへ人に包まましやは

女に忍びてかたらふこと侍りけるを聞ゆること

顯昭法師

よしさらば涙にくちねからころもほすも人目を忍ぶかぎりぞ

題しらす

道因法師

おもひわびさても命はあるものをうきにたへぬは涙なりけり

藤原仲實朝臣備中守にまかれりけるとき具して

國イ

くだりたりけるを思ひうすくなりて後月をみて

よみ侍りける

遊女戸々

數ならぬ身にも心のありがほにひとりも月をながめつるかな

契日中戀といへる心をよめる

中原清重

涙にや朽ちはてなましから衣そでのひるまとたのめざりせば

鳥羽院御時藏人所に侍りけるととき女にかはりて

よめる

藤原成親

中納言國信しのびて物申して後つかはしける 前齋院新肥前

あづまやのあさきの柱我ながらいつつふしなれて戀しかるらむ

寄枕戀といへる心をよみ侍りける 久我内大臣

つつめども枕はこひを知りぬらむ涙かからぬ夜半しなければ

夏の戀の心をよめる 前中納言雅頼

戀すればもゆる螢もなく蟬もわが身のほかのものとやは見る

題しらず 右大臣

引きかけて涙を人に包むまにうらや朽ちなむ夜半のころもは

百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる 前參議親隆

潮たるる伊勢をの蟹の袖だにもほすなる隙ひまはありとこそ聞け

歌合し侍りける時よめる 藤原清輔朝臣

しばしこそ濡るる袂もしほりしか涙にいまはまかせてぞ見る

忍びたる所にまかりて有明の月に夜ふかく歸り

てつかはしける

權中納言通親

思へただ入りやらざりしありあけの月よりさきにいでし心を

攝政右大臣の時家の歌合に旅宿逢戀といへる心

をよめる

皇嘉門院別當

難波江の葦のかりねの一よ故みをつくしてや戀ひわたるべき

初逢戀の心をよめる

藤原公衡朝臣

戀ひ戀ひてあふ嬉しさをつつむべき袖は涙にくちはてにけり

藤原隆信朝臣

君やそれありしつらさはたれなれば恨みけるさへ

悔しかるらむ
今は悔しき

夢中契戀といへる心をよめる

參議俊憲

すがたこそ寐覺の床に見えずとも契りし事のうつつなりせば

百首の歌奉りける時戀の心をよめる

前參議教長

戀しさは逢ふを限と聞きしかどさてしもいとど思ひそひけり

左京大夫顯輔

よそにしてもどきし人にいつしかと袖の雫をとほるべきかな

待賢門院堀河

長からむ心もしらず黒髪のみだれて今朝はものをこそおもへ

上西門院兵衛

宵のまもまつに心やなぐさむと今來むとだにたのめおかなむ

待賢門院安藝

磯馴木のそなれそなれてむす苔のまほならずとも逢ひ見てしがな

後朝戀の心をよめる

從三位賴政

人はいさあかぬ夜床にとどめつる我が心こそわれを待つらめ

たのめこし野邊の道芝夏ふかしいづくなるらむもすの草くき

題しらす

法性寺入道前太政大臣

冬の日を春よりながくなすものは戀ひつつくらす心なりけり

位の御とき皇太后宮はじめてまゐり給へりける

後の朝につかはしける

院御製

萬世を契りそめつるしにはかつがつ今日の暮ぞひさしき

おなじ御時忍びてはじめてまうのほりて侍りけ

る人に朝まつりごとの程まぎれさせ給ふことあ

りて暮れにける夕つ方つかはされける

今朝とはぬつらさに物は思ひしれ我もさこそは恨みかねしか

花園左大臣につかはしける

待賢門院加賀

かねてより思ひし事ぞふし柴のこるばかりなる歎きせむとは

の内侍にも遣しける^{たり}と聞きてそねみたる歌を送

りて侍りければ遣しける

大納言公實

みつ潮の末葉をあらふな^{みだい}がれ芦の君をぞ思ふうき^{しづみつ}みしづ^{つイ}みみ

中將に侍りける時歌合し侍りけるに戀の歌とて

よめる

權中納言俊忠

我が戀はあまのかる藻にみだれつつ乾くときなき波のした草

法性寺入道内大臣に侍りける時の歌合に尋失戀

といへる心をよめる

藤原時昌

なほざりに三輪の杉とは教へおきて尋ぬる時はあはぬ君かな

法性寺殿にて五月の御供花の時をのこども歌よ

み侍りけるに契後隱戀といへる心をよみ侍りけ

る

皇太后宮大夫俊成

戀をのみしづのをだまきくるしきは逢はで年ふる思なりけり
中納言師時

麻手ほすあづまをとめの萱筵^{かやじしろ}しきしのびても過ぐすころかな
源俊頼朝臣

中院の右大臣中將に侍りける時歌合し侍りける
修理大夫顯季
によめる

よとともに行く方もなき心かな戀は道なきものにぞありける
僧都覺雅
旅の戀の心をよめる

旅衣なみだのいろのしるければ露にもえこそかこたざりけれ
堀河院の御時艷書の歌をうへのをのこどもによ
ませさせ給ひて歌よむ女房のもとに遣しけるを
大納言公實は康資の王の母に遣しけるを又周防

を又の目心あるさまに人のいひ侍りければ遣し

ける

小 大 君

棚機にかしつと思ひしあふ事をその夜なき名の立ちにける哉

びはどのの皇太后宮にまゐりて侍りけるに辨の

めのとはかまのこしのいでたるを御まへなる

硯を引きよせてそのこしに書きつけ侍りける 宇治前太政大臣

うらめしやむすほほれたる下ひものとけぬや何の心なるらむ

かへし

辨のめのと

下紐は人の戀ふるにとくなれば誰がつらきとか結ほほるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時戀の心をよめ

る

大 納 言 公 實

ひとり寐るわれにて知りぬ池水につがはぬをしのおもふ心を

千載和歌集 卷第十三

戀歌三

題しらす

藤原實方朝臣

契りこし事の違ふぞたのもしきつらさもかくや變ると思へば

相模

知らじかしおもひも出でぬ心にはかく忘れずがイわれ嘆くとも

藤原長能

つれもなくなりぬる人の玉章たまづきをうき思ひ出のかたみともせじ
やはらかに寐ねる夜もなくて別れぬる夜々の手枕いつか忘れむ

ふん月の七日の夜大納言朝光ものいひ侍りける

柚川の浅からずこそ契りしかなどこのくれをひきたがふらむ

皇太后宮大夫俊成

思ひきや榻しじのはしがきかきつめて百夜も同じまろねせむとは

戀しさをいかがはすべき思へども身は數ならず人はつれなし

女のもとに遣しける

權大納言實國

戀ひしなば我故とだに思ひ出でよさこそはつらき心なりとも

一向に恨みしもせじさきの世にあふまでこそは契らざりけめ

左衛門督家通

思ひながら色には出でざりけるを女のもとにて

鏡をかりてその裏にかきつけ返し侍りける

藤原公衡朝臣

増鏡ころもうつるものならばさりとも今はあはれとや見む

法住寺殿の殿上の歌合に臨期違約戀といへる心

をよめる

權中納言通親

いましばしそらだのめにも慰めで思ひたえぬる宵のたまづさ

藤原盛方朝臣

いたづらにしをるる袖をあさ露にかへる袂とおもはましかば

菅原是忠

戀ゆゑはさもあらぬ人ぞ恨しき我よそならばとはましものを

藤原親盛

思ひせく心のうちのしがらみも堪へずなりゆくはイなみだ川かなゆるイ

靜縁法師

おのづからつらき心もかはるやと待ち見むほどの命ともがなもイくてイ

むつましくはならで忘られにける人に遣しける 大江維順がむすめ

忘らるるうき名はさても立ちにけり心のうちは思ひわけども

晚風催戀といへる心をよめる 藤原顯家朝臣

よとともにつれなき人を戀草のつゆこほれ増す秋のゆふかぜ

題しらず 源師光

かかりける歎は何のむくいぞと知る人あらば問はましものを

太宰大貳重家

戀ひ死なむことぞはかなき渡川逢瀬ありとは聞かぬものゆる

刑部卿範兼

妹が邊あたりながるる川の瀬によらば泡となりても消えむとぞ思ふ

石清水の歌合とて人々よみ侍りける時寄松戀と

いへる心をよみ侍りける

權中納言經房

はかなしな心つくしにとしをへていつとも知らぬあふの松原

戀の歌とてよめる

寂蓮法師

思寐の夢だに見えて明けぬれば逢はでも鳥の音こそつらけれ

俊恵法師

夜もすがら物思ふ頃は明けやらぬ閨の隙さへつれなかりけり

潮たるる袖のひるまはありやともあはでの浦の蟹にとはばや

俊 恵 法 師

思ひきや夢をこの世のちぎりにて覺むる別をなけくべしとは

藤原隆信朝臣

我ゆるゑの涙とこれをよそに見ばあはれなるべき袖のうへかな

賀 茂 政 平

逢ふことのかくかたければつれもなき人の心や岩木なるらむ

源 光 行

こひ死なむ涙のはてやわたり川深きながれとならむとすらむ

寄石戀といへる心を

二條 院 讃 岐

我が袖は汐干に見えぬ沖の石のひとこそ知らね乾くまもなし

題しらず

民部卿成範

契りおく其言の葉に身をかへて後の世にだに逢ひ見てしがな

大内にて月あかかりける夜人々あそびけるをほ

のかにみて心あくがるるよしひて侍りける人

の返事につかはしける

殷富門院尾張

誰ゆゑかあくがれにけむ雲間より見し月影はひとりならじを

戀爲後世妨といへる心をよめる

藤原家基

こえやらで戀路にまよふ逢坂や世を出ではてぬ關となるらむ

乍臥無實戀といへる心をよめる

西住法師

たまくらの上にみだるる朝寐髪したにとけずと人は知らじな

題しらす

從三位頼政

我が袖のしほのみちひる浦ならば涙のよらぬをりもあらまし

法印靜賢

などやかくさも暮れ難き大空ぞ我が待つ事はありとしらずやぞイ

百首の歌の中に戀のこころを

式子内親王

袖のいろは人のとふまでなりもせよふかき思を君したのまば

契暮秋戀といへる心をよみ侍りける

左近中將良經

あきはをし契は待たるとにかくに心にかかるくれのそらかな

戀の歌とてよめる

藤原成家朝臣

戀をのみしぐるるそらの浮雲はくもりもあへず袖ぬらしけり

忍傳書戀といへる心をよめる

藤原家實

磯がくれかきはやれども藻鹽草たちくる波にあらはれやせむ

題しらず

藤原家隆

くれにとも契りてたれか歸るらむ思ひたえたるあけほのの空

讀人しらず

あはれとも枕ばかりやおもふらむ涙たえせぬ夜半のけしきを

忍戀のこころをよみ侍りける

二條院内侍參河

ころも手におつる涙のいろなくば露とも人にいはましものを

殷富門院大輔

思ふこそ忍ぶにいそど添ふものはかすならぬ身の嘆なりけり

右大臣に侍りける時家に歌合し侍りける時戀の

歌とてよみ侍りける

攝政前右大臣

行きかへる心に人のなるればやあひ見ぬさきに戀しかるらむ

寄郷戀といへる心をよめる

左衛門督家通

あふ事をさりとともとのみ思ふかな伏見の里の名をたのみつつ

忍びて暮にまうのほるべきよし侍りける人につ

かはしける

二條院御製

戀ひわびぬちぬの壯夫まさすらをならなくに生田の川に身をやなけまし

寂超法師

命をばあふにかへむと思ひしを戀ひ死ぬとだに知せてしがな

源師光

戀しともまたつらしとも思ひやる心いづれかさきにたつらむ

道因法師

逢ふならぬ戀慰めのあらばこそつれなしとても思ひたえなめ

顯昭法師

つれなさに今は思ひもたえなましこの世ひとつの契なりせば

源慶法師

うたたねの夢に逢ひ見て後よりは人もたのめぬ暮ぞまたるる

朝恵イ法師

大納言しけみち少將に侍りける時名の立つこと
侍りけるをおなじくば誠になさばやといひ遣し

てければよみて遣しける

法性寺入道前太政大臣家參河

逢ひ見むとおもひなよりそ白波の立ちけむ名だに惜しき江を

後三條内大臣家に歌合し侍りける時戀の歌とて

よめる

道因法師

戀ひしなむ身は惜からず逢^じふ事にかへむ程までと思ふばかりぞ

贈左大臣長實八條の家にて戀の心をよめる

左京大夫顯輔

今はさは逢ひ見むまではかたくとも命とならむ言の葉もがな

題しらす

平忠盛朝臣

ひとかたになびく藻鹽の烟かなつれなき人のかからましかば

藤原通經

せきかぬる涙の川の早き瀬は逢ふよりほかのしがらみぞなき

藤原顯方

我が戀は年ふるかひもなかりけりうらやましきは宇治の橋守

道因法師

なれてのちしなむ別のかなしきに命にかへぬ逢ふこともがな

賀茂重保

錦木のちつかに限なかりせばなほこりすまに立てましものを

百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる
前參議教長

いかばかり戀路は遠きものなれば年はゆけども逢瀬なからむ

時々物申しかはしける人に名なき名イのたつは知らぬか

と人のつけければよめる
三のみこの家越後

なれて後つらからましにくらぶればなき名は事の數ならぬ哉

戀ひわぶる^{たい}今日の涙にくらぶればきのふの袖はぬれし數かは

題しらず

右大臣

朝まだき露をさながら笹めかる賤がそでだにかくは濡れ^{しなれじ}じを

權大納言實國

潮たるるいせをの蟹や我ならむさらばみるめをかる由もがな

權大納言實家

よしさらば逢ふとみつるに慰まむさむる現^{うつ}もゆめならぬかは

右衛門督賴實

いかばかり思ふと知りてつらからむあはれ涙の色を見せばや

俊惠法師

戀ひしなむ命を誰にゆづり置きてつれなき人の果をみせまし

從三位賴政

いかで我がつれなき人に身をかへて戀しき程を思ひしらせむ

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家の

歌合に戀の心をよめる

源 雅 光

玉藻かる野島がイの浦のあまだにもいとかく袖は濡るるものかは

あふことをその年月とちぎらねば命やこひのかぎりなるらむ
藤原重基

中院入道右大臣中將に侍りける時歌合し侍りけ

るに戀の歌とてよめる

藤原宗兼朝臣

戀ひわたる涙の川に身をなけむこの世ならでも逢瀬ありやと

百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる
前參議親隆

陸奥の十綱のはしにくるつなの絶えずも人にいひわたるかな

逐日増戀といへる心をよませ給ひける
院 御 製

の歌よみ侍りけるによめる

前中納言雅兼

かかりける涙と人も見るばかりしほらじ袖よ朽ちはてねただ

權中納言俊忠家に戀の十首の歌よみ侍りける時

いのれども不逢戀といへる心を

源俊賴朝臣

うかりける人を初瀬の山おろしよ烈しかれとは祈らぬものを

おなじ十首の中に誓ふ戀といへる心をよめる

修理大夫顯季

うれしくは後の心を神もきけ引くしめなはの絶えじとぞ思ふおもへばい

乍臥無實戀

藤原顯仲朝臣

結びおくふしみのさとの草枕とけで止みぬる戀にもあるかな

來不留戀

權中納言俊忠

戀ひ戀ひてかひもなぎさに沖つ波よせては臆て立ち歸れとや

女につかはしける

德大寺左大臣

千載和歌集 卷第十二

戀歌二

堀河院の御時百首の歌奉りける時戀の心をよみ

侍りける

大納言公實

思ひあまり人にとはばや水無瀬川むすばぬ水に袖はぬるやと

わたらばイ

題しらす

花園左大臣

はかなくも人に心をつくすかな身のためにこそ思ひそめしか

一二條太皇太后宮大貳

戀ひそめし人はかくこそつれなけれ我が涙しも色かはるらむ

白河院三條殿におはしましける時をのこども戀

よそ人にとはれぬるかな君にこそ見せばやとおもふ袖の雪を

藤原伊綱

つれなくぞ夢にも見ゆるさよ衣うらみむとては返しやはせし

攝政右大臣の時家の歌合に戀の歌とてよめる
藤原季經朝臣

思ひ出づるその慰めもありなまし逢ひ見て後のつらさ思なりせへば

おなじ家に百首の歌よみ侍りける時初戀の心を

よみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

照射さしする端山がすそのした露やいるより袖はかくしをるらむ

忍戀

いかにせむ室の八島にやどもがな戀のけぶりを空にまがへむ

あさましやおさふる袖の下くぐる涙のすゑをひとや見つらむ

皇嘉門院別當

忍びねの袂は色に出でにけりころにも似ぬわがなみだかな

女のなき名たつよし恨みて侍りければ遣しける 左兵衛督隆房
同じくば重ねてしほれぬれ衣さてもほすべきなき名ならじを

かへし

讀人しらす

流れてもすすぎやするとぬれ衣人はきすとも身にはならさじ

戀の歌とてよみ侍りける

大納言宗家

人目をばつつむと思ふにせきかねて袖にあまるは涙なりけり

右京大夫季能

つれなさにいはで絶えなむと思ふこそあひ見ぬ先の別なりけれ

法眼實快

祐盛法師
いろ見えぬこころのほどを知らするは袂を染むる涙なりけり

大中臣定雅
わが床は信夫の奥のますけ原つゆかかるとも知るひとのなき

祝部宿禰成仲
君こふる涙しぐれと降りぬればしのぶのやまも色づきにけり

二條院前皇后宮常陸
いかにせむ忍ぶの山のした紅葉しぐるるままに色のまさるを

賀茂重延
いつしかと袖に時雨のそそぐかな思ひは冬のはじめならねど

攝政右大臣の時百首の歌の中に忍戀の心をよみ
侍りける
從三位賴政

藤原惟規

頼めとやいなとやいかにいな舟の暫しと待ちし程も經にけり

賢智法師

かくばかり色に出でじと忍べども見ゆらむ物をたへぬ氣色は

賀茂重保

夏にいりて戀まさるといへる心をよめる

人しれずおもふ心はふかみ草はなさきてこそいろに出でけれ

津守國基₁光

題しらず

日を経つつしけさはまさる思草あふ言の葉のなどなかるらむ

大中臣清文

おつれども軒にしられぬ玉水は戀のながめのしづくなりけり

源季貞

ひとしれずおもひそめてし心こそいまは涙のいろとなりけれ

ことの音にかよひそめぬる心かな松吹く風にあらぬ身なれどわが身もい

百首の歌よみ給侍りいひける時戀の歌

式子内親王

はかなしや枕さだめぬうたた寐にほのかにまよふゆめの通路

百首歌よみ侍りけるとき戀の心をよみはべり

ける

右大臣

さきにたつ涙とならば人しれず戀路わいにまどふみちしるべせよ

題しらす

刑部卿賴輔

ながらへばつらき心も變るやとさだめなき世を頼むばかりぞ

源有房

もらさばや忍びはつべき涙かは袖のしがらみかくとばかりは

源師光

戀しさを憂身なりとてつつみしはいつまでありし心なるらむ

我が戀はをばな吹きこす秋風の音にはたてじ身にはしむとも

横川がはのふもとなる山寺にこもりけるて侍りけるイ時いとよ

ろしきわらはの侍りければよみて遣しける 仁 昭 法師

世をいとふはしと思ひし通路にあやなく人を戀ひわたるかな

題しらず 花園 左大臣

たよりあらば蟹の釣船ことづてむ人をみるめに求めわびぬと

大宮前太政大臣

またもなくただ一すぢに君を思ふ戀路に迷ふわれやなになる

前中納言伊房

君こふる身はおほ空にあらねども月日をおほく過しつるかな

きさいの宮にはじめてまゐりける女房ことひく

を聞かせ給うてよみてたまひける 二條院御製

戀ひ死なば世の果なきにいひ^{おき}なしてなき後^{あき}までも人にしられじ

顯昭法師

ひとしれぬ涙の川のみなかみやいはでの山のたにのしたみづ

題しらす

讀人しらす

いかにせむ御垣が原につむ芹のねにのみ泣^くけどしる人のなき

戀の百首の歌よみ侍りける時寄霞戀といへる心

をよめる

賀茂重保

つれもなき人の心やあふ阪のせき路へだつるかすみなるらむ

戀の歌とてよめる

藤原清輔朝臣

涙川うきねのとり^{とこに}となりぬれ^ば人^いにはえこそみなれざりけれ

二條院の御時うへのをのこども百首の歌たてま

つりける時よめる

源のみちよしの朝臣

百首の歌よみ侍りけるとき戀の歌とてよみ侍り

ける

右大臣

人しれぬ木の葉の下のうもれみづ思ふこころをかき流さばや

題しらす

久我内大臣

こひしとも言はぬにぬるる袂かなこころをしるは涙なりけり

從三位賴政

思へどもいはでしのぶのすりごろも心のうちにみだれぬる哉

寂然法師

陸奥のしのぶもぢずり忍びつついろには出でじ亂れもぞする

藤原清輔朝臣

難波女のすくもたく火の下焦れ上はつれなきわが身なりけり

歌合し侍りける時忍戀のこころをよめる

刑部卿賴輔

思ふこといは間にまきし松の種千代とちぎらむ今はねざせよ

うるまの島の人ここにはなたれ來てここの人の
物いふを聞きも知らでなむあるといふ比かへり

事せぬ女につかはしける

前大納言公任

おほつかなうるまの島の人なれやわが言の葉をしらず顔なる

雨のふる日しのびたる人につかはしける

堀河右大臣

人しれずものおもふころの袖見れば雨も涙もわかれざりけり

權中納言としただかつらの家にてなき名たつ戀

といへる心をよみ侍りける

源俊賴朝臣

たちしより晴れずも物を思ふかななき名や野邊の霞なるらむ

戀の歌とてよめる

源明賢朝臣

歎き餘り知せそめつる言の葉も思ふばかりは言はれざりけり

百首の歌奉りける時戀にイの歌とてよめる

大炊御門右大臣

おほかたの戀する人にききなれて世のつねのとや君思ふらむ

左京大夫顯輔

思へどもいはでの山に年を経て朽ちやはてなむ谷のうもれ木

高砂のをのへの松にふく風のおとにのみやは聞きわたるべき

待賢門院堀河

荒磯のいはにくだくる波なれやつれなき人にかくるころは

上西門院兵衛

岩間ゆくやました水をせきわびかれイてもらす心のほどを知らなむ

權中納言俊忠の家の歌合に戀の歌とてよめる 藤原基俊

みこもりに言はでふるやの忍草忍ぶとだにも知らせてしがな

人につかはしける 藤原長能

に初戀の心をよめる

後二條關白家筑前

思ふよりいつしか濡るるたもとな涙ぞ戀のしるべなりける

女につかはしける

藤原長能

藻くづ火のいそまを分くる漁船いさりぶねほのかなりしに思ひそめてき

題しらす

輔仁親王

いかにせむ思ひを人にそめながら色にいでじと思ふこころを

徳大寺左大臣

ひとめ見し人はたれをいともしら雲のうはの空なる戀もするかな

中院右大臣

つつめども涙にそでのあらはれて戀すと人にしられぬるかな

大納言成通

つつめどもたへぬ思えいになりぬれば問はず語りのせまほしき哉

千載和歌集 卷第十一

戀歌一

堀河院の御時百首の歌たてまつりける時初戀の

心をよめる

源俊賴朝臣

難波江の藻に埋^{うづも}るるたまかしはあらはれてだに人をこひばや

二條太皇太后宮肥後

まだしらぬ人をはじめて戀ふるかなおもふ心よ道しるべせよ

前齋宮河内

わりなしや思ふ心の色ならばこれぞそれとも見せましものを

權中納言俊忠中將に侍りける時歌合し侍りける

同じ御時大嘗會主基方稻舂歌丹波國雲田村をよ

める

刑部卿範兼

天地あめつちのきはめも知らぬみ代なれば雲田の村のいねをこそつめ

高倉院御時仁安三年大嘗會悠紀方の御屏風の歌
霜ふれどさかえこそませ君が代にあふさか山のせきの杉むら
宮内卿永範

今上の御時元暦元年大嘗會悠紀方の風俗の歌三

神山をよめる

藤原季經朝臣

ときはなるみ神のやまの杉むらや八百萬代のしるしなるらむ

に備中國長田^{ながた}山の麓に琴ひき遊びたる所をよめ

る

善滋爲政朝臣

千代とのみおなじことをぞしらぶなる長田の山のみねの松風

白河院の御時承保元年大嘗會主基方の稻舂歌神

田の郷をよめる

前中納言匡房

千はやぶる神田の里のいねなれば月日とともに久しかるべし

院の御時の久壽二年大嘗會悠紀^{ゆき}方の風俗歌近江

國わか松の森をよめる

宮内卿永範

すべらぎのすゑ榮ゆべきしるしには木だかくぞなる若松の森

平治元年大嘗會悠紀方の風俗歌近江國千坂の浦

をよめる

參議俊憲

君が代のかずにはしかじかぎりなき千坂の浦の眞砂なりとも

の日女房の中に申し侍りける

右大臣

笛のねの萬代までときこえしを山もこたふるここちせしかな

入道右大臣はじめて中院の家に住み侍りける時

祝の心をよめる

修理大夫顯季

群れてゐるたづのけしきにしるきかな千年すむべき宿の池水

橘俊綱朝臣の伏見の家にかつらをほりうゑさせ

給ひけるによめる

賀茂成助

みづがきの桂をうつすやどなれば月見むことぞ久しかるべき

俊綱朝臣さぬきの守にまかりけるとき祝の心を

よめる

藤原孝善

君が代にくらべていはば松山の松の葉かずはすくなかりけり

後一條院の御時長和五年大嘗會主基^{すき}方の御屏風

百千たび浦島が子^のはかへるともはこやの山はときはなるべし

二條院の御時大炊御門高倉の内裏に侍りけるに

同じ西のまちの家にてはじめて詩歌講じ侍りけ

るに鶴契還年といへる心をよみ侍りける

大炊御門右大臣

幾千代とかぎらぬたづの聲すなり雲井のちかき宿のしるしに

閑院の家にてはじめて對松爭齡といへる心をよ

み侍りける

入道前關白太政大臣

千年ふるをのへの小松うつしうゑて萬代までの友とこそ見め

源通能朝臣

萬代もすむべきやどに植ゑつれば松こそ君がかけをたのまめ

高倉院の御時内裏にまゐり侍りけるにうへの御

笛に萬歳樂ふかせ給ひけるをはじめて承りて又

百首の歌めしける時祝の心をよませ給うける 崇徳院御製^{歌₁}

吹く風も木々の枝をばならさねど山は久しきこゑぞきこゆる

二條院の御時大内におはしまして初めて花有喜

色といへる心をよませ給ひけるによみ侍りける ^{右₁}大 臣

千代ふべきはじめの春と知りがほにけしきことなる初櫻^{花₁}かな

うへのをのこども百首の歌奉りける時祝の心を

よませ給うける 二條院御製

白雲にはねうちかけて飛ぶ^{たづ₁}つるの遙に千代のおもほゆるかな

百首の歌よみ給^{ませ₁}ひける時の祝の歌 式子内親王

動きなきなほ萬代ぞたのむべきはこやの山のみねのまつかぜ

攝政右大臣に侍りける時百首の歌よませ給^{侍り₁}ひける

るに祝の歌五首が中によみ侍りける 皇太后宮大夫俊成

堀河院の御時百首の歌奉りける時子の日の心を

よめる

二條太皇太后宮肥後

行末をまつぞ久しき君がへむ千代のはじめの子の日と思へば

祝の心をよめる

藤原基俊

奥山のやつをのつばき君が代にくたび蔭をかへむとすらむ

保延二年法金剛院に行幸ありて菊契多秋といへ

る心をよみ侍りける

法性寺入道前太政大臣

君が代をなが月にしも白菊の咲くや千とせのしるしなるらむ

花園左大臣

八重菊のにほひにしるし君が代はちとせの秋を重ぬべしとは

八條前太政大臣

千はやぶる神代のこと人も人ならばとはましものを白菊のはな

堀河院御時鳥羽殿に行幸の日池上花といへる心
をよみ侍りける

權中納言俊忠

千とせすむ池のみぎはの八重櫻かけさへ底にかさねてぞ見る

白河院鳥羽殿におはしましける時松契遐年とい

ふ心をよめる

源俊頼朝臣

神代よりひさしかれとやうごきなき岩根に松の種をまきけむ

京極の前のおほきおほいまうち君の高陽院の家

の歌合に祝の心をよみ侍りける

落ちたぎつやそ宇治川の早き瀬に岩こす波は千代のかずかも

二條太皇太后宮賀茂のいつきと申しける時本院

にて松映水といへる心をよみ侍りける

京極前太政大臣

ちはやぶるいつきの宮のありす川松とともにぞ影はすむべき

わがともと君がみかきの吳竹は千よに幾よのかけをそふらむ

祝の心をよみ侍りける

大宮前太政大臣

君が代は天のかこ山出づる日のてらむ限りは盡きじとぞ思ふ

堀河院の御時立春の朝に今日の心つかうまつる

べきよし侍りければ奏し侍りける

源俊頼朝臣

君がためみたらし川を若水にむすぶや千代のはじめなるらむ

同じ御時后の宮にて花契週年といへる心を上の

をのこどもつかうまつりけるによませ給うける 堀河院御製

千年までをりて見るべき梅のイ櫻花こすゑはるかに咲きそめにけり

鳥羽院位おりさせ給うての頃庭花年久といへる

心をかれこれつかうまつりけるによみ侍りける 大納言忠教

ほり植ゑし若木の梅にさく花は年もかぎらぬにほひなりけり

千載和歌集 卷第十

賀歌

みこにおはしましける時鳥羽殿に渡らせ給^うへり
ける頃八條院内親王と申しける時かの御かたに
て竹遐年友といへる心を講ぜられけるによませ
給うける

院御製

幾千代とかぎらざりける吳竹や君がよはひのたぐひなるらむ

後三條内大臣

うゑて見る籬の竹のふしごとにこもれる千よは君ぞかぞへむ

皇太后宮大夫俊成

かへし

圓位法師

この世にてまたあふまじき悲しさにすすめし人ぞ心みだれし

山の端にたなびく雲やゆくへなくなりし煙のかたみなるらむ

父の中納言顯長が墓所の堂深草の里に侍りける

にまかりてよめる

法眼長眞

としをへて昔をしのぶ心のみうきにつけてもふかくさのさと

母の身まかりにける時よめる

顯昭法師

たらちめやとまりて我を惜まましかはるにかふる命なりせば

はい

同行の上人西住秋の頃わづらふ事ありてかぎり

に見え侍りければよめる

圓位法師

もろともに眺めながめて秋の月ひとりにならむことぞ悲しき

西住法師身まかりける時をはり正念なりけるよ

し聞きて圓位法師の許につかはしける

寂然法師

亂れずとをはり聞くこそ嬉しけれさても別はなぐさまねども

供養し侍りける時笛にそへて侍りける

法印成清

思ひきや今日うちならす鐘の音に傳へし笛の音を添へむとは

わづらふこと侍りける時母にさきだたむことを

歎き思ひ侍りけるをそのたびおこたりて後また

母身まかりにける時よめる

靜縁法師

さきだたむ事をうしとぞ思ひしに後れてもまた悲しかりけり

周防の國に父のまかりくだりけるがかの國にて

身まかりにけると聞きて急ぎ下りける時よめる 藤原親盛

待つらむと思はばいかにいそがまし跡を見るだにまよふ心を

仁和寺法親王蓮花門院にてかくれ侍りける後月

忌の日かの墓所にまかりけるに山に雲かかりて

心ほそく侍りければよめる

覺蓮法師

三年まで馴れしは夢の心地して今日ぞうつつの別れなりける

後入道法親王かくれ侍りて後いりがたまで月を

見てよみ侍りける

僧都印性

入りぬるか飽かぬわかれの悲しさを思ひしれとや山の端の月

親の墓にまかりて侍りけるに知らぬつかどもの

多く見え侍りければよめる

左京大夫脩範

野邊みれば昔の跡やたれならむその世もしらぬ苔のしたかな

奈良に侍従と申しけるわらはのいづみ川に身を

なけて侍りければよめる

僧都範玄

何事のふかきおもひにいづみ川その玉藻としづみはてけむ

花園の左大臣の家に童にて侍りけるを笙を教へ

侍るとて給へりける笛を年経て後かのために佛

る

法印澄憲

常に見し君がみゆきを今日とへばかへらぬ旅ときくぞ悲しき

大炊御門の右大臣身まかりて後かのしるしおき

て侍りける私記日イどもの侍りけるを見てよみ侍り

ける

右大臣

教へおくその言の葉を見るたびにまたとふ方のなきぞ悲しき

母の二位身まかりて後よみ侍りける

民部卿成範

鳥部山おもひやるこそ悲しけれひとりや苔のしたに朽ちなむ

母の服に侍りける程に又紀伊三位身まかりにけ

る時よみ侍りける

藤原貞憲朝臣

かぎりありて二重はきねばイど藤衣なみだばかりを重ねつるかな

忍びて物申しける女身まかりにける時よめる

左京大夫秀能

大納言公實身まかりて後かの遠忌の日よみ侍り

ける

花園左大臣の室

かぞふれば昔がたりになりにつけりわかれは今の心地すれども

大炊御門の右大臣かくれ侍りて後七月七日母の

三位の許に消息のついでに遣し侍りける

權大納言實家

柵たなはた機にことしはかさぬ椎柴のそでしもことにつゆけかりけり

かへし

三

位

椎柴のつゆけきそでは柵機もかさぬにつけてあはれとや見む

待賢門院かくれさせ給ひて後法金剛院にて郭公

の鳴き侍りけるに

仁和寺入道法親王

故郷にけふ來ざりせばほととぎすたれと昔をこひてなかまし

二條院かくれさせ給ひて御わざの夜よみ侍りけ

袈裟を忘れてとりに遣したりけるに遣すとして 天台座主勝範

墨染の色はいづれもかはらぬを濡れぬや君がころもなるらむ

わづらはせ給うけるととき鳥羽殿にて郭公の鳴き

けるを聞かせ給うてよませ給うける 鳥羽院御製

つねよりもむつまじきかな郭公しでの山路のともとおもへば

美福門院の御服にて侍りけるを宣旨にてぬぎ侍

るとてよめる 久我内大臣

こころざし深くそめてし藤衣きつる日かすの浅くもあるかな

中納言伊實六條の家にて身まかりにけるを後の

わざなどはてて九條の堂に歸り侍りける時柱に

かきつけ侍りける 大宮前太政大臣

たぐひなく憂き事見えし宿なれどそも別るるは悲しかりけり

侍りければよみ侍りける

慶範法師

うちならす鐘の音にや長き夜も明けぬなりとは思ひしるらむ

待賢門院かくれさせ給うて後御いみはててかた

がたにかへらせ給ひける口

崇徳院御製

かぎりありて人はかたがた別るとも涙をだにも止めてしがな

御かへし

上西門院兵衛

ちりぢりに別るる今日の悲しさに涙しもこそとまらざりけれ

語らひけるわらはの思はずにうとく成りにける

後なくなりになるを人のとぶらひて侍りければ

よめる

靜嚴法師

悲しさをこれよりけにや思はましかねて習はぬ別れなりせば

服に侍りける時ある上人の來れりけるが墨染の

菖蒲草 うきねを見て も涙のみかからむそでをおもひこそやれ

女におく^てれて歎き侍りけるころ肥後がもとより

とひ侍りけるに遣しける

藤原基俊

思ひやれむなしき床をうちはらひ昔をしのぶそでのしづくを

贈皇后茨子かくれ侍りにける後硯の箱など取り

したためけるに物に書きつけておかれ侍りける

歌

胸にみつおもひを^だにもはるかさで煙とならむことぞ悲しき

あひ知れりける女身まかりにける時月を見てよ

める

藤原有信朝臣

もろともに有明の月を見^もしものをいかなる闇に君まよふらむ

人のわざしける導師にて諷誦文よみけるに歌の

もろともに春の花をば見しものを人におくる秋ぞかなしき

左¹右衛門督基忠かくれ侍りて後かの家につかはし

ける

前中納言匡房

花と見し人は程なくちりにけり我が身も風を待つとしらなむ

後三條院かくれさせ給うて諒闇のころよみ侍り

ける

藤原顯綱朝臣

かわく世もなき墨染の袂かな朽ちなばなにをかたみにもせむ

少將に侍りける時大納言忠家長¹かくれ侍りける後

五月五日中納言國信中將に侍りける時消息して

侍りけるついでに遣しける

權中納言俊忠

墨染の袂にかかるねを見ればあやめも知らぬなみだなりけり

かへし

中納言國信

年をへてきみが見なれします鏡むかしの影はとまらざりけり

上東門院に参りて侍りけるに一條院の御事など

おほし出でたる御氣色なりける朝奉^{にい}りける 赤染衛門

つねよりもまた濡れそひし袂かなむかしをかけて落ちし涙に

御^{返事}かへし 上東門院

現とも思ひわかれで過ぐるまに見し世の夢をなにかたりけむ^{るらい}

あがたに侍りけるほどに京なる女身まかりぬと

聞きていそぎのほり侍りける道にてよめる 源實基朝臣

都へと思ふにつけてかなしきはたれかは今はわれを待つらむ^母

藏人に侍りけるとき親のおもひになり^母にける秋

うへのをのこども嵯峨野に花見にゆくと聞きて

つかはしける 平雅康

同じ年の冬御禊大嘗會など過ぎて十二月つごも

り大納言長家二條院の一品内親王と申しける時

まゐりて侍りけるにより侍りける

前中宮宣旨

うきもののさすがに惜しき今年かな遠ざかりなむ君が別れに

かへし

大納言長家

悲しさはいとどぞ増る別れにし今年もけふをかぎりと思へば

遠き所に行きにける人のなくなりにけるを親は

らからなど都に歸り來て悲しき事いひたるにつ

かはしける

紫

式部

いづかたの雲路としらばたづねましつら離れけむ雁たるイのゆく末

恒徳公かくれ侍りて後かの常に見侍りける鏡の

物の中に侍りけるを見てよみける

藤原道信朝臣

遣しける

大貳三位

悲しさをかつは思ひも慰めよたれもつひにはとまるべきかは

かへし

大納言長家

誰も皆とまるべきには有らねども後るるほどはなほぞ悲しき

一條院かくれさせ給へりける年の秋月を見てよ

み侍りける

承香殿女御

おほかたにさやけからぬか月影はなみだ曇らぬ人に見せばや

後一條院四月にかくれさせ給ひける年の九月に

中宮又かくれ給ひにける四十九日末つかた宮々

上東門院に渡り給ひ侍りける日人々別をしみけ

るにより侍りける

小辨命婦

悲しさにそへてもものの悲しきは別の^{の₁}うちのわかれなりけり

一聲も君につけなむほととぎすこのさみだれは闇にまよふと^{どイ}

枇杷殿の皇太后宮わづらひ給ひける時所をかへ
て試むとて外にわたり給へりけるをかくれたま
ひてのち陽明門院一品親王と申しける枇杷殿に
かへり給へりけるにふかき御帳のうちに菖蒲く
すだまなどの枯れたるが残りたる^{侍りけるイ}を見てよみ侍
りける

辨乳母

菖蒲草涙のたまにぬきかへてをりならぬねをなほぞ掛けつる

かへし

草^イ

江侍従

玉ぬきし菖蒲の糸はありながらよどのはあれむ物とやはみし^{ぬイ}

大納言長家大納言齊信の女にすみ侍りけるを女
身まかりける頃法住寺にこもりゐて侍りけるに

思ひかねきのふの空を眺むれば^{どい}それかと見ゆる雲だにもなし

世のはかなき事をよませ給うける
花山院御製

現とも夢ともえこそわき果てないづれの時をいづれとかせむ

一條院かくれ給うてのまたの年彼の院の花を見

てよめる
源 道 濟

櫻花見るにも悲しなかなかにことしの春は咲かずぞあらまし

親しかりける人身まかりけるによめる
道 命 法師

おくれじと思へど死なぬ我が身かな獨やしらぬ道をゆくらむ

花山院かくれさせ給うての頃よみ侍りける
藤 原 長 能

おいらくの命のあまり長くして君にふたたびわかれぬるかな

後一條院かくれさせ給うての年郭公のなきける

によませ給うける
上 東 門 院

主なき家の櫻を見てよめる

藤原範永朝臣

うゑおきし人のかたみと見ぬだにも宿の櫻をたれかをしまぬ

彈正尹爲尊のみにおくれ侍りてよめる

和泉式部

をしきかな形見にきたる藤衣ただこのごろに朽ちはてぬべし

煩ひ侍りけるがいとどよわくなりけるに如何

なるかたみにか有りけむ山吹なるきぬをぬぎて

女につかはしける

藤原道信朝臣

口なしの園にやわが身入りにけむ思ふ事をもいはでやみぬる

又云ふ身まかりてのち女の夢にみえてかく詠みはべりける

とも

中將道信朝臣身まかりにけるを送りをさめての

朝によめる

藤原賴孝

千載和歌集 卷第九

哀傷歌

花のさかりに藤原爲頼などともにて石藏にまかれりけるを中將宣方朝臣などかかくと侍らざりけむ後の度には必ず侍らむと聞えけるを其年中將も爲頼も身まかりにけるまたの年彼の花を見
て大納言公任の許イにつかはしける

中務卿具平のみこ

春くれば散りにし花も咲きにけりあはれ別のかからましかば

かへし

前大納言公任

行きかへる春やあはれと思ふらむちぎりし人の又もあはねば

あづま路も年も末にやなりぬらむ雪ふりにけるしらかはの關^{リイ}

圓位法師がよませける百首の歌の中に旅の歌と

てよめる

寂蓮法師

いはねふみ峯の椎柴をりしきて雲にやどかるゆふぐれのそら

かくしつつつひにとまらむ蓬生ふしやうの思ひしらるる草まくらかな

旅の歌とてよめる

權律師覺辨

旅寐する木のしたつゆの袖にまたしぐれ降るなり小夜の中山

攝政右大臣の時家の歌合に旅の歌とてよめる 藤原資忠

旅寐するいほりをすぐる村時雨なごりまでこそ袖はぬれけれ

旅の歌とてよめる 大中臣親宗

霞もる不破の關屋にたびねして夢をもえこそとほさざりけれ

心のほかなる事ありて知らぬ國に侍りける時よ

める 平康頼

かくばかり憂身のほどもわすられてなほ戀しきは都なりけり

さつまがた沖の小島にわれはありと親にはつけよ八重の潮風

羈中歳暮といへる心をよめる 僧都印性

旅宿の心をよみ侍りける

二品親王

よしさらば磯のとまやに旅寐せむ波かけずとて濡れぬ袖かは

旅の歌とてよみ侍りける

法印慈圓

旅の世にまた旅寐して草まくら夢のうちにもゆめを見るかな

右兵衛督隆房

草まくらかりねの夢にいくたびか馴れし都にゆきかへるらむ

關路曉月といへる心をよめる

法眼兼覺

いつもかくあり明の月のあけがたはものや悲しき須磨の關守

百首の歌よみ侍りける時旅の歌とてよめる

藤原家隆

旅寐する須磨の浦路のさよ千鳥こゑこそでの波はかけけれ

修行にまかりありきけるに野中に宿して侍りけ

る夜旅の枕の露けく侍りけるによめる

圓立法師

もしほ草しきつの浦の寐覺にはしぐれにのみや袖はぬれける

源 仲 綱

玉藻ふく磯屋がしたにもる時雨たびねの袖もしほたれよとや

太皇太后宮小侍從

草枕おなじたびねのそでにまた夜半の時雨もやどはかりけり^{の₁}

家に百首の歌よませ侍りける時旅の歌とてよみ

侍りける

攝政前右大臣

はるばるとつものりの沖をこぎゆけば岸の松風とほざかるなり

刑部卿賴輔

わたの原しほぢ遙に見わたせばくもと波とはひとつなりけり

皇太后宮大夫俊成

あばれなる野島が崎のいほりかな露おくそでに波もかけけり

月見ればまづ都こそ戀しけれ待つらむとおもふ人はなけれど

夜逢坂の關を過ぐるとてよめる
祝部成仲

逢坂のせきには人もなかりけりいはまの水のもるにまかせて

中院の右大臣の家にて獨行關路といへる心をよ

み侍りける
大納言定房

こえて行くともやなからむ逢坂の關のしみづの影はなれなば

客衣露重といへる心をよみ侍りける
前大僧正覺忠

旅衣あさたつ小野の露しけみしほりも敢へずしのぶもぢずり

住吉の社の歌合とて人々よみ侍りけるととき旅宿

時雨といへる心をよみ侍りける
右近大將實房

風のおとにわきぞかねまし松が根の枕にもらぬ時雨なりせば

俊惠法師

さだめなきうき世の中としりぬれば何處も旅の心地こそすれ

下野國にまかりける時尾張國なるみといふ所に

てよみ侍りける

前中納言師仲

おほつかないかになるみの果ならむ行方もしらぬ旅の悲しさ

あづまの方にまかりける時ゆくさき遙におほえ

侍りければよめる

左京大夫脩範

日をへつつ行くにはるけき道なれどすゑを都と思はましかば

海邊時雨といへる心をよみ侍りける

讀人しらす

かくまでは哀ならじをしぐるとも磯の松が根まくらならずば

尾張國にしるよしありてしばし侍りける頃人の

許より都のことは忘れぬるといひて侍りければ

遣しける

道因法師

藤原季通朝臣

さらしなやをばすて山に月みむと都にたれかわれを知るらむ

待賢門院堀河

道すがら心もそらにながめやるみやこの山のくもがくれぬる

同院安藝

ささの葉をゆふ露ながら折りしけば玉しくいちる旅の草まくらかな

皇太后宮大夫俊成

浦づたふいそのとまやのかぢ枕ききもならはぬ波のおとかな

世をそむきて後修行し侍りけるに海路にて月を

見てよめる

圓位法師

わたの原はるかになみをへだて來て都にいでし月を見るかな

高野にまうで侍りける道にてよみ侍りける

高野法親王覺法

津守有基

ことまだしとてとどめければよめる
住の江のまつらむとのみ歎きつつ心つくしにとしを經るかな

天仁元年齋宮群行の時忘井といふ所にてよめる 齋宮 甲斐

別れゆく都のかたの戀しきにいざむすび見むわすれ井のみづ

法性寺入道内大臣の時に歌合に旅宿雁といへる

心を

源雅光

小夜ふかきくもるの雁もおとすなり我ひとりやは旅の空なる

百首の歌めしける時旅の歌とてよませ給うける 崇徳院御製

かりころも袖の涙にやどる夜は月もたびねのこちこそすれ

松が根の枕もなにかあだならむたまの床とてつねのそこかは

大炊御門右大臣

花咲きし野邊のけしきも霜がれぬこれにてぞ知る旅の日數を

める

中納言國信

波の上に有明の月を見ましやは須磨の關屋にやどらざりせば

行路雪初雪イといへる心をよみ侍りける

八條前太政大臣

夜な夜なの旅寐のところに風さえてはつ雪ふれるさやの中やま

海づらに船ながらあかしてよみ侍りける

和泉式部

水の上に浮寐をしてぞ思ひしる斯れば鴛は鳴くにぞありける

丹後國にまかりける時よめる

赤染衛門

思ふことなくてや見ぞイましよさのうみ天のイの橋立みやこなりせば

攝津國に住み侍りけるを美濃國にくだる事あり

てあづさの山にてよみ侍りける

能因法師

宮木引くあづさの袖をかきわけて難波の浦をとほざかりぬる

大隅の任はてて上らむとしけるを大貳さたする

千載和歌集 卷第八

羈旅歌

題しらず

藤原範永朝臣

ありあけの月も清水にやどりけりこよひは越えじ逢坂のせき

やま

法性寺入道太政大臣内大臣に侍りける時關路月

といへる心をよみ侍りける

中納言師俊

播磨路や須磨の關屋の板びさし月もれとてやまばらなるらむ

月前旅宿といへる心をよめる

藤原基俊

あたら夜を伊勢の濱荻をりしきて妹戀ひしらに見つる月かな

堀河院の御時百首の歌奉りける時旅の歌とてよ

百首の歌よみ侍りけるとき別の心を

藤原定家

わかれても心へだつなたびごろも幾重かさなる山路なりとも

夏の頃こしの國にまかりける人の秋は必ずのほ
りなむ待てといひけるが冬になるまでのほりま
うでござりければ遣しける
西住法師

待てといひて頼めし秋も過ぎぬれば歸る山路の名ぞかひもなき

源惟盛年頃侍ふ者にて箏の琴などをしへ侍りけ
るを土佐國にまかりける時川尻まで送りになう
で來りけるに青海波の祕曲の琴柱たつること教
へ侍りてその曲の譜かきて給ふとて奥に書き

付けて侍りける

をしへ置かたみをふかく忍ばなむ身は青海の波にながれぬ
しづみぬイ入道前太政大臣

人に餞し侍りける曉よみ侍りける
右衛門督頼實

わするなよ姨捨山の月見てもみやこを出づるありあけの空

永らへて有るべき身とし思はねば忘るなとだにえこそ契らね^{もイ}

筑紫にまかれりける男京に上るとてかどでの所

より女の許にのほるべき心地なむせぬなど言へ

りける返しに遣しける

讀人しらす

あはれとし思はむ人はわかれしを心は身よりほかのものは

離れける男の遠きほどにゆくをいかが思ふとい^{ところイ}

ひて侍りければ遣しける

和泉式部

別れてもおなじ都にありしかばいとこのたびの心地やはせし

成尋法師入唐し侍りける時よみ侍りける
成尋法師母

忍べどもこのわかれ路を思ふにはからくれなるの涙こそふれ

百首の歌よみ侍りける時わかれの心をよめる
僧都覺雅

心をも君をも宿にとめ置きてなみだとともに出づるたびかな^{どとめイ}

限あらむ道こそあらめこの世にて別るべしとは思はざりしを

参議資通大貳はててのほりけるに筑前守にて侍

る時つかはしける

藤原經衡

行く君をとどめまほしく思ふかな我も戀しきみやこなれども

かへし

太宰大貳資通

年つもへたる人のこころをおもひやれ君だに戀ふる花のみやこそ

修行に出でて熊野にまうで侍りける時人につか

はしける

道命法師

もろともに行くひともしなき別路に涙ばかりぞとまらざりける

人の法會行ひける導師に越前國にまかりて上り

なむとする時彼の國の願主わかれ惜みけるによ

める

天台座主源心

侍りける

大納言公實

かへりこむほどもさだめぬ別路は都の手ぶりおもひでにせよ

前中納言匡房

行末をまつべき身こそ老いにけれわかれは道の遠きのみかは

源俊頼朝臣

忘るなよかへる山路におとたえて日数は雪のふりつもるとも

修業に出で立ち侍る時いつほどにか歸りまうで

來べきと人のいひ侍りければよめる

大僧正行尊

歸り來む程をばいつといひおかじ定めなき身は人だのめなり

世イ

百首の歌奉りける時わかれの心を

左京大夫顯輔

たのむれど心かはりてかへり來ばこれぞやがての別なるべき

上西門院兵衛

千載和歌集 卷第七

離別歌

宇佐の使の餞しける所にてよみ侍りける

藤原實方朝臣

むかし見し心ばかりをしるべにておもひぞおくるいきの松原

有國大貳になりて下りける時よみ侍りける

前大納言公任

別よりまさりて惜しき命かな君にふたたび逢はむとおもへば

遠所にまかりける人のまうで來て曉歸りけるに

九月盡くる日蟲の音あはれなりければ

紫式部

なきよわるまがきの蟲もとめがたき秋の別やかなしかるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時別の心をよみ

み侍りける

民部卿親範

都にて送り迎ふといそぎしを知らでや今日のとしはくれなむ知りてやとしの今日はくるらむ

籠り居て侍りける年の暮によめる

前左衛門督公光

さりとともと歎き歎きてすごしつる年も今宵にくれはてにけり

年の暮の心をよめる

相模

哀にも暮れゆく年の日数かなかへらむことは夜の間と思ふに

歳暮述懐のこころをよめる

惟宗廣言

數ならぬ身には積らぬ年ならば今日のくれをも歎かざらまし

源光行

をしめどもはかなく暮れてゆく年の忍ぶ昔にかへらましかば

歳暮の心をよみ侍りける

前律師俊宗

一年ははかなき夢の心地して暮れぬる今日ぞおどろかれぬる

かしらおろして後大原に籠りゐて侍りけるに閑

中歳暮といへる心を上人どもよみ侍りけるによ

題しらす

坂上明兼

吳竹のをれふすおとのなかりせばよ深き雪をいかで知らまし

雪の歌とてよめる

藤原爲季

眞柴かる小野の細道あとたえてふかくも雪のなりにけるかな

俊恵法師

雪ふれば木々の梢にさきそむるえだよりほかの花もちりけり

關路滿雪雪イといへる心をよみ侍りける

内大臣

ふるまに跡たえぬれば鈴鹿山ゆきこそ關のとざしなりけれ

年内に梅の花の咲けるを見てよみ侍りける

天台座主明快

山里のかきねの梅はさきにけりかばかりこそは春もにほはめ

雪中歳暮といへる心をよみ侍りける

前大納言實長

かきくらし越路も見えずふる雪にいかでか年の歸りゆくらむ

あともたえしをりも雪に埋れてかへる山路にまよひぬるかな

從三位賴政

こえかねて今ぞ越路をかへる山雪ふる時の名にこそありけれ

顯昭法師

波間より見えしけしきぞかはりぬる雪ふりにけり松がうら嶋

攝政右大臣に侍りける時百首の歌よませ侍りけ

る時雪の歌とてよめる

藤原良清

ふぶきするながらの山を見渡せばをのへをこゆる志賀の浦波

醍醐の清瀧のやしろに歌合し侍りける時よめる 讀人しらす

ふる雪にのきばの竹もうづもれて友こそなけれ冬のやまざと

行路雪といへる心をよめる

西住法師

駒のあととはかつ降る雪に埋れておくるる人やみちまどふらむ

藤原顯綱朝臣

外山にはしばの下葉もちりはててをちの高嶺に雪降りにけり

源俊賴朝臣

ふる雪に谷のかけはしうづもれてこすゑぞ冬の山路なりける

うへのをのこども百首の歌奉りける時雪の歌と

てよませ給うける

二條院御製

雪つもるみねにふぶきや渡るらむこしのみ空にまよふしら雲

遍昭寺にて池邊雪といへる心をよみ侍りける
二品法親王

波かけばみぎはの雪もきえなましこころありても氷る池かな

雪の歌とてよみ侍りける

右大臣

山里のかきねは雪にうづもれて野邊とひとつになりにける哉

右近大將實房

さえ渡る夜半のけしきに深山べの雪のふかさを空にしるかな

藤原清輔朝臣

消ゆるをや都の人はをしむらむ今朝やまざとにはらふしら雪

雪の歌とてよめる

藤原資隆朝臣

霜がれのまがきのうちの雪に雪ふれ見れば菊よりのちの花もありけり

題しらす

仁和寺後入道法親王

たとへても言はむかたなし月影に薄雲かけて降れるしらゆき

前参議教長

みやま路はかつちる雪に埋れていかでか駒のあとをたづねむ

京極前太政大臣の高陽院の家の歌合に雪の歌と

てよめる

治部卿通俊

おしなべて山のしら雪つもれどもしるきは越の高嶺なりけり

月のすむそらには雲もなかりけりうつりしみづは氷へだてて

百首の歌めしける時氷の歌とてよませ給うける 崇徳院御製
つららゐてみがける影の見ゆるかなまことにいまや玉川の水

皇太后宮大夫俊成

月さゆるこほりのうへに霰ふりこころくだくる玉がはのさと

閑居聞霰といへる心をよみ侍りける 左近中將良經

さゆる夜のまきのいたやの獨寐にこころくだけと霰ふるなり

山家雪朝といへる心をよめる 大納言經信

あさどあけて見るぞさびしき片岡のならの廣葉にふれる白雪

百首の歌の中に雪の歌とてよませ給うける 崇徳院御製

夜をこめて谷の戸ほそに風さむみかねてぞしるき嶺のはつ雪

藤原季通朝臣

鴨のゐる入江の葦はしもがれておのれのみこそ青ばなりけり

賀茂重保

おく霜を拂ひかねてやしをれ伏すかつみが下に鶯のなくらむ

月前水鳥といへる心をよめる

前左衛門督公光

芦がものすだく入江の月かけはこほりぞ波のかずにくだくる

冬月といへる心をよめる

平實重

夜をかさねむすぶ氷のしたにさへ心ふかくもすめるつきかな

氷の歌とてよめる

左京辨親宗

いづくにか月はひかりをとどむらむやどりし水も氷るにけり

藤原成家朝臣

冬くればゆくてに人はくまねども氷ぞむすぶやまの井のみづ

道因法師

かたみにや上毛の霜をはらふらむともねの鶯のもろ聲になく

題しらず

紫式部

水鳥を水の上とやよそに見むわれもうきたる世をすぐしつつ

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる

前中納言匡房

みづどりの玉藻のこのうき枕ふかきおもひは誰かまされる

百首の歌めしける時よませ給うける

崇徳院御製

このころのをしはいのうきねぞ哀なる上毛のしもよ下のこほりよ

左京大夫顯輔

難波がた入江をめぐるあしがもの玉藻の床のうきねすらしも

氷初結といへることを

權中納言經房

をし鳥のうきねの床やあれぬらむつららるにけりるい昆陽こやの池水

水鳥の歌とてよめる

道因法師

妹許^{いもが}と佐保の川邊をわけゆけば小夜か更けぬる千鳥鳴くなり

千鳥をよめる

皇太后宮大夫俊成

須磨の關あり明の空になく千鳥かたぶく月はなれもかなしき^や

道因法師

岩こゆるあらいそ波にたつ千鳥こころならずや浦づたふらむ

右大臣

あかつきになりやしぬらむ月影のきよき河原に千鳥なくなり

法印靜賢

霜さえて小夜もながるの浦寒み明けやらすとや千鳥なくらむ

賀茂成保

霜がれの難波の芦のほのほのと明くるみなとに千鳥鳴くなり

水鳥をよめる

源親房

中納言定頼世をのがれてのち山里に侍りける頃

遣し侍りける

中納言定頼女^{母₁}

都^だにさびしさまさるこがらしに嶺のまつかぜ思ひこそやれ

宇治にまかりて侍りける時よめる

中納言定頼

朝ほらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木

堀河院の御時百首の歌奉りける時鷹狩をよめる 藤原仲實

矢^や形^{かた}尾^をの目^ま白^{しろ}の鷹を引きすゑて宇陀の鳥^む立^{たち}を狩りくらしつる

隆源法師

ふる雪にゆくへも見えずはし鷹のをぶさの鈴の音ばかりして

源俊頼朝臣

ゆふまぐれ山かたつきて立つ鳥の羽音に鷹をあはせつるかな

傳大納言道綱家の歌合に千鳥をよめる

藤原ながたふ

ふりはへて人もとひこぬ山里は時雨ばかりぞ過ぎがてにする

かよはイ

圓位法師人々にすすめて百首の歌よませ侍りけ

るとき時雨の歌とてよめる

藤原定家

しぐれつるまやの軒端の程なきにやがてさしいる月の影かな

讀人しらす

たまづさに涙のかかるここちしてしぐるる空に雁のなくなり

山家時雨といへる心を

源仲頼

嶺ごえに檜の葉つたひ音づれてやがて軒端にしぐれ來にけり

題しらす

紀康宗

曉のねざめに過ぐるしぐれこそ漏らでも人のそで濡らしけれ

落葉の心をよめる

藤原盛雅

散りはてて後さへ風をいとふかな紅葉をふけるみやまべの里

うたたねの夢や現にかよふらむ覺めてもおなじ時雨をぞ聞く

前右京權大夫

時雨の歌とてよめる

從三位賴政

山めぐり雲のしたにやなりぬらむすそ野の原に時雨すぐなり

るイ

源師光

しぐれゆく遠をちの外山の峯つづきうつりもあへず雲かへイかるらむ

道因法師

嵐ふく比良のたかねのねわたしにあはれしぐる時雨をよめるイる神無月かな

堀河院の御時百首の歌奉りける時の時雨の歌 中納言國信

深山べのしぐれてわたる數ごとにかごとがましき玉かしは哉

源俊賴朝臣

木の葉のみ散ると思ひし時雨には涙もたへぬ物にぞありける

一二條太皇太后宮肥後

寐覺して誰かきくらむこの頃の木の葉にかはるよはの時雨を

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家の

歌合に時雨をよめる

源 定 信

おとにさへ袂をぬらすしぐれかなまきの板屋の夜半の寐覺に

崇徳院に百首の歌奉りけるととき落葉の歌とてよ

める

皇太后宮大夫俊成

まばらなる槇の板屋に音はしてもらぬ時雨や木の葉なるらむ

時雨の歌とてよめる

仁和寺後入道法親王

木の葉ちるとばかり聞きてやみなましもらで時雨の山巡りせば

曉更時雨といへる心をよみ侍りける

攝政前右大臣

ひとりねの涙やそらにかよふらむ時雨にくもるありあけの月

藤原隆信朝臣

外山ふく嵐のかぜのおと聞けばまだきに冬のおくぞ知らるる

百首の歌奉りける時初冬の歌とてよみ侍りける 大炊御門右大臣

はつしもや置きはじむらむ曉めけいの鐘のおとこそほのきこゆなれ

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる 前中納言匡房

高砂のをのへの鐘のおとすなりあかつきかけて霜やおくらむ

藤原基俊

楸生ひさぎふる小野の浅茅におく霜の白きをみれば夜やふけぬらむ

冬の初の歌とて 藤原定家

冬來ては一夜ふたよを玉笹の葉わけのしものところせきまで

題しらず 藤原もとし

霜さえて枯れゆく小野の岡べなる櫓の廣葉にしぐれ降るなり

馬内侍

ひまもなく散るもみぢ葉に埋れて庭のけしきも冬ごもりけり

大炊御門右大臣

さまざまの草葉も今は霜がれぬ野邊より冬はたちて來つらむ

大納言隆

すむ水を心なしとはたれかいふこほりぞ冬のはじめをも知る

前參議教長

秋のうちは哀しらせし風の音のはけしさも添ふる冬は來にけり

花園左大臣家小大進

わがわがせい
わぎもこが上裳の裾の水なみにけさこそ冬はたちはじめけれ

藤原孝善

山家初冬をよめる

いつのまに笈のみづのこほるらむさこそ嵐のおとのかはらめ

題しらず

和泉式部

千載和歌集 卷第六

冬 歌

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき初冬の心を

よみ侍りける

大納言公實

昨日こそ秋はくれしかいつの間に岩間のみづのうす氷るらむ

源俊頼朝臣

いかばかり秋のなごりを眺めましけさは木の葉に嵐ふかずば

藤原仲實朝臣

いづみ川水のみわたのふしつけに岩間柴イもイのこほる冬は來にけり

百首の歌めしける時初冬の心をよませ給うける 崇徳院御製

あけぬともなほ秋風は音づれて野邊のけしきよ面がはりすな

承暦二年内裏の歌合に紅葉をよめる

前中納言匡房

龍田山ちるもみぢ葉を來てみればあきは麓にかへるなりけり

百首の歌奉りける時九月盡の心をよめる

花園左大臣家小大進

今宵まで秋はかぎれとさだめける神代もさらに恨めしきかな

散りかかる谷の小川の色づけば木もみぢイの葉や水秋イのしぐれなるらむ

落葉浮水といへる心をよみ侍りける

後三條内大臣

くれてゆく秋をばみづやさそふらむ紅葉ながれぬ山川ぞなき

百首の歌めしけるとき九月盡の心をよませ給う

ける

崇徳院御製

もみぢ葉のちりゆく方を尋ねれば秋もあらしの聲のみぞする

山寺秋暮といへる心をよみ侍りける

前大僧正覺忠

さらぬだに心ほそきを山ざとのかねさへ秋のくれを告ぐなり

雲居寺の結縁經の後宴に歌合し侍りけるに九月

盡の心をよみ侍りける

瞻西上人

からにしき幣ぬきにたちもてゆく秋もけふや手向の山路こゆらむ

源俊賴朝臣

賀茂成保

吹きみだるははそが原を見渡せばいろなき風も紅葉しにけり

松間落葉といへる心をよめる

藤原朝仲

色かへぬ松ふくかぜの音はして散るははその紅葉なりけり

故郷落葉といへる心をよめる

惟宗廣言

ふるさとの庭は木の葉にいろかへてかはらぬ松ぞ緑なりける

題しらす

法橋慈辨

ちりつもる木の葉も風にさそはれて庭にも秋のくれにける哉

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる

源俊賴朝臣

秋の田に紅葉ちりける山ざとをこともおろかに思ひけるかな

百首の歌よませ侍りけるととき紅葉の歌とてよみ

侍りける

攝政前右大臣

題しらす

覺盛法師

秋といへば岩田のをののははそ原時雨もまたす紅葉しにけり

近衛院の御時禁庭落葉といへる心をよめる
藤原公重朝臣

庭のおもに散りてつもれるもみぢ葉は九重にしく錦なりけり

大井川に紅葉見にまかりてよめる
俊恵法師

今日みれば嵐の山は大井川紅葉吹きおろす名にこそありけれ

道因法師

大井川ながれておつる紅葉かなさそふは峯のあらしのみかは

百首の歌の中に紅葉をよめる
藤原清輔朝臣

今ぞしる手向の山は紅葉のぬさと散りかふ名にこそありけれ

落葉の心をよめる
祝部成仲

龍田山ふもとのさとはとほけれど嵐のつてにもみぢをぞ知る

大納言實房

清見がたせきにとまらでゆく船は嵐のさそふ木の葉なりけり

權中納言實守

もみぢ葉を關もる神に手向けおきて逢坂山をすぐる木がらし

左大辨親宗

もみぢ葉のみな紅にちりしより名のみなりけりしらかはの關

從三位賴政

都にはまだあを葉にて見しかどももみぢ散りしく白川のせき

刑部卿範兼

湖上落葉といへる心をよめる

ささ波や比良の高嶺の山おろしに紅葉を海のものとなしつる

藤原清輔朝臣

百首の歌奉りける時よめる

龍田山松のむらだち無かりせばいづくか残るみどりならまし

宇治の前太政大臣紅葉見侍りけるによめる

小

辨

君見むところやしけむ龍田姫もみぢのにしき色をつくせり

紅葉留客といへる心をよめる

素意法師

故郷にとふ人あらばもみぢ葉のちりなむ後をまてとこたへよ

歌合し侍りける時紅葉の歌とてよめる

左京大夫顯輔

山姫にちへの錦を手向けても散るもみぢ葉をいかにとどめむ

月照紅葉といへる心をのこどもつかうまつり

ける時よませ給うける

院御製

もみぢ葉につきの光をさしそへてこれやあかぢの錦なるらむ

嘉應二年法住寺殿の殿上の歌合に關路落葉とい

へる心をよみ侍りける

右のおほいまうち君

山おろしに浦づたひする紅葉かないかがはすべき須磨の關守

ことごと悲しかりけりむべしこそあきの心を愁うれひといひけれ

瞻西上人雲居寺にて結縁經の後宴に歌合し侍り

けるに野風の心をよめる

藤原基俊

秋にあへずさこそは葛の色づかめあな恨めしの風のけしきや

紅葉の心をよみ侍りける

仁和寺後入道法親王覺性

初時雨ふるほどもなくしもとゆふかつらぎ山は色づきにけり

覺延法師

村雲のしぐれて染むるもみぢ葉は薄く濃くこそ色も見えけれ

秋の歌とてよめる

藤原定家

しぐれ行くよものこすゑの色よりも秋は夕のかはるなりけり

題しらす

道命法師

おほろけの色とや人の思ふらむをぐらの山をてらすもみぢ葉

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家の

歌合に残菊をよめる

藤原基俊

今朝見ればさながら霜をいただきておきなさびゆく白菊の花

月照菊花といへる心をよみ侍りける

内大臣

白菊の葉におくつゆにやどらずば花とぞ見ましてらす月かけ

籬菊如雪といへる心をよみ侍りける

前大僧正行慶

雪ならばまがきのみは積らじと思ひとくにぞしらぎくの花

菊の歌とてよめる

祐盛法師

朝な朝なまがきの菊のうつろへば露さへ色のかはりゆくかな

百首の歌よみ侍りける時菊の歌とてよめる

藤原家隆

冴えわたる光を霜にまがへてや月にうつろふしらぎくのはな

崇徳院に百首の歌奉りける時秋の歌とてよめる
藤原季通

源俊賴朝臣

まつかぜの音だにあきはさびしきに衣うつなりたまがはの里

藤原基

たがために如何にうてばか唐衣ちたびやちたび聲のうらむる

旅宿擣衣といへる心をよめる

俊盛法師

衣うつ音をきくにぞ知られぬる里とほからぬくさまくらとは

霧の歌とてよめる

法師宗圓

夕霧や秋のあはれをこめつらむ分け入るそでに露のおきそふ

暮尋草花といへる心をよませ給うける

崇徳院御製

秋ふかみたそがれ時のふぢばかま匂ふは名のる心地こそすれ

百首の歌奉りける時よめる

前參議親隆

如何にしていはまも見えぬ夕霧となせの筏おちてきつらむ

式子内親王

草も木も秋のすゑ葉は見えゆくに月こそ色はもイかはらざりけれ

後冷泉院の御時九月十三夜月宴侍りけるによみ

侍りける

大宮の右のおほいまうち君

すむ水にさやけき影のうつればや今宵の月の名にながるらむ

十三夜の心をよめる

讀人しらす

秋の月ちぢに心をくだき來てこよひ一夜にたへずもあるかな

月前擣衣といへる心を

仁和寺入道法親王覺性

さ夜ふけてきぬたの音ぞたゆむなる月を見つつや衣うつらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時擣衣の心をよ

み侍りける

大納言公實

戀ひつつや妹がうつらむ唐衣きぬたのおとのそらになるまで

秋の夜のあはれは誰もしるものを我のみとなくきりぎりす哉

蟲聲非一といふ心をよみ侍りける

左近中將良經

さまざまのあさぢが原の蟲のねを哀ひとつに聞きぞなしつる

百首の歌奉りける時よみ侍りける

大炊御門右大臣

夜をかさね聲よわりゆく蟲のねに秋のくれぬる程をしるかな

蝨の近くなきけるをよませ給うける

花山院御製

秋深くなりにつけらしなきりぎりす牀ゆかのあたりに聲きこゆなり

保延のころほひ身を恨むる百首の歌よみ侍りけ

る時蟲の歌とてよめる

さりともとおもふ心も蟲の音もよわり果てぬる秋のくれかな

題しらす

道性法親王

蟲の音もまれになり行くあだし野にひとり秋なる月の影かな

さびしさを何にたとへむを鹿なく深山のさとの明がたのそら

長覺法師

いかばかり露けかるらむさを鹿の妻こひかぬる小野の草ぶし

寂蓮法師

をのへより門田にかよふ秋風にいな葉をわたるさを鹿のこゑ

題しらす
讀人しらす

おどろかす音こそよるの小山田は人なきよりも寂しかりけれ

源兼昌

我が門のおくてのひたに驚きてむろのかり田に鳴ぞたつなる

寂蓮法師

蟲のねは淺茅がもとにうづもれて秋は末葉の色にぞありける

藤原兼實朝臣

さを鹿のつまとふ聲もいかなれや夕はわきてかなしかるらむ

右¹ 左京大夫秀能

聞くままにかたしく袖のぬるるかな鹿の聲にも露やそふらむ

法 印 慈 圓

山ざとの曉がたのしかの音は夜半のあはれのかぎりなりけり

俊 惠 法 師

外^{よそ}にだに身にしむ暮の鹿の音をいかなる妻かつれなかるらむ

道 因 法 師

夕まぐれさてもや秋はかなしきと鹿の音きかぬ人にとはばや

賀 茂 政 平

つねよりも秋の夕をあはれとは鹿の音にてやおもひそめけむ

惟 宗 廣 言

さらぬだに夕さびしきやまざとの霧のまがきにを鹿なくなり

夜泊鹿といふ心をよめる

刑部卿範兼

みなと川うきねのところに聞ゆなりいく田のおくのさを鹿の聲

藤原隆信朝臣

うきねする猪名のみなとにきこゆなり鹿の音おろす峯の松風

俊恵法師

夜をこめて明石のせとを漕ぎ出れば遙におくるさを鹿のこゑ

道因法師

みなと川夜船こぎいづる追風にしかの聲さへせとわたるなり

覺延法師

鹿聲兩方といふ心を

宮城野の小萩が原をゆくほどは鹿の音をさへわけて聞くかな

鹿の歌とてよめる

左京大夫修範

露さむみうらがれもてく秋の野にさびしくもある風の音かな

承暦二年内裏の歌合によめる

藤原正家朝臣

夕されば小野の萩原ふく風にさびしくもあるか鹿の鳴くなる

堀河院の御時百首の歌奉りける時

一二條太皇太后宮肥後

みむろやまおろす嵐のさびしきにつまとふ鹿の聲たぐふなり

大納言公實

そまがたに道やまどへるさを鹿の妻とふ聲のしけくもある哉

題しらず

輔仁のみこ

秋の夜はおなじ尾上になく鹿のふけゆくままに近くなるかな

田上の山里にて鹿のなくを聞きてよみ侍りける 源俊頼朝臣

さを鹿の鳴く音は野邊に聞ゆれど涙は床のものにぞありける

百首の歌奉りける時よめる

待賢門院堀河

千載和歌集 卷第五

秋歌下

題しらず

大貳三位

はるかなるもろこしまでも行く物は秋のねざめの心なりけり

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる

藤原仲實朝臣

山ざとはさびしかりけりこがらしの吹く夕暮のひぐらしの聲

崇徳院に百首の歌奉りける時秋の歌とてよめる 藤原季通朝臣

秋の夜は松をはらはぬ風だにも悲しきことの音をたてずやは

法性寺入道前太政大臣前内大臣に侍りける時の

家の歌合に野風といへる心をよめる

藤原時昌

心をよみ侍りける

源俊頼朝臣

てる月の旅寐のとこやしもとゆふかつらぎ山のたにがはの水

てる月のかけさえぬれば淺茅原ゆきのしたにも蟲はなくなり

月照草露といへる心をよめる

藤原親盛

あさぢ原葉末にむすぶ露ごとにひかりを分けてやどる月かな

題しらす

藤原清輔朝臣

ふけにける我がよの秋ぞ哀なるかたぶく月はまたもいでなむ

けり

刑部卿頼輔

身のうさの秋はわするものならば涙くもらで月は見てまし

紫式部

おほかたの秋のあはれをおもひやれ月に心はあくがれぬとも

前大納言成通

類なくつらしとぞおもふ秋の夜の月を残して明くるしのめ

法性寺入道前太政大臣の家にて澗底月といへる

る

右衛門督頼實

つねよりも身にぞしみける秋の野に月すむ夜半の萩のうは風

海邊月といへる心をよめる

俊 恵 法 師

ながめやる心のはてぞなかりけるあかしのおきにすめる月影

賀茂社の後番の歌合とて神主重保歌よませ侍り

ける時よめる

權中納言長方

やほかゆく濱の眞砂をしきかへて玉になしつるあきの夜の月

藤原公時朝臣

岩間ゆくみたらしがはの音さえて月やむすばぬこほりならむ

湖上月といへる心をよめる

藤原顯家朝臣

月かけはきえぬ氷と見えながらささなみよする志賀のから崎

月前蟲といへる心をよめる

頼 圓 法 師

しほがまの浦ふく風にきりはれて八十嶋かけてすめる月かけ

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りけるととき月

毎秋友といへる心をよませ侍りける時よめる 源俊頼朝臣

思ひぐまなくても年のへぬるかなもの言ひかはせ秋の夜の月

藤原基俊

山の端にますみの鏡かけたりと見ゆるは月の出づるなりけり

藤原道經

秋の夜や天の川瀬はこほるらむ月のひかりの冴えまさるかな

法性寺入道前太政大臣の家に月の歌よませ侍り

ける時よめる

太宰大貳重家

遠ざかるおとはせねども月きよみ氷とみゆる志賀のうらなみ

百首の歌よみ侍りける時月の歌とてよみ侍りけ

て遣しける中^のに月の歌

右大臣

月みればはるかに思ふさらしなの山も心のうちにぞありける

權中納言俊忠の桂の家にて水上月といへる心を

よみ侍りける

源俊賴朝臣

あすもこむ野路の玉川はぎこえていろなる波に月やどりけり

百首の歌の中に月の歌とてよませ給うける
崇徳院御製

玉よする浦わのかぜに空はれてひかりをかはす秋の夜のつき

大炊御門右大臣

さ夜ふけて富士のたかねにすむ月は烟ばかりや曇るなるらむ

皇太后宮大夫俊成

石ばしる水のしらたまかす見えてきよたき川にすめる月かな

藤原清輔朝臣

月の歌三十首よませ侍りける時よみ侍りける 法性寺入道前太政大臣

秋の月たかねの雲のあなたにて晴れゆく空のくるる待ちけり

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる 源俊頼朝臣

こがらしの雲ふき拂ふ高嶺よりさえても月のすみのほるかな

隆源法師

いづこにも月はわかじを如何なればさやけかるらむ更科の山

攝政右大臣家に百首の歌よませ侍りける時月の

歌とてよめる 藤原隆信朝臣

いでぬより月見よとこそさえにけれ姨捨山のゆふぐれのそら

月の歌とてよみ侍りける 前中納言雅頼

くまもなきみ空に秋の月すめばにはは冬のこほりをぞしく

皇太后宮大夫俊成十首の歌よみ侍りける時よみ

時しもあれ秋ふる里にきてみれば庭は野邊ともなりにける哉

住み侍りける山里をしばし外に侍りて歸りたり

けるに前栽のいたくしをれたりければよめる 小

辨

宿かれて幾日もあらぬに鹿のなく秋の野邊ともなりにける哉

思野花といへる心をよめる

藤原伊家

今はしもほに出でぬらむ東路あづまぢの岩田の小野のしののをすすき

秋の歌とてよみ侍りける

攝政前右大臣

夕されば小野のあさぢふたまちりて心くだくる風のおとかな

前大僧正覺忠

ときはなる青葉の山も秋くれば色こそかへねさびしかりけり

月の歌あまたよみ侍りける時よめる

權大納言實家

あきの夜の心をつくすはじめとてほのかに見ゆる夕月夜かな

はかなさを我が身の上によそふれば袂にかかる秋のゆふつゆ

藤原清輔朝臣

龍田姫かざしの玉の緒をよわみ亂れにけりと見ゆるしらつゆ

題しらず

藤原季經朝臣

ゆふまぐれ萩ふく風のおときけば袂よりこそつゆはこほるれ

圓位法師

おほかたの露には何のなるならむ袂におくはなみだなりけり

法輪寺にまうで侍りけるにさが野の花をみてよ

める

道命法師

はなすすき招くはさがと知りながら止まるものは心なりけり

ひさしく住ます侍りける所に秋頃まかりわたり

てよみ侍りける

前大納言公任

野分する野邊のけしきを見わ^{見るときはイ}たせば心なき人あらじとぞ思ふ

皇太后宮大夫俊成

夕されば野邊のあきかぜ身にしみて鶉なくなりふかくさの里

題しらず

源俊頼朝臣

何となくものぞかなしき菅原やふしみのさとの秋のゆふぐれ

百首の歌よませ侍る時草花の心^{歌とてイ}をよみ侍りける 攝政前右大臣

さまざまの花をば宿にうつしうゑつ鹿の音さそへ野邊の秋風

野花露といへる心をよみ侍りける 二品親王

秋の野の千草のいろにうつろへば花ぞかへりて露をそめける

題しらず 法印慈圓

草木まで秋のあはれをしのべばや野にも山にも露こほるらむ

崇徳院に百首の歌奉りける時よめる 待賢門院堀河

歎くこと侍りける時女郎花をみてよみ侍りける 前左衛門督公光
をみなへし涙に露やおきそふる手折ればいとど袖のしをるる

題しらす

藤原行家

吹く風にをれふしぬれば女郎花まがきぞ花のまくらなりける

攝政前右大臣家に歌合し侍りけるとき野徑秋夕

といへる心をよめる

藤原盛方朝臣

夕されば萱がしけみになき交す蟲のねをさへ分けつつぞゆく

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる

源俊賴朝臣

さまざまに心ぞとまる宮城野のはなのいろいろ蟲のこゑごゑ

野花留客といへる心をよめる

秋くれば宿にとまるを旅寐にて野邊こそ常のすみかなりけれ

百首の歌奉りける時秋の歌とて詠める

藤原季通朝臣

人もがな見せもきかせも萩がはな咲く夕かけのひぐらしの聲

藤原伊家

秋山のふもとをこむるうす霧はすそのの萩のまがきなりけり

藤原基俊

宮城野のはぎやをじかの妻ならむ花さきしよりこゑの色なる

長覺法師

心をば千草のいろに染むれどもそでにうつるは萩がはなすり

堀河院の御時百首の歌奉りける時よみ侍りける 大納言師頼

露しけきあしたのはらの女郎花ひとえだ折らむ袖はぬるとも

法性寺入道前太政大臣の家にて女郎花隨風とい

へる心をよめる 前中納言雅兼

をみなへし靡くを見れば秋風のふきくる末もなつかしきかな

堀河院の御時百首の歌奉りけるととき刈萱をよみ

侍りける

大納言師頼

秋くればおもひみだるるかる萱の下葉や人のこころなるらむ

題しらす

親王家甲斐

おしなべて草葉のうへをふく風にまづしたをるる野邊の刈萱

雲居寺瞻西上人房にて歌合し侍りける時よめる 藤原道經

ふみしだき朝ゆく鹿や過ぎぬらむしどろに見ゆる野路^邊の刈萱

草花告秋といへる心をよめる 法印靜賢

秋きぬと風もつけてし山ざとになほほのめかす花すすきかな

題しらす 讀人しらす

いかなれば上葉をわたる秋風に下をれぬらむ野邊のかるかや

和泉式部

百首の歌奉りける時七夕の心をよめる

大納言 隆季

棚機にの天つひれ吹くあき風に八十のふなつを御ふねいづらし

堀河院の御時百首の歌奉りける時よみ侍りける
二條太皇太后宮肥後
たなばたのあまの羽衣かさねてもあかぬ契やなほむすぶらむ

前齋 宮河内

戀ひ戀ひてこよひばかりや棚機の枕にちりのつもらざるらむ

七夕の心をよめる

源俊頼 朝臣

七夕のあまの河原のいはまくら交しもはてず明けぬこの夜は

百首の歌の中に七夕の心をよませ給うける
崇徳院 御製

たなばたに花ぞめ衣ぬぎかせばあかつき露のかへすなりけり

七夕後朝の心をよみ侍りける
土御門右大臣

天の川こころをくみて思ふにも袖こそ濡るれあかつきのそら

初秋の心をよめる

寂然法師

秋はきぬ年はな^{もイ}かばにすぎぬとや萩ふく風のおどろかすらむ

讀人しらす

木の葉だにいろづくほどはあるものを秋風ふけばちる涙かな

社頭立秋といへる心をよめる
賀茂重政

神山のまつ吹く風もけふよりは色はかはらでおとぞ身にしむ

郁芳門院の前裁合^{せんざいはせ}に萩をよめる
大藏卿行宗

物ごとに秋のけしきはしるけれどまづ身にしむは萩の上かせ

初秋の心を
源俊賴朝臣

秋風や涙もよほすつまならむおとづれしよりそでのかわかぬ

七夕の心をよみ侍りける
攝政前右大臣

たなばたの心のうちやいかならむ待ち來し今日の夕暮のそら

千載和歌集 卷第四

秋歌上

秋立日よみ侍りける

秋たつと聞きつるからにわが宿の萩の葉風のふきかはる侍従の乳母
かなむ

二品 法親王

浅ぢふの露けくもあるか秋來ぬと目にもさやかに見えける物を

百首の歌奉りける時秋立心をよめる
待賢門院堀河

秋の來るけしきの森の下風にたちそふものはあはれなりけり

皇太后宮大夫俊成

八重葎さしこもりにし蓬生にいかでかあきの分けてきつらむ

秋風はなみとともにや越えぬらむまだきすすしき末のまつ山

刑部卿頼輔歌合し侍りけるに納涼の心をよみ侍

りける

前參議教長

岩たたく谷のみづのみおとづれて夏にしられぬみやまべの里

藤原盛方

岩まより落ちくる瀧のしら糸はむすばで見るも涼しかりけり

百首の歌奉りける時みな月のみそぎをよめる
藤原季通朝臣

今日くれば麻の立枝にゆふかけてなつみなづきの祓禊をぞする

皇太后宮大夫俊成

いつとても惜しくやはあらぬ年月をみそぎにすつる夏の暮哉

みな月祓をよめる
讀人しらす

みそぎする川瀬にさ夜やふけぬらむかへる袂に秋かぜぞふく

夏夜曉月といへる心をよめる

藤原經家朝臣

我ながら程なき夜半やをしむ^からむなほ山の端にありあけの月

夏月をよめる

祝部宿禰成仲

夏の夜の月の光はさしながら如何にあけぬるあまの戸ならむ

雨後月明といへる心をよめる

俊恵法師

ゆふ立のまだ晴れやらぬ雲間よりおなじ空ともみえぬ月かな

大宮の前太政大臣の家にて夏月如秋といへる心

をよめる

藤原敦仲

小萩はらまだ花さかぬみやぎ野の鹿やこよひの月に鳴くらむ

草花先秋といへる心をよめる

顯昭法師

夏ごろもすそ野の原をわけゆけばをりたがへたる萩が花すり

松風秋近といへる心をよめる

藤原親盛

百首の歌奉りける時氷室の歌とてよみ侍りける 大炊御門右大臣
あたりさへ涼しかりけり氷室山まかせしみづの氷るのみかは

題しらす

法 印 慈 圓

山かけや岩もるしみづおとさえて夏のほかなるひぐらしの聲

藤 原 道 經

ゆふされば玉るるかずも見えねども關の小川のおとぞ涼しき

俊 惠 法 師

岩間もる清水を宿にせきとめてほかより夏をすごしつるかな

顯 昭 法 師

さらぬだに光すすしき夏の夜の月をしみづにやどしつるかな

てぞみるイ

泉邊納涼といへる心をよめる

法 眼 實 快

せきとむる山水にみがくれてすみけるものを秋のけしきは

哀にもみさをにもゆる螢かな聲たてつべきこの世とおもふに
あさりせし水のみさびに閉ぢられてひしの浮葉に蛙なくなり

水草隔船といへる心をよみ侍りける

法性寺入道前太政大臣

夏ふかみ玉江にしける葦の葉のそよぐや船のかよふなるらむ

百首の歌の中に鵜川の心をよませ給うける
崇徳院御製

早瀬川みをさかのほる鵜飼舟まづこの世にもいかがくるしき

撫子の花のさかりなりけるを見てよめる
和泉式部

見るになほこの世の物とおほえぬは唐撫子の花にぞありける

松下逐涼といへる心をよみ侍りける
中務卿具平親王

とこなつの花もわすれて秋風をまつの蔭にて今日はくれぬる

氷室をよみ侍りける
仁和寺後入道法親王覺性

春秋ものちのかたみはなきものを氷室ぞ冬のなごりなりける

權中納言俊忠中將に侍りける時歌合し侍りける

に照射の歌とてよめる

藤原顯綱朝臣

五月やみしけき端山にたつ鹿はともしにのみぞ人にしらるる

ともしの歌とてよめる

大藏卿行宗

ともしするほぐしの松ももえつきて歸るに迷ふしもつ闇かな

讀人しらず

山ふかみほぐしの松はつきぬれど鹿におもひは猶かくるかな

賀茂重保

ともしする火串^{ほぐし}を妻と思へばやあひ見て鹿の身をこがすらむ

百首の歌奉りける時螢の歌とてよめる

藤原季通朝臣

昔わがあつめし物をおもひ出でてみなれがほにも來る螢かな

題しらず

源俊賴朝臣

古をこひつつひとり越えくればなきあふ山のほととぎすかな

瞻西上人雲居寺うんこじの房にて未飽郭公といへる心を

よみ侍りける

源俊頼朝臣

などてかく思ひそめけむほととぎす雪のみ山の法のこゑかは

堀河院の御時きさいの宮にて閏五月郭公といへ

る心をよみ侍りける

權中納言俊忠

さつきやみふたむらやまの郭公みねつづきなく聲をきくかな

同じ御時百首の歌奉りける時照射さもしの心をよみ侍

りける

前中納言匡房

照射する宮城が原のした露にしのぶもぢずりかわくまよぞなき

修理大夫顯季

五月さつきやみさやまの峯にともす火はくもの絶間の星かとぞ見る

るに五月雨の心をよめる

源行頼朝臣

五月雨に室のやしまを見わたせば煙はなみのうへよりぞ立つ

旅泊五月雨といへる心をよめる

源仲正

五月雨はとまの雫にそで濡れてあなしほとけたれいの波のうきねや

月前郭公といへる心をよめる

賀茂成保

五月雨のくものたえまに月さして山ほととぎす空になくなり

雨中郭公といへる心をよみ侍りける

按察使資賢

をちかへり濡るともきなけ郭公いまいくかかはさみだれの空

關路郭公といへる心をよめる

中納言師時

あふ坂のやまほととぎす名のるなり關もる神や空にとふらむ

後一條院の御八講に菩提樹院に参りて侍りける

に神樂岡にて郭公の鳴きければよめる

律師慶暹

五月雨に淺澤沼のはなかつみかつ見るままにかくれゆくかな

崇徳院に百首の歌奉りける時よめる

左京大夫顯輔

五月雨に日數へぬれば刈りつみし閑野しづやの小菅くちやしぬらむ

前參議親隆

五月雨は水にイの水嵩みかさや増るらしみをのしるしも見えすなり行く

皇太后宮大夫俊成

五月雨はたく藻の烟うちしめりしほたれまさる須磨のうら人

藤原濟輔朝臣

時しもあれ水の水菰みこもをかりあけて乾ほさでくたしつ五月雨の空

待賢門院安藝

五月雨はあまのもしほ木朽ちにけり浦邊に煙たえてほど經ぬ

攝政右大臣に侍りける時百首の歌よませ侍りけ

百首の歌めしける時花橘の歌とてよませ給うけ

る

崇徳院御製

五月雨に花たちばなのかをる夜は月すむ秋もさもあらばあれ

題しらす

無品親王輔仁

五月雨におもひこそやれいにしへの草の庵の夜半のさびしさ

堀河院の御時百首の歌奉りける時五月雨の歌と

てよめる

藤原基俊

いとどしくしづの庵のいぶせきにうの花くたし五月雨ぞ降る

源俊賴朝臣

おほつかないつか晴るべきわび人のおもふ心や五月雨のそら

中院入道左大臣中將に侍りける時歌合し侍りけ

るに五月雨の歌とてよめる

藤原顯仲朝臣

軒ちかく今日しもきなく郭公ねをやあやめに添へてふくらむ

後朱雀院の御時長久二年五月一品内親王の歌合

に花橘をよめる

枇杷皇太后宮
皇太后宮の五節

ただならぬはな橘のにほひかなよそふる袖はたれとなけれど

題しらず

藤原もとし

風にちる花たちばなに袖しめて我が思ふ妹がたまくらにせむ

藤原家基

うき雲のいさよふよひの村雨におひ風しるくにほふたちばな

左大辨親宗

我がやどの花たちばなに吹く風をたが里よりとたれ眺^がむらむ

花橘薫枕といへる心をよめる

藤原公衡朝臣

をりしもあれ花たちばなのかをるかな昔をみつるゆめの枕に

すぎぬるか夜半のねざめのほととぎす聲は枕にある心地して

右大將實房中將に侍りける時十五首の歌よませ

侍りけるにときよめる

道因法師

夜を重ね寐ぬより外にほととぎすいかに待ちてか一聲は聞く

郭公をよみ侍りける

權中納言長方

こころをぞつくしはてつる郭公ほのめくよひのむらさめの空

久我内大臣の家にて旅宿菖蒲といへる心をよめ

る

前中納言雅賴

都人ひきなつくしそあやめ草かりねのこのまくらばかりは

菖蒲の歌とてよみ侍りける

攝政前右大臣

五月雨にぬれぬれひかむ菖蒲草ぬまの岩がきなみもこそ越せ

内大臣良通

右大臣に侍りける時家に百首の歌よませ侍りけ

るに郭公の歌とてよみ侍りける

攝政前右大臣

おもふことなき身ならずば郭公夢に聞く夜もあらましものを

曉聞郭公といへる心をよみ侍りける

右大臣

ほととぎす鳴きつるかたを眺むれば唯ありあけの月ぞ残れる

郭公の歌とてよめる

權大納言實國

なごりなく過ぎぬなるかな郭公こぞかたらひし宿としらずや

權大納言宗家

夕月夜いるさのやまの木隠こかくれにほのかに名のるほととぎすかな

前左衛門督公光

ほととぎす聞きもわかれぬ一聲によもの空をも眺めつるかな

攝政右大臣の時の歌合に郭公の歌とて

皇太后宮大夫俊成

覺盛法師

またで聞くひとにはばや郭公さても初音のイやうれしかるらむ

崇徳院に百首の歌奉りける時よめる
前參議教長

尋ねても聞くべきものを郭公ひとだのめなる夜半のひとこゑ

遠聞郭公といふ心を
權大納言實家

思ひやる心もつきぬほととぎす雲のいくへのほかに鳴くらむ

暮天郭公といへる心をよみ侍りける
仁和寺法親王守覺

ほととぎすなほ初聲をしのぶやま夕るる雲のそこに鳴くなり

郭公の歌とてよめる
藤原清輔朝臣

かざごしをゆふ越えくれば郭公ふもとの雲のそこになくなり

從三位賴政

一聲はさやかに鳴きてほととぎす雲路はるかに遠ざかるなり

郭公まつはひさしき夏の夜をねぬに明けぬとたれかいひけむ

修理大夫顯季歌合し侍りけるに郭公をよめる 藤原道經

ふた聲ときかでや止まむ郭公まつにねぬ夜のかずはつもりて

郭公の歌とてよめる 賀茂重保

郭公しのぶるほどはやまびこのこたふる聲もほのかにぞするきく

山寺にこもりて侍りけるに郭公のなかざりけれ

ばよめる 道命法師

あやしきは待つ人からか郭公なかぬにさへも濡るるそでかな

題しらず 康資王母

寐ざめするたよりにきけば郭公つらき人をも待つべかりけり

刑部卿頼輔母

郭公又もやなくと待たれつつ聞く夜しもこそ寐られざりけれ

うのはなのかきねとのみや思はまし賤のふせやに煙たたずば

山里にこれかれまかりて歌よみ侍りけるに野草

をよめる

藤原定通

焼きすてしふる野のを野のま葛原玉まくばかりなりにける哉

堀河院の御時百首の歌奉りける時あふひをよめ

る

藤原もとし

あふひ草照る日はかみの心かは影さすかたにまづなびくらむ

賀茂の齋院おり給ひて後祭の御生みあれの日人の葵を

奉りけるに書きつけられて侍りける

前齋院式子内親王

神山のふもとになれしあふひ草ひきわかれても年ぞへにける

仁和寺のみこの許にて郭公の歌五首よみ侍りけ

る時よめる

按察使公通

卯花をよめる

左京大夫顯輔

むらむらに咲けるかきねの卯花は木の間の月の心地こそすれ

暮見卯花といへる心をよみ侍りける

右近大將實房

ゆふ月夜ほのめくかけも卯花のさける垣根はさやけかりけり

卯花の歌とてよみ侍りける

仁和寺入道法親王

玉川とおとにききしは卯花を露のかざれる名にこそありけれ

白河院烏羽殿におはしましける時をのこども歌

合し侍りけるに卯花をよめる

藤原季通朝臣

見でずぐる人しなければうの花のさけるかきねやしら河の關

遠村卯花といへる心をよめる

賀茂政平

うの花のよそめなりけり山ざとのかきねばかりに降れる白雪

卯花藏宅といへる事をよめる

藤原敦經朝臣

千載和歌集 卷第三

夏歌

堀河院の御時百首の歌奉りける時更衣ころもがへのこころ

をよみ侍りける

前中納言匡房

夏衣はなのたもとに脱ぎかへて春のかたみもとまらざりけり

藤原基俊

今朝かふるせみの羽衣きて見れば袂に夏はたつにぞありける

崇徳院に百首の歌奉りける時夏のはじめの歌と

てよめる

藤原實清朝臣

あかでゆく春のわかれにいにしへの人やう月といひ初めけむ

海路三月盡といへる心をよめる

前大僧正覺忠

惜めどもかひもなぎさに春くれて波とともにぞたち別れぬる

堀河院の御時百首の歌奉りける時春の暮の心を

よめる

前中納言匡房

つねよりも今日のくるるを惜むかないま幾度の春としらねば

前齋宮河内

けふ暮れぬ花の散りしもかくぞありし二度春はものを思ふよ

幾返り今日に我身の逢ひぬらむ惜しきは春の暮るるのみかは

過ぐ

源 仲 綱

身のうさも花見しほどは忘れき春のわかれを歎くのみかは

藤原經家朝臣

いづかたと春のゆくへは知らねども惜む心のさきに立つらむ

行路三月盡といへる心をよめる
琳 賢 法師

もろともにおなじ都は出でしかどつひにも春に別れぬるかな

三月盡の日皇太后宮大夫俊成の許によりて遣し

ける
法 印 靜 賢

花はみなよもの嵐にさそはれてひとりや春のけふは行くらむ

閏三月盡によりみ侍りける
權大僧都範玄

花の春重かさなるかひぞなかりける散らぬ日數のそはばこそあらめ

百首の歌めしけるととき暮の春の心をよませたま

うける

崇徳院御製

花は根にとりは古巢にがへるなり春のとまりを知る人ぞなき

三月のつごもりによみ侍りける

中務卿具平のみこ

命あらばまたもあひみむ春なれど忍び難くてくらす今日かな

式子内親王

ながむれば思ひやるべきかたぞなき春のかぎりの夕暮のそら

百首の歌奉りける時暮の春の心をよみ侍りける 大納言隆季

くれてゆく春はのこりも無きものを惜む心のつきせざるらむ

三月盡の心をよみ侍りける 久我内大臣

入日さす山の端さへぞ恨めしきくれずば春のかへらましやは

藤原定成

山吹の花のつまとは聞かねども移ろふなべに鳴くかはづかな

土御門右大臣の家に歌合しける時藤花をよめる 康 資 王 母

いづかたににほひますらむ藤のはな春と夏との岸をへだてて

永承六年内裏の歌合に藤花をよみ侍りける 中納言祐家

九重にさけるを見れば藤のはな濃きむらさきの雲ぞ立ちける

百首の歌奉りける時よみ侍りける 大炊御門右大臣

年ふれどかはらぬ松をたのみてやかかりそめけむ池の藤なみ

やよひのつごもりの比白河殿に御かたたがへの

行幸ありける夜春残二日といへる心をうへのを

のこどもつかうまつりけるついでによませ給う

ける 二條院御製

われもまた春と共にや歸らましあすばかりをばここに暮して

藤原基俊

やまぶきの花咲きにけり蛙なく井手のさと人いまやとはまし

堀河院の御時肥後が家によき山吹ありときこし

めしてめしければ奉るとて結びつけ侍りけるてい 二條太皇太后宮肥後

九重にやへ山吹をうつしては井手のかはづのころをぞくむしるゝ

水邊山吹といへる心をよめる 藤原範綱

吉野川岸のやまぶき咲きぬれば底にぞふかきいろは見えける

藤原定經

くちなしの色にぞすめる山吹のはなの下ゆく井手のかはみづ

山吹をよめる 惟宗廣言

いかなれば春をかさねて見つれども八重にのみさく山吹の花

百首の歌奉りける時やまぶきの歌とてよめる 藤原清輔朝臣

心なきわが身なれども津の國の難波の春にたへずもあるかな

藤原季通朝臣

堀河院の御時の百首の歌の中にうち呼子鳥をよめる

前中納言匡房

思ふことちえにやしけき呼子鳥しのだの森のかたに鳴くなり

おなじ百首のときすみれをよめる

中納言國信

今宵寐てつみてかへらむ堇さく小野のしばふは露にしけくとも

修理大夫顯季

雉子きすなくいはたの小野のつほ堇しめさすばかりなりにける哉

嘉承二年後の宮の歌合に堇をよめる

源顯國朝臣

道遠みいり野のはらのつほすみれ春のかたみにつみて歸らむ

堀河院の御時の百首の歌奉りける時うち歎冬をよめる

前中納言匡房

春ふかみ井手のかは水かけ添はばいくへか見えむ山吹のはな

山家落花といへる心をよめる

前大納言俊實

花のみな散りてのちぞ山里のはらはぬ庭は見るべかりける

花落客稀といへる心をよめる

藤原基俊

故郷は花こそいとど忍ばるれ散りぬるのちは訪ふひともなし

みちの國にまかりける時なこそその關にて花の散

りければよめる

源義家朝臣

吹く風をなこそそのせきとおもへども道もせに散るやま櫻かな

小野の氷室山のかたに残りの花尋ね侍りける日

僧都證觀が坊にてこれかれ歌よみけるによめる
源仲正

したさゆるひむろの山のおそ櫻きえのこりける雪かとぞ見る

百首の歌奉りける時春の歌とてよめる
前參議親隆

鏡山ひかりは花の見せければちりつみてこそさびしかりけれ

道因法師

散る花を身にかふばかり思へどもかなはで年の老いにける哉

覺盛法師

あかなくに散りぬる花のおもかけや風にしられぬ櫻なるらむ

源仲綱

山ざくら散るを見てこそおもひ知れたづねぬ人は心ありけり

花の散るを見てよみ侍りける
道命法師

よそにてぞ聞くべかりける櫻花目のまへにても散らしつる哉

池に櫻のちるを見てよみ侍りける
能因法師

櫻ちるみづの面にはせきとむる花のしがらみ掛くべかりけり

花浮澗水といへる心をよみ侍りける
花園左大臣

山風にちりつむ花しながれずば如何で知らましたにがはの水

のした

櫻花^イさく比良の山かぜ吹くままに花になりゆく志賀のうらなみ

花留客といへる心をよみ侍りける
右近大將實房

ちりかかる花の錦は著たれどもかへらむことぞ忘られにける

落花の心をよめる
權大納言實國

あかなくに袖につつめば散る花の嬉を^イしと思ふになりぬべき哉

久我内大臣の家にて身にかへて花を惜むといへ

る心をよめる
權中納言通親

櫻花憂身にかふるためしあらば生きて散るをば惜まざらまし

花の歌とてよめる
俊惠法師

み吉野のやました風やはらふらむ梢にかかるはなのしらゆき

源有房

一枝は折りてかへらむ山ざくら風にのみやは散らしはつべき

堀河院の御時百首の歌奉りける時櫻をよめる 前中納言匡房

山櫻ちぎに心のくだくるは散るはなごとに添ふにやあるらむ

藤原仲實朝臣

はなのちる木のしたかけはおのづから染めぬ櫻の衣をぞきる

藤原基俊

春をへて花ちらましやおくやまの風を櫻のころとおもはば

崇徳院の御時十五首の歌奉りける時花の歌とて

よみ侍りける

右兵衛督公行

あらしふく志賀の山邊のさくら花ちれば雲井はささ波ぞたつ

百首の歌奉りける時よめる

前参議親隆

春風に志賀のやまごえ花ちればみねにぞ浦のなみは立ちける

花の歌とてよみ侍りける

左近中將良經

白雲とみねには見えて櫻ばな散ればふもとの雪にぞありける

百首の歌たてまつりける時花の歌とて

藤原季通朝臣

吉野やま花はなかばに散りにけりたえだえ残るみねのしら雲

寛治八年さきのおほきおほいまうち君の高陽院

の家の歌合に櫻をよめる

周防内侍

やま櫻をしむ心のいくたびか散るこのもとに行きかへるらむ

後朱雀院の御時うへのをのこどもひんがし山の

花見侍りけるに雨のふりにければ白河殿にとま

りておのおの歌よみ侍りけるによみ侍りける 大納言長家

春雨にちる花見ればかきくらしみぞれし空のこちこそすれ

落花満山路といへる心をよめる

赤染衛門

踏めばをし踏までは行かむ方もなしこころづくしの山櫻かな

千載和歌集 卷第二

春歌下

烏羽殿院イにおはしましけるころ常見花といへる心
ををのこどもつかうまつりけるついでによませ

給うける

白河院御製

咲きしより散るまで見れば木の下もぎに花も日數も積りぬるかな

みこにおはしましける時烏羽殿に渡らせ給へり

けるころ池上花といへる心をよませ給うける
院御製

池水にみぎはのさくら散りしきて波の花こそさかりなりけれ

山の花の心をよみ侍りける

大宮前太政大臣

百首の歌奉りける時よみ侍りける

待賢門院堀河

白雲とみねのさくらは見ゆれども月のひかりは隔てざりけり

上西門院兵衛

花の色に光さしそふはるの夜ぞ木の間の月は見るべかりける

歌合し侍りける時花の歌とてよめる

太宰大貳重家

をはつ瀬の花のさかりを見わたせば霞にまがふみねのしら雲

藤原範綱

ささなみやながらのやまの嶺つづき見せばや人にはなの盛を

十首の歌人々によませ侍りける時花の歌とてよ

み侍りける

皇太后宮大夫俊成

み吉野の花のさかりをけふ見ればこしのしらねに春風ぞ吹く

ささなみやしがの都はあれにしを昔ながらのやまざくらかな

日吉のやしろの歌合とて人々よみ侍りける時よ

める

祝部宿禰成仲

ささなみや志賀の花園見るたびに昔のひとのころをぞ知る

花の歌とてよめる

賀茂成保

たかさごのをのへの櫻さきぬれば梢にかかるおきつしらなみ

圓位法師

おしなべて花のさかりになりにけり山の端ごとにかかる白雲

藤原爲業

吉野山はなのさかりになりにけり絶ゆるときなき峯のしら雲

毎春花芳といへる心をよめる

源仲正

春をへてにほひを添ふるやま櫻はなは老こそさかりなりけれ

尋花日暮れぬといへる心をよめる

源俊頼朝臣

暮れはてぬかへさは送れ山櫻たがために來てまどふとか知る

花の歌とてよめる

道因法師

花ゆるゑにしらぬ山路はなけれどもまどふははるの心なりけり

賀茂の社の歌合とて人々よみ侍りける時花の歌

とてよめる

藤原公時朝臣

年を経ておなじさくらの花の色を染めますものは心なりけり

藤原公衡朝臣

花ざかりよもの山邊にあくがれてはるは心の身にそはぬかな

春日の社の歌合とて人々よみ侍りける時よめる
顯昭法師

吉野川みかさはさしもまさらじを青根を越すやはなのしら波

故郷花といへる心をよみ侍りける
讀人しらす

十首の歌人のよませ侍りけるととき花の歌とて
前左衛門督公光
みな人のこころにそむる櫻花いくしほとしにいろまさるらむ

崇徳院に百首の歌奉りける時花の歌とてよめる
左京大夫顯輔
かつらぎやたかまの山の櫻花くもるのよそに見てや過ぎなむ

前參議教長

山櫻かすみこめたるありかをばつらきものから風ぞしらす

藤原清輔朝臣

神がきのみむろの山は春きてぞ花のしらゆふかけて見えける

夜思山花といへる心を

仁和寺後入道法親王覺性

夜もすがら花のにほひを思ひやるこころや嶺に旅寐しつらむ

尋深山花といへる心をよみ侍りける

攝政前右大臣

咲きぬやとしらぬ山路に尋ね入る我をば花のしを^{リイ}るなりけり

京極の家にて十種供養し侍りける時白河院御幸

せさせ給ひて又の日歌奉らせ給うけるによみ侍

りける

京極前太政大臣

櫻ばなおほくの春にあひぬれど昨日けふをやためしかぎりにはせむ

後二條關白内大臣

花ざかり春のやまべを見わたせば空さへにほふ心地こそすれ

右衛門督基忠

咲きにほふ花のあたりは春ながら絶えせぬ宿のみ雪とぞ見る

毎朝見花といへる心をよみ侍りける

中院右大臣

尋ねきて手折るさくらの朝露に花のたもとの濡れぬ日はなしぞなき

東山に花見侍りける日よみ侍りける

右大臣

かりにだに厭ふ心やなからまし散らぬ花さくこの世なりせば

徳大寺左大臣
よろづよの花のためしやけふならむ昔もかかる春しなければ

近衛殿に渡らせ給うて歸らせ給ひける日遠尋山

花といへる心をよませ給うける
崇徳院御製

尋ねつる花のあたりになりにつけりにほふにしるし春のやま風

法性寺入道前太政大臣

歸るさをいそがぬほどの道ならばのどかに峯の花は見てまし

寛治八年さきのおほきおほいもうち君の高陽院

の家の歌合に櫻の歌とて
中納言女王

山櫻にほふあたりのはるがすみ風をばよそに立ちへだてなむ
つち

藤原顯綱朝臣

花ゆゑにかからぬ山ぞなかりける心ははるのかすみならねど

崇徳院に百首の歌奉りける時春の歌とてよめる 藤原季通朝臣

春はなほ花のにほひもさもあらばあれただ身にしむは曙の空

百首の歌めしける時春の歌とてよませ給うける 崇徳院御製

あさゆふに花まつ程は思ひねの夢のうちにぞ咲きはじめける

待賢門院堀河

いづかたに花咲きぬらむと思ふよりよもの山邊にちる心かな

白河院花御らんじにおはしましけるに召なかり

ければよみて奉り侍りける

京極前太政大臣

山櫻たづぬと聞くにさそはれぬ老のこころのあくがるるかな

鳥羽院位おりさせ給うて後白河に御幸ありて花

御らんじける日よみ侍りける

花園左大臣

かけきよき花のかがみと見ゆる哉のどかに澄めるしら河の水

崇徳院に百首の歌奉りける時春駒の歌とてよめ

る

藤原清輔朝臣

みこもりにあしの若葉やもえつらむ玉江のぬまをあさる春駒^{ぬい}

堀河院の御時百首の歌のうち歸雁のうたとてよ

める

源俊頼朝臣

春くればたのむの雁もいまはとてかへる雲路に思ひたつなり

歸雁の心をよみ侍りける

左近中將良經

ながむれば霞めるそらの浮雲とひとつになりぬ歸るかりがね

從三位頼政

天つ空ひとつに見ゆるこしの海の波をわけてもかへる雁がね

祝部宿禰成仲

かへる雁いく雲井ともしらねども心ばかりをたぐへてぞやる

に結びつけて皇太后宮大夫俊成の許に遣し侍り

ける

大納言定房

昔よりちらさぬやどの梅の花わくるこころはいろに見ゆらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時春雨の心をよ

める

前中納言匡房

よも山にこのめはる雨降りぬればかぞいろはとや花の頼まむ

藤原基俊

春雨のふりそめしより片岡のすそ野のはらぞあさみどりなる

題しらす

和泉式部

つれづれとふるは涙のあめなるを春のものとや人の見るらむ

堀河院の御時百首の歌の中に早蕨をよめる
藤原基俊

みやま木のかけ野の下のした蕨もえ出づれども知る人もなし

百首の歌めしける時梅の歌とてよませ給うける 崇徳院御製
春の夜は吹きまふ風のうつり香に木ごとに梅と思ひけるかな

梅花夜薰といへる心をよめる 源俊賴朝臣

梅が香は己が垣根をあくがれてま屋のあまりに隙もとむなり

題しらず 右大臣

うめが香にこゑうつりせば鶯のなくひと枝は折らましものを

二品法親王

梅が枝の花に木づたふうぐひすの聲さへにほふ春のあけほの

權大納言實家

風わたる軒端の梅にうぐひすの鳴きて木づたふ春のあけほの

なかのゐん
中院にありける紅梅のおろし枝遣さむなど申し

けるを又の年の二月ばかり花咲きたるおろし枝

よめる

大納言師頼

いまよりは梅さくやどは心せむ待たぬに來ます人もありけり

前中納言匡房

にほひもて分かばぞ分かむ梅の花それとも見えぬ春の夜の月

崇徳院に百首の歌奉りける時よみ侍りける

大炊御門右大臣

梅の花をりてかざしにさしつれば衣におつるゆきかとぞ見る

題しらず

和泉式部

梅が香におどろかれつつ春の夜の闇こそ人はあくがらしけれ

藤原道信朝臣

さよふけて風や吹くらむ花の香の匂ふここのちの空にするかな

皇太后宮大夫俊成

春の夜はのきばの梅をもる月のひかりもかをる心地こそすれ

春日野の雪を若菜につみそへて今日さへ袖のしをれぬるかな

睦月の廿日頃雪の降りて侍りける朝に家の梅を

折りてとしよりの朝臣につかはしける

權中納言俊忠

咲きそむる梅の立枝に降る雪のかさなる數をとへところそ思へ

かへし

源俊賴朝臣

梅が枝に心もゆきてかさなるを知らでや人のとへといふらむ

梅の木に雪のふりけるに鶯のなきければよめる 左京大夫顯輔

梅が枝に降りつむ雪はうぐひすの羽風にちるも花かとぞみる

永保二年二月後の宮にて梅花久薰といへる心を

よみ侍りける

久我前太政大臣

かをる香の絶えせぬ春は梅の花ふきくる風やのどけかるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時梅花の歌とて

霞の歌とてよめる

刑部卿頼輔

春くれば杉のしるしも見えぬかな霞ぞたてる三輪のやまもと

左兵衛督隆房

見わたせばそことしるしの杉もなし霞のうちや三輪の山もと

百首歌奉りける時子の日の心をよめる

待賢門院堀河

ときはなる松もや春をしりぬらむはつねを祝ふ人にひかれて

家に侍りける女房をんなイのもとに睦月七日前中宮の女

房若菜をつかはしたりけるを聞きてつかはしけ

る

治部卿通俊

うらやまし雪の下草かき分けてたれをとぶひの若菜なるらむ

堀河院の御時百首歌奉りけるうち若菜の歌とて

よめる

源俊頼朝臣

承暦二年内裏後番の歌合に鶯をよめる

藤原顯綱朝臣

春たてばゆきのした水うちとけて谷のうぐひす今ぞなくなる

後冷泉院御時皇后宮の歌合によみ侍りける

大納言隆國

山里のかきねに春やしらる^{るか}らむ霞まぬさきにうぐひすの鳴く

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時十首

の歌よませ侍りけるによめる


源俊賴朝臣

烟かとむろの八島を見しほどにやがても空のかすみぬるかな

右大臣に侍りける時家に歌合し侍りけるに霞の

歌とてよみ侍りける

攝政前右大臣

 かすみしく春のしほちを見わたせばみどりを分くる沖つ白波

堀河院の御時百首の歌のうち霞の歌とてよめる 前中納言匡房

わぎも子がそでふる山も春きてぞかすみの衣たちわたりける

千載和歌集 卷第一

春歌上

春たちける日よみ侍りける

源俊頼朝臣

春のくるあしたの原を見わたせば霞も今日ぞたちはじめける

堀河院御時百首歌奉りける時よめる

中納言國信

みむろやま谷にや春のたちぬらむ雪のしたみづ岩たたくなり

百首歌たてまつりける時初春の心をよめる

待賢門院堀河

雪ふかき岩のかけ道あとたゆるよし野のさとも春はきにけり

堀河院御時百首歌奉りける時残雪をよめる

前中納言匡房

道たゆといとひしものを山里に消ゆるは惜しきこぞの雪かな

つめたてまつるべき勅をもうけたまはれるならし。この集かくこのたびし
しおかれぬれば、住吉の松の風久しく傳はり、玉津島の浪ながくしづかにして
千々の春秋をおくり、世々の星霜をかさねざらめや。文治三年の秋長月の中
のとをかに、えらびたてまつりぬるになむありける。

の葉、錦いろいろに、玉ころゑるなりとのみ思へれど、山の井のふかき名をからざることも多く、難波江のあしのをかしきふしあることは難くなむありけれど、かつはこのむ心ざしを憐み、かつは道をたやさざらむが爲めに、瓦のまど、柴の庵の言の葉をも、見るによろしく、聞くにさかへざるをばもらす事なし。勅して千うた二百ぢ^{ふたも}あまり、二十卷^{はた}とせり。古より勅をうけたまはりて集を撰ぶこと、あるひはその位たかく、或はその品下れるも、久しく此の道をまなび、ふかく其の心をさとれるともがらは、つとめ來れる中に、松の戸ほそに遁れ、苔の袂にしをれたるもの、これをえらべるあとなむなかりけれど、宇治山の僧喜撰といひけるなむ、すべらぎのみことのりをうけたまはりて、倭歌の式をつくりける。式を作り、集を撰ぶ、かの昔のあとにより、今このなすらへあるがうへに、和歌の浦の道にたづさひては七十^{ななそち}のしほに過ぎ、我が　　のりのすべらぎにつかへたてまつりては、六十^{むそち}になむあまりにければ、家々の言の葉、浦々の藻鹽草、かきあ

べき仰ごとなむありける。かの御時よりこの方、年はふたももちあまりに及び、世はとつぎあまり七世になむなりにける。過ぎにし方も年久しく、今ゆくさきも遙にとどまらむため、此の集を名づけて千載和歌集といふ。かの後拾遺集の後、同じく勅撰になすらへて撰べるところ、金葉、詞花のふたつの集あり。然れども部類ひろからず、歌の數少くして、残れる歌多し。その外今の世までの歌をとり撰べるならし。抑この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國日の本のひろきふみの道をもまなびず、鹿の園、鷺の嶺の深き御法をさとるにしもあらず、唯假字のよそぢあまり七文字のうちを出でずして、心に思ふ事をことばにまかせていひ連ぬるならひなるが故にこそ、三十もじあまり一文字をだによりみ連ねつるものは、出雲八雲の底をしのぎ、敷島やまとみことのさかひに入りすぎにたりとのみ思へるなるべし。^{らし}しかはあれども、まことには、鑽ればいよいよ堅く、仰けば彌高きものは、このやまと歌の道になむありける。春の林の花、秋の山の木

ふとなづけし年より、もしきの古きあとをば、紫の庭、玉の臺、千年ひさしかる
べきみぎりと磨きおき給ひ、藐姑射の山のしづかなるすみかをば、青き谷、菊の
水、よろづ代すむべき境としめ定め給ふ。かれこれおし合せて、みそぢあまり三
かへりの春秋になむなりにける。あまねき御うつくしみ、秋津島のほかまで及
び、廣き御惠、春の園の花よりもかうばし。近うなれつかうまつり、遠くきき傳ふ
るたぐひまで、事にふれ折にのぞみて、むなしくすぐさぬ情、おほし。春の花のあ
した、秋の月の夕、おもひをのべ、心をうごかさずといふことなし。ある時には糸
竹の聲しらべをととのへ、あるときはやまともろこしの歌ことばをあらそふ。
敷島の道もさかりにおこりて、心の泉古よりも深く、詞の林昔よりもしけし。こ
こに今の世の道をこのむともがらの言の葉をもきこしめし、昔の時のをりに
つけたる人の心をも見そなはさむ事によりて、後拾遺集に撰び残されたる歌、
かみ正暦のころほひより、下文治の今に至るまでのやまとうたを、えらび奉る

千載和歌集序

やまとみこと歌は、ちはやぶる神代よりはじまりて、ならの葉の名におふ宮に
ひろまれり。玉きたひらの都にしては、延喜の聖の御代には古今集を撰ばれ、
天曆のかしこき御時には後撰集をあつめ給ひ、白河の御代には後拾遺を勅せ
しめ、堀河の先帝はももぢの歌を奉らしめ給へり。おほよそこのことわざ、我が
世の風俗として、これを好みもてあそべば、名を世々に残し、これを學びたづさ
はらざるは、おもてを牆にしてたてらむが如し。かかりければ、此の世に生れ、我
が國にきたりと來たる人は、たかきもくだれるも、この歌をよまざるはすくな
し。聖德太子は片岡山の御ことをのべ、傳教大師は我がたつ杣の言の葉をのこ
せり。よりて世々の御門もこの道をばすて給はざるをや。ただし、又集を撰び給
ふあとは、猶まれになむありける。我が

君世をしろしめして、保ちはじめ給

よそになど佛のみちをたづねけむ我が心こそしるべなりけれ

左京大夫顯輔

いかでわが心の月をあらはしてやみにまどへる人をてらさむ

常在靈鷲山の心をよめる

登蓮法師

世のなかの人のこころの浮雲にそらがくれするありあけの月

の事ことわり給へといなりにこもりて祈り申しける法師の夢に社の中よりいひ出し給ひける歌

長きよの苦しきことを思へかしなに歎くらむかりのやどりを

賀茂のいつきときこえける時に西にむかひてよ

める

選子内親王

思へどもいむとていはぬ事なれば其方そなたに向きて音をのみぞなく

信解品周流諸國五十餘年といふ心を

神祇伯顯仲

あくがるる身のはかなさは百年の半過ぎてぞおもひ知らるる

卽身成佛といふ事をよめる

讀人しらず

露の身のきえて佛になることはつとめて後ぞ知るべかりける

舍利講のつひでに願成佛道の心を人々によませ

侍りけるによめる

關白前太政大臣

はしましければよめる

藤原有信朝臣

涙のみ袂にかかる世のなかに身さへ朽ちぬることぞかなしき

こひい

をとこにおくれてよめる

讀人しらす

をりをりのつらさを何に歎きけむやがて臆なきよもあればありけり

人の四十九日の誦經文にかきつけける

人とふかねの聲こそ哀なれいつか我が身にならむとすらむ

にひまゐりして侍りける女のまへゆるされて後

程なく身まかりにければ

四條中宮

悔しくも見初めける哉なべて世の哀とばかり聞かましものを

いなりのとりるに書きつけて侍りける

讀人しらす

かくてのみよにありあけの月ならば雲かくしてよ天くだる神

おやの所分そふんをゆるなく人におしとられけるをこ

今日よりは天の川霧たちわかれ如何なる空にあはむとすらむ

かへし

讀人しらす

七夕はのちの今日をもたのむらむ心ほそきはわが身なりけりかれい

むすめにおくれて服著はべるとてよめる

神祇伯顯仲

あさましや君にきすべき墨染のころもの袖をわれぬらすかな

大江匡衡身まかりて又の年の春花を見てよめる 赤染衛門

こぞの春ちりにし花も咲きにけりあはれ別のかからましかば

左兵衛督公行妻めにおくれて侍りける頃女房につ

けて申さする事侍りける御返しによませ給ひけ

る

新院御製

いづる息いるを待つ間も難き世を思ひしるらん袖はいかにぞ

後冷泉院御時藏人にて侍りけるに御門かくれお

たによませ給ひける

圓融院御製

おもひかねながめしかども烏部山はては烟も見えずなりにき

一條攝政身まかりにける頃よめる

少將義孝

ゆふまぐれ木茂こしひき庭をながめつつ木の葉とともに落つる涙か

子のおもひに侍りけるころ人のとひて侍りけれ

ばよめる

待賢門院安藝

人しれず物思ふをりもありしかどこの事ばかり戀しきはなし

兼盛子におくれて歎くと聞きていひ遣しける
清原元輔

おひたたで枯れぬと聞きしこの本のいかで嘆きの森となるらん

天曆のみかどかくれおはしまして七月七日御忌

果ててちりぢりにまかり出でけるに女房の中に

おくり侍りける

昔見したる井の水はかはらねどうつれるかけぞ年をへにける

帥前内大臣はりまへまかりけるともにて川じり

をいづる日よめる

大江正言

思ひ出もなきふる里の山なれど隠れ行くはたあはれなりけり

三條太政大臣身まかりて後月をみてよめる

前大納言公任

いにしへを戀ふる涙にくらされておほろに見ゆる秋の夜の月

むすめにおくれて歎き侍りける人に月のあかか

りける夜いひつかはしける

堀河右大臣

その事と思はぬだにもあるものを何ごちして月を見るらむ

あはたの右大臣身まかりにける頃よめる

藤原相如

夢ならで又も逢ふべき君ならば寐られぬいをも歎かざらまし

堀河の中宮かくれ給ひてわざの事はててのあし

水上のさだめてければきみが代にふたたびすめる堀河のみづ

有馬の湯にまかりたりけるによめる

宇治前太政大臣

いざやまたつづきたつきも知らぬ高嶺にてまづくる人に都をぞ問ふ

熊野へまうでけるみちにて月をみてよめる

道 命 法 師

都にてながめし月のもろともに旅のそらにも出でにけるかな

はりまに侍りける時月を見てよめる

帥 前 内 大 臣

都にてながめし月をみるときは旅のそらともおほえざりけり

信濃守にてくだりけるに風越かざこしのみねにてよめる 藤原家經朝臣

かざこしの峯の上にて見るときは雲は麓のものにぞありける

藤原頼任朝臣美濃守にて下り侍りける供にまか

りてその後年月をへてかの國の守に成りてくだ

り侍るとて垂井といふいづみを見てよめる

藤原隆經朝臣

よませ給ひけるによめる

わたの原こぎ出でてみれば久方の雲井にまがふおきつしら波

後冷泉院御時大嘗會主基方御屏風に備中國高倉

山にあまたの人花摘みたるかたかきたる所によ

める

藤原家經朝臣

うちむれて高くら山につむものはあらたなる世の^きとみ草の花

今上大嘗會悠紀方御屏風に近江國板倉の山田に

稻をおほく刈りつめりこれを人見たるかたかき

たる所をよめる

左京大夫顯輔

板くらの山田につめるいねを見て治れる世のほどを知るかな

圓融院御時堀河院に二たび行幸せさせ給ひける

によめる

曾 禰 好 忠

新院位におはしましける時うへのをのこどもを

めして述懐の歌よませ給ひけるに白河院の御事

忘るる時なくおほえ侍りければ

大納言成通

白河のながれをたのむこころをば誰かは空にくみて知るべき

堀河院御時百首歌奉りける中に

大藏卿匡房

百とせの花にやどりて過してきこのよは蝶の夢にぞありける

むすめのさうし書かせけるおくに書きつけける
源義國妻

木の下^{もと}にかき集めたる言の葉をははその杜のかたみとは見よ
^{ところ}

左京大夫顯輔近江守に侍りける時とほきこほり

にまかりけるに便^{たより}につけていひ遣しける

關白前太政大臣

思ひかねそなたのそらをながむればただ山の端にかかる白雲

新院位におはしましし時海上遠望といふことを

遠江にきりかへて侍りければいひ遣しける 太皇太后宮肥後

筑波山ふかくうれしとおもふかな濱名の橋にわたすこころを

下藤にこえられて堀河關白のもとに侍りける人
のもとへおとどにも見せよとおほしくてつかは
しける

大中臣能宣朝臣

年をへて星をいただく黒髪のひとつよりしもになりけるかな

堀^イ白河院位におはしましける時修理大夫顯季につ

けて申さずる事侍りけるを宣旨のおそく下りけ

ればその冬ごろいひつかはしける

津守國基

雲の上は月こそさやに冴え渡れまだとどこほるものや何なる

かへし

修理大夫顯季

とどこほることはなけれど住吉のまつ心にやひさしかるらむ

涙がはその水上をたづぬれば世のうきめより出づるなりけり

この集撰ぶとて家集こひて侍りければよめる 太政大臣

思ひやれ心のみづのあさければかきながすべき言の葉もなし

周防内侍あまになりぬと聞きていひ遣しける 大藏卿匡房

かりそめの浮世の闇をかき分けてうらやましくも出づる月哉

法師になりてのち左京大夫顯輔が家にて歸雁を

よめる

沙彌蓮寂

歸る雁西へゆきせばたまづさに思ふことをば書きつけてまし

題しらず 読人しらず

身をすつる人は誠にすつるかば捨てぬ人こそすつるなりけれ

藤原實宗常陸の介に侍りける時大藏省のつかひ

ども厳しくせめければ匡房にいひて侍りければ

この世にはまたも見るまじ梅の花ちりぢりならむ事ぞ悲しき

あふイ
その後程なく身まかりにけるとぞ

人の四位をとらせて侍りければ

読 人 し ら す

此身をば空しき物と知りぬればつみえむ事もあらじとぞ思ふ

題 し ら す

増 基 法 師

我が思ふ事のしけきにくらぶればしのだの森の千枝は物かは

大 江 以 言

網代には沈む水屑もなかりけり宇治のわたりに我やすままし

大原に住みはじめけるころ俊綱朝臣のもとへい

ひつかはしける

良 暹 法 師

大はらやまだすみがまもならはねば我が宿のみぞ烟たえける

題 し ら す

賢 智 法 師

いとくらくなりければよめる

神祇伯顯仲

このよだに月まつほどは苦しきにあはれいかなる闇に惑はむ

病おもくなり侍りけるころ雪のふるを見てよめ

る

良暹法師

覺束なまだ見ぬみちをしでの山雪ふみわけて越えむとすらむ

大江舉^{たかちか}周の朝臣おもくわづらひてかぎりに見え

侍りければよめる

赤染衛門

かはらむといのる命はをしからでさても別れむことぞ悲しき

病重くなり侍りければ三井寺へまかりて京の坊

にうゑおきて侍りける八重紅梅を今は花咲きぬ

らむ見ばやといひ侍りければ折りにつかはして

見せければよめる

大僧正行尊

よそに見し尾花が末の白露はあるかなきかの我が身なりけり

世の中はかなくおほえさせ給ひけるころよませ

たまひける

花山院御製

かくしつつ今はとならむ時にこそ悔しき事のかひもなからめ

いりあひの鐘の聲を聞きてよめる

和泉式部

夕暮はものぞ戀しき鐘の音をあすも聞くべき身とし知らねば

大納言忠教身まかりける後の春鶯の鳴くを聞き

てよめる

藤原教良母

鶯のなくになみだの落つるかなまたもや春にあはむとすらむ

おもへばい

はかなき事のみおほく聞えけるころよめる

法橋清昭

皆人の昔がたりになり行くをいつまでよそに聞かむとすらむ

夏の夜はしに出でてすすみ侍りけるに夕闇の

新院六條殿におはしましける時月あかくはべり
ける夜御船にめして月前言志といふ事をよませ

給ひけるによめる

右近中將教長

三日月のまた有明になりぬるや浮世をめぐるためしなるらむ

櫻花のちるを見てよめる

藤原實方朝臣

散る花に又もやはむおほつかな其春までと知らぬ身なれば

世の中さわがしくきこえける比よめる

増基法師

朝な朝な鹿のしがらむ萩が枝のする葉の露のありがたの世や

秋の野をすぎまかりけるに尾花の風になびくを

見てよめる

源親元

花薄招かばここにとまりなむいづれの野邊もつひのすみかぞ

心地れいならずおほされける頃よみ給ひける

四條中宮

詞花和歌集 卷第十

雜 下

みやこに住み侘びてあふみにたなかみといふ所
にまかりてよめる

源俊頼朝臣

葦火たくまやの栖すみかは世の中をあくがれ出づそむるるかどでなりけり

女どもの澤に若菜摘むを見てよめる

しづのめがゑぐ摘む澤の薄氷いつまでふべき我が身なるらむ

四位して殿上おりて侍りけるころ鶴鳴皐といふ

ことをよめる

藤原公重朝臣

昔見し雲井をこひてあしたづの澤邊になくや我が身なるらむ

厭ひてもなほ惜まるるわが身かな二度くべきこの世ならねば

神祇伯顯仲廣田にて歌合し侍るとて寄月述懷と

いふ事をよみてといひ侍りければ遣しける

左京大夫顯輔

難波江の蘆間に宿る月みれば我が身ひとつもしづまざりけり

堀河院の御時百首歌奉りけるによめる

大納言師頼

身のうさは過ぎぬる方にしを思ふにもいま行末のことぞかなしき

大藏卿匡房

埋木のしたは朽つれどいにしへの花のこころは忘れざりけり

題しらす

大納言伊通

今はただむかしぞ常更に戀ひらるる殘ありしをおもひでにして

小野宮右大臣のもとにまかりて昔のことなどい

ひてよめる

清原元輔

老いてのち昔をしのぶ涙こそこころよそのひとめをつつまざりけれ

題しらす

賀茂政平

ゆく末のいにしへばかり戀しくば過ぐる月日も歎かざらまし

新院のおほせにて百首歌奉りけるによめる

藤原季通朝臣

長恨歌の心をよめる

源道濟

思ひかね別れし野邊をきてみれば淺茅が原にあきかぜぞ吹く

陸奥國の任はてて上り侍りけるにたけぐまの松

橘爲仲臣

古里へわれはかへりぬ武隈たけぐまのまつとはたれに告げよとか思ふ

世にしづみて侍りけるころ春日の冬のまつりに

幣たてまつりけるに思ひける事をみてぐらに書

きつけ侍りける

左京大夫顯輔

枯れはつる藤の末葉うゑはのかなしきはただ春の日を頼むばかりぞ

帥前内大臣あかしに侍りける時戀ひかなしみて

病になりてよめる

高内侍

夜の鶴みやこの内にこめられて子を戀ひつつもなき明すかな

あしかれと思はぬ山の峯にだにおふなるものを人のなけきは

津の國に古曾部といふ所にこもりて前大納言公

任のもとへいひつかはしける

能因法師

ひたぶるに山田もる身となりぬれば我のみ人をおどろかす哉

後二條關白はかなき事にてむつかり侍りければ

家の中には侍りながら前へもさしいで侍らで女

房の中にいひ入れ侍りける

源仲正

三笠山さすがに蔭にかくろひてふるかひもなきあめの下かな

おほやけの御かしこまりにて侍りけるを僧正源

覺申しゆるして侍りければそのよろこびに五月

五日まかりてよめる

平致經

君ひかずなりなましかば菖蒲草いかなるねをか今日はかけまし

けるによめる

式部大輔資業

住吉のなみにひたれる松よりも神のしるしぞあらはれにける

ものへまかりける道に人のあやめをひきけるを

長き根やあるとことイはせけるををしみ侍りければ

よめる

周防内侍

いかでかくねを惜むらむ菖蒲草うきには聲もたてつべき身世イを

冷泉院へたかなな奉らせ給ふとてよませ給ひけ

る

花山院御製

世の中にふるかひもなき竹の子はわがへむとしを奉つるなり

御かへし

冷泉院御製

年へぬる竹の齡をかへしてもこのよをながくなさむとぞ思ふ

男をうらみてよめる

和泉式部

忍び忍びに物思ひける比よめる

出羽辨

忍ぶるも苦しかりけりかすならぬ身には涙のなからましかば

忍びたる男のなりける衣をかしがましとておし

のけければよめる
和泉式部

音せぬはくるしき物を身に近くなるとていとふ人もありけり

おもくわづらひけるに立ちおくれなばえなむな

がらふまじきといひたる男の返事によめる
大貳三位

人の世にふたたび死ぬるものならば忍びけりやと心みてまし

題しらす
左大辨俊雅母

夕霧に佐野のふな橋おとすなりたなれの駒のかへりくるかも

長元八年宇治前太政大臣の家に歌合しけるにか

ちがたのをのこども住吉にまうでて歌よみ侍り

ば弟忠清かよひ侍りけるも程なく忘れ侍りければ忠清が弟隆重にあひぬと聞きてかの女にいひ

つかはしける

藤原忠清

いかなればおなじ流の水にしもさのみは月のうやどいつるなるらむ

題しらず

さがみ

住吉のほそ江にさせるみをつくし深きにまけぬ人はあらじな

物思ひける頃よめる

大納言道綱母

降る雨のあしとも落つる涙かなこまかにものを思ひくだけば

思ふ事侍りける頃のねられず侍りければ終夜

ながめ明して有明の月の隈なく侍りけるが俄に

かきくらししぐれけるを見てよめる

赤染衛門

神無月ありあけの空のしぐるるをまた我ならぬ人や見るらむ

かへりける曉に雨のいたくふりければ朝にいひ

つかはしける

江侍従

かづきけむ袂は雨にいかがせし濡るるはさても思ひしれかし

題しらす

曾禰好忠

深くしも頼まざらなむ君ゆゑに雪ふみ分けて夜な夜なぞ行く

いたく忍びける男の久しく音せざりければいひ

つかはしける

赤染衛門

世の人のまだしらぬまの薄氷見わかぬほどに消えねとぞ思ふ

いひわたりける男の八月ばかりに袖の露けさな

どいひたりける返事によめる

和泉式部

秋はみな思ふことなき萩の葉もすゑたわむまで露はおきけり

藤原隆時朝臣ものいひ侍りける女をたえにけれ

おもはれぬ空のけしきを見るからに我もしぐるる神無月かな

題しらす

待賢門院堀河

あだ人はしぐるる夜半の月なれやすむとてえこそ頼むまじけれ

たえにける男の五月ばかりに思ひかけずまうで

きたりければよめる

讀人しらす

たが里にかたらひかねて郭公かへるやま路のたよりなるらむ

たのめたる夜見えざりける男の後にまうできた

りけるに出であはざりければ言ひわづらひてつ

びてイ

らき事をしらせつるなどいはせたりければよめ

る

清少納言

よしさらばつらさは我に習ひけり頼めて來ぬはたれか教へし

かきたえたる男のいかが思ひけむきたりけるが

とうらみければ

和泉式部

おのが身のおのが心になはぬを思はば物はおもひしりなむ

忍びける男のいかが思ひけむ五月五日の朝にあ
けて後歸りて今日あらはれぬるなむ嬉しきとい
ひたりける返事によめる

菖蒲草かりにもくらむ物ゆゑにねやのつまとや人の見るらむ

保昌に忘られて侍りけるころ兼房朝臣のとひて
侍りければよめる

人しれず物思ふことはならひにき花にわかれぬ春しなければ

藤原盛房かよひける女をかれがれになりて後神

無月の二十日頃に時雨のしける日何事かといひ

つかはしたりければ母の返事にいへりける

讀人しらす

いひ侍りけるに有明の月の三笠山よりさしのほ
りけるを見てよめる

琳賢法師

ながらへば思ひ出にせむ思ひ出でよ君とみかさの山の端の月

京極前太政大臣家歌合によめる

大藏卿匡房

あふさかの關の杉原したはれて月のもるにぞまかせざりける

つくしより歸りまうで來てもとすみける所の有

りしにもあらず荒れたりけるに月のいとあかく

侍りければよめる

帥前内大臣

つくづ^{れイ}くと荒れたる宿をながむれば月ばかりこそ昔なりけれ

題しらす

高松上

深く入りてすまばやと思ふ山の端をいかなる月の出づるなるらむ、

たがひにつつむ事ありける男のたやすく逢はず

所によめる こイ 大江 嘉言

かぐ山こイの白雲かかるみねにてもおなじたかさぞ月にイは見えける、

家に歌合し侍りけるによめる 左京大夫顯輔

夜もすがら富士の高嶺に雲きえて清見が關にすめるつきなイかけ

山城守になりてなけき侍りける頃月のあかいイかり
ける夜まうで來りける人のいいイかと思ふととひは

べりければよめる 藤原輔尹朝臣

山城のいはたのもりのいはずともこころの中をてらせ月かけ

久しく音もせぬ人のもとへ月のあかかりける夜

いひつかはしける 中原 長國

月にこそむかしのことは覺えけれわれを忘るる人にみせばや

山科寺にまかりけるに宗延法師にあひて終夜物

堀河院御時中宮の御方にまるりて女房に物申し
ける程に月の山の端より立ちのほりけるを見て
女の月はまつにかならず出づるなむ哀なるとい
ひければよめる

大納言公實

いかなれば待つには出づる月かけのいるを心に任せざるらむ

題しらす

花山院御製

こころみにほかの月をも見てしがなわが宿からの哀なるかと

月のあかく侍りける夜前大納言公任まうできた
りけるをする事侍りて遅く出であひければ待ち

かねて歸り侍りにければつかはしける

中務卿具平親王

恨めしく歸りけるかな月夜には來ぬ人をだに待つとこそきけ

屏風の繪に山のみねにゐて月見たる人かきたる

女房につけて奉りける

太政大臣

すみのほる月の光にさそはれて雲のうへまで行くころかな

あれたるやどに月のもりて侍りけるをよめる

良暹法師

板間より月のもるをも見つるかな宿は荒して住むべかりけり

題しらず

内大臣

隈もなくしのだの森の下晴れて千枝のかずさへ見ゆる月かけ

ない

山家月をよめる

源道濟

さびしさに家出しぬべき山里をこよひの月におもひとまりぬ

新院殿上にて海路月といふ事をよめる

平忠盛朝臣

行く人も天のとわたるここちして雲のなみぢに月をみるかな

題しらず

橘爲義朝臣

君まつと山の端いでて山の端にいるまで月をながめつるかな

ければよめる

大中臣能宣朝臣

月はいり人は出でなばとまりゐてひとりや我は空をながめむ

御ぐしおろさせ給ひて後六條院の池に月のうつ

りて侍りけるを御覽じてよませ給ひける

小一條院御製

池水にやどれる月はそれながらながむる人のかげぞかはれる

左京大夫顯輔中宮亮にて侍りける時下臈にこえ

らるべしと聞きて宮の女房の中に歎き申したり

けるに返事にたれとはなくて

世の中を嘆きないりそ三笠山さし出づる月のすまむかぎりは

田家月といふ事をよませ給ひける

新院御製

月きよみ田中にたてるかりいほのかげばかりこそ曇なりけれ

新院位におはしまししとき月あかく侍りける夜

雲井よりつらぬきかくる白たまをたれ布引のたきといひけむ

新院位におはしまししとき御前にて水草隔舟と

いふ事をよみ侍りける

大藏卿行宗

難波江のしけき蘆間をこぐ船はさのおとにぞゆく方をしる

題しらす

律師濟慶

思ひ出もなくてや我が身やみなまし姨捨山のつき見ざりせば

父長實信濃守にてくだり侍りけるに共にまかり

てのほりけるころ左京大夫顯輔家に歌合し侍り

けるに

藤原爲眞

名にたかき姨捨山も見しかどもこよひばかりの月はなかりき

月あかく侍りける夜人々まうで來て遊び侍りけ

るに月入りにければ興つきて各々歸りなむとし

よませ給ひけるによめる

大納言師頼

春日山きたの藤なみ咲きしより榮ゆべしとはかねて知りనికి

修理大夫顯季みまさかの守に侍りけるととき人々

いざなひて右近馬場にまかりて郭公まち侍りけ

るに俊子内親王の女房の車まうできて連歌し歌

よみなどしてあけほのに歸り侍りけるにかの女

房の車より

美作やくめのさら山と思へども和歌の浦とぞいふべかりける

贈 左大臣

このかへしせよといひければよめる

和歌の浦といふにて知りぬ風吹かば波のよりこと思ふなるべし

左衛門督家成布引の瀧見にまかりて歌よみ侍り

けるによめる

藤原隆季朝臣

春くればあちかたの海一かたにうくてふ魚いその名こそをしけれ

宇治前太政大臣花見にまかりけると聞きてつか

はしける

堀河右大臣

身をしらで人をうらむる心こそ散る花よりもはかなかりけれ

二條關白しら河へ花見になむといはせて侍りけ

ればよめる

小式部内侍

春の來ぬところはなきを白河のわたりにのみや花はさくらむ

入道攝政八重山吹をつかはしていかが見るとい

はせて侍りければよめる

大納言道綱母

たれかこの數はさだめしわれはただとへとぞ思ふ山吹のはな

新院位におはしましし時皇后宮の御方に上達部

うへのをのこどもをめして藤花年久といふ事を

播磨寺に侍りける時三月ばかり船よりのほり侍にてイ

りけるに津の國にやまぢといふ所に參議爲通朝

臣しほゆあみて侍ると聞きてつかはしける

平忠盛朝臣

ながるすな都の花も咲きぬらむわれもなにゆゑいそぐ船出ぞ

修行しありかせ給ひけるに櫻の花の咲きたりけ

るもとにやすみ給ひてよませ給ひける

花山院御製

木のもとをすみか柄とすればおのづから花みる人になりぬべきかな

人のもとにまかりたりけるに櫻花おもしろく咲

きて侍りければあしたにあるじのもとへいひ遣

しける

天台座主源心

ちらぬ間にいま一度も見てしがな花に先立つ身ともこそなれ

花ををしむ心をよめる

大藏卿匡房

詞花和歌集 卷第九

雜 上

ところどころの名を四季によせて人々歌よみ侍

りけるに三島江の春の心をよめる

源頼家朝臣

春霞かすめるかたや津の國のほのみしま江のわたりなるらむ

堀河院の御時うへのをのこども御前にめして歌

よませ給ひけるに

源俊頼朝臣

須磨の浦にやく鹽がまの烟こそ春にしられぬかすみなりけれ

おなじ御時百首歌奉りけるによめる

なみたてる松のしづ枝をくもでにてかすみわたれる天の橋立

まだ知らぬ事をばいかが教ふべき人を忘るる身にしあらねば

おなじ所なる男のかきたえにければよめる

和泉式部

幾かへりつらしと人をみ熊野のうらめしながら戀しかるらむ

大江公資にわすれられてよめる

さがみ

夕ぐれは待たれしものを今はただ行くらむ方を思ひこそやれ

題しらす

読人しらす

忘らるる人目ばかりを嘆きにてこひしき事のなからましかば

逢ふ事も我が心よりありしかば戀ひは死ぬとも人はうらみじ

藤原仲實朝臣

汲み見てし心ひとつをしるべにて野中の清水わすれやはする

關白前太政大臣の家にてよめる

藤原基俊

淺茅生にけさおく露の寒けくにかれにし人のなぞやこひしき

心かはりたる男にいひつかはしける

清少納言

忘らるる身はことわりと知りながら思ひあへぬは涙なりけり

久しく音せぬ男にいひつかはしける

讀人しらす

今よりはとへともいはじわれぞただ人を忘るる事を知るべき

中納言通俊たえ侍りければいひつかはしける

讀人しらす

さりとては誰にかいはむ今はただ人を忘るるころをしへよ

返し

中納言通俊

いとほしく侍りけるわらはの大僧正行尊が許へ

まかりにければいひ遣じける

律師 仁祐

鶯は木づたふはなのえだにても谷のふるすをおもひわするな

返事わらはにかはりて

大僧正 行尊

うぐひすは花のみやこも旅なれば谷の古巢をわすれやはする

左衛門督家成が長月の晦日頃に初ていひそめて

如何なる事かありけむ絶えて音づれ侍らざりけ

るがその冬ごろ聞くことのあればはばかりてえ

なむ言はぬといはせて侍りける返事によめる

皇嘉門院出雲

夜を重ね霜と共にしおきぬればありしばかりの夢をだに見す

家に歌合し侍りけるに逢不遇戀といふことをよ

める

中納言 國信

よめる

和泉式部

竹の葉に霞ふる夜はさらさらにひとりは寐^ねべき心地こそせね

程なく絶えにける男のもとへいひ遣しける
さ
が
み

ありふるも苦しかりけりながからぬ人の心をいのちともがな

かよひける女のこと人に物いふと聞きていひつ

かはしける
清原元輔

うきながらさすがに物の戀しきは今はかぎりと思ふなりけり

久しく音せぬ男につかはしける
俊子内親王家大進

とはぬ間をうらむらさきに咲く藤の何とてまつに懸りそめけむ

男の絶々になりける頃いかにととひたる人の返

事によめる
高階章行朝臣女

思ひやれかけひの水のたえだえになり行くほどの心ほそさを

ながら歸りにければあしたにいひ遣しける

涙さへいでにしかたをながめつつ心にもあらぬ月を見しかな

題しらず

讀人しらず

つらしとて我さへ人を忘れなばさりとて中のたえや果つべき

平公誠

逢ふ事や涙の玉の緒なるらむしばし絶ゆれば落ちてみだるる

弟子なりけるわらはの親に具して人の國へあか

らさまにとてまかりけるが久しく見えざりけれ

ばたよりにつけていひ遣しける

最嚴法師

み狩野の暫しばしのこひはさもあらばあれ反果そりてぬるか矢形尾やかたをの鷹

たのめたりける男をいまやいまやと待ちけるに

まへなる竹の葉に霞の降りかかりけるを聞きて

何處いづくをもよがる事れむイのわりなきに二ふたつにわくる我が身ともがな

をとこに忘られて歎きける頃八月ばかりにまへ

なる前栽の露をよもすがらながめてよめる 赤染衛門

諸ともにおきゐる露のなかりせば誰とか秋の夜をあかさまし

題しらず 曾禰好忠

きたりとも寐ねるまもあらし夏の夜の有明のつきも傾きにけり

新院くらるにおはしましける時雖契不來戀とい

ふ事をよませ給ひけるによみ侍りける 關白前太政大臣

來ぬ人をうらみもはてじ契りおきしその言の葉も情ならずや

題しらず 和泉式部

夕暮に物思ふことはまさるか和我れならざらむ人にとはばや

月のあかりける夜まうできたりける男の立ち

物いひ侍りける女のもとへいひ遣しける

大江爲基

思ふことなくてすぎぬる世の中につひに心をとどめつるかな

夜がれもせずまうで來ける男の秋立ちける日そ

の夜しもまうでこざりければあしたにいひ遣し

ける

一宮紀伊

常よりも露けかりける今宵かなこれや秋立つはじめなるらむ

女の許に罷りたりけるに親のいさむれば今はえ

なむ逢ふまじきといはせて侍りければよめる 坂上明兼

せきとむる岩間の水もおのづから下にはかよふ物とこそきけ

題しらす

惠慶法師

逢ふ事はまばらに編めるいよ簾いよいよ人^{われい}をわびさするかな

等思兩人といふ事をよめる

右大臣

左京大夫顯輔家にて歌合し侍りけるによめる 藤原顯廣朝臣

心をばとどめてこそは歸りつれあやしや何のくれをまつらむ

女のもとより夜ふかく歸りてあしたに遣しける 藤原實方朝臣

竹の葉に玉ぬく露にあらねどもまだよをこめておきにける哉

長月の晦日の日のあしたに初めたる女の許より

かへりて立ち歸りつかはしける 讀人しらす

皆人の惜む日なれどわれはただ遅く暮れゆくなけきをぞする

左衛門督家成歌合し侍りけるによめる 藤原範綱

すみよしのあさ澤小野の忘水たえだえならで逢ふよしもがな

藤原保昌朝臣に具して丹後國へまかりけるに忍

びて物いひける男のもとへいひつかはしける 和泉式部

われのみや思ひおこせむあぢきなく人は行方ゆくへもしらぬ物ゆゑ

詞花和歌集 卷第八

戀 下

人しづまりて來こといひたる女のもとへ待ちかね
てとくまかりたりければかくやは言ひつるとて

藤 原 相 如

君をわがのみいであはず侍りければいひ入れ侍りける
君をわがのみいであはず侍りければいひ入れ侍りける

題しらす
藤 原 道 經

我が戀はあひ初めてこそまさりけれ飾し摩まの褐かちの色ならねども

女のもとより曉かへりて立ち歸りいひ遣しける
清 原 元 輔

夜を深み歸りし空もなかりしをいづくよりおく露にぬれけむ

播磨なる飾摩しふまにそむるあなかちに人をこひしと思ふころかな

冬の頃暮にあはむといひたる女にくらしかねて

いひつかはしける

道 命 法 師

ほどもなくくると思ひし冬の日の心もとなきをりもありけり

家に歌合し侍りけるによめる

中 納 言 俊 忠

こひわびて獨ふせやによもすがら落つる涙やおとなしのたき

題しらず

大中臣能宣朝臣

御垣守衛士のたく火のよるはもえ晝は消えつつ物をこそ思へ

讀人しらず

我が戀は蓋身ふたみかはれる玉櫛笥いかにすれどもあふかたぞなき

山寺にこもりて日頃侍りて女のもとへいひつか

はしける

藤原範永朝臣

氷しておとはせねども山川のしたはながるるものと知らずや

關白前太政大臣の家にてよめる

藤原親隆朝臣

かぜふけばもしほの烟かたよりになびくをひとの心ともがな

題しらず

新院御製

瀬を早み岩にせかるる瀧川のわれてもすゑに逢はむとぞ思ふ

曾福好忠

しのぶれど涙ぞしるき紅にものおもふそでは染むべかりけり

文つかはしける女のいかなる事かありけむ今更

に返事せず侍りければいひ遣しける

源 雅 光

くれなるに涙のいろもなりにけり變るは人のこころのみかは

左京大夫顯輔が家に歌合し侍りけるによめる 平 實 重

戀ひ死なむ身こそ思へば惜しからね憂もつらきも人の咎かは

題しらず 道 命 法 師

つらさをば君にならひて知りぬるを嬉しき事は誰にとはまし

女を恨みてよめる 藤原道信朝臣

嬉しきはいかばかりかは思ふらむ憂は身にしむ物にぞありける

ひえの山に歌合し侍りけるによめる 心 覺 法 師

戀すれば憂身さへこそ惜まるれ同じよにだに住まむと思へば

じけに見えければいひ遣しける

道 命 法 師

山櫻つひに咲くべきものならば人のこころをつくさざらなむ

堀河院御時藏人に侍りけるに贈皇^{てイ}后宮の御方に

侍りける女を忍びてかたらひ侍りけるをこと人

にもものいふと聞きて白菊の花にさしつかはしけ

る

源 家 時

霜おかぬひとの心はうつろひておもがはりせぬしら菊のはな

返^{事イ}し女にかはりて

大 納 言 公 實

白菊のかはらぬ色もたのまれずうつろはでやむ秋しなければ

中納言としただが家の歌合によめる

藤 原 顯 綱 朝 臣

紅のこぞめのころもうへに著むこひのなみだの色かはるやと

題しらず

源 道 濟

ことをよめる

わびつつもおなじ都はなぐさみき旅寐ぞ戀のかぎりなりける

冷泉院春宮と申しける時百首歌奉りけるによめ

る

源 重 之

風をいたみ岩うつ波のおのれのみ碎けてものを思ふころかな

堀河院御時百首歌奉りけるによめる

修理大夫顯季

我が戀はよしのの山のおくなれや思ひいれどもあふ人もなし

題しらす

平 祐 舉

むねは富士そでは清見が關なれや烟もなみもたたぬ日ぞなき

藤 原 永 實

いたづらに千束くちにし錦木をまたこりすまに思ひたつかな

春になりてあはむとたのめける女のさもあるま

一度はおもひ絶えにし世の中をいかかはすべき賤のをだまき

三井寺に侍りけるわらはに京にいでばかならず

告げよとちぎりて侍りけるを京へいでたりとは

聞きけれどおとづれ侍らざりければいひ遣しけ

る
僧都覺雅

影見えぬきみは雨夜の月なれや出でても人にしられざりけり

さらにゆるぎけもなき女に七月七日つかはしけ

る
大納言道綱

七夕にけさ引く糸の露を重^{たも}みたわむけしきを見でややみなむ

戀のうたとてよめる
隆縁法師

身のほどを思ひしりぬることのみやつれなき人の情なるらむ

左衛門督家成が津の國の山莊にて旅宿戀といふ

はしける

平 兼 盛

忘るやとながらへゆけど身にそひて戀しき事は後れざりけり

題しらす

讀人しらす

年をへて燃ゆてふ不二の山よりも逢はぬおもひは我ぞ勝れる
侘びぬればしひて忘れむとおもへども心よわくも落つる涙か
おもはじと思へばいとど戀^{どイ}しきはいづれかわれが心なるらむ

能 因 法 師

心さへむすぶの神やつくりけむ解くるけしきも見えぬ君かな

あだあだしくも有るまじかりける女をいと忍び

ていはせ侍りけるに世^{をイ}にちりてわづらはしきさ

まにきこえければいひたえて後とし月をへて思

ひあまりていひつかはしける

前大納言公任

左京大夫顯輔が家に歌合し侍りけるによめる 大納言 成通
よそながら哀といはむことよりも人傳^{はい}ならでいとへとぞ思ふ

題しらす

寛念法師

戀ひ死なば君は哀といはずともなかなかよその人^{のい}やしのばむ

つれなき女につかはしける

賀茂成助

いかばかり人のつらさを恨みましうき身の咎^{のい}と思ひなさずば

左衛門督家成が家に歌合し侍りけるによめる 藤原頼保

いかならむ言の葉にてか靡くべき戀しといふはかひなかりけり

題しらす

淨藏法師

我が爲につらき人をばおきながら何のつみなき世をや恨みむ

女をあひかたらひけるころよしありて津の國^{へい}に

ながらといふ所にまかりてかの女のもとにつか

題しらす

平兼盛

谷川の岩間をわけてゆく水のおとにのみやは聞かむと思ひし^{すらむい}

春立ちける日承香殿女御のもとへつかはしける 一條院御製

よとともに戀ひつつ過ぐる年月は變れどかはる心地こそせね^{すい}

承暦四年内裏の歌合によめる 藤原伊家

わが戀はゆめぢにのみぞ慰むるつれなき人も逢ふと見つれば^{ゆい}

新院くらるにおはしましし時うへのをのことも

御前にめして寐覺の戀といふ事をよませ給ひけ

るによめる

左兵衛督公能^{行い}

慰むるかたもなくてややみなまし夢にも人のつれなかりせば

寛和二年内裏歌合によめる 藤原惟成

命あらば逢ふよもあらむ世の中になど死ぬばかりおもふ心ぞ

詞花和歌集 卷第七

戀 上

戀のうたとてよみ侍りける

關白前太政大臣

あやしくも我がみ山木のもゆるかな思ひは人につけてし物を

題しらす

藤原實方朝臣

いかでかはおもひ有りともしらすべき室の八島の烟ならでは

隆 恵 法 師

かくとだにいはで果なく戀ひ死なば魎やがてしられぬ身とやなりなむ

堀河院御時百首歌奉りけるによめる

大藏卿匡房

思ひかね今日たてそむる錦木の千束ちづかもまたで逢ふよしもがな

はかなくも今朝の別の惜しき哉いつかは人をながらへて見し_{むい}

ふたつなき心を君にとどめおきて我さへ我にわかれぬるかな

大納言經信太宰帥にて下り侍りけるに俊頼朝臣

まかりければいひつかはしける

太皇太后宮甲斐

暮はまづそなたをのみぞ眺むべき出でむ日毎に思ひおこせよ

橘爲仲朝臣みちの國の守にてくだりけるに太皇

太后宮の大盤所よりとて誰とはなくて

東路あづさちのはるけき道を行きめぐりいつかとかくべき下ひものせき

修理大夫顯季太宰大貳にて下らむとし侍りける

に馬に具してつかはしける

權僧正永縁

立ち別れはるかにいきの松なれば戀しかるべき千代の陰かな

あづまへまかりける人の宿りて侍りけるがあか

つきに立ちけるによめる

傀儡傀儡靡イくぐつなびき

茜あかねさす日にむかひても思ひいでよ都は晴れぬながめすらむと

弟子に侍りけるわらはの親に具して人の國へま
かりけるにさうぞく遣すとてよめる
法 橋 有 禪

別路のくさ葉をわけむたび衣たつよりかねて濡るるそでかな

月ごろ人のもとにやどりけるがかへりける日あ
るじにあひてよめる
玄 範 法 師

また來むとたれにもえこそ言ひおかね心になふ命ならねば

もろこしへ渡り侍りけるを人のいさめ侍りけれ
ばよめる
寂 照 法 師

止まらむ止まらじともおもほえず何處いづもつひの住處すまならねば

人のもとに日ごろ侍りてかへる日あるじにあひ
ていひける
僧 都 清 胤

よろこびをくはへて急ぐ旅なれば思へどえこそ止めざりけれ

橘則光朝臣みちの國のかみにて下り侍りけるに

餞し侍るとてよめる

藤原輔尹朝臣

とまりて待つべき身こそ老いにけれあはれ別は人の爲かは

物申しける女の齋宮の下り給ひけるとともにまか

りけるにいひ遣しける

藤原道經

かへり來む程をもらで悲しきはよを長月のわかれなりけり

大納言經信太宰帥にて下りけるに川尻にまかり

あひてよめる

津守國基

六年にて君は來まさむ住吉のまつべき身こそいたく老いぬれ

つねに侍りける女房の日向の國へ下り侍りける

に餞し給ふとてよませ給ひける

一條院皇后宮

詞花和歌集 卷第六

別

參議廣業たえて後伊豫のかみにてくだりけるに

つかはしける

民部内侍

都にておほつかなさをならはずば旅寐をいかに思ひやらまし

道貞にわすられて後みちの國のかみにてくだり

けるに遣しける

和泉式部

もろともにたたまし物をみちのくの衣の關をよそに聞くかな

左京大夫顯輔加賀守にて下り侍りけるにいひつ

かはしける

源俊賴朝臣

天喜四年四月晦日^イ后宮の歌合によませ給ひける 後冷泉院御製
長濱の眞砂のかずもなにならじつきせず見ゆる君が御代^{千イ}かな

上東門院御屏風に十二月つごもりのかたかきた

る所によめる

前大納言公任

一年^{のイ}を暮れぬとなにか惜むべきつきせぬ千代の春をまつには

河原院に人々まかりて歌合し侍りけるに松臨江

といふことを

惠慶法師

たれにとか池のこころも思ふらむそこにやどれる松の千年を

後三條院の住吉まうでによめる

読人しらす

君が代の久しかるべきためしにや神も植ゑけむすみよしの松

としつなに具して住吉にまうでてよめる

大納言經信

住吉のあらひと神の久しさにまつもいくたび生ひかはるらむ

京極前太政大臣家に歌合し侍りけるによめる 匡房

君が代はくもりもあらじ三笠山みねに朝日のささむかぎりは

長元八年宇治前太政大臣の家の歌合によめる 能因法師

君が代は白雲かかる筑波嶺のみねのつづきのうみとなるまで

題しらず 染衛門

榊葉を手にとりもちていのりつる神の代よりも久しからなむ

三條太政大臣の賀の屏風の繪に花見てかへる人

かきたる所によめる 中務

あかでのみかへると思へば櫻花をるべき春ぞつきせざりける

ある人の子三人にかうぶりをさせたりけるに又

の日つかはしける 清原のもとすけ

松島の磯にむれるるあしたづの己がさまざま見えし千代かな

詞花和歌集 卷第五

賀

一條院上東門院に行幸せさせ給ひけるに

入道前太政大臣

君が代にあふくま川の底きよみ千年をへつつすまむとぞ思ふ

正月一日子生みたる人に襦袢つかはすとてよめ

る

伊勢大輔

珍しくけふたち初むる鶴の子は千代のむつきを重ぬべきかな

一條左大臣の家の障子に住吉のかたかきたる所

によめる

大中臣能宣朝臣

過ぎ來にしほどをばすてつ今年より千代はかぞへむ住吉の松

おくやまの岩垣もみぢ散りはてて朽葉がうへに雪ぞつもれる

大江嘉言

日暮しに山路の昨日しぐれしは富士の高嶺の雪にぞありける

新院くらるにおはしましし時雪中眺望といふ事

をよませ給ひけるによみ侍りける

關白前太政大臣

くれなるに見えしこずゑも雪ふれば白木綿しらゆふかくる神なびの森

題しらす

和泉式部

まつ人の今もきたらばいかかせむ踏ままくをしき庭の雪かな

歳暮の心をよめる

成尋法師

數ならぬ身にさへ年のつもるかな老は人をもきはざりけり

曾禰好忠

魂祭る年のをはりになりにつけり今日にや又もあはむとすらむ

いほりさす櫛の木陰にもる月のくもと見れば時雨ふるなり

天曆の御時御屏風に網代に紅葉おほく寄りたる

かたかきける所をよめる

平兼盛

みやまには嵐やいたく吹きぬらむ網代もたわに紅葉つもれり

鷹狩をよめる

藤原長能

霰ふるかた野のみ野のかりころも濡れぬ宿かす人しなれば

堀河院御時百首歌奉りけるによめる

大藏卿匡房

山深みやく炭がまのけぶりこそやがて雪けのくもとなりけれ

大和守にて侍りける時入道前太政大臣の許にて

初雪を見てよめる

藤原義忠朝臣

年をへて吉野の山にみなれたる目にめづらしき今朝のしら雪

題しらす

大藏卿匡房

山ふかみおちて積れるもみぢ葉のかわける上に時雨ふるなり

落葉埋水といふ事をよめる

惟宗隆頼

今更におのがすみかを立たじとて木の葉の下に鶯ぞ鳴くなる

落葉有聲といふ事をよめる

風ふけば櫓の枯葉のそよそよといひ合せつついつか散るらむ

題しらす

曾禰好忠

外山なる柴のたち枝にふくかぜの音きくをりぞ冬はものうき

讀人しらす

秋はなほ木の下陰はがくれイもくらかりき月はふゆこそ見るべかりけれ

東山に百寺をがみけるに時雨しければよめる 左京大夫道雅

諸共に山めぐりする時雨かなふるにかひなき身とはしらすや

旅宿時雨といふ事をよめる

瞻西上人

詞花和歌集 卷第四

冬

題しらず

曾 禰 好 忠

何事も行きていのらむと思ひしに神無月にもなりにけるかな
楸ひさぎおふる澤邊のちはら冬くればひばりの床ぞあらはれにける

家に歌合し侍りけるに落葉をよめる

大 貳 資 通

梢にてあかざりしかばもみぢ葉の散りしく庭を拂はでぞ見る

題しらず

左衛門督家成

色々にそむるしぐれにもみぢ葉つひは争ひかねて散りはてにけり

大 江 嘉 言

初霜をよめる

大中臣能宣朝臣

初霜もおきにけらしな今朝見れば野邊の淺茅も色付きにけり

雨中九月盡といふ事をよめる

前大納言公任

いづ方へ秋のゆくらむ我が宿に今宵ばかりはあまやどりせよ

題しらす

曾 禰 好 忠

山里はゆききの道も見えぬまで秋の木の葉にうづもれにけり

春より法輪寺にこもりて侍りける秋大井河に紅

葉のひまなく流れけるを見てよめる

道 命 法 師

春雨のあやおりかけし水のおもにあきはもみぢの錦をぞしく

雨後落葉といふ事をよめる

源 俊 頼 朝 臣

名残なく時雨の空は晴れぬれどまだふる物は木の葉なりけり

月のあかき夜紅葉の散るをみてよめる

平 兼 盛

あれはてて月もとまらぬ我が宿に秋の木の葉を風ぞふきける

一條攝政家の障子屏風に網代に紅葉のひまなく寄り

たるかたかきたる所をよめる

藤 原 惟 成

秋深み紅葉おちしく網代木は氷魚のよるさへあかく見えけり

題しらす

道命法師

今年また咲くべき花のあらばこそ移ろふ菊にめかれをもせめ

曾禰好忠

草がれの冬まで見よと露霜のおきてのこせるしらぎくのはな

宇治前太政大臣白河にて見行客といふ事をよめ

堀河右大臣

關こゆる人にとはばやみちのくの安達のまゆみ紅葉しにきや

武藏の國より上り侍りけるに三河の國二村山の

紅葉を見てよめる
橘能元

いくらとも見えぬ紅葉の錦かなたれふたむらの山といひけむ

寛治元年太皇太后宮の歌合によめる
大藏卿匡房

夕されば何かいそがむもみぢ葉の下てる山はよるも越えなむ

秋風に露をなみだとなくむしの思ふこころをたれに問はまし

駒迎をよめる

大藏卿匡房

逢坂の杉間のつきのなかりせばいくきの駒といかで知らまし

永承五年一宮歌合によめる

出羽辨

きく人のなど安からぬ鹿の音は我が妻をこそ^{山イ}こひて鳴くらめ^{わびイ}

題しらす

藤原伊家

秋萩を草のまくらにむすぶ夜はちかくも鹿のこゑをきくかな

九月十三夜に月照菊花といふ事をよませ給ひけ

る

新院御製

秋ふかみはなには菊の關なれば下葉につきもりあかしけり

關白前太政大臣家にてよめる

源雅光

霜がるるはじめと見ずば白菊のうつろふ色をなけかざらまし

敦輔王

萩の葉にこととふ人もなきものを來る秋ごとにそよと答ふる

題しらす

曾禰好忠

秋の野のくさむらごとにおく露はよるなくむしの涙なるべし

りけり

永源法師

八重葎しけれる宿はよもすがら蟲の音聞くぞとりどころなる

和泉式部

鳴く蟲のひとつ聲にも聞えぬはこころごころにものや戀^{悲イ}しき

陸奥國の任はててのほり侍りけるに尾張の國鳴

海野に鈴蟲の鳴き侍りけるをよめる

橘爲仲朝臣

古里にかはらざりけり鈴蟲のなるみの野邊のゆふぐれのころ

天祿三年女四宮歌合によめる

橘正通朝臣

法輪へまうでけるにさが野の花おもしろく咲き
て侍りければ見てよめる
赤染衛門

秋の野の花見る程の心をば行くとや云はむとまるとや云はむ

賀茂のいつきときこえて侍りける時本院のすい
がきにあさがほの花咲きかかりて侍りけるをよ
める
禰子内親王

神垣にかかるとならば朝顔もゆふかくるまでにほはざらめや

堀河院の御時百首歌奉りけるによめる
隆源法師

ぬしやたれきる人なしに藤袴見れば野ごとにほころびにけり

白河院烏羽殿にて前栽あはせせさせ給ひけるに

よめる
周防内侍

朝な朝なつゆおもけなる萩が枝に心をさへもかけて見るかな

題しらず

源 道 濟

ひとり居てながむる宿のをぎの葉に風こそわたれ秋の夕ぐれ

大 江 嘉 言

萩の葉にそそや秋風ふきぬなりこほれやしぬるつゆのしら玉

和 泉 式 部

秋ふくは如何なるいろの風なれば身にしむばかり哀なるらむ

曾 禰 好

みよしののきさ山かけにたてる松いく秋風にそなれきぬらむ

藤原顯綱朝臣

萩の葉に露吹きむすぶこがらしの音ぞ夜寒になりまさるなる

霧をよめる

源 兼 昌

夕霧にこずるも見えず初瀬山いりあひのかねの音ばかりして

秋の夜のつきに心のひまどなき出づるをまつと入るを惜むと

關白前太政大臣家にて八月十五夜のころをよ

める

藤原朝隆朝臣

ひくこまにかけをならべて逢坂の關路よりこそ月はいでけれ

左衛門督家成が家に歌合し侍りけるによめる
隆縁法師

秋の夜の露も曇らぬ月をみておきどころなき我がころかな

月を待つころをよめる
大江嘉言

秋のよの月まちなねておもひやる心いくたびやまを越ゆらむ

月浮山水といふ心事¹をよめる
藤原忠兼

秋山の清水はくまじにごりなばやどれる月のくもりもぞする

寛和二年内裏歌合によませ給ひける
花山院御製

秋の夜の月にこころのあくがれてくもるに物を思ふころかな

いかなればおなじ空なる月影の秋しもことに照りまさるらむ

家に歌合し侍りけるによめる

左衛門督家成

春夏とそらやはかはる秋の夜の月しもいかで照りまさるらむ

月を御覽じてよませ給ひける

三條院御製

秋に又逢はむあはじめ知らぬ身は今宵ばかりの月をだに見む

題しらす

天台座主明快

有りしにもあらずなりゆく世の中にかはらぬ物は秋の夜の月

關白前太政大臣の家にてよめる

藤原重基

秋の夜の月の光のもるやまは木のしたかけもさやけかりけり

ひえの山の念佛にのほりて月をみてよめる

良暹法師

天つ風雲ふきはらふたかねにて入るまで見つるあきの夜の月

京極前太政大臣家の歌合によめる

藤原イ源頼綱朝臣

天の川たま橋いそぎわたさなむ淺瀬たどるも夜のふけゆくになイ

橘俊綱伏見の山庄にて七夕後朝のこころをよめ

る

良 暹 法師

あふ夜とは誰かはしらぬ棚機のおくる空をもつつまざらなむ

藤原顯綱朝臣

棚機のまちつるほどのくるしさとあかぬ別といづれまされリイる

題しらす

祝 部 成 仲

天の川かへらぬみづを棚機はうらやましとや今朝はみるらむ

三條太政大臣の家にて八月十五夜に水上月とい

ふことをよめる

源 順

水清みやどれる月のかけさへや千代まで君とすまむとすらむ秋の月イ

題しらす

右 大 臣

ける

花山院御製

棚機に衣もぬぎてかすべきにゆゆしとや見むすみぞめのそで

承暦二年内裏歌合によめる

藤原顯綱朝臣

棚機に心はかすとおもはねど暮れゆくそらはうれしかりけり

題しらず

加賀左衛門

如何なればとだえそめけむ天の川逢瀬に渡すかささぎのはし

新院のおほせごとにて百首歌たてまつりけるに

よめる

左京大夫顯輔

天の川よこぎるくもや棚機のそらだきもののけぶりなるらむ

寛和二年内裏の歌合によめる

大中臣能宣朝臣

おほつかな變りやしにし天の川としにひとたび渡る瀬なれば

七夕をよめる

修理大夫顯季

詞花和歌集 卷第三

秋

題しらず

曾 禰 好 忠

山城の烏羽田のおもを見わたせばほのかにけさぞ秋風はふく

津の國にすみ侍りけるころ大江爲基任はてての

ほり侍りければいひつかはしける

僧 都 清 胤

君すまばとはましものを津の國の生田のもりのあきのはつ風

・ 七月七日式部大輔資業がもとにてよめる

橘 元 任

萩の葉にすぐ糸をもささがには柵機のイにとやけさは引くらむ

御ぐしおろさせ給ひて後七月七日よませたまひ

そま川の筏のとうきまくら夏はすすしきふしどなりけり

長保五年入道前太政大臣の家に歌合し侍りける

によめる

源 道 濟

まつ程に夏の夜いたくふけぬればをしみもあへず山の端の月

題しらす

曾 禰 好 忠

川上に夕立すらしみくづせぐやな瀬のさなみたちさわぐなり

閏六月七日によめる

太皇太后宮大貳

常よりもなけきやすらむ棚機のあはまし暮をよそにながめて

題しらす

さ が み

下紅葉ひと葉づつちる木のもとに秋とおほゆる蟬のこゑかな

よ した だ

蟲の音もまだうちとけぬ草むらに秋をか^{けい}ねてもむすぶ露かな

やどちかくはな橘はほり植ゑじむかしを忍ぶつまとなりけり

なでしこの花を見てよめる

藤原經衡

うすくこく垣ほににほふ撫子のはなのいろにぞ露もおきける

贈左大臣の家に歌合し侍りけるによめる

修理大夫顯季

たねまきしわが撫子の花ざかりいくあさ露のおきて見つらむ

寛和二年内裏歌合に

大貳高遠

なく聲もきこえぬもののかなしきは忍びにもゆる螢なりけりこひ

六條右大臣家に歌合し侍りけるによめる

讀人しらす

さつきやみ鶉川にともすかがり火の数ますものは螢なりけり

水邊納涼といふ事をよめる

藤原家經朝臣

風ふけば河邊すすしくよる波のたちかへるべき心地こそせね

題しらす

會禰好忠

題しらす

皇嘉門院治部卿

五月雨の日をふるままに鈴鹿川八十瀬のなみぞ音まさりける

堀河院御時百首歌奉りけるによめる

大藏卿匡房

我^わ妹^も子^こがこやのしのやの五月雨にいかでほすらむ夏引のいと

右大臣家の歌合によめる

源 忠 季

五月雨は難波堀江のみをつくし見えぬや水のまさるなるらむ

郁芳門院のあやめの根合によめる

中納言通俊

もしほやく須磨の浦人うちはへていとひやすらむ五月雨の空

藤原通宗朝臣歌合し侍りけるによめる

良 暹 法師

五月やみ花たちばなに吹く風はたがさとまでか匂ひゆくらむ

世をそむかせ給ひて後花橘を御覽じてよませ給

ひける

花山院御製

題しらず

能因法師

山彦のこたふる山のほととぎすひと聲なけばふたこゑぞ聞く

藤原伊

郭公あかつきかけて鳴くこゑを待たぬ寐ざめの人やきくらむ

大納言公教

待つほどは寐^ぬるともなきを郭公なくねは夢のこちこそすれ

閑中郭公といふ事をよめる

源俊賴朝臣

なきつとも誰にかいはむ郭公かけよりほかにひとしなれば

題しらず

待賢門院堀河

こやの池におふる菖蒲の長き根はひく白糸のこちこそすれ

土御門右大臣の家に歌合し侍りけるによめる
源賴家朝臣

よもすがらたたたく水鷄^{くひな}は天の戸をあけて後こそ音せざりけれ

神まつりをよめる

源 兼 昌

榊とるなつの山路やとほからむゆふかけてのみまつる神かな

郭公を待ちてよめる

周 防 内 侍

むかしにも有らぬわが身に郭公まつころこそ變らざりけれ

關白前太政大臣の家にて郭公の歌おのおの十首

づつよませ侍りけるによめる

藤 原 忠 兼

郭公なく音ならではよの中に待つこともなき我が身なりけり

題しらす

花 山 院 御 製

ことしだにまづはつ聲を郭公よにはふるさでわれに聞かせよ

山寺にこもりて侍りけるに郭公のなき侍らざり

ければよめる

道 命 法 師

山里のかひこそなければととぎす都のひともかくや待つらむ

詞花和歌集 卷第二

夏

卯月の一日によめる

僧基法師

今日よりはたつ夏衣うすくともあつしとのみや思ひわたらむ

題しらす

源俊賴二朝臣

雪のいろをぬすみて咲ける卯の花はさえでや人に疑はるらむ

齋院長官にて侍りけるが少將に成りて賀茂の祭

の使して侍りけるを珍しきよし人のいはせて侍

りければよめる

大藏卿長房

年をへてかけしあふひは變らねど今日のかざしは珍しきかな

惜むとて今宵かきおく言の葉やあやなく春のかたみなるべきらまし

麗景殿の女御の家の歌合によめる

讀人しらす

八重咲けるかひこそなけれ山吹のちらば一重もあらじと思へば

堀河院御時百首歌奉りけるによめる

太皇太后宮肥後

こぬ人をまちかねやまのよぶこ鳥おなじ心にあはれとぞ聞く

新院位におはしましし時牡丹をよませ給ひける

によみはべりける

關白前太政大臣

咲きしより散り果つるまで見し程に花の下にて廿日經にけり

老人惜春といふ事をよめる

橘 俊 綱

老いてこそ春の惜しさは増りけれいま幾度もあはじと思へば

三月盡日うへのをのこどもをおまへにめして春

の暮れぬる心をよませさせ給ひけるによませ給

ひける

新 院 御 製

める

藤原範永朝臣

散る花もあはれと見ずや石いそのかみふり果つるまでをしむ心を

庭の櫻の散るを御覽じてよませ給ひける

花山院御製

我がやどの櫻なれども散るときは心にえこそまかせざりけれ

さくらの花のちるを見てよめる

源俊賴朝臣

身にかへて惜むにとまる花ならばけふや我が世の限ならまし

落花滿庭といふ事をよめる

花園左大臣

庭もせに積れる雪と見えながらかをるぞ花のしるしなりける

題しらぬ

大中臣能宣朝臣

ちる花にせきとめらるる山川のふかくも春のなりにけるかな

寛和二年内裏歌合によめる

藤原長能

一重だにあかぬにほひをいとどしく八重かさなれる山吹の花

太皇太后宮賀茂のいつきときこえ給ひける時人
人まゐりて鞠つかうまつりけるに硯のはこのふ
たに雪をいれていだされたりけるしき紙にかき
つけ侍りける

攝

津

櫻花ちりしくはをはらはねば消えせぬ雪となりにけるかな

住みあらしたる家の庭に櫻の花のひまなく散り

積りて侍りけるを見てよめる

源俊頼朝臣

はく人もなき古里の庭のおもは花散りてこそ見るべかりけれ

橘としつなの朝臣の伏見の山庄にて水邊落花と

いふことをよめる

源師賢朝臣

さくら咲く木の下水は浅けれどちりしく花のふちとこそなれ

藤原兼房朝臣の家にて老人惜花といふことをよ

よめる

源 登 平

櫻ばな手ごとに折りてかへるをば春の行くとや人はみるらむ

題しらず

道 命 法 師

春ごとに見る花なれど今年より咲きはじめたる心地こそすれ

歸雁をよめる

贈 左 大 臣 母

古里の花のにほひやまさるらむしづこころなくかへる雁がね

源 忠 季

なかなかに散るを見じとや思ふらむ花の盛にかへるかりがね、

櫻の花のちるを見てよめる

藤 原 元 眞

櫻ばな散らさで千代もみてしがな飽かぬ心はさてもありやと

天徳四年内裏歌合によめる

大 中 臣 能 宣 朝 臣

櫻花風にし散らぬものならばおもふことなき春にぞあらまし

所々に花をたづぬといふ事をよませ給うける　白河院御製
春くればはなの梢にさそはれていたらぬ里のなかりつるかな

橘俊綱朝臣の伏見の山庄にて水邊櫻花といふこ
とをよめる　源師賢朝臣

池水のみぎはならずばさくらばな影をも波にをられましやは

一條院の御時ならの八重櫻を人の奉りけるをそ
の折御前に侍りければその花を題にて歌よめと

おほせごとありければ　伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重櫻けふこのへににほひぬるかな

新院のおほせ事にて百首の歌奉りけるによめる　右近中將教長朝臣
ふるさとに問ふ人あらば山櫻ちりなむのちを待てとこたへよ

人々あまた具して櫻花を手毎に折りて歸るとて

おなじ歌合によめる

一宮紀伊

あさまだき霞なこめそ山ざくら尋ねゆくまのよそめにも見む

大藏卿匡房

白雲と見ゆるにしるしみよしのの吉野の山のはなざかりかも

承暦二年内裏の後番歌合ごはんのうたあはせによめる

大納言公實

山櫻をしむにとまるものならば花ははるともかぎりざらまし

遠山櫻といふ事をよめる

前齋院出雲羽イ

九重にたつしら雲と見えつるはおほうち山のさくらなりけり

題しらず

戒秀法師

春ごとに心をそらになすものは雲井に見ゆるさくらなりけり

しら川に花見にまかりてよめる

源俊頼朝臣

白川のはるのこすゑを見わたせば松こそ花のたえまなりけれ

古郷の柳をよめる

源 道 濟

古里のみかきの柳はるばると誰がそめかけしあさみどりぞも

題しらす

源 頼 政

みやま木のその梢とも見えざりし櫻ははなにあらはれにけり

京極前太政大臣の家に歌合し侍りけるによめる 康 資 王 母

紅のうす花ざくらにほはすばみなしらくもと見てやすぎまし

この歌を判者大納言經信くれなるの櫻は詩に作侍¹

れども歌にはよみたる事なむなきと申しければ

あしたにかの康資王母のもとにつかはしける 京極前太政大臣

白雲はたちへだつれどくれなるのうすはな櫻ころにぞそむ

かへし

康 資 王 母

しらくもはさも立たばたて紅のいまひとしほを君しそむれば

梅花をよめる

右兵衛督公行

梅のはな匂をみちのしるべにてあるじも知らぬ宿に來にけり

題しらす

俊恵法師

まこも草つのぐみわたる澤邊にはつながぬ駒も放れざりけり

藤原盛經

とりつなぐ人もなき野の春ごまは霞にのみやたなびかるらむ

僧都覺雅

もえ出づる草葉のみかはをざさ原駒のけしきも春めきにけり

平兼盛

天徳四年内裏歌合に柳をよめる

佐保姫のいとそめかくる青柳を吹きなみだりそ春のやまかぜ

贈左大臣の家の歌合によめる

原季遠

いかなれば氷はとくる春風^{吹きとく}にむすほほるらむあをやぎのいと

題しらす

曾 禰 好 忠

雪消えばゑぐの若菜もつむべきに春さへ晴れぬみ山邊のさと

冷泉院東宮と申しける時百首歌奉りけるによめ

る

源 重 之

春日野に朝鳴く雉のはねおとは雪の消えまにわかな摘めとや

鷹司殿の七十賀の屏風に子日したるかたかきた

る所によめる

赤 染 衛 門

萬代のためしに君がひかるれば子の日の松もうらやみやせむ

題しらす

新 院 御 製

子の日すと春の野ごとに尋ねれば松にひかるる心地こそすれ

梅花遠薫といふ心を

源 時 綱

吹きくれば香をなつかしみ梅の花ちらさぬほどの春風もがな

詞花和歌集 卷第一

春

堀河院御時百首歌奉りけるに春たつ心をよめる 大藏卿匡房
氷りるし志賀の唐崎うちとけてささなみ寄するはる風ぞ吹く

寛和二年内裏歌合に霞をよめる

藤原惟成

きのふかも霞ふりしかしがらきのとやまの霞はるめきにけり

天徳四年内裏歌合によめる

平兼盛

ふる里は春めきにけりみよし野のみかきがはらは霞をこめたり

はじめて鶯の聲を聞きてよめる

道命法師

たまさかにわが待ちえたる鶯の初音をあやなひとや聞くらむ

金葉和歌集終

在水鳥の下夢にだにの上

山の歌合に戀の心を

隆覺法師

身の程を思ひしりぬる事のみやつれなき人のなさけなるらん

在面影下淺ましや上

戀の心を

琳賢法師

あくといふことを知らばや紅のなみだに染むる袖やかへると

在逢ひ見ての下いつとなく上

卷第八 戀歌下

題しらず

讀人しらず

いとせめて戀しき時は播磨なる飭摩しかまに染むるかちよりぞくる

在逢ふ事の下逢ふ事は上

七十になるまでつかさもなくて萬にあやしき事
をおもひつづけて

源俊頼朝臣

ななそぢに満ちぬる潮の濱びさし久しくよにも埋れぬるかな

* * * * *

異本

卷第七 戀歌上

攝政左大臣家にて戀の心をよめる

藤原爲眞朝臣興イ

あふ事のなきをうき田の森に住む呼子鳥こそ我が身なりけれ

頼めて不逢戀

藤原親隆朝臣

戀しなで心つくしに今までもたのむればこそいきのまつばら

鵜の水にうかべるを見て

あらうと見れどくろき鳥かな

さもこそは住すみの江ならめよとともに

瀧の音のよるまさるを聞きて

よるおとすなりたきのしら糸

くり返しひるもわくとは見ゆれども

柱をみて

ものイ

奥なるをもやはしらとはいふ

見わたせば内にもとをばたててけり

頼 算 法 師

讀 人 し ら す

讀 人 し ら す

成 光

觀 暹 法 師

ひくにはよわきすまひ草かな
とる手にははかなくうつる花なれど

讀人しらす

鳥を籠軒にさしたりけるが夜雨にイに入れ侍りけるが横雨に濡れけるを見て

雨ふればきじもしととなりけり
かささぎならばかからましやは

蓑蟲のうめの花咲きたる枝にあるを見て

うめの花がさきたるみのむし

まへなるわらはのつけける

あめよりは風ふくなどやおもふらむ

律師慶暹

川といふ川ありかみより船のくだりけるを薀あ
くる侍してとはせければ蓼と申すものかりてま
かるなりといふを聞きて口すさびにいひける

たでかる船のすぐるなりけり

源頼光朝臣

これを連歌に聞きなして

朝まだきからろのおとの聞こゆるは

相模母

花くぎは散るてふことぞなかりける

讀人しらす

風のまにまにうてばなりけり

前太政大臣家のふしで

すまひぐさといふ草のおほかりけるを引きすて
させけるを見て

かりはかまをばをしと思ひて

信

綱

あゆを見て

なにあゆるを鮎といふらむ
鵜舟にはとりいれし物をおほつかな

讀人しらず

匡房卿妹

和泉式部がかもにまるりけるにわらうづに足を

くはれてかみをまきたりけるを見て

ちはやぶるかみをばあしにまく物か

是をぞしものやしろとはいふ

神主忠頼

和泉式部

源頼光が但馬守にてのほりける時館の前にけた

かはら屋をみて

かはらやの板ぶきにても見ゆるかな

つちくれしてや作りそめけむ

讀人しら

助

成俊すけ

つくしのしかイ
しかの島をみて

つれなく立てるしかの島かな

ゆみはりの月のいるにもおどろかで

爲

國

忠助

宇治へまかりけるみちにて日頃雨のふりければ

水の出でて賀茂川を男のはかまをぬぎて手にさ

さけて渡るをみて

かも川をつるはぎにてもわたるかな

頼綱朝臣

見て

春の田にすきいりぬべきおきかな
かのみなぐちに水をいればや

僧 正 源 覺
宇治入道前太政大臣

日の入るを見て

日の入るはくれなるにこそ似たりけれ
あかねさすとも思ひけるかな

觀 遲 法 師
平 爲 成

田中に馬のたてるを見て

田にはむ駒はくろにぞありける
なはしろの水にはかけと見えつれど

永 源 法 師
永 成 法 師

あづま人のこゑこそ北にきこゆなれ
陸奥國みちのくによりこしにやあるらむ

永成法師
律師慶範

ももどのの花をみて
ももどののもの花こそ咲きにけれ
梅津のうめは散りやしぬらむ

賴經法師
公資朝臣

賀茂の御社にて物つく音のしけるを聞きて
しめの内にきねの音こそきこゆなれ
いかなる神のつくにか有らむ

神主成助
行重

宇治にて田の中に老いたる男のふしたりけるを

かくてつひにおちいるとてよめる

たゆみなく心をかくる彌陀佛みだほきひとやりならぬちかひたがふな

屏風

障子のゑに天王寺の西門よりにて法師の船にのりて

西ざまに漕ぎはなれて行くかたかける所をよめ

る

源俊頼朝臣

阿彌陀佛となふる聲をかぢにてや苦しき海を漕ぎ離るらむ

連歌

ゐたりける所の北のかたに聲なまりたる人の物
いひけるを聞きて

極樂をおもふといへる事心イを

源俊頼朝臣

よもの海の波にただよふ水屑みくづをも七重の網にひきなもらしそ

醍醐櫻イの舍利會に花のちるを見てよめる

珍海法師母

けふも猶をしみやせまし法のためちらす花ぞと思ひなさずば

地獄の繪に劔のえだに人のつらぬかれたるを見

てよめる

和泉式部

あさましや劔の枝のたわむまでいかなるつみのイこは何のみのなれるなるらむ

人のもとに侍りけるに俄にたえいりてうせなむ

としければ薔のもとにかきいれてりけるイ大路におきた

りけるに草の露のあしにさはる程郭公のなくを

聞きていきのしたによめる

田口重如

草の葉にかどではしたり郭公しでのやま路もかくやつゆけき

藥王品の心をよめる

懷尋法師

うき身をし渡すと聞けばあま小船のりに心をかけぬ日ぞなき

人のもとにて經供養しけるに五百弟子授記品の
心を説けるに繫寶珠のことのたふとかりけるよ
しをよみてかづけものに結びつけて侍りけるを
見てかへしによみ侍りける

權僧正永縁

いかにして衣の玉をしりぬらむおもひもかけぬ人もあるよに

依^ひ他^たの八のたとひを人々よみけるに此身如幻と

いへる事をよめる

懷尋^{春イ}法師

いつをいつと思ひ撓^{たゆ}みて陽炎^{かげろふ}のかけるふ程の世をすぐすらむ

常住心月輪といへる心をよめる

澄成法師

よと共に心のうちにすむ^{あるイ}月をありと知るこそ晴るるなりけれ

弟子品の心をよめる

僧正靜圓

吹き返すわしの山風なかりせばころものうらの玉をみましや

提婆品の心をよめる

瞻西上人

法のためになふ薪にことよせてやがて浮世をこりぞはてぬる

皇后宮權大夫師時

けふぞ知るわしの高嶺にてる月を谷川くみしひとのかけとは

龍女成佛をよめる

勝超法師

わたつみの底のもくづと見し物をいかでか空の月となるらむ

涌出品の心をよめる

權僧正永縁

たらちねは黒髪ながらいかなればこのまゆ白き糸となるらむ

不輕品の心をよめる

覺雅法師

ありがたき法をひろめし聖ひいにぞうち見し人もみちびかれける

しける

選子内親王

あみだ佛となふる聲に夢さめて西へかだながるゝふく月をこそみれ

依釋迦遺教念阿彌陀といふ事をよめる

皇后宮肥後

教へおきて入りにし月のなかりせばいかで心を西にかけまし

清海上人後生を猶おそり思ひてねぶり入りたり

けるに枕がみに僧の立ちてよみかけける歌

かくばかりこちてふ風のふくを見てちりの疑を残さずもがな

普賢十願の文に願我臨欲命終時といへる文をよ

める

覺樹法師

命をも罪をも露にたとへけり消えばともにや消えむとすらむ

衆罪如霜露といへる文をよめる

覺譽法師

罪はしも露ものこらず消えぬらむ長き夜すがらくゆる思ひに

たりけるをほの聞きてよませ給ひける

三

宮

見しままに我は悟をえてしかば知らせでとると知らざらめやは

月のあかりける夜瞻西上人のもとへつかはし

ける

僧正行尊

いさぎよき空のけしきを頼むかなわれまどはすな秋の夜の月

例ならぬ事ありける頃いかかなと思ひつづけて

心細さに

源行宗朝臣

いかにせむうき世の中にすみがまの果は煙となりぬべき身を

實範聖人山寺にこもりぬと聞きてつかはしける
靜嚴法師

心にはいとひはてつと思ふらむあはれいづこも同じうき世を

八月ばかりに月あかりける夜あみだの聖の^{上人}と

ほりけるを呼びよせさせて里なる女房にいひ遣

月より三四月までいかにも雨のふらざりければ
なはしろもせでよろづに祈りさわぎけれどもかな
はざりければ守能因歌よみて一宮にまゐらせて
雨いのれと申しければまゐりていのり申しける

歌

能因法師

天の川なはしろ水にせきくだせあまくだります神ならばかみ

神感ありて大雨ふりて三日三夜やまずと家集に見えたり

心經供養してそのこころを人々によませ侍りけ
るに

攝政左大臣

色も香も空しと説ける法なれど祈るしはありところ聞け

法文のありけるを里なる女房のもとより宮に申
さずともしのびてあからさまにとりてなど申し

今ぞ知るおもひの果は世の中のうき雲にのみまじるものとは

陽明門院かくれおはしまして後御わざの事果て

て又の日雲のたなびけるを見てよめる

藤原資

信陰イ

さだめなき世をうき雲ぞあはれなるたのみし君が烟と思へば

白河院の女御かくれ給ひて後かの家の南面の藤

の花さかりに咲きたりけるを見てよめる

僧たればイ正行尊

草木まで思ひけりとも見ゆるかな松さへ藤のころもきてけり

兼房朝臣重服になりてこもりゐて侍りけるに出

羽辨がもとよりとぶらひたりけるを是がかへし

せよと申しければよめる

橘元任

悲しさのその夕暮のままならば有りへて人にとはれましやは

範實イ國朝臣に具して伊豫國にまかりたりけるに正

よめる

權僧正永緣

夢にのみむかしの人をあひ見れば覺むるほどこそ別なりけれ

人のむすめ母のものへまかりたりける程におも

き病をしてかくれなむとしける時かきおきて身

まかりける歌

讀人しらす

露の身のきえも果てなば夏草のはは如何にして逢はむとすらむ

小式部内侍うせてのち上東門院より年ごろ給は

りけるきぬを亡きあとにもつかはしけるに小式

部内侍とかきつけられたるを見てよめる

和泉式部

諸共に苔のしたには朽ちずしてうづもれぬ名をみるぞ悲しき

したしき人におくれてわざのことはてて歸り侍

りけるによめる

平忠盛朝臣

外^{とそ}ながら世を背きぬと聞くからに越路の空は打ちしぐれつつ

律師長濟^{うせい}かくれてのち母のそのあつかひをして

ありける夜の夢にみえける歌

たらちめの嘆きをつみて我はかくおもひの下になるぞ悲しき

顯仲卿女子におくれてなけき侍りけるころ程へ

てとひにつかはすとてよめる

大藏卿匡房

その夢をとば歎きやまさとて驚かさでも過ぎにけるかな

從三位藤原賢子れいならぬ事ありてよろづ心ほ

そくおほえけるに人のもとよりいかがなど問ひ

て侍りければよめる

藤原賢子

古^{いにしへ}は月をのみこそながめしにいまは日をまつわが身なりけり

身まかりてのち久しうなりにける母を夢にみて

玉匣たまぐしけかけごに塵もすゑざりしふたおやながらなき身とをしれ

大路に子をすてて侍りけるおしくくみに書きつ

け侍りける歌

身にまさる物なかりけり縁子はやらむ方なくかなしけれども

阿波守知綱基^イにおくれ侍りて^イけるころ流されたりけ

る人のゆるされて歸りたりけるを聞きてよめる 藤原知陰信^イ母

流れてもあふせありけり涙川きえにしあわをなにたとへむ

心地例ならず侍りけるころ人のもとよりいかが

など申したりければよめる 讀人しらす

吳竹のふししづみぬる露てけり^イの身もとふ言の葉におきぞゐらるる

範永朝臣出家しぬと聞きて能登守にてはべりけ

るころ國よりいひつかはしける

藤原通宗朝臣

うかりしに秋は盡きぬと思ひしを今年も蟲のねこそなかるれ

かへし

藤原知

信イ陰

蟲の音はこの秋しもぞなきまさる別のとほくなるここちして

下蔭にこえられて歎き侍りけるころよめる

源俊頼朝臣

せきもあへぬ涙の川は早けれど身のうき草はながれざりけり

律師實源がもとに知らぬ女房の佛供養せむとて

よばせ侍りければまかりて見れば事もかなはず

けなるけしきを見てかたのごとく急ぎくやうし

て立ちける程にすだれの内より女房手づから衣

ひとへとまきゑの手箱をさし出したりければ從

僧してとらせかへりて見ればしろがねの箱のう

ちに書きて入れたりける歌

讀人しらす

もとより何事になど尋ねて侍りければつかはしける

平基綱

櫻ゆゑいとひし風の身にしみて花よりさきに散りぬべきかな

後三條院かくれおはしまして後五月五日一品宮の御帳にさうぶふかせ侍りけるに櫻のつくり花のさされたりけるを見てよめる

藤原有祐朝臣

あやめ草ねをのみかくる世の中にをりたがへたるはな櫻かな

北方うせ侍りて後天王寺にまゐりける道にてよ

六條右大臣

難波江のあしのわかねのしけければ心もゆかぬ船出をぞする

郁芳門院かくれおはしまして又の年の秋知陰が

りつかはしける

康資王母

金葉和歌集 卷第十

雜部下

公實卿かくれ侍りて後かの家にまかりたりける
に梅花さかりに咲きけるをみて枝にむすびつけ

て侍りける歌

藤原基俊

むかし見しあるじ顔にも梅が枝の花だにわれに物がたりせよ

かへし

中納言實行

ねにかへる花の姿の戀しくばただこのもとをかたみとは見よ

人々あまた具してはな見ありきてかへりてのち

風おこりてふしたりけるに具して花見ける人の

堀河院御時源俊重が式部丞申しける申文にそへ
て頭辨重資がもとへつかはしける

源俊頼朝臣

日のひかりあまねき空のけしきにも我が身一つは雲隠れつつ

是れを奏しければ内侍周防をめしてこれが返し

せよとおほせ事ありければつかうまつれる

周防内侍

何か思ふ春のあらしに雲晴れてさやけき影はきみぞ見るべき

そのたびなりにけりと云々

思ふ事侍りける頃よめる

參議師賴

いたづらに過ぐる月日を數ふれば昔をしのぶ音ぞなかれける

鏡をみるに影のかはりゆくを見てよめる

源師賢朝臣

變り行くかがみの影をみるからにおいその森の歎きをぞする

前太政大臣家に侍りける女を中將忠宗朝臣と少

將顯國とともにかたらひ侍りけるに忠宗にあひ

にけりその後程もなく忘れけりと聞きて女の

がりにひつかはしける

源顯國朝臣

こゆるぎのいそぎで逢ひしかひもなく波よりこずと聞くは誠か

藏人親隆がかうぶり給はりて又の日つかはしけ

る
藤原公教

雲の上になれにし物を蘆鶴あしづるの逢ふことかたにおりるぬるかな

右だたみありけるものを君に又しくものなしと思ひけるかな

大原の行蓮聖人がもとへ小袖つかはすとてよめ

る

天台座主仁覺

憐まむと思ふ心はひろけれどはぐくむ袖のせばくもあるかな

百首歌の中に述懐の心をよめる

源俊賴朝臣

世の中はうき身にそへる影なれや思ひすつれど離れざりけり

男につきて越前國にまかりたりけるに男心かは

りて常にはしたなければ都なる親のもとへいひ

つかはしける

讀人しらす

うちたのむ人の心はあらち山こしぢくやしき旅にもあるかな

かへし

お

や

おもひやる心さへこそくるしけれあらちの山の冬のけしきは

る

周防内侍

住みわびて我さへのきの忍ぶ草しのぶかたかたしけき宿かな

賀茂成助に初めてあひてもの申しけるついでに

かはらけとりてよめる

津守國基

聞きわたるみたらし川の水きよみそこの心をけふぞみるべき

かへし

賀茂成助

住吉のまつかひありて今日よりはなにはの事も知らず計りぞ

皇后宮弘徽殿におはしましける頃俊頼西面のほ

そどのにて立ちながら人に物申し侍るに夜の更

けゆくままにくるしかりければ土にゐたりける

をみて疊をしかせばやと女の申しければ石疊し

かれて侍るめりと申すを聞きてよめる

皇后宮大貳

大中臣輔弘祭主にもあらざりけるころ祭主にな
させ給へと太神宮に申しこひて寐いたりける
夜の夢にまくらがみに知らぬ人の立ちてよみか

ける歌

草の葉のなびくもまたす露の身のおき所なくなけくころかな
にイ しらでイ

六條右大臣六條の家つくりていづみなど掘りて

とくわたりて見よなど申したりければよめる

顯雅卿母

千年まですまむ泉の底にふもイきよみかけをイならべむとおもひしもせじ

宇治平等院の主寺イになりて宇治にすみつきて比叡

の山の方をながめやりてよめる

忠快法師

宇治川のそのみくづとなりながらなほ雲かかる山ぞ戀しき

家を人にはなちてたつとて柱にかきつけ侍りけ

夜な夜なはまどろまでのみ有明のつきせずものを思ふ頃かな

上陽人苦最多思苦老亦苦といへる心をよめる 源 雅 光

昔にもあらぬ姿になり行けどなけきのみこそおもがはりせね

青黛畫眉眉細長といへる事をよめる 源 俊 頼 朝 臣

さりともとかくまゆすみのいたづらに心細くも老いにける哉

年ひさしく修行しありきて熊野にてけんくらべ

しけるを秋家卿まゐりあひて見けるにことの外

にやせおとろへて姿もあやしけにやつれたりけ

れば見忘れてかたはらなる僧にいかなる人ぞこ

とのほかにしるしありけなる人かななど申しけ

るを聞きてつかはしける 僧 正 行 尊

心こそ世をば捨てしかまほろしのすがたも人に忘られにけり

爲仲朝臣陸奥守にて侍りける時延任しつと聞き

てつかはしける

藤原隆資

まつ我はあはれ八十やそぢになりぬるをあふくま川の遠ぞイざかりぬる

したしき人の春日にまゐりて鹿のありつるよし

なご申しけるを聞きてよめる

藤原實光朝臣

三笠山神のしるしのいちじるくしかありけると聞くぞ嬉しき

屏風のゑにしかすがのわたり行く人たちわづら

ふかたかける所をよめる

藤原家經朝臣

ゆく人も立ちぞわづらふしかすがの渡りや旅の泊りなるらむ

題しらす

讀人しらす

身のうさを思ひしとけば冬の夜もとどこほらぬは涙なりけり

皇后宮美濃

ばよめる

讀人しらす

葉隠れにつはると見えし程もなくこはうみ梅になりける哉

堀河院の御時中宮の女房たちを亮^{すけ}仲實が紀伊守

にて侍りける時若浦^{わかのうら}みせんとしてさそひければ許^{あま}
多^たまかりけるにまからでつかはしける

前中宮甲斐

人なみに心ばかりは立ちそひて誘はぬわかのうらみをぞする

保實卿ほかにうつりて後かのもとの所につねに

見ける鏡をとがせ侍りければくらきよしを申し

けるを聞きてよめる

藤原實信母

ことわりや曇ればこそはます鏡うつりし影^{れるい}もみえずなるらめ^{りにき}

月の入りぬるを見てよめる

源師賢朝臣

西へゆく心はたれも有るものをひとりな入りそやま^{あきのよ}のはの月

日影にはなき名立ちけりをみ衣きてみよとこそいふべかりけれ

經信卿に具してつくしに侍りけるころ肥後守盛

房野太刀劔イのよきあり見せむなど申して程へにけ

ればいかなどたづねられて忘れたるよしを申

しければよめる

源俊賴朝臣

なき陰に懸けける太刀もある物をさやつかのまに忘れ果てぬる

大峯の神仙といへる所に久しう侍りければ同行

どもみなかぎり有りてまかりにければ心細さに

よめる

僧正行尊

見し人はひとり我が身にそはねども後れぬものは涙なりけり

ただならぬ人のもてかくしてありけるに子をう

みてけるが許より熟うみたる梅をおこせたりけれ

身のうさもとふ一もじにせかれつつ心つくしの道はとまりぬ

男のなかりける夜こと人をつほねに入れたりけるにもとの男まうできあひたりければさわぎてかたはらのつほねの壁のくづれよりくぐりてにがしやりての又の日その逃したるつほねの主のがりよべの壁こそうれしかりしなどいひに遣したりければよめる

讀人しらす

寐ぬるよのかべ騒がしく見えしかど我が違ふれば事なかりけり

源頼家がもの申しける人の五節に出で侍りけるを聞きてまことにやあまたかさねしをみ衣とよのあかりのくもりなきよにとよみて遣したりければかへしによめる

源光綱母

蛸ひぐしの聲ばかりするしばの戸は入り日のさすにまかせてぞ見る

題しらす

藤原仲眞朝臣

年ふれば我がいただきにおく霜を草のうへとも思ひけるかな

殿上おり侍りけるころ人の殿上しけるを聞きて

よめる

源行宗朝臣

うらやまし雲のかけはしたち返りふたび上のぼる道をしらばや

殿上申しける頃ゆるされざりければよめる

平忠盛朝臣

思ひきやくもるの月をよそに見て心のやみにまどふべしとは

かたらひ侍りける人のかれがれになりければこ

と人につきてつくしの方へまかりなむとしける

を聞きて男のもとよりまかるまじきよしを申し

たりければいひ遣しける、

内大臣家小大進

のきばうつ眞白の鷹の餌袋にをぎゑもささでかへしつるかな

後冷泉院の御時近江國より白き鳥を奉りたりけるをかくして人にも見せさせ給はざりければ女房たちゆかしがり申しければおのおの歌よみて奉れさてよくよみたらむ人にみせむとおほせ事ありければつかうまつれる

少將内侍

たぐひなく世に面白き鳥なればゆかしからずとたれか思はむ

甲斐國よりのほりてをばなる人のもとにありけるがはかなき事にてそのをばのなありそとておひいだしたりければよめる

讀人しらす

鳥の子のまだ卵^{かひ}ながらあらませばをはいふ物はおひ出でざらまし

百首歌のなかに山家をよめる

修理大夫顯季

れいならぬ事ありてわづらひけるころ上東門院

に柑子たてまつるとて人にかかせて奉りける 堀河右大臣

つかへつるこのみの程を數ふればあはれ梢になりけるかな

御かへし 上東門院

すぎ來ける月日の數もしられつつこのみを見るも哀なるかな

僧正行尊まうできてよるとどまりてつとめて歸

りけるとて獨^ミ鮎^ニを忘れたりける返しつかはすと

てよめる 大納言宗通

草枕さこそは旅^{旅_イ集_イ}のとこならめ今朝しもおきてかへるべしやは

をとこ心かはりてまうで來ず成りにける後おき

たりけるゑぶくろをとりにおこせたりければ書

きつけてつかはしける 櫻井尼

男かれがれになりて程へてたがひにわすれて後
人にしたしくなりにつけりなど申すと聞きてなけ
きける人にかはりてよめる

春宮大夫公實

無き名にぞ人のつらさは知られける忘れしには身をぞ恨みし

大貳資通忍びて物申しけるを程もなくさぞなど

人の申しければよめる

相模

いかにせむ山田にかこふ垣柴のしばしの^{ほどもい}まだに隠れなき身を

肥後内侍をとくに忘られて歎きけるを御覽じて

よませ給ひける

堀河院御製

忘られてなけく袂をみるからにさもあらぬ袖の萎れぬるかな

水車をみてよめる

僧正行尊

早き瀬にたえぬばかりぞ水車われもうきよにめぐるとを知れ

和泉式部石山にまゐりけるに大津にとまりて夜
ふけて聞きければ人のけはひあまたしてののじ
りけるを尋ねければあやしの賤下人のイの女がよねしら
け侍るなりと申しけるを聞きてよめる
和泉式部

鷺のゐる松原いかにさわぐらむしらけばうたて里とよみけり

公實卿のもとにまかりたりけるに侍らざりけれ
ば出居におきたりける小弓をとりて侍さむらいにこれは
おろしつとふれて出でにけりかの卿かへりて弓
をたづねければ時房まうできてとりつと申しけ
ればおどろきて院の御弓ぞとくかへせといひに
つかはしたりければ御弓につけて遣しける歌
藤原時房

梓弓さこそはそりの高からめはるほどもなくかへるべしやは

百首歌の中に夢の心をよめる

修理大夫顯季

うたたねの夢なかりせば別れにし昔のひとをまた見ましやは

も見ましや^イ

百首歌に旅の心^{宿^イ}をよめる

参議師頼

小夜中に思へばかなしみちのくのあさかの沼に旅寐してけり

この集撰じける時歌こはれておくとてよめる 藤原顯輔朝臣

家の風吹かぬものゆるはつかしの森の言の葉ちらしはてつる

しほ湯あみに西の海のかたへまかりたりけるに

みるといふ物をみづからつみて都^{とリ^イ}なるむすめの

もとへつかはすとて 平康貞女

磯菜つむ入江の波のたちかへり君みるまでのいのちとがな

かへし むすめ

長居するあまのしわざとみるからに袖のうらにもみつ涙かな

りの程とのる物のれうにきぬをかりて程過ぎて
是を忘れて今まで返さざりける事など申したり
ける返事にいひつかはしける

前齋宮内侍

返さじとかねて知りにき唐衣こひしかるべき我が身ならねば

和泉式部保昌に具して丹後國に侍りけるころ都
に歌合のありけるに小式部内侍歌よみにとられ
て侍りけるを中納言定頼つほねのかたにまうで
きて歌はいかがせさせ給ふ丹後へ人はつかはし
てけむや使はまうでこずやいかに心もとなくお
ほすらむなどたはぶれて立ちけるをひきとどめ
てよめる

小式部内侍

大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ずあまのはしだて

讀人しらす

天の川これやながれのすゑならむ空より落つるぬのびきの瀧

選子内親王いつきにおはしましけるととき女房に

物申さむとてしのびてまゐりたりけるに侍どもさむらい

いかなる人ぞなどあらく申してとはせ侍りけれ

ばたたうがみに書いておかせ侍りける

藤原惟規

神垣は木の丸どのにあらねどもなのりをせねば人とがめけり

郁芳門院伊勢におはしましける時あからさまに

下りて侍りける時思ひがけず鐘の聲のほのかに

きこえければよめる

六條右大臣北方

神垣のあたりと思ふにゆふだすき思ひもかけぬかねの聲かな

前齋宮伊勢におはしましける時寮頭保俊御まつ

つましながらひきならしけるを聞きて口ずさび

のやうにていひかけける

攝

津

琴の音や松ふく風に通ふらむ千世のためしにひきつべきかな

かへし

美

濃

うれしくも秋のみやまの松風にうひことのねの通ひけるかな

月のあかりける夜人の琴ひくを聞きてよめる 内大臣家越後

琴の音は月の影にもかよへばや空にしらべの澄みのほるらむ

伊勢國の二見浦にてよめる

大中臣輔弘

玉くしけ二見の浦のかひしけみまきゑに見ゆるまつのむら立

宇治前太政大臣布引の瀧見にまかりたりけると

もにまかりてよめる

大納言經信

白雲とよそに見つればあしびきの山もとどろに落つる瀧つ瀬

けるにもれて公實卿のもとにつかはしける
にければイ
源 師 光

かすが山みねつづき照る月影にしられぬたにの松もありけり

僧都頼基光明山にこもりぬと聞きてつかはしけ

る
橘 能 元

うらやまし浮世を出でていかばかり隈なき峯の月を見るらむ

かへし
僧 都 頼 基

もろともに西へやゆくと月影のくまなき峯をたづねてぞこし
見イ

郁芳門院伊勢におはしましける時あからさまに

下りけるにすずか川を渡りける時よめる
六條右大臣北方

早くよりのみわたりしすずか川思ふことなる音ぞきこゆる

源仲正がむすめ皇后宮に初めて参りたりけるに

琴ひくと聞かせ給ひてひかせさせ給ひければつ

良暹法師をうらむる事ありけるころむつき一日
にまうできて又久しう見えざりければいひ遣し

ける

律師慶範

春の來しその日つらはとけにしを又何事にとどこほるらむ

對山待月といへる事をよめる

藤原正季

このよには山の端出づる月をのみ待つ事にてもやみぬべき哉

山家にて有明の月を見てよめる

僧正行尊

木の間もる片われ月のほのかにも誰か我が身を思ひ出づべき

山寺に月のあかりけるに經のたふときを聞き

て涙の落ちければよめる

平康貞母

いかでかは袂につきのやどらましひかり待ちとる涙ならずば

宇治前太政大臣時の歌よみどもに月の歌よませ

めしてイ

一品宮天王寺にまゐらせ給ひて日頃御念佛せさせ給ひけるに御ともの人々住吉にまゐりて歌よ

みけるによめる

源俊頼朝臣

いくかへり花咲きぬらむ住吉の松もかみ代のものところそ聞け

田家老翁といへる事をよめる

中納言基長

ますらをは山田の庵に老いにけり今いく秋にあはむとすらむ

仁和寺にすませ給ひけるころいつまでさてはな

ど都より人のたづね申したりければよませ給へ

る

三

宮

かくてしもえぞ住むまじき山里のほそ谷川のこころほそさに

大峰の笙の岩やにてよめる

僧正行尊

草の庵をなに露けしと思ひけむ漏らぬいはやも袖はぬれけり

家が許につかはしける

藤原惟信朝臣

山吹もおなじかざしのはななれどくもるの櫻なほどこひしき

隆家卿太宰帥に二たびなりて後のたび香椎御社

にまゐりたりけるに神主木のもとの杉の葉を折

りて帥のかうぶりにさすとてよめる

神主大膳武忠

千早振かしひの宮のすぎの葉をふたたびかざすわがきみぞ君

源心座主になりてはじめて山にのほりたりける

にやすみたる所にて歌よめと申しければよめる 良 暹 法師

年をへて通ふ山路はかはらねど今日はさかゆく心地こそすれ

藤原基清が藏人にてかうぶりたまはりておりに

ければ又の日つかはしける

藤 原 家 綱

思ひかね今朝はそらをやながむらむ雲のかよひぢ霞へだてて

とたづねて侍りければつかはすとてうへに書き
つけ侍りける歌

源行宗朝臣

いくとせにわれなりぬらむ諸人の花みる春をよそに聞きつつ

山ざとに人々まかりて花の歌よみけるによめる 源 定 信

みな人はよしののやまの櫻花をりしらぬ身やたにのうもれ木

後三條院かくれさせおはしまして後又のとしの

春さかりなる花をみてよめる 右近將曹秦兼房

こぞみしに色もかはらず咲きにけり花こそ物は思はざりけれ

つかさめしの頃よろづにうらやましき事のみ聞

えければよめる 藤原顯仲朝臣

としふれど春にしられぬ埋木は花のみやこに住むかひぞなき

藏人おりて臨時祭の陪從し侍りけるに右中辨伊

圓宗寺の花を御覽じて後三條院の御事などおほ

しいでてよませ給へりける

三

宮

植ゑおきし君もなき世に年へたる花はわが身の心地こそすれ

花見御幸を見て妹の内侍のもとに遣しける

權僧正永縁

行末のためしと今日をおもふとも今いくとせか人にかたらむ

かへし

内

侍

いくとせも君ぞかたらむつもりて面白かりし花のみゆきを

大峯にておもひもかけず櫻の花の咲きたりける

を見てよめる

僧正行尊

もろともにあはれとおもへ山櫻はなよりほかに知る人もなし

堀河院の御時殿上人あまたぐして花見ありきけ

るに仁和寺に行宗朝臣ありと聞きて懷紙やある

金葉和歌集 卷第九

雜部上

むかし道方卿に具して筑紫にまかりて安樂寺に
まゐりて見侍りけるみぎりの梅の我が任にまる
りてみれば木のすがたはおなじさまにて花の老
木になりて所々さきたるを見てよめる

大納言 經信

神垣にむかしわが見しうめの花ともに老木となりにけるかな

山家鶯といへる事を人々によませ侍りけるついでに

でに

攝政左大臣

山里もうきよのなかを離れねば谷のうぐひす音をのみぞなく

る

源顯國朝臣

我が戀はしづのしけ糸すぢよわみ絶え間は多くくるは少なし

戀の歌人々よみけるによめる

源俊賴朝臣

淺ましやこは何事のさまぞとよ戀せよとてもうまれざりけり

寄夢戀をよめる

源行宗朝臣

つらかりし心ならひに逢ひみても猶夢かとぞうたがはれける

俊忠卿の家にて戀の歌十首人々よみけるにおと

しめてあはずといへる事をよめる

源俊賴朝臣

奇あやしきも嬉しかりけりおとしむる其言の葉にかかると思へば

數ならぬ身をうぢ川のはしばしといはれながらも戀ひ渡る哉

戀歌十首人々よみけるに來不留といふ事をよめ

る

修理大夫顯季

玉津島きしうつ波のたちかへりせないでましぬ名殘さびひさしも

戀の歌とてよめる

春宮大夫公實

逢ふことは舟人よわみ漕ぐ舟のみをさかのほる心地こそすれ

顯仲卿母

心からつきなき戀をせざりせば逢はでやみには迷はざらまし

見かはしながら恨めしかりける人によみかけけ

る

内大臣家小大進

かくばかり戀の病はおもけれど目逢戀にかけさけてあはぬ君かな

攝政左大臣家にて時々あへりといへる事をよめ

圖るめる言のよきのみ多けれど空歎きをばこるにやあるらむ
 逢ふ事の今はかたみのめをあらみもりて流れむ名こそをしけれ
 逢ふ事はかたねぶりなる磯額いそがしひねりふすともかひやなからむ
 近江にか有りといふなるかれいひ山君は越えけり人とねくさし
 逢ふ事のかた野に今は成りぬれば思ふがりのみ行くにやあるらむ
 あふことはながめふる屋の板廂いたびきしさすがに掛けて年のへぬらむ
 かしがまし山の下ゆくさされ水あなかまわれもおもふ心あり
 ぬすびとといふもことわりさ夜中に君が心をとりにきたれば
 はなうるしこやぬる人のなかりけるあなはらぐろの君が心や

寄石戀といへる事をよめる

前齋院六條

逢ふことをとふ石神のつれなきにわが心のみうごきぬるかな

攝政左大臣家にて戀のこころをよめる

源雅光

返し

左兵衛督實能

忘れむ名は世にふらじ五月雨もいかでか暫しばしをやまざるべき

題しらす

讀人しらす

あま雲のかへしの風の音せぬは思はれじとのこころなるべし
足引のやまのまにまにたふれたるからきは獨ひとりふせるなりけり
津の國のまろやは人をあくた河君こそつらき瀬々は見えしか
あふみてふ名は高島にきこゆれどいづらはここにくり本の里
かさとりくイの山によをふる身にしあれば炭やきもをる我が心哉
み熊野に駒のつまづく青つづら君こそまろがほだしなりけれ
こりつむる歎きを如何にせよとてか君にあふいたくごの一筋もなき
あふごなき物としるしる何にかは歎きを山とこりはつむらむ
うとましや木の下蔭のわすれ水いくらの人のかけを見つらむ

すなと申しければよめる

源信宗朝臣

逢はぬ夜はまどろむ程のあらばこそ夢にもみきと人に語らめ

なき名たつといへる事をよめる

左京大夫經忠

人しれぬなき名はたてど唐衣かさねぬそではなほぞつゆけき

人をうらみてよめる

大中臣輔弘女

あぢきなく過ぐる月日ぞ恨めしき逢ひ見し程を隔つと思へば

三井寺にて人々戀歌よみけるによめる

僧都公圓

つらしとも思はむ人はおもはなむ我なればこそ身をば恨むれ

かたらひける女のもとにまからむなど申しけれ

どもさはる事ありてまからざりければ五月雨の

ころおくりて侍りける

讀人しらす

五月雨の空だのめのみ隙ひまなくて忘らるる名ぞ世にふりぬべき

梓弓かへるあしたのおもひには引きくらぶべき事物イのなきかな

人のもとよりせめて袖ぬらすさまを見せばやな

どいはせたりければよめる

皇后宮少將

うらむともみるめもあらじ物ゆるに何かは蟹の袖ぬらすらむ

旅宿戀といへることをよめる

修理大夫顯季

戀しさをいも知るらめや旅寐して山のしづくに袖ぬらすとは

人の夕方まうでこむと申したりければよめる 一宮紀伊

恨むなよかけ見えがたき夕月夜おほろけならぬ雲間まつ身ぞ

藏人にて侍りける頃内をわりなく出でて女のも

とにまかりてよめる

藤原永實

三日月のおほろけならぬ戀しさにわれてぞ出づる雲の上より

周防内侍したしくなりて後ゆめゆめこの事もら

人はいさありもやすらむ忘られて訪はれぬ身こそなき心地すれ

寄關戀をよめる

源俊賴朝臣

なこそてふことといふをば君が言こぐさを關の名ぞとも思ひけるかな

としごろ物申しける人のたえて音づれざりければつか

はしける

讀人しらす

はやくよりあさき心を見てしかばおもひたえにき山川のみづ

題しらす

もらさばや細谷川のうもれみづかけだに見えぬ戀にしづむと

をとこの今日は方たがへに物へまかるといはせ

侍りければつかはしける

君こそは一夜めぐりの神ときけなに逢ふことの方たがふらむ

後朝戀の心を

藤原顯輔朝臣

目のまへにかはる心をなみだ川ながれてやとも思ひけるかな

國信卿の家の歌合に初戀の心をよめる

源

兼

昌

今日こそはいはせの杜の下紅葉色に出づればちりもしぬらめ

むい

雪の朝に出羽辨がもとより歸り侍りけるにかれ

よりおくりて侍りける

出

羽

辨

おくりては歸れと思ひし魂たましひの行きさすらひて今朝はなきかな

かへし

大納言經信

冬の夜の雪けの空にいでしかど影よりほかにおくりやはせし

すみかを知らせぬ戀ざるいといへる事をよめる

前齋院六條

行方ゆくへなくかき籠むるにぞひきまゆのいとふ心の程は知らるる

よにあらんかぎりは忘れじと契りたりける人の

久しう音もせざりければよめる

讀人しらす

あふ事はいつともなくてあはれわが知らぬ命に年をふるかな

ある所にて女房のながき髪を打ちいだして見せ

ければよめる

藤原顯綱朝臣

人しれず思ふ心をかなへなむかみあらはれて見えぬとならば

堀河院の御時艷書合によめる

中納言俊忠

人しれぬおもひありその浦風に波のよるこそいかまほしけれ

かへし

一宮紀伊

音にきく高師の浦のあだなみはかけじや袖のぬれもこそすれ

くれには必ずとたのめたりける人のはつかの月

出づるまで見えざりければよめる

攝政家堀河

契りおきし人もこそすゑの木の間より頼めぬ月の影ぞもりくる

心かはりたる人のもとへつかはしける

江侍從

物おもひ侍りけるころ月のあかりける夜あか

ざりし面影つねよりも堪へがたくてよめる

橘俊宗女

つれづれと思ひぞ出づる見し人をあはで幾月ながめしつらむ

題しらす

上總侍從

あさましや涙にうかぶ我身かなこころかろくは思はざりしを

物へまかりける道にはしたもののあひたりける

をとはせ侍りければ上東門院に侍るすまひこそ

となむ申すといひけるを聞きてよめる

源縁法師

名きくより兼ても移る心かないかにしてかは逢ふべかるらむ

戀の心をよめる

民部卿忠教

戀ひわびてたえぬ思ひの煙もやむなしきそらの雲となるらむ

女のもとへつかはしける

大納言經信

山里のおもひかけ^{ぢい}ひにつららるてとくる心のかたけなるかな

山の歌合にこひの心をよめる

讀人しらす

たまさかに逢ふ夜は夢のこ^{ひし}ちして戀しもなどか現なるらむ

いかでかとおもふ^{ひし}人のさもあらぬさきにさぞな

ど人の申しければよめる

中原章經

こひわぶるきみにあふてふ言の葉は偽さへぞうれしかりける

伊賀少將がもとへつかはしける

前中納言資仲

よもの海の浦々毎にあされども怪しく見えぬいけるかひかな

かへし

伊賀少將

たまさかに波の立ちよる浦々は何のみるめのかひかあるべき

忍戀の心をよめる

源親房

ものをこそしのべばいはね^{ぬい}岩代のもりにのみもるわが涙かな

逢ふ事もなぎさにあさる蘆鴨のうきねをなくと人しるらめや

人をうらみてよめる

盛 經 母

さのみやは我が身の憂^{うれ}になし果てて人のつらさを恨みざるべき

攝政左大臣の家にて戀の心をよめる

源 雅 光

名にたてるあはでの浦の蟹だにもみるめは潜^{かづ}く物とこそきけ

うらめしき人のあるにつけて昔思^もひ出でらるる

事ありて

前 齋 宮 甲 斐

いま人の心をみわのやまにてぞ過ぎにし方はおもひ知らるる

わすれたる人のおもひ出でておとづれたるによ

める

橘 俊 宗 女

めづらしや岩間によどむ忘水いく世をすぎておもひ出づらむ

皇后宮にて山里戀といへる事をよめる

左 京 大 夫 經 忠

人のがり遣しけるイ
戀の心をよめる

左兵衛督實能

我が戀の思ふばかりの色にいでばいはでも人にみえまし物を

もろともに郭公をまちけるにさはる事ありて入
りにける後鳴きつやなどたづねけるを聞きてよ
める

春宮大夫公實

郭公くもるのよそになりしかばわれぞ名殘のそらになかれしがめイ

冬戀といへる事を

藤原成通朝臣

水の上おもはイにふる白雪のあとかたイもなく消えやしなまし人のつらさに

多聞といへる童をよびにつかはしたりけるに見

えざりければ月のあかりける夜よめる

權僧正永緣

まつ人のおほぞらわたる月ならばぬるる袂にかけは見てまし

寄水鳥戀

攝政左大臣

いろみえぬ心ばかりはしづむれど涙はえこそしのばざりけれ

題しらす

読人しらす

逢ふ事は夢ばかりにて止みにしをさこそ見しかと人に語るな

大納言經信

蘆垣のひまなくかかるくものいの物むづかしくしけるわが戀

藤原忠隆

おさふれどあまる涙はもるやまのなけきに落つる雫なりけり

なき名たちける頃月をみてよめる

橘俊宗女

いかにせむなけきの森は茂けれど木の間の月の隠れなき世を

もの申しける人の久しう音もせざりければ遣し

ける

前齋院肥後

蘆ぶきのこや忘らるるつまならむ久しく人のおとづれもせぬ

戀の歌をよみける所にてよめる

源俊賴朝臣

忘草しけれるやどを來てみれば思ひのきより生ふるなりけり

人をうらみて

讀人しらす

今よりはおもひもいでじ恨めしといふもたのみのかかる契は

逢不遇戀をよめる

左兵衛督實能

思ひきや逢ひ見し夜はの嬉しさに後のつらさの増るべしとは

人をうらみけるころ心地例ならずおほえければ

よめる

讀人しらす

あはずともなからん世には思ひいでよ我ゆる命絶えし人かと

女のがりつかはしける

藤原長實

するすみも落つる涙に洗はれて戀しとだにもえこそ書かれね

家の歌合に初戀を

中納言國信

わぎも子がこゑたちききし唐衣その夜の露にそでは濡れけりにきイ

我をばかれがれになりてこと人の許へまかると

聞きてつかはしける

讀人しらす

ことわりや思ひくらぶの山櫻にほひまされるはなを愛づるも

郁芳門院根合に戀の心をよめる

周防内侍

戀ひわびてながむるそらの浮雲やわがしたもえの烟なるらむ

人をうらみて五月五日につかはしける

前齋宮河内

あふ事のひさしにふける菖蒲草ただかりそめの妻とこそ見れ

戀の心をよめる

太宰大貳長實

つらきをも思ひうきをイもしらぬ身の程に戀しさいかで忘れざるらむ

題しらす

前中齋イ宮上總

さきの世の契をしらではかなくも人をつらしと思ひけるかな

みちのくのおもひしのぶにありながら心にかかるあふの松原

戀の心をよめる

皇后宮權大夫師時

人しれぬこひをしすまの浦人は泣きしほたれて過すなりけり

奈良の人々百首の歌よみけるに恨の心をよめる 權僧正永縁

思はんとたのめし人の昔にもあらずなるみのうらめしきかな

戀の心歌とてイをよめる

隆源法師

くるるまも定なき世に逢ふ事をいつともしらで戀ひ渡るかな

藏人家時かれがれになりけるを恨みていひつか

はしける

前中宮越後

人心あさ澤みづのねぜりこそこるばかりにも摘ままほしけれ

俊忠卿の家にて戀の歌十首人々よみけるに立聞

戀といへる事をよめる

修理大夫顯季

月増戀といへる事をよめる

内大臣

いとどしく面影にたつこよひかな月見よとしも契らざりしを

戀の心を

藤原顯輔朝臣

戀ひわびて寐ぬ夜つもれば敷妙の枕さへこそうとくなりけれ

烏羽殿の歌合に戀の心をよめる

藤原仲實朝臣

夜とともに袖のかわかぬ我がこひやとしまが磯によする白波

晩の戀といへる事をよめる

中納言雅定

あふことを今宵と思はば夕づく口いる山のはも嬉しからまし

戀の心をよめる

右兵衛督伊通

山の井の岩もる水に影みればあさましけにもなりにけるかな

皇后宮にて人々こひの歌つかうまつりけるによ

める

太宰大貳長實

金葉和歌集 卷第八

戀歌下

初戀の心をよめる

良 暹 法師

かすめてはおもふ心をするやとて春の空にもまかせつるかな

公任卿家にて紅葉天橋立戀と三の題を人によま

せ侍りけるにおそくまかりて人々みな書きける

程なりければ三の題をひとつによめるうた

藤原範永朝臣

こひわたる人にみせばや松の葉もしたもみぢするあまの橋立

後朝戀の心をよめる

源 師 俊 朝 臣

しののめの明けゆく空も歸るさは涙にくるる物にぞありける

權中納言俊忠卿家にて戀歌十首人々よみけるに

來不留戀といへる事をよめる

源俊賴朝臣

おもひ草葉末にむすぶ白露のたまたまきては手にもたまらず

女を恨みて遣しける

春宮大夫公實

蘆根はふ水の上とぞおもひしをうきは我が身にありける物を

重服になりたる人の立ちながらまうでこむと申

したりければ遣しける

橘俊宗女

立ちながらきたりとあはじ藤衣ぬぎすてられむ身ぞと思へば

戀の心を人にかはりてよめる

前中宮上總齋イ

石いはばしる瀧の水上はやくよりおとに聞きつつ戀ひわたるかな

皇后宮女別當

たのめおく言の葉だにもなきものをなににかかれる露の命ぞ

あだなりし人の心にくらぶれば花もときはのものとこそ見れ

百首の歌の中に戀の心をよめる

修理大夫顯季

我が戀はからす羽にかく言の葉のうつらぬ程はしる人もなし

さい

攝政左大臣家にて戀の心をよめる

源 雅 光

あやにくにこがるる胸もある物をいかにかわかぬ袂なるらむ

寄山戀といへる事をよめる

大中臣公長朝臣

こひわびて思ひ入るさの山の端にいづる月日の積りぬるかな

つれなかりける人のもとにあふよしの夢を見て

つかはしける

藤 原 公 教

うたたねに逢ふと見つるは現^{うつ}にてつらきを夢と思はましかば

攝政左大臣家にて寄花戀といへる事をよめる

源 雅 光

吹く風にたへぬこずゑの花よりもとどめがたきは涙なりけり

皇后宮にて人々戀の歌つかうまつりけるに被返

書戀といへる事を

美

濃

戀ふれども人の心のとけぬには結ばれながらかへるたまづさ

人々に戀の歌よませ侍りけるに人にかはりて
攝政左大臣

こころざし淺茅がすゑにおく露のたまさかにとふ人は頼まじ

寄三日月戀をよめる

藤原爲忠

よひのまにほのかに人をみか月のあかで入りにし影ぞ戀しき

忍戀をよめる

讀人しらす

忍ぶれどかひもなぎさのあま小舟波のかけても今はたのまうらみじ

雲居寺の歌合に人にかはりて戀の心をよめる
三宮大進

なぞもかく身にかふばかり思ふらむ逢ひ見む事も人の爲かは

寄花戀

攝政左大臣

いはぬ^あまは下はふ蘆の根をしけ^いみひまなき戀を君^人しるらめや

かたらひける人のかれがれになりて恨めしかり

けるにつかはしける

白河女御越中

待ちし夜のふけしを何に歎^ときけむ思ひ絶えても過^あしける身^れを

戀の心を人々よみけるによめる

律師實源

命をしかけて契りし中なればたゆるは死ぬるここちこそすれ

皇后宮美濃

かきたえて程はへぬるをささがにの今は心にかからずもがな

旅宿戀を

攝政左大臣

見せばやな君しのびねの草枕たまぬきかくるたびのけしきを

堀河院の御時艷書合によめる

皇后宮肥後

思ひやれとはで日をふる五月雨の獨^にやども^せるそでのしづくを

なき名たてける人のもとにつかはしける

前齋宮内侍

あさましや逢瀬もしらぬ名取川まだきに岩間もらすべしやは

とイ

逢不遇戀といへる事をよめる

左京大夫經忠

ひとよとはいつか契りし河竹のながれてところ思ひそめしか

俊忠卿の家にて戀歌十首人々によませ侍りける

に誓ひて逢はずといへる事をよめる

皇后宮式部

あひみての後つらからばよよをへてこれより増る戀に惑はむ

實行卿の家の歌合に戀の心をよめる

源俊賴朝臣

いつとなく戀にこがるる我が身よりたつや淺間の煙なるらむ

戀の歌とてよめる

藤原成通朝臣

後の世と契りし人もなき物を死なばやとのみ言ふぞはかなき

攝政左大臣

まうしければ歸りにける後ひと日はいかに思ひ

しなど申しければいひ遣しける

藤原正家朝臣

秋風に吹きかへされて葛の葉のいかにうらみし物とかは知る

かたらひ侍りける人のあながちに申さする事のうらむイ

ありければいひ遣しける

藤原有教母

從へば身はイをばすててむ心にもかなはでとまる名こそ惜しけれ

長實卿の家の歌合に戀の心をよめる

藤原忠隆

つつめども涙の雨のしるければ戀する名をもながイふらしつるかな

人にかはりて

春宮大夫公實

白菊のかはらぬいろもたのまれず移ろはでやむ秋しなければ

人を恨みてつかはしける

藤原惟規

島風鹽イにしばだつ波のたちかへりうらみても猶たのまるるかな

菖蒲にもあらぬ眞菰をひきかけしかりのよどのの忘れぬ哉

閏五月侍りける年人をかたらひけるが後の五月

すぎてなど申しければよめる

紀季通

なぞもかくこひぢに立ちて菖蒲草あまり長びく五月さつきなるらむ

人のもとに遣しける

神祇伯顯仲

おのづから夜がるるほどのさ筵は涙のうきになると知らずや

そら事いひて久しうおとせぬ人のもとにいひつ

かはしける

相模

ありふるもうき世なりけり長からぬ人の心をいのちともがな

人をうらみて遣しける

藤原惟規

池にすむ我が名をしのとりかへす物にもがなや人を恨みじ

女のもとにまかりたりけるに今宵はかへりねと

ゐりて旅の床の露けかりければよめる

太宰大貳長實るむい

夜もすがら草の枕におく露はふるさと戀ふるなみだなりけり

忍戀の心をよめる

神祇伯顯仲

知らせばやほのみしま江に袖ひぢて七瀬のよどにおもふ心を

野分のわきしたりけるにいかかなどおとづれたりける

人の其後又音もせざりければ遣しける

相模

荒かりし風の後より絶えぬるは蜘蛛くも手にすぐ糸にやあるらむ

國信卿の家の歌合に夜戀の心をよめる

源俊賴朝臣

よとともに玉ちるとこのすが枕見せばや人に夜半のけしきを

五月五日わりなくもていでたる所にこもといふ

ものをひきたりけるを忘れがたさにいひ遣しけ

る

相

模

戀すてふもじの關守いく度かわれかきつらむこころづくしに

左兵衛督實能

命だにはかなからずば年ふともあひ見む事を待たましものを

後朝の心をよめる

源行宗朝臣

つらかりし心ならひにあひみても猶夢かとぞうたがはれける

堀河院御時の艶書合によめる

春宮大夫公實

思ひあまりいかでもらさむ奥山のいはがきこむる谷のした水

戀の心をよめる

藤原顯輔朝臣

年ふれど人もすさめぬ我がこひやくち木の柚の谷のうもれぎ

あるまじき人をおもひかけてよめる

讀人しらす

いかにせむ數ならぬ身にしたがはでつつむ袖より落つる涙を

院の熊野にまるらせおはしましける時御迎にま

ふみそめておもひかへりし紅の筆のすさびをいかで見せけむまし

實行卿家の歌合に戀の歌の心をよめる
長實卿母

知るらめや淀の繼橋よとともにつれなき人を戀ひわたるとは

藤原道經

戀ひわびておさふる袖や流れ出づる涙の川のるぜきなるらむ

少將公教母

ながれての名にぞ立ちぬる涙川人目づつみをせきしあへねば

題しらず
皇后宮右衛門佐

涙川そでのるぜきも朽ちはててよどむかたなき戀もするかな

源顯國朝臣

かくとだにまだいはしろの結び松むすほほれたるわが心かな

女のもとにつかはしける
藤原顯輔朝臣

ながむれば戀しき人のこひしきにくもらばくもれ秋の夜の月

題しらす

讀人しらす

つらしとも愚なるにぞいはれけるいかに恨むと人にしらせむ

もの申しける人の前中宮にまゐりにければなご
りを戀ひて月のあかかりける夜いひつかはしけ

る

藤原知房朝臣

面かけはかずならぬ身にこひられて雲井の月を誰とみるらむ

さはる事ありて久しうおとづれざりける女のも

とよりいひ送り侍りける

讀人しらす

浅ましやなどかきたゆる藻鹽草もしほぐささこそは蟹のすさびなりとも

文ばかりおこせていひたえにける人の許にいひ

遣しける

内大臣家小大進

寄水鳥戀といへることをよめる

源師俊朝臣

水鳥の羽風にさわぐささなみのあやしきまでもぬるる袖かな

寄夢戀といへる事をよめる

左兵衛督實能

ゆめにだに逢ふとは見えよさもこそは現につらき心なりとも

題しらす

中納言顯隆

白雲のかかるやまぢをふみみてぞいとど心はそらになりける

中納言俊忠卿の家にてたのめてあはぬ戀といへ

る心をよめる

源顯國朝臣

逢ひ見むと頼むればこそ吳服くれはごりあやしやいかがちかへるべき

忍戀の心をよめる

中納言實行

谷川のうへは木の葉にうづもれて下にながると人しるらめや

月前戀といへる事をよめる

藤原基光

朝寐がみ誰が手枕にたわつけてけさは形見にふりこしてみる

題しらす

讀人しらす

戀すてふ名をだにながせ涙川つれなきひと聞きやわたると
なにせむにおもひかけけむ唐衣戀しきことはみさをならぬに

中納言雅定

あふ事はいつとなぎさの濱千鳥波のたちるに音をのみぞなく

ある宮ばらに侍りける人の忍びて宮をいでてあ

やしの小家にて物申して後日ごろありてつかは

しける

春宮大夫公實

思ひいづやありしそのよの呉竹はあさましかりしふし所かな

顯季卿家にて寄織女戀といふ心をよめる

少將公教母

棚機はまたこむ秋も頼むらむ逢ふ夜もしらぬ身をいかにせむ

後朝の心をよめる

としよりの朝臣

わが戀はおほろの清水いはでのみ堰きやる方もなくて暮しつ

顯季卿の家にて人々戀の歌よみけるによめる 藤原顯輔朝臣

あふとみて現うつのかひはなけれどもはかなきゆめぞ命なりける

女のもとにつかはしける

源 雅 光

逢ふ迄は思ひもよらず夏なつ引びきのいとほしとだにいふと聞かばや

從二位藤原親子家の雙紙合に戀の心をよめる 宣 源 法 師

今はただねられぬいをぞ友にとする戀しき人のゆかりと思へば

太宰大貳長實

思ひやれ須磨のうらみて寐たる夜のかたしく袖にかかる涙を

ものいひける女の髪をかきこして見けるをよめ

る

津 守 國 基

金葉和歌集 卷第七

戀歌上

五月五日はじめたる女のもとにつかはしける 小一條院御製

知らざりき袖のみぬれて菖蒲草^{あやめぐさ}かかるこひぢに生ひむ物とは

女のもとにつかはしける 大江公資朝臣

しの薄上葉にすがくささがにのいかさまにせば人なびきなむ

暁の戀をよめる 神祇伯顯仲

さりともと思ふかぎりは忍ばれて鳥と共にぞねはなかれける

つれなかりける女のもとにつかはしける 春宮大夫公實

これにしくおもひはなきを草枕たびに歸すはいなむしろとや

人はいさ我が世は末になりぬれば又あふさかも如何いかがまつべき

藤原有定

こひしさはその人かすにあらずとも都を忍思ふぶうちにいれなむ

經平卿つくしへまかりけるに具してまかりける

時公實のもとへつかはしける

中納言通俊

さしのほる朝日に君を思ひ出でむかたぶく月にわれを忘るな

かへし

春宮大夫公實

あさ日とも月ともわかすつかのまも君を忘るる時しなれば

みちのくにへまかりけるにあふさかの關より都

へつかはしける

橘則光朝臣

我ひとり急ぐと思ひしあづまぢに垣根の梅はさきだちにけり

沖つ島くもゐの岸を行き返りふみかよはさんまほろしもがな

としよりが伊勢へまかることありてくだりけるいでた

とき人々馬のはなむけし侍りける時よめる

参議師頼

伊勢の海のをのイのふるえに朽ちはてで都の方へかへれとぞ思ふ

源行宗朝臣

待ちつけむ我が身なりせば歸るべき程をいく度君にとはましいく千たび歸りこん日を

百首歌の中に別の心をよめる

中納言國信

今日はさは立ちわかるとも便たよりあらばありやなしやの情忘るななさけ

藤原基俊

秋ぎりの立ちわかれぬる君によりはれぬ思にまどひぬるかな

橘爲仲朝臣みちのくににくだりけるに人々むま

のはなむけし侍りけるによめる

藤原實綱朝臣

おくれるて我がこひをれば白雲の棚引く山を今日やこゆらむ

經輔卿つくしへくだり侍りけるに具してくだり

けるに道より上東門院に侍りける人につかはし

ける

前太宰大貳長房朝臣

かたしきのそでに獨はあかせどもおつる涙ぞ夜をかさねぬる

是を御覽じてかたはらに書きつけさせ給ひける 上 東 門 院

別路をけにいかばかり歎くらむ聞く人さへぞそでは濡れける

源公定が大隅守になりてくだりける時月あかか

りける夜わかれををしみてよめる 源 爲 成

はるかなる旅の空にもおくれねばうらやましきは秋の夜の月

但^イ對馬守にて小槻のあきみちが下りける時つかは

しける

共^イ爲 政 朝 臣 妻

金葉和歌集 卷第六

別離歌

兼房朝臣丹後守にてくだりけるに遣しける

大納言經長

君うしやはなのみやこのはなを見て苗代水にいそぐこころは

かへし

藤原兼房朝臣

よそにきく苗代水にあはれわがおりたつ名をも流しつるかな

重尹帥になりてくだり侍るに人々馬のはなむけ

し侍りける時よめる

堀河右大臣

かへるべきたびの別となぐさむる心にたがふなみだなりけり

題しらす

讀人しらす

雪つもる年のしるしにいとどしくちとせの松の花さくぞみる

かへし

六條右大臣

つもるべし雪つもるべし君が代は松の花さくちたび見るまで

天喜四年皇后宮の歌合に祝の心をよませ給うけ

る

後冷泉院御製

長濱の眞砂のかずもなにならずつきせず見ゆる君が御代かな

松上雪をよめるといへる事をよめるイ

源頼家朝臣

萬代のためしと見ゆる松の上に雪さへつもる年にもあるかな

前齋宮伊勢におはしましける頃石などりの石合歌イ

といへる事をせさせ給ひけるに祝のこころをよ

める

源俊頼朝臣

くもりなくとよさかのほる朝日には君ぞつかへむ萬代までに

宇治前太政大臣家の歌合に祝の心をよめる

中納言通俊

君が代は天つ兒^{こや}屋根^ねの命^{みこと}よりいはひぞ初めしひさしかれとは

大藏卿匡房

君が代はくもりもあらじ三笠山みねに朝日のささむかぎりは

新院の北面にて藤花久匂といへる事をよめる
大夫典侍

藤なみは君が千年をまつにこそかけて久しく見るべかりけれ

祝の心をよめる

源忠季

君が代はとみの小川の水すみて千年を経^ふともたえじとぞ思ふ

實行卿の家の歌合に祝の心をよめる
藤原爲忠

みづがきのひさしかるべき君が代を天照神やそらにしるらむ

前中宮初めて内へまるらせ給ひける夜雪のふり

て侍りければ六條右大臣のもとへつかはしける
宇治前太政大臣

同國いな井のさとを人にかはりてよめる

高階明頼

苗代のみづはいな井にまかせたり民やすけなる君が御代かな

祝の心をよめる

皇子宫肥後

いつとなく風ふく空にたつちりの數もしられぬ君が御代かな

花契週年といへる事をよめる

太宰大貳長實

花もみな君がちとせをまつなればいづれの春か色もかはらむ

攝政左大臣中將にて侍りける頃春日祭の使にく

だりけるに周防内侍女使にてくだりけるに爲隆

卿行事辨にて侍りけるがもとにつかはしける

周防内侍

いかばかり神もうれしとみかさ山二葉の松の千代のけしきを

題しらず

藤原道經

きみが代はいく萬代かかさぬべきいつぬきがはのつるの毛衣

嘉承二年三月鳥羽殿の行幸に池上花といへる事

をよませ給ひける

堀河院御製

池水のそこさへにほふ花ざくら見るともあかじ千代の春まで

大嘗會主基方辰日參入音聲に鼓山をよめる

藤原行盛

音たかきつづみの山のうちはへて樂しき御代となるぞ嬉しき

悠紀方の朝日の里をよめる

藤原敦光朝臣

曇なきとよのあかりにあふみなる朝日の里はひかりさしそふ

巳日の樂の破に雄琴の里をよめる

松風のを琴の里にかよふにぞをさまれる世にこゑはきこゆる

後冷泉院の御時の大嘗會の主基方備中國二萬鄉

をよめる

藤原家經朝臣

みつぎもの運ぶよほろを數ふれば二萬の里人かずそひにけり

禁中翫花といへる心をよめる

中納言實行

九重にひさしくにほへ八重櫻のどけきはるのかぜと知らずや

花契遐年といへる事をよめる

源師俊朝臣賴一

萬代とさしてもいはじさくら花かざさむ春のかぎりなければ

橘俊綱朝臣家歌合に祝の心をよめる

藤原國行

自たのづから我が身さへこそいははるれ君が千代にも逢はまほしさに

百首歌の中に祝の心をよめる

源俊賴朝臣

君が代は松の上葉におくつゆのつもりて四方の海となるまで

祝の心をよめる

大納言經信

君が代のほどをばしらで住吉の松をひさしとおもひけるかな

後一條院御時弘徽殿女御歌合に祝の心をよめる 永成法師

君が代は末の松山はるばると越すしらなみのかずも知られず

金葉和歌集 卷第五

賀 歌

長治二年三月五日内裏にて竹不改色といへるこ

とをよませ給うける

堀河院御製

千代イ

よよふれど面變りせぬ河竹はながれての世ながきイのためしなりけり

郁芳門院根合の祝の心をよめる

六條右大臣

萬代はまかせたるべし石清水ながきながれをきみによそへて

堀河院御時中宮はじめて遷御の時松契遐年とい

へる事をよめる

大納言俊實

水のおもに松のしづえのひぢぬれば千とせは池の心なりけり

さぐりてよみ侍りけるに年のくれをとりてよめ

る

藤原永實

數ふるに残りすくなき身にしあればせめても惜しき年の暮かな

この歌よみて後としの内に身まかりにけるとぞ

としの暮の心をよませ給ひける

三宮

いかにせむ暮れ行く年をしるべにて身を尋ねつつ老は來にけり

中原長國

年くれぬとばかりこそは聞かましをこそいか我身をいの上に積らざりせば

中納言國信

何事を待つとはなしに明けくれて今年もけふになりになる哉

つながねどながれもやらす高瀬舟むすぶ氷のとけぬかぎりは

水鳥をよめる

前齋院六條

なかなか霜のうはぎを重ねてやをしの毛衣さえまさるらむ

池水鳥をよめる

前齋宮内侍

なみまくら如何にうきねをさだむらむ氷る益田の池のをし鳥

題しらす

修理大夫顯季

さむしろにおもひこそやれ笹の葉のさゆる霜夜のをしの獨寐

依花待春といふ心を

内大臣

何となく年のくるるはをしけれど花のゆかりに春をまつかな

としのくれの心をよめる

藤原成道朝臣

人しれず暮れゆく年を惜むまに春といふ名の立ちぬべきかな

霜月十日ごろに攝政左大臣家にて冬の題どもを

に月のあかりける夜参りたりけれど女房達ね
たりけるにや月もみざりければ殿上の御簾にむ
すびつけける歌

藤原兼房朝臣

かき暮し雨ふる夜半やいかならむ月と雪とはかひなかりけり

冬月をよめる

源 雅 光

あらし山雪ふりつもる高嶺よりさえても出づる夜半の月かな

家經朝臣が桂の山庄のさうじのゑに神樂したる

かたかける所をよめる

康 資 王 母

さかき葉や立ちまふ袖の追風に靡かぬ神はあらじとぞおもふ

神樂をよめる

皇后宮權大夫師時

神なびイがきのみむろのやまに霜ふればゆふしでかけぬ榊葉ぞなき

氷をよませ給へる

三 宮

雪の歌とてよめる

源俊賴朝臣

衣手のさえゆくままにしもとゆふかつらぎ山に雪はふりつつ

雪の御幸におそくまるりければしきりにおそき

よし御使をたまはりてつかうまつれる

六條右大臣

朝ごとのかがみの影に面なれてゆき見むとしも急がれぬかな

炭竈をよめる

皇后宮權大夫師時

すみがまに立つ烟さへ小野山は雪けのくもと見ゆるなりけり

百首歌の中に雪をよめる

隆源法師

みやこだに雪ふりぬればしがらきの楨の柚山あと絶えぬらむ

皇后宮肥後

道もなくつもれる雪に跡たえてふる里いかにさびしかるらむ

選子内親王いつきにおはましける時雪ふりたる

鷹狩の心をよめる

俊頼朝臣

はしたかをとるかふ澤に影みれば我が身も共にとやがへりけり

内大臣家越後

ことわりや交野かたのの小野に鳴く雉子さこそは狩かりの人はつらけれ

百首歌の中に雪の心をよめる

大藏卿匡房

いかにせむ末の松山なみこさば峯しらのはつゆき消えもこそすれ

宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる

皇后宮攝津

ふる雪に杉の青葉もうづもれてしるしも見えす三輪の山もと

中納言女王

岩代のむすべるまつにふる雪は春もとけずやあらむとすらむ

大嘗會主基方備中國彌高山をよめる

藤原行盛

雪ふればいやたかやまの梢にはまだ冬ながらはな咲きにけり

深山霰をよめる

大藏卿匡房

はしたかのしらふに色やまがふらむとかへる山に霰ふるなり

水邊寒草といへる事をよめる

大中臣公長朝臣

たかねには雪ふりぬらし眞柴川きしのかけ草たるひしにけり

宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる

源頼綱朝臣

衣手によごのうら風さえさえてこだかみ山にゆき降りにけり

橋上初雪といへる事をよめる

前齋院尾張

白波の立ちわたるかと見ゆるかな濱名の橋にふれるしらゆき

初雪をよめる

大納言經信

はつ雪はまきの葉白くふりにけりこや小野山の冬のさびしさ

雪中鷹狩のこころをよめる

源道濟

ぬれぬれも猶かりゆかむはしたかの上毛の雪を打ち拂ひつつ

神祇伯顯仲

風早みとしまが崎をこぎ行けばゆふなみ千鳥たちるなくなり

氷をよめる

藤原隆經朝臣

高瀬舟棹のおとにぞしられぬる蘆間けいのこほりひとへしにけり

谷水結氷といへる事をよめる

内大臣

谷川のよどみにむすぶこほりこそ見るひともしなき鏡なりけれ

百首歌の中に氷をよめる

藤原仲實朝臣

しながどりるなのふしはらかぜさえてこやの池水氷しにけり

冬月をよめる

神祇伯顯仲

冬さむみ空にこほれる月影はやどにもるこそ解くるなりけれ

氷満池上といへる事をよめる

大納言經信

水鳥のつららの枕ひまもなしうべ訝えけらしとふのすがごも

十月十日ごろに鹿のなきけるを聞きてよめる
法 印 光 清

何事にあきはてながらさを鹿のおもひ返してつまをこふらむ

百首歌のなかに紅葉をよめる
源 俊 頼 朝 臣

龍田川しがらみかけてかみなびのみむろの山の紅葉をぞみる

あじろをよめる
皇 后 宮 肥 後

氷魚ひをのよる川瀬にみゆる網代木あじろぎはたつ白波のうつにやあるらむ

月照網代といへる事をよめる
大 納 言 經 信

月きよみ瀬々の網代による氷魚はたま藻にさゆる氷なりけり

旅宿冬夜といへる事をよめる

旅寐する夜床さえつつ明けぬらしとかたぞ鐘の聲きこゆなり

關路千鳥といへる事をよめる
源 兼 昌

淡路島かよふ千鳥のなく聲にいくよねざめぬ須磨のせきもり

音にだにたもとをぬらす時雨かなまきの板屋のよるの寐覺に

時雨をよめる

攝政家三河

神無月しぐれの雨のふるま^たまにいろいろになるすすか山かな

後朱雀院御時御前にて霧藏紅葉といへる事をよ

める

前中納言資仲

紅葉ちるやまは秋霧はれせねば龍田のかはのながれをぞみる

大井河にまかりて紅葉^{落イ}の心をよめる

源^{平イ}致親

大井河もみぢをわくる筏士はさをににしきをかけてこそみれ

落葉をよめる

大納言經信

みむろやまもみぢ散るらし旅人の菅の小笠ににしきおりかく

竹風似雨といへるころをよめる

前中納言基長

なよ竹の音にも袖^{そイ}をかづつつ濡^{るイ}れぬにこそは風と知りぬれ

金葉和歌集 卷第四

冬 歌

承暦二年御前にて殿上のをのこども題を探りて

歌つかうまつりけるに時雨をとりて

源師賢朝臣

神無月しぐるるままにくらぶ山したてるばかり紅葉しにけり

從二位藤原親子家の草子合きうしあはせにしぐれをよめる

修理大夫顯季

しぐれつつ且ちる山のもみぢ葉をいかに吹く夜の嵐なるらむ

ならにて人々の百首歌よみけるに時雨をよめる 權僧正永縁

山川のみづはまさらでしぐれには紅葉の色ぞふかくなりける

源 定 信

大井河ちるもみぢ葉にうづもれてとなせの瀧は音のみぞする

落葉隨風といへる事をよめる

太宰大貳長實母

色ふかきみやまぐれのもみぢ葉を嵐の風のたよりにぞみる

九月盡の心をよめる

中原經則

あすよりはよもの山邊の秋ぎりの面影にのみ立たむとすらむ

源俊賴朝臣

草の葉にはかなく消ゆる露をしも形見におきて秋の行くらむ

九月盡の日大井にまかりてよめる

春宮大夫公實

惜めどもよもの紅葉は散り果ててとなせぞ秋のとまりなりける

谷川にしがらみかけよ龍田姫みねのもみぢにあらし吹くなり

大井河の行幸につかうまつれる

修理大夫顯季

大井河るぜきの音のなかりせば紅葉をしけるわたりとやみむ

深山紅葉といへる事をよめる

大納言經信

山守よ斧の音たかくひびくきこゆいなり峯のもみぢはよきてきらせよ

紅葉をよめる

神祇伯顯仲

よそにみる峯のもみぢや散りくると麓の里はあらしをぞ待つ

大井河の逍遙かづくに水上紅葉落葉といへる事をよめる 藤原伊家

ははそちる岩間をくぐるかづく鴨とりはおのが青葉も紅葉しにけり

落葉埋橋といへる事をよめる

修理大夫顯季

小倉山みねのあらしの吹くからに谷のかけはし紅葉しにけり

落葉藏水といへる心をよめる

大中臣公長朝臣

千年まで君がつむべき菊なれば露もあだには置かじとぞ思ふ

攝政左大臣家にて隣家紅葉といへる事をよめる 藤原仲實朝臣

もずのゐる櫛はじのたちえの薄紅葉たれわがやどの物とみるらむ

承暦二年内裏歌合にもみちをよめる 源師賢朝臣

ははき木の梢やいづこおほつかな皆その原はもみぢしにけり

宇治前太政大臣大井河にまかりたりけるとともに

まかりて水邊紅葉といへる事をよめる 大納言經信

大井河いはなみ高いかだ士よきしの紅葉にあからめなせそ

太皇太后宮の扇合に人にかはりてもみぢの心を

よめる 源俊賴朝臣

音羽山もみぢ散るらしあふさかの關の小川ににしきおりかく

落葉をよめる 藤原伊家

野花留人といへる事をよめる

平忠盛朝臣

行く人をまねくか野邊の花すすき今宵もここに旅寐せよとや

堀河院御時御前にておのおの題をさぐりて歌つ

かうまつりけるに薄をとりてつかうまつれる
源俊頼朝臣

うづらなく眞野のいりえの濱風に尾花なみよる秋のゆふぐれ

河霧をよめる
藤原基光

宇治川のかはせも見えぬ夕霧にまきのしま人ふねよばふなり

藤原行家

河霧のたちこめつれば高瀬舟わけゆくさをのおとのみぞする

郁芳門院の歌合に菊をよめる
中納言通俊

盛りなるまがきの菊を今朝みればまだ空さえぬ雪ぞつもれる

鳥羽殿の前裁合に菊をよめる
修理大夫顯季

女郎花夜のまのかぜに折れふしてけさ白露にこころおかるな

攝政左大臣

攝政左大臣家にて歌合し侍りけるに蘭をよめる
源 忠 季

佐保川のみぎはに咲ける藤袴なみのよりてや掛けむとすらむ

藤袴をよめる
右兵衛督伊通

かりにくる人もきよとやふぢばかま秋の野毎に鹿のたつらむ

神祇伯顯仲

さ^さがにの糸のとぢめやあだならむ綻びわたる藤ばかまかな

鳥羽殿の前^{せんざいあはせ}裁合に女郎花のこころをよめる
春宮大夫公實

あだし野のつゆ吹きみだる秋風になびきもあへぬ女郎花かな

思野花といへる事をよめる
藤 原 伊 家

今はしもほに出でぬらむ東路の岩田の小野のしののをすすき

野花帶露といへる事をよめる

皇后宮肥後

白露とひとはいへども野邊みればおく花ごとに色ぞかはれる

太皇太后宮扇合に人にかはりて萩の心をよめる 僧 正 行 尊

小萩原にほふさかりは白露もいろいろにこそ見えわたりけれ

萩をよめる 太宰大貳長實

しらすけの眞野の萩原つゆながら折りつる袖ぞ人なとがめそ

女郎花をよめる 隆 源 法 師

女郎花さける野邊にぞ宿りぬる花の名だてになりやしぬらむ

顯隆卿家に歌合し侍りける時女郎花をよめる 中納言俊忠

ゆふつゆの玉かづらして女郎花のはらの風にをれやふすらむ

女郎花をよめる 藤原顯輔朝臣

白露や心おくらむをみなへしいろめく野邊にひとかよふとて

鹿をよめる

三宮大進

妻こふる鹿ぞ鳴くなるひとりねのこの山風身にやしむらむ

曉聞鹿といへる事をよめる

皇后宮右衛門佐

思ふこと有明がたの月かけにあはれを添ふるさをしかのこゑ

夜聞鹿聲といふ事をよめる

内大臣家越後

夜はになく聲に心ぞあくがる我が身は鹿のつまならねども

攝政左大臣家にて旅宿鹿といへる事をよめる

源雅光

さもこそはみやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬるる袖かな

鹿の歌とてよめる

藤原顯仲朝臣

世の中をあきはてぬとやさ鹿の今はあらしの山に鳴くらむ

藤原行家

秋ならで妻よぶ鹿を聞きしがなをりから聲の身にはしむかと

ればよめる

平忠盛朝臣

有明のつきもあかしの浦風になみばかりこそよると見えしか

月前落葉といへる事をよめる

源俊賴朝臣

あらしをや葉守の神もたたたるらむ月に紅葉のたむけしてつればけり

蜚をよめる

前齋院六條

露しけき野邊にならひてきりぎりすわが手枕の下になくなり

はたおりといへる蟲をよめる

顯仲卿女

ささがにのいと引きかくる叢にはたおる蟲のころぞきこゆる

雁をよめる

讀人しらす

玉章たまづさはかけてきつれどかりがねのうはの空にも聞ゆなるかな

歌合に雁を

春宮大夫公實

いもせやま峯のあらしやさむからむ衣かりがね空になくなり

月前旅宿といへる事をよめる

修理大夫顯季

松が根に衣かたしきよもすがら眺むるつきをいもや見^{見らむか}るらむ

ひとり月をながめてよめる

藤原有教母

ながむればおほえぬ事もなかりけり月や昔のかたみなるらむ

行路曉月といへる事をよめる

權僧正永縁

もろともにいつとはなしに有明の月のみおくる山路をぞ行く

山にむかひて月を待つといへる事をよめる

土御門左大臣^右

有明の月まつほどのうたたねは山のはのみぞゆめに見えける

山家曉月といへる事をよめる

中納言顯隆

山里の門田のいねのほのほのと明くるもしらず月をみるかな

月のあかりけるころ明石にまかりて月をみて

のほりたりけるに都の人々月はいかにと尋ねけ

源俊頼朝臣

村雲や月のくまをばのごふらむ晴れゆくたびに照りまさる哉

月の心をよめる

藤原家經朝臣

いまよりは心ゆるさじ月かけのゆくへも知らず人さそひけり

月照古橋といへる心事をよませ給へる

三宮

とだえして人も通はぬたな橋は月ばかりこそ澄みわたりけれ

水上月をよめる

藤原實光朝臣

月影のさすにまかせて行く舟はあかしの浦やとまりなるらむ

題しらす

太宰大貳長實

さらぬだに玉にまがひておく露をいとどみがける秋の夜の月

永承四年殿上歌合に月の心をよめる

藤原家經朝臣

よとともに曇らぬ雲のうへなれば思ふことなく月をみるかな

宿からぞつきの光もまさりけるよの曇りなくすめばなりけり

月をよめる

藤原忠隆

眺むればふけゆくままに雲晴れて空もののどかにすめる月かな

奈良の花林院の歌合に月をよめる

權僧正永縁

いかなれば秋はひかりのまさるらむおなじ三笠の山の端の月

月の歌とてよめる

藤原顯輔

三笠山もりくる月のきよければ神のこころもすみやしぬらむ

太皇太后宮の扇合に月の心をよめる

大納言經信

三笠山みねよりいづる月かけはさほの河瀬のこほりなりけり

顯季卿の家にて九月十三夜人々月の歌よみける

に

太宰大貳長實

くまもなくか^{きイ}がみと見ゆる月かけに心うつらぬ人はあらじな

かがみ山みねより出づる月なれば曇る夜もなき影をこそみれ

秋なにはの方にまかりて月のあかかりければよ

める

参議師頼

いにしへのなにはの事を思ひ出でて高津の宮に月のすむらむ

秋月如畫といへることをよめる

藤原隆經

菊の上^{にイ}の露なかりせば如何にして今宵の月をよると知らまし

翫明月といふ事をよめる

源行宗朝臣

なごりなく夜半の嵐に雲はれてこころのままにすめる月かな

八月十五夜に人々歌よみけるによめる

平師季

みかさ山ひかりをさして出でしより曇らであけぬ秋の夜の月

宇治入道前太政大臣の三十講の歌合に月の心を

よめる

讀人しらす

經長卿の桂の山庄にて閑に月を見るといへる事

をよめる

大納言經信

今宵わがかつらの里の月を見ておもひ殘せることのなきかな

承暦二年内裏歌合に月をよめる

春宮大夫公實

くもりなき影をとどめば山のはに入るとも月を惜まざらまし

宇治前太政大臣家の歌合に月をよめる

皇后宮攝津

てる月のひかりさえゆく宿なれば秋の水にもこほり^{つらら}るにけり

源俊賴朝臣

やまのはに雲の衣をぬぎ捨ててひとりも月のたちのほるかな

水上月

攝政左大臣

蘆根はひかつみもしけき沼水にわりなくやどる夜半の月かな

宇治前太政大臣家の歌合に月をよめる

一宮紀伊

さやけさはおもひなしかと月影を今宵としらぬ人にとはばや

閏九月ハイのある年八月十五夜によめる

春宮大夫公實

秋は猶のこりおほかる年なれどこよひの月の名こそをしけれ

水上月といへる心をよめる

前齋院六條

雲のなみかからぬさよの月影をきよたき川にうつしてぞ見る

九月十三夜しづかに閑見月といへる事をよめる

源俊頼朝臣

すみのほるこころや空をはらふらむ雲のちりるぬ秋の夜の月

月をよめる

皇后宮肥後

月をみて思ふ心のままならばゆくへも知らずあくがれなまし

人のもとにまかりて物申しけるほどに月の入り

にければよめる

源師俊朝臣

如何にしてしがらみかけむ天の川流るる月やしばしよどむと

る事をよませ給ひける

院御製

池水にこよひの月をうつしもてこころのままに我が物と見る

大納言經信

てる月の岩間の水にやどらずば玉ゐるかすをいかで知らまし

明月をよめる

民部卿忠教

いづくにもこよひの月をみる人の心やおなじそらにすむらむ

後冷泉院の御時皇后宮の歌合に駒迎こまむかへのこころを

よめる
藤原隆經

ひく駒のかすより外にみえつるは關の清水の影にぞありける

駒迎の心をよめる
源仲正

東路をはるかに出づるもち月のこまに今宵やあふさかのせき

八月十五夜の心をよめる
源親房

風ふけば枝やすからぬ木の間よりほのめく秋の夕づくよかな

後冷泉院御時殿上の歌合に月の心をよめる
大納言・經信

月かけのすみわたるかな天の原雲ふきはらふ夜半のあらしに

月はたびの友といへる事をよめる
法橋忠命

草枕このたびねにぞおもひしる月よりほかのともなかりけり

^{しづかに}閑見月といへる事をよめる
顯仲卿女

もろともに草葉の露のおきるすばひとりや見まし秋の夜の月

翫明月といへる事をよめる
前中納言伊房

いつはりになりぞしぬべき月影をこの見るばかり人に語らば

烏羽殿にて旅宿月といへる事をよめる
春宮大夫公實

我こそはあかしのせとに旅寐せめおなじ水にもやどる月かな

寛治八年八月十五夜烏羽殿にて池上翫月といへ

おのづから秋はきにけり山里のくす這ひかかる槇のふせやに

田家早秋といへる事をよめる

右兵衛督伊通

稻葉ふく風のおとせぬ宿ならばなににつけてか秋を知らまし

山家秋といへる事をよめる

藤原行盛

山深みとふ人もなきやどなれどそもの小田に秋はきにけり

師賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて田家秋風

といへる事をよめる

大納言經信

夕されば門田のいなばおとづれて蘆のまるやにあき風ぞふく

三日月の心をよめる

大江公資朝臣

山の端にあかでいりぬる夕月夜いつあり明にならむとすらむ

攝政左大臣の家にて夕月夜の心をよませ侍りけ

るによめる

藤原忠隆

かぎりありてわかるる時もたなばたの涙の色は變らざりけり

皇后宮權大夫師時

たなばたのあかぬわかれの涙にや花のかつらも露けかるらむ

内大臣家越後

天の川かへさの船に波かけよ乗りわづらはばほども經^ふばかり

源俊賴朝臣

歸るさはあさ瀬もしらじ天の川あかぬなみだに氷しまさらば

草花告秋といふ事をよめる

源雅兼朝臣

咲きそむる朝^{あした}の原の女郎花あきをしらするつまにぞ有りける

おなじ心をよめる

源縁法師

咲きにけりくちなし色の女郎花いはねどしるし秋のけしきは

秋のはじめの心をよめる

大納言經信

萬代に君ぞ見るべきたなばたのゆきあひの空を雲のうへにて

七夕の心をよめる

能因法師

たなばたの苔の衣をいとはずば人なみなみに貸しもしてまし

七月七日父のぶくにて侍りける年よめる

橘元任

藤衣いみもやするとたなばたに貸さぬにつけて濡るる袖かな

七夕の心をよめる

前齋宮河内

戀ひこひて今宵ばかりやたなばたの枕にちりの積らざるらむ

三宮

天の川わかれに胸のこがるればかへさの船はかぢも取られず

中納言國信

たなばたにかせる衣の露けさにあかぬけしきを空にしるかな

七夕後朝の心をよめる

内大臣

金葉和歌集 卷第三

秋 歌

百首歌の中に秋立心をよめる

春宮大夫公實

とことはに吹く夕暮のかぜなれど秋たつ目こそ涼しかりけれ

野草帶露といへる事をよめる

太宰大貳長實

まくずはふあだの大野の白露を吹きなみだりはらひそ秋のはつかぜ

待草花といへることをよめる

皇后宮美濃

藤袴はやほころびてにほはなむ秋のはつかぜ吹きたたずとも

後冷泉院御時皇后宮の春秋の歌合に七夕の心を

よめる

土佐内侍

秋隔一夜といへる事をよめる

中納言顯隆

みそぎするみぎはに風の涼しきは一夜をこめて秋やきぬらむ

宿ごとにはな橘ぞにほひふないけるひと木がするをかぜは吹けども

二條關白家にて雨後野草といへる事をよめる 源俊頼朝臣

この里も夕立しけりあさぢふに露のすがらぬくさの葉もなし

實行卿の家の歌合に鵜川の心をよめる 中納言雅定

大井河いくせ鵜舟のすぎぬらむほのかになりぬかがり火の影

夏月をよめる 源親房

玉くしけふたがみ山の木の間よりいづれば明くる夏の夜の月

六月廿日ごろに秋の節になる日人のもとに遣し

ける 攝政左大臣

みな月のてる日の影はさしながら風のみ秋こいのけしきなるかな

公實卿の家にて對水待月といへる事をよめる 藤原基俊

夏の夜の月まつほどのてすさびに岩もる清水いくむすびしつ

夜もすがらはかなく叩く水鶏かなさせる戸もなき柴の假屋かりやを

實行卿の家の歌合に夏風の心をよめる

修理大夫顯季

なつごろも裾野の草をふく風におもひもあへず鹿やなくらむ

水風暮涼といへる事をよめる

源俊朝朝臣

風吹けばはすのうき葉に玉こえて涼しくなりぬひぐらしの聲

照射ごもしの心をよめる

源仲正

澤水にほぐしの影のうつれるをふたともしとや鹿はみるらむ

神祇伯顯仲

鹿たたぬ端山はやまのすその照射して幾夜かひなき夜をあかすらむ

家の歌合に廬橘をよめる

中納言俊忠

五月きつき閨やみ花たちばなのありかをば風につてにぞそらに知りける

百首歌の中に廬橘をよめる

春宮大夫公實

權中納言俊忠卿の家の歌合にさみだれの心をよ

める

藤原顯仲朝臣

五月雨に水まさるらしさはだ川まきのつぎ橋浮きぬばかりに

五月雨の心をよめる

左兵衛督實能

さみだれは小田の水口手もかけでみづの心にまかせてぞみる

三宮

五月雨に入江のはしの浮きぬればおろす筏のこことこそすれ

攝政左大臣の家にて夏月の心をよめる
神祇伯顯仲

夏の夜の庭にふりしくしら雪は月のいるこそ消ゆるなりけれ

權中納言俊忠卿の家の歌合に水鷄の心をよめる
藤原顯綱朝臣

里ごとにたたく水鷄くひなの音すなりこころのとまる宿やなからむ

攝政左大臣の家にて水鷄の心をよめる
源雅光

五月五日家にあやめふくを見てよめる

左近府生秦兼久

同じくばととのへてふけ菖蒲草さみだれたらばもりもこそすれ

むかし中の院にすませ給ひける頃はみえざりけ

るあやめを人の中の院のなどいと申しけるを見てよま

せ給ひける

第三宮

浅ましや見しふる里の菖蒲草わがしらぬまに生ひにけるかな

百首歌の中にさみだれをよめる

参議師頼

五月雨は沼のにいはがき水こえて眞菰かるべきかたも知られず

五月雨の心をよめる

藤原定通

五月雨は日かすへにけりあづまやの萱が軒端の下くつるまで

承暦二年内裏の歌合に五月雨の心をよめる

源通時朝臣

五月雨に玉江のみづやまさるらむ蘆の下葉のかくれゆくかな

あやめ草ねたくも君がとはぬかな今日は心にかかれと思ふに

永承六年殿上にて根合にあやめをよめる

大納言經信

萬代にかはらぬものはさみだれの雪にかをるあやめなりけり

郁芳門院の根合にあやめをよめる

藤原孝善

菖蒲草あやめひく手もたゆく長きねのいかであさかの沼に生ひけむ

承暦二年内裏の歌合にあやめを

春宮大夫公實

玉江にや今日の菖蒲を引きつらむ磨ける宿のつまと見ゆるは

宮づかへしける娘のもとに五月五日くすだま遣

はすとして

權僧正永緣母

菖蒲草我身のうきをにい引かへてなべてならぬに生ひも出でなむ

百首の中にあやめをよめる

春宮大夫公實

菖蒲草よどのに生ふる物なればねながら人は引くにやあるらむ

聞きもあへずこぎぞわかるる郭公わが心なるふなでならねば

郭公をよめる

藤原成通朝臣

郭公一こゑなきて明けぬればあやなくよるのうらめしきかな

月前郭公といへる事をよめる

皇后宮式部

郭公くものたえまに^{もイ}いる月のかけほのかにも鳴きわたるかな

曉聞郭公といへる事をよめる

源定信

わぎもこにあふさか山の郭公あくればかへるそらになくなり

尋郭公といふことをよめる

讀人しらす

郭公たづぬるだにもあるものを待つ人いかでこゑを聞くらむ

雨中郭公とい^{ふイ}へる事をよめる

大納言經信

郭公くもぢにまど^{ふイ}ふ聲すなりをやみだにせよさみだれのそら

五月五日實能卿のもとに藥玉つかはすとて

内大臣

俊忠卿の家の歌合に郭公をよめる

後二條關白家筑前

まつ人のやどをばしらで郭公をちのやまべを鳴きてわたるゝすぐらむ

中納言女王母

郭公ほのめくこゑをいづかたと聞きまどはしつ明ほののそら

郭公をよめる

前齋院六條

宿ちかくしばしかたらへ郭公まつ夜のかすのつもるしるしに

中納言雅定

郭公まれになく夜はやまびこの答ふるさへぞうれしかりける

宇治太政大臣の歌合に郭公をよめる

康資王母

山ちかくうらこぐふねは郭公なくわたりこそとまりなりなれ

匡房卿美作守にて下りける道にて郭公なきける

を聞きてよめる

中原高

眞1

承暦二年内裏歌合に郭公を人にかはりてよめる 藤原孝善

ほととぎす心もそらにあくがれてよがれがちなるみ山邊の里

郭公をよめる

權僧正永縁

聞くたびにめづらしければ郭公いつも初音のここちこそすれ

人々十首歌よみけるに郭公を

源俊頼朝臣

待ちかねてたづねざりせば郭公たれとか山のかひになかまし

中納言實行

いなり山たづねやみまし郭公まつにしるしのなきとおもへば

郭公驚夢といへる事をよめる

中納言公成

おどろかすこゑなかりせば郭公まだ現うつにはきかずやあらまし

待郭公といへる事をよませ給へる

院御製

郭公まつにかかりてあかすかな藤のはなとやひととは見るらむ

郭公すがたは水にやどれども聲はうつらぬものにぞありける

源 雅 光

郭公なきつとかたる人づてのことの葉さへぞうれしかりける

郭公尋ねける日は聞かで二日ばかりありて鳴き

けるを聞きてよめる
橘 成 元

郭公おとはの山のふもとまでたづねしこゑをこよひ聞くかな

長實卿の家の歌合に郭公の心をよめる
左京大夫經忠

年ごとに聞くとはすれど郭公聲はふりせぬものにぞありける

郭公をまつ心を
内 大 臣

戀すてふなき名やたたむ郭公まつにねぬ夜のかずしつもれば

郭公をよめる
藤原顯輔朝臣

郭公あかで過ぎぬるこゑによりあとなき空^{をイ}にながめつるかな

神山の麓にさける卯のばなは誰がしめゆひしかきねなるらむ

卯花をよめる

大納言經信

賤の女が蘆火たく屋もうの花の咲きしかかれば寢れざりけり

源盛清

うの花を音なし河の波かとしてねたくも折らで過ぎにけるかな

大中臣定長

卯の花の青葉も見えず咲きぬれば雪と花のみかはるなりけり

烏羽殿の歌合に郭公をよめる
修理大夫顯季

み山いでてまだ里なれぬ郭公うはのそらなる音をやなくらむ

尋郭公といへる事をよめる
藤原節信

今日もまたたづねくらしつ郭公いかできくべき初音なるらむ

郭公の歌十首人々によませ侍りける頃に
攝政左大臣

大納言 經信

たまがしは庭も葉廣になりにつけりこやゆふしでて神祭るころ

烏羽殿にて人々歌つかうまつりけるに卯のはな

の心をよめる

春宮大夫公實

雪の色をうばひて咲けるうの花に小野のさと人冬ごもりすな

卯花連垣といへる事をよめる

大藏卿 匡房

いづれをかわきて折らまし山里の垣根つづきに咲ける卯の花

卯花をよめる

江侍 從

雪としもまがひもはてず卯の花は暮るれば月の影かとも見ゆ

攝政 左大臣

うの花のさかぬ垣根はなけれども名にながれたる玉川のさと

卯花たがかき根ぞといへる心事イをよめる

中納言 實行

金葉和歌集 卷第二

夏歌

卯月のついたちの日ころもがへの心をよめる 源師賢朝臣

我のみぞ急ぎたたれぬ夏ごろもひとへに春を花イをしむ身なれば

二條關白家にて人々殘花の心をよませ侍りける

によめる

藤原盛房

夏山の青葉まじりのおそざくらはつ花よりもめづらしきかな

應徳元年四月三條内裏にて庭樹結葉といへる事

をよませ給ひける

院御製

おしなべて梢みどりイあを葉になりぬればまつの緑ちとせイもわかれざりけり

春のゆくみちに來むかへ郭公かたらふこゑに立ちやとまると

中納言 雅定

残りなく暮れゆく春ををしむとて心をさへにつくしつるかな

三月盡戀といへる心事をよめる

内大臣

春はをし人は今宵とたのむれば思ひわづらふ今日のくれかな

攝政左大臣家にて人々三月盡の心をよませ侍り

けるに

源俊賴朝臣

歸る春卯月のいみにさしこめてしばしみあれの程までも見む

重服に侍りけるとし三月晦日の日人のもとより

音づれて侍りければ遣しける

藤原顯輔朝臣

思ひやれめぐり逢ふべき春だにもたち別るるは悲しきものを

まつかぜの音せざりせば藤波をなにかかれる花としらまし

二條關白の家にて池邊藤花といへる事をよめる 大納言 經信

いけにひづ松のはひ枝に紫のなみおりかくるふぢ咲きにけり

百首の歌の中に藤花をよめる 修理大夫 顯季

住の江イよしのまつにかかれる藤の花かぜのたよりに波やおるらむ

雨中藤花といへる事をよめる 神祇伯 顯仲

ぬるるさへ嬉しかりけり春雨に色ます藤のしづくとおもへば

隣家藤花といへる事をよめる 内大臣家 越後

蘆垣のそとはみれど藤のはなにほひは我をへだてざりけり

題しらす 盛 經家イ 母

花のみや暮れぬる春のかたみとて青葉のしたに散り残るらむ

三月盡の心をよめる 大僧都 證觀

春ふかみかみなび河に影みえてうつろひにけりやまぶきの花

後冷泉院の御時歌合に山吹をよめる

前太宰大貳長房

山吹にふきくる風も心あらば八重ながらをば散らさざらなむ^{や₁}

晚見躑躅といふ心をよめる

攝政左大臣家參河

いり日さすゆふくれなるの色はえて山下てらす岩つつじかな

院の北面にて橋上藤花といへる事をよめる

大 夫 典 侍

色かへぬ松によそへてあづまぢのときはの橋にかかる藤なみ

藤花をよめる

藤原顯輔、朝臣

むらさきの色のゆかりに藤の花かかれる松もむつまじきかな

坊の藤の花さかりなりけるを見てよめる

律 師 増 覺

くる人もなき我が宿の藤の花たれを待つとて咲きかかるらむ

紫藤藏松といへる事をよめる

良 暹 法 師

あら小田に細谷川をまかすればひくしめ繩にもりつつぞゆく

苗代をよめる

津守國基

嶋のゐる野澤の小田をうち返し種蒔きてけりしめはへて見ゆ

後冷泉院御時弘徽殿の女御の歌合に苗代をよめ

る

藤原隆資

山里のそともの小田の苗代にいはまのみづを堰かぬ日ぞなき

家の山吹を人々あまたまうで來てあそびける頃

に折りけるを見てよめる

中納言雅定

わが宿にまた來む人もみるばかり折りなやつくししそ山吹のはな

水邊款冬

攝政左大臣

限ありて散るだにをしき山吹をいたくな折りそ井手の川なみ

おなじ心を

太宰大貳長實

下野やあらむとてめしにつかはしたりければ参
りたるを御覽じてあの花折りてまるれと仰言あ
りければ折りて参りたるをただにてはいかがと
おほせ事ありければつかうまつりける

下

野

春の夜ながきイの月のひかりのなかりせば雲井の花をいかでをらまし

散りのこるイはてぬ花のありかをしらすれば厭いとひし風ぞけふは嬉しき
新院の御方にて殘花薰風といへる事をよめる 中納言雅定

奈良にて人々百首歌よみけるに早蕨さわらびをよめる 權僧正永縁

やまざとは野邊のさ蕨もえいづる折にのみこそ人はとひけれ

百首の歌の中に杜若かきつばたを

修理大夫顯季

あづまぢのかほやが沼の杜若かきつばたはるをこめても咲きにけるかな

春の田をよめる

大納言經信

庭の花もとのこすゑに吹きかへせ散らすのみやは心なるべき

夜思落花といへる事をよめる

隆源法師

衣手に晝はちりつむさくら花よるはこころにかかるなりけり

春ものへまかりけるに山田つくるを見てよみ侍

りける

高階經成朝臣

櫻さく山田をつくるしづの男はかへすがへすや花をみるらむ

花をよみ侍りける

右兵衛督伊通

白雲とみねには見えてさくら花ちればふもとの雪とこそみれ

後冷泉院の御時月のあかかりける夜女房御供に

て南殿にわたらせ給ひたりけるに庭の花かつ散

りておもしろかりけるを御覽じて是をしりたら

む人に見せばやとおほせ事ありて中宮の御方に

水上落花といへる心をよめる

大納言 經信

水上に花やちるらむ山がはのるぐひにいとどかかるしらなみ

藤原成通朝臣

水の面にちりつむ花をみる折^{時イ}ぞはじめて風はうれしかりける

落花衣にちるといへる事をよめる
藤原 永實

散りかかるけしきは雪の心地して花には袖のぬれぬなりけり

堀河院御時花のちりたるをかきあつめて大きな

る物のふたに山のかたにつませ給ひて中宮の御

方に奉らせ給へりけるを宮御覽じて歌よめとお

ほせごと有りければつかうまつれる
御 匣 殿

さくら花雲かかるまでかきつめて吉野の山と今日はみるかな

花の庭にちりつもりたるを見てよめる
郁芳門院安藝

春の日のどけき空にふる雪は風にみだるる花にぞありける

水上落花といへる事をよめる

源雅兼朝臣

花さそふあらしや峯をわたるらむさくらなみよる谷川のみづ

落花満庭といへる事をよめる

左兵衛督實能

けさ見ればよはの嵐にちりはてて庭こそ花のさかりなりけれ

堀河院御時中宮の御方にて風靜花芳といへる事

をつかうまつれる

源俊頼朝臣

こすゑには吹くとも見えで櫻花かをるぞ風のしるしなりける

落花の心をよめる

長實卿母

春ごとにおなじさくらの花なればをしむ心もかはらざりけり

落花隨風といふ心をよめる

右兵衛督伊通

うらやまし如何にふけばか春風のはなを心にまかせそめけむ

よしのやま嶺になみよる白雲とみゆるは花のこす忍なりけり

堀河院の御時女御の御かたの女房あまた花見あ

りきけるによめる

前齋宮筑前乳母

春毎にあかぬにほひをさくらばな如何なる風の惜まざるらむ

人にかはりてよめる

僧正行尊

外^{まへ}にては惜みに來つる花なれど折らではえこそ歸るまじけれ

後冷泉院の御時皇后宮の歌合に櫻をよめる

堀河右大臣

春雨にぬれて尋ねむやまざくら雲のかへしのあらしもぞ吹く

月前見花といふ心をよめる

大藏卿匡房

月影にはな見る夜半のうき雲は風のつらさにおとらざりけり

顯季卿の家にて櫻の歌十首人々によませ侍りけ

るによめる

太宰大貳長實

みねつづき匂ふ櫻をしるべにて知らぬ山路にまどひぬるかな

人々に櫻の歌十首よませ侍りけるによめる

修理大夫顯季

櫻花さきぬるときはよしのやま立ちものほらぬ峯のしらくも

山花留人といへる事をよめる

大中臣公長朝臣

斧の柄は木のもとにてや朽ちなまし春をかぎらぬ櫻なりせば

宇治前太政大臣の家の歌合に櫻をよめる

皇后宮攝津

ちりつもる庭をぞみまし櫻花かぜよりさきにたづねざりせば

源俊賴朝臣

山櫻咲きそめしよりひさかたのくもるに見ゆる瀧のしらいと

遙見山花といへる事をよめる

大藏卿匡房

初瀬山くもるに花のさきぬれば天のかはなみ立つかとぞ見る

藤原忠隆

萬代に見るべき花のいろなれど今日のにほひをいつか忘れむ

終日尋花といふ事をよめる

源貞亮朝臣

しらくもにまがふ櫻を尋ぬとてかからぬ山のなかりつるかな

堀河院御時女房たちを花山の花見せにつかはし

たりけるにかへりまゐりて御前にて歌つかうま

つりけるに女房にかはりてよませ給うける

堀河院御製

よそにては岩こす瀧とみゆるかなみねの櫻やさかりなるらむ

源師俊朝臣

今日くれぬ明日もきてみむ櫻花ころしてふけ春のやまかぜ

山花を翫ぶといへる事をよめる

太宰大貳長實

かがみ山うつろふ花を見てしより面影にのみ立たぬ日ぞなき

深山花を

といへる事を

攝政左大臣

白雲とをちのたかねの見えつるは心まどはすさくらなりけり

松間櫻花といへる事をよめる

内 大 臣

春ごとに松のみどりにうづもれて風にしらね花ざくらかな

左兵衛督實能

この春はのどかに匂へさくら花えださしかはす松のしるしに

山寒花遅といふことを

左京大夫經忠

山櫻こするのかぜのさむければ花のさかりになりぞわづらふ

花爲春友といへることをよめる

内 大 臣

散らぬまは花を友にてすぎぬべし春よりのちのしる人もがな

新院の御方にて花契遐年といへる事をよめる 待賢門院中納言

しらくもにまがふさくらの梢にて千歳の春をそらにしるかな

藤原顯輔朝臣

太政大臣

白河のながれひさしきやどなれば花の匂ひものどけかりけり

人にかはりてよめる

太宰大貳長實

吹く風も花のあたりはこころせよ今日をば常の春とやは見る

待賢門院兵衛

萬代のためしと見ゆるはなの色をうつしとどめよ白河のみづ

源雅兼朝臣

年ごとに咲きそふやどの櫻花なほゆくするはるぞゆかしき

宇治前太政大臣京極の家の御幸の日よませ給ひ

ける

院御製

春霞たちかへるべきそらぞなき花のにはひにこころとまりて

遠山櫻といへる事をよめる

春宮大夫公實

池邊柳をよめる

源雅兼朝臣

風ふけばなみのあやおる池水に糸ひきそふるきしのあをやぎ

呼子鳥をよめる

前齋院尾張

いとかやまくる人もなき夕暮にこころほそくもよぶこ鳥かな

霞中歸雁といへる事をよめる

藤原成通朝臣

こゑせすばいかで知らまし春霞へだつる空にかへるかりがね

歸雁をよめる

藤原經通朝臣

今はとてこしちに歸る雁がねは羽もたゆくや行きか^くかるらむ

花薰風といふ心をよみ侍りける

攝政左大臣

よしのやま峯の櫻や吹きぬらむふもとの里ににほふはるかぜ

白河の花見の御幸に

新院御製

たづねつる我をや花も^{風イ}まちつらむ今日ぞ盛^{さかり}ににほひましける

道雅卿の家の歌合に梅花をよめる

藤原兼房朝臣

ちりかかる影はみゆれど梅の花水には香こそうつらざりけれ

梅の花をよめる

源 忠 季

かぎりありて散りははつとも梅の花香をば梢に残せとぞ思ふ

子の日の心をよめる

大中臣公長朝臣

春日野の子の日の松はひかでこそ神さびゆかむ蔭にかくれめ

百首の歌の中に子の日の心をよめる

大藏卿匡房

春霞たちかくせどもひめ小松ひくまの野邊にわれは來にけり

柳絲隨風といふ心事¹をよませ給ひける

院 御 製

かぜふけば柳のいとのかたよりに靡くにつけて過ぐる春かな

百首の歌の中に柳をよめる

春宮大夫公實

あさまだき吹きくる風にまかすればかたよりしに¹ける青柳の糸

皇后宮にて人々歌つかうまつりけるに雨中鶯と
いふ事をよめる

源俊賴朝臣

春雨はふりしむれども鶯のこゑはしをれぬものにぞありける

良暹法師忍びてもものへまかりけるに右大辨經賴
が家の梅さかりに咲きければ門にひねもすに立

ちくらしして夕つかたいひいれ侍りける

良暹法師

梅の花匂ふあたりはよきてこそいそぐ道をば行くべかりけれ

梅花夜芳といへることをよめる

前太宰大貳長房

梅が枝に風やふくらむ春の夜はをらぬ袖さへにほひぬるかな

朱雀院に人々まかりて閑庭梅花といへる事をよ

める

大納言經信

今日ここに見にこざりせば梅の花ひとりや春の風にちらまし

年ごとにかはらぬものは春霞たつたのやまのけしきなりけり

霞の心をよめる

太宰大貳長實

あづさゆみ春のけしきになりにつけりいるさの山に霞たなびく

百首の歌の中に鶯の心をよめる

修理大夫顯季

鶯の鳴くにつけてやまがねふくきびのやまびと春をしるらむ

初聞鶯といへる事をよめる

春宮大夫公實

今日よりや梅のたちえに鶯のこゑ聞きなるるはじめなるらむ

正月八日春立ちける日鶯のなきけるを聞きてよ

める

藤原顯輔朝臣

今日やさは雪うちとけて鶯のみやこに出づるはじめはつねなるらむ

あかつき鶯をきくといふ事をよめる

源雅兼朝臣

鶯の木づたふ様もゆかしきにいまひとこゑは明けはてて鳴け

つららるし細谷川のとけ行くはみなかみよりや春はたつらむ

百首の歌の中に春の心を人にかはりてよめる
前齋宮 河内

春のくる夜のまの風のいかなれば今朝ふくにしも氷とくらむ

初春の心をよめる
太宰大貳長實

いつしかと春のしるしに立つものはあしたの原の霞なりけり

正月の一日ごろ雪のふり侍りける日遣しける
修理大夫顯季

あらたまのとしの初に降りしけば初雪とこそいふべかりけれ

かへし
春宮大夫公實

朝戸あけて春のこすゑの雪みれば初花ともやいふべかるらむ

實行卿の家の歌合に霞の心をよめる
少將公教母

あさみどりかすめる空のけしきにや常磐の山も春をしるらむ

藤原顯輔朝臣

金葉和歌集 卷第一

春 歌

堀河院の御時百首の歌めしける時立春の心をよ

み侍りける

修理大夫顯季

うちなびき春はきにけり山川の岩間のこほり今日やとくらむ

春宮大夫公實

春たちてこすゑに消えぬ白雪はまだきに咲ける花かとぞ見る

藤原顯仲朝臣

いつしかと明けゆく空の霞めるは天の戸よりや春は立つらむ

皇后宮肥後

千載和歌集目錄

卷一	春歌上	二五九
卷二	春歌下	二七四
卷三	夏歌	二八六
卷四	秋歌上	三〇三
卷五	秋歌下	三一八
卷六	冬歌	三三四
卷七	離別歌	三五一
卷八	羈旅歌	三五七
卷九	哀傷歌	三六七
卷十	賀歌	三八四
卷十一	戀歌一	三九三

卷十二	戀歌二	四〇五
卷十三	戀歌三	四二〇
卷十四	戀歌四	四三三
卷十五	戀歌五	四四五
卷十六	雜歌上	四五六
卷十七	雜歌中	四七八
卷十八	雜歌下	五〇三
	短歌	五〇三
	旋頭歌	五〇九
	折句歌	五一〇
	物名	五一一
	俳諧歌	五一三
卷十九	釋教歌	五一八
卷二十	神祇歌	五三〇

金葉和歌集目錄

卷一	春歌	一
卷二	夏歌	二〇
卷三	秋歌	三三
卷四	冬歌	五三
卷五	賀歌	六三
卷六	別離歌	六九
卷七	戀歌上	七三
卷八	戀歌下	八八
卷九	雜部上	一〇七
卷十	雜部下	一三三
連歌		一四六

詞花和歌集目錄

卷一	春	一五七
卷二	夏	一六八
卷三	秋	一七四
卷四	冬	一八六
卷五	賀	一九〇
卷六	別	一九三
卷七	戀上	一九八
卷八	戀下	二〇八
卷九	雜上	二一七
卷十	雜下	二三七

俳の趣を脱せざるに反し、其本集がよく高雅醇正の致を失はず、次いで來れる新古今の、幽玄奥妙なる歌風を胚胎したるが如き、茲に特記するに足らん。以上の三集、何れも、正保四年開版の八代集原本と、天和三年版の八代集抄とによりて、嚴密に校訂し、異本の如きも、すべて、原本の形式に準じて、之を傍注する事となしたり。

明治四十四年六月

校訂者 塚本 哲 三

緒言

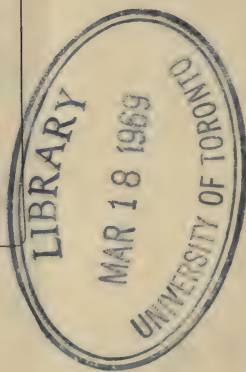
金葉和歌集は、崇徳天皇の大治二年、源俊賴、白河院の院宣を蒙りて、撰奏せしものにして、十卷六百四十九首、別つて四季、賀別、戀雜、連歌の諸目となせり。勅撰集中連歌を收むるは、此集を始めとす。

詞花和歌集は、近衛天皇の仁平年中、藤原顯輔、崇徳院の勅を奉じて、撰進せしものにして、收むる所、十卷四百九首に過ぎず。金葉集、詞花集、共に、其卷數の少きに於て、勅撰集の常型を逸したるもの也。

千載和歌集は、後白河院の宣旨によりて、後鳥羽院の文治四年、藤原俊成の撰進せる所、二十卷一千二百八十四首より成る。撰者俊成が、當時歌人輩の反目偏執、徒らに覇を蝸牛角上に争へる時に當りて、卓識雅量群を抜き、確執相下らざりし俊賴の歌を、多數に、此集に收録せしが如き、金葉詞花の二集が、とかく浮華輕

爐邊に携へ行き、軽く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョenson



PL
758
.26
A1
1911

全詞子

集華載

和味和

歌歌歌

集集集

全全全



PL
758
.26
A1
1911

Kin'yo waka shu
Kin'yo waka shu

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

